



葉子、と。

西原正



土曜日。

亨と葉子は、夜の帳がおりたころに京都駅で待ち合わせて、電車で街を抜け出した。土曜日に夜桜見物をしようと決めただけでもどこにいても人が多い。ゆっくり腕を組んで歩きたいし、二人だけで話せる場所へ行きたいと葉子がいった。それは亨にとっても同じこと。二人にとって大事なことは花見よりも一週間ぶりに逢う事だから。

一駅だけの乗車である。トンネルを抜けて山科駅で降りた。そして山際の琵琶湖疎水沿いの道へやってきた。亨が高校時代に草刈のバイトで覚えた場所である。駅から山へ向かって歩いていくと葉子は闇に包まれていくような心持ちになった。

桜並木を葉子と歩きながら亨は闇を仰ぎ見た。桜は八分咲きといったところである。曇天だった昼に来たならばぼんやりとみえたのだろうけれど、今は夜に花びらが浮きあがり、滲むほどの精気を放っている。

緩い風に桜がさざめいて、ほんの時たま地元の人たちが桜のことを囁くように話ながらを歩いていくのとすれ違う。ふたりは疎水に沿って歩き、行き止まりの公園でベンチに腰を下ろした。疎水は半円形のトンネルの闇に吸い込まれていく。そしてトンネルを抜けて向こう側の京都へと続いている。あちらにも桜並木はある。

むこうは凄い人だろうね、と亨が言うと葉子は微笑む口の形だけをして頷いた。

警察官が自転車で夜回りをしていく。その車輪の音だけが響く夜。

お花見やね、と葉子が呟いた。

夜が更けて京都駅を最終電車が通過した。自転車置き場の白い街灯に二人の自転車が輝いていた。



やわらかな光の午後に 区役所へ歩いた
きれいな雲の白に黒松が映えて
いきかう人たちの眼の焦点は
もっと遠くの空にあっいて

「いい日やね」 「これぐらいの寒さやったらね」
しわす走のろーじは少し賑やか
やきいもの匂いが漂って
「きいて。 わたし 焼き芋にマヨネーズつけて食べんねんよ 変？」
いいやん 変やないよ
もう ぼくかて君とおんなじになるよ きっと

やらないでいたことの できる日
きみの歩く姿勢はまっすぐで
ためらう理由のないふたりは早足になる
てのひらの熱 そのまま握りしめて

目次

●表紙絵 「1, 2, 3 はいっ」竹林柚宇子

目次

序1・自転車

序2・届けを出す日

石鹼

チノパン

一応、ぼくの母ですから

ケータイ、goes on

Here, there and everywhere

屋根裏さんちゃん

マリア

あかるくて、洗われていて

爆風

バックシートの狐

金柑

日曜日

鷹伊万里の上には

背中

足音

ブヴァリア、ブヴァルディア

朝は神 昼は人間 夕されば獣に近き心悲しも

梅ジャムと薔薇を吸う象

街に、黄

つばめ

T a t o o

空へ、音が

はぶらし

歌姫

トタンの壁、金木犀の壁

石榴の樹の下で

しゅんしゅんしゅん

L o v e i s B l i n d n e s s

月曜日の朝食会

ただいま

とおりゃんせ

ほらっ、こっちだよ

おいしい土

薬

明星

ひよ

桜を持って

弥勒

きゃらぶき

楠の流れる

微笑

雨にぬれても

宝石

スワロウ・テイル

私の／放浪する／半身

夏の終わり

ぎゃあてえぎゃあてえいはらぎゃあてえ

きれいなおでこに

観察

C h e r r y S a g e , P u r p l e S a g e

夜は散歩者

冬が駆け足で

その70円について

ぐんじょう組

妙心寺の狸さん

氷点下の「御札」

兆し

花をどうぞ

春を告げるもの

濁

花信

アンダンテ

よく晴れた4月25日に

緑の眼

雨があがったら

隠せない傷

お祭りの日に

夕立兄弟会社

発芽

金木犀

うつくしい日

ありがとう

●あとかぎ

月曜日午後六時。

亨は今日の自分の仕事をもう一度振り返った。

大学の駐輪場の中央に高さ三メートル、間隔二メートルで逆「ハ」の字の形に、長さ一メートルの蛍光灯を六つ取り付けた。

まだ駐輪場は開いていて、白い灯りが一斉にともったところだった。配線も問題ない。 亨は肯いて、帰る支度をはじめた。

...今夜は過ごしやすく、熱帯夜はようやく終わり明け方の最低気温は22℃になるでしょう...

仕事の時にいつも鳴らしているラジオのスイッチを、その声を最後に切った。

同じ時刻。

山際の家で亨の帰りを待つ葉子は、夕食の支度をしていた。作業中はいつもラジオをかけっぱなしにしている。

硝子のボウルをざあっと水洗いしていると、その音にAMラジオのモノラル音が被さった。

葉子は瞬間、母親もラジオをかけっぱなしにして夕食の支度をしていたことをおもいだした。その足元でうろちょろしていた自分の姿と。いつもエプロンの裾を握りしめては母に苦笑いさせていた。

ざあざあざあ

硝子に水が当たる高い音。家の硝子鉢は赤い朝顔の絵付けだった。そう、ラジオは確か歌謡曲。すぐにナイターだった。

我に返って自分の手もとを見る。カット硝子のボウルが蛍光灯にきらきらと光っている。

午後六時四十分。

亨は仕事のミニサンバーを駐車場に駐め、家に向かって歩いていた。嵐電の単線の踏切の向こうから若い女が歩いてくる。踏切脇の銭湯をでてきたところである。

たぶん下宿している女子大生なのだろう。化粧気のない顔がいいな、と亨は思う。

グレーのだぶだぶのTシャツに紺にオレンジの三本線のだぶだぶジャージ、素足にサンダルでぺたぺたと歩いてくる。

すれ違いざまに「石鹼」だとわかる。亨の口元が緩んだ。

亨は子供の頃、酷いアトピーだった。様々な療法を試したのだけれど、症状は重くなる一方だった。すっかり治った子もいるのに、と母は神経質なぐらい様々な医院を回り続けた。

とうとうこれ以上行くところがない、という病院で、亨の母は医師から決断を迫られた。亨も聴いていた。

「どうしますか。私の治療方針はこうです。いやなら今すぐお引き取りください」

母は医師の説明に半信半疑のようだった。そして自分が見つけてきた特製の石鹼を使って云々、としゃべりだした。即座に医師の痲癢が爆発した。

「そんなものはいっしょ。なんでもいっしょ。高いだけっ。ふつう——の石鹼でいいの。普通の石鹼！！」

その迫力に圧倒されたのか、亨がその間うつむいて萎れていたからか、母は半分泣きそうになりながらその医師の治療に従うことにしたのだった。

以来ずっとその石鹼なのだ。その石鹼で治ったわけではないし、もうアトピーが完治しているのだけれど、今でも使い続けていた。

誰もが知っている「ふつうの石鹼」である。

同じ時刻。

葉子はほとんど夕食の準備を終えていた。日が落ちてから気温が一気に下がった。クーラーを消して、窓を開けていると涼やかな風が流れ込んでくる。

葉子は腕を撫でてみる。久しぶりに汗ばんでいない。乾いた風でさらさらになっている。ふと、風の中に石鹼の匂いを感じた。踏切の角にある銭湯から風向きによって匂いが流れてくるときがあるのだ。

...あ、うちといっしょ...

葉子の口元も少し緩む。

午後六時四十五分。

「ただいま」

「おかえり」

鮮やかな光が車の流れの上にぼんっと点き、亨ははっとした。

対向車がヘッドランプをつけたのだ。町は群青色に染まる時間帯に入っていた。そしてそれを合図にするかのように道路上でヘッドランプが次々と点灯されていく。亨もボタンに手を伸ばした。

薄暮の時間がずいぶん短くなった、と亨は感じた。

夕暮れの空が橙からあっという間に群青に、そして闇へと流れるように変わっていく。

亨はゆっくりとスーパーマーケットの駐車場に車を入れた。

この時刻のスーパーマーケットは主婦は殆どいなくて、学校帰りの学生と仕事を終えた人が多い。閉店時刻が近いので、惣菜や弁当に値引きシールが貼られるのを待っている人もいる。...トマト、チーズ、ボンレスハム、マヨネーズ、レタス、ミルク、バナナ...

亨は、時折、胸ポケットからメモを取り出し確認しながら買い物を済ますと、レジに並んだ。前の人の山のような買い物をぼんやりみるでもなく眺めていて、昨晚のことを思い出していた。

明日は葉子のお母さんとハイキングに行くことになっていた。行き先は洛西のお寺巡りである。この母と娘は歩くことが大好きなのだ。

電話で秋の七草の話をしているうちに、洛西のお寺にならあるかもしれないということになったらしい。確かに町中で見かける「七草」はススキと撫子ぐらいのものだ。

昨晚食事の時に葉子が訊いた。

「亨さんは、どうする？折角、仕事が休みだし、家で休んでる？」

「うーん、洛西か。長いこといっていないなあ。たしか富有柿の広い『畑』があったなあ。行ってみようかな。気分転換になるかもしれないし」

「うん。いこいこ。お母さんも喜ぶわよ」

「義父さんもくるかもね」

「そうねえ。今頃向こうでもそんな話してるわよ。きっと」

そしてみんなで食べるサンドウィッチを作って持っていく、と葉子が言い、その材料が多いのと、葉子が夕方、ヨガ教室に行く日でもあるので、亨が仕事帰りの買い物をかってでたのだった。

レジの順番が回ってきた。レジスターについた中年の婦人がぺこりと頭を下げる。

「いらっしゃいませえ」

レジスターを打っている殆どの人がパートなのだろうなあ、と亨は思う。そういえば葉子もパートにでる、と言っていた頃があった。生活に困窮するほどではないけれど、電器店の仕事が不景気のおおりにくって暇になった時分もあったのだ。

今は今で、大型店の圧力が常にあるし…。子供ができたらどうしても「二馬力」で稼ぐ必要が
できるかもしれない。

…そういえばあのころから…

亨は物思いにふけりながら、大きなレジ袋を二つ持ち、駐車場に歩いていった。あたりはすっ
かり夜で、テールランプやヘッドライトが尾を曳いて流れていた。

買い物の話をしたあと、葉子はハイキングに着ていく服を思いついたらしく、クローゼットか
らチノパンを出してきた。

「あーあ」と落胆した声。

「これを穿いていきたかったんだけどなあ。もうよれよれやね」

うーん、と亨は畳の上に置かれた膝が抜けて少しすり切れているチノパンを見て唸った。

「毎日、こればかり穿いてからねえ。仕方ないな…」と葉子。

「あのさ、毎日同じユニクロのジーンズ穿いて、現場にでてくる若い子がいるんだよ。毎日同じ
なのに全然ぼろにならないというか、いつも綺麗なんだよね」

「ふんふん」

「なんでだろうと思って訊いたらさ、同じのを六本揃えて毎日着替えるんだって。その方が長持
ちするし、綺麗だし、結局経済的なんだって」

「毎日着替えて毎日洗濯なんだ。…うん。おしゃれな人はそうだよ。同じ麻のスーツをいくつ
も揃えて着る人の話を着ていたことある。そうかあ…」

車のエンジンが唸る。

…何が毎日着替えるだよ、俺あいつになんにも買ってあげてないよな…

亨は胸ポケットから買い物メモを取だし、もう一度確認すると、車を商店街の道路にだした。

「ただいま」

亨が帰ってきた。

「お帰り。遅かったわね」

「うん、最後のところで少し時間かかっちゃって」

「あ。ごめんごめん。書き直したからわかりにくかった」

「ううん。ちゃんと買ったから」

亨がテーブルの上にどさりと荷物を置いた。

「まあ、たくさん。あれ？これは？何？」

「えっ。チノパンだよん」

「あ？あ。なんで？」

「もう、よれよれだったもんね。うん、葉子も思いきったな、とおもって」

「いや...その...それは有り難いんだけど、なんで六本もあるの」

つまりこういうことだった。

葉子はメモの最後にサンドウィッチの「パン」のことを書いたのだけど、スーパーのパンだとまずいから、近くのホームベーカリーナイトウのパンにしようとして、

「ナイトウサンチノパン 六」と書きなおしたのだ。

カタカナがあだになった。

亨は昨晚から古いチノパンのことばかり考えてたので、メモのチノパンに反応してしまっていた。さらに悪いことにトラッドの専門店「ナイトウ洋装店」の前を毎日亨は車で走っていたのだ。

もちろん「六」とは「六枚切り」のことである。しかし亨は毎日着替える「六本」だと考えた。

葉子がけらけら笑っている。

「よくお金があったわね」

「.....ぷぷ。ほんまになあ」

亨は銀行のATMの前で神妙な気分になっていた自分を思い出し、笑い出した。

二人は大急ぎで車に乗り込み、閉店間際のホームベーカリーナイトウに向かっているところである。

「そういえば洋装店の主人が少し変な顔してたかなあ。ははは」

「ぎゃはははは」

「...その六本、プレゼントだと思って受け取ってよ」

「ええもちろん。ありがと。二本ぐらいお母さんにあげようかな。そんなにチノパンばかりはかへんもん。かまへん？」

「うん。だけどサイズは？」

「私とお母さんいっしょだから。そういえば、亨さん何で私のサイズ知ってたの」

「そりゃあ『夫』だもんね」

「...あ、そうか」

「そうそう」

月がくっきりと出ている。明日の天気はよいようだ。

亨と葉子は、月に一、二回ほど、家の斜交いにある割烹で夕食をとっていた。

背の高いご主人と息子さん、その二人に挟まれた背の低いおかみさんとで切り盛りしている小さなお店である。名前は「竹村」という。

近所ではあったけれど、会釈をする程度でほとんどいくこともなかった。それが店に通うようになり、出会えば軽い立ち話をするまでになったのには、きっかけになる「事件」があったからである。

この家に引っ越してきてまだ日の浅かった、ある夕暮れのことだった。

買い物帰りの葉子は、群青色に染まりだした路上に、白い割烹着がじっと動かずにいるのをみつけた。近づくとつれてそれが「竹村」のおかみさんであることがわかってくる。さらに近づくと、おかみさんは猫を抱えていた。猫はまったく動かない。

「どうしはったんです」

葉子が声をかけた。

「急ブレーキをかける音と、どんっという音がしたから表に出たらこの猫がはねられてましてん」

おかみさんの目は潤んでいた。

おかみさんの話だと、この猫は店の裏口にいつもごはんをもらいに来ているのだという。

「最近、子猫を生んでねえ。どうやら裏隣の茶道教室にある竹林の奥らしいんやけど、そろそろ連れてくるかなて、おもてたのに」

深い溜息をつきながらおかみさんはその場にしゃがみ込んでしまった。お店の戸が、からからと開いて、主人があらわれた。困った顔をして妻のその姿を見ている。店の中は忙しいようだ。

「ちょっと待っててください」

葉子は立ち上り、自分の家に駆け込んだ。そして、大きなバスタオルを持ってその場に戻った。おかみさんは茫然としたままだいる。

「さあ」

葉子はそうやって野良猫を引き取った。誰かがしなければならぬことだ、と葉子はとっさに思ったのだった。

この野良猫の葬送をかってでてから、二人は割烹「竹林」に通うようになった。また、歩いていて、それまで経験したことのなかった会釈を町の人から受けるようにもなった。

町の人たちはどうやらこの顛末を見ていたようなのだ。

次の週の土曜日にふたりは「竹村」にいった。

カウンターに着くと、さっそくおかみさんと葉子は残された子猫たちの話を始める。亨は正面にかかげられた「お品書き」をみて注文を考えていた。するとカウンターから裏の調理場へいく暖簾のよこに、自分の家のものと同じ殺虫剤を見つけた。

「あ、あれうちでも使ってますよ。もう売ってないんですよね」

それは最近発売中止になった薬剤ではなく氷点下40℃のガスで虫を殺すというもの。

「そうなんですよ。薬で殺さないからっていうんでね、裏のほうでも使えるかなって。だけど火事おこしたくないし、もう使いませんが」と主人。

「だけどそれあんまり効きませんでしたよ」と亨。

亨はビールを注文し、横目で葉子を見ながら、話を始めた。

亨と葉子の家に十日以上も蠅が居続けていることである。

「殺虫剤の毒性が気になるから、と今までは極力、殺虫剤を使わないようにしていたんですけどね、あまりのしつこさに葉子が「切れて」、この殺虫剤ならいいだろうと早速購入したんです。まだ蠅とのバトルはが続いていて、今のところ蠅はまだ死んでいないようなんですよ。

ノズルから噴射されたガスがかかったはずなのに、息を潜めていて、いきなり不意打ちを食らわすように飛び回るんです

「いやあ蠅が強いのか、その殺虫剤がダメなのか」

「うーん、うちでは効いたようにおもいますがね」

隣から、子猫に名前をつけようとか、誰かが飼ってくれたらいいのになどという声が聞こえてくる。

「もう自然死させてやったらいいやん、っていったんですよ。ただどこいつが聞かなくて」

「ふふ」

「いやそれがもっとおおかしいのは、名前が付いちゃったんですよね」

「蠅に？」

「そう。いつのまにか『あの蠅、まだ生きてる』って、仕事から帰ったら確かめるようになってちゃって。そのうちだんだん『あの蠅』じゃ済まなくなっちゃって」

「そうなんですよ。いつも対峙しているでしょ。そしたら愛着ってわけでもないんだけど、うーん、結局蠅に遊ばれているんですけどね、ただの蠅じゃなくなっちゃって」

いつのまにか葉子が話に加わった。

「へえ。なんて名前つけたんです」

「思いつきでね、タマヨってつけたんです。みつけたら『こらあタマヨ』って追っかけ回します」

「あははは、『蠅のタマヨ』ですか。なるほどねー。そりゃあ強いはずですよ。しぶといですよ。あー、それはまず死にませんぜ」

と、主人が声を強くして断言する。妙に強調するなあとおもって、亨が何気なくおかみさんを見ると。

「それ、私の名前…」

「ありゃ」

「ありっ」

「あはははは」

「おかみさん、ごめんなさいほんとに偶然なんです。名前かえなきゃ。うーんそうカズエ。カズエにかえますっ」

「奥さん、それ、隣の奥さんの名前っ！」

全員、大笑いである。息子さんまで縄暖簾の向こうの調理場から顔を出して笑っていた。

それから「蠅のタマヨ」は姿を見せなくなった。どうやら成仏したようである。

葉子はおかみさんと二人で朝夕姿を現す子猫たちに給餌の世話をするようになった。特に夕方、店が忙しくなる頃に姿を現すので、おかみさんの手が離せないときは携帯に連絡が入り、葉子が店の裏に出向いていくのだ。

夕飯の刻だった。

「ねえ亨さん聞いてくれる」「うん」

「今日、猫のご飯をやり『竹村』の裏にいったのね」「うん」

「ステンレスのお皿に缶詰を分けて入れてたら、息子さんが顔を出したの。で、『タマヨ』どうなりました、ってきくから、もう死んだみたいですよっていったのよ。そしたら息子さん、うちにもしつこい蠅がでましてんっていうのよ」

「ひょっとして名前つけたんとちゃう」

「そうなのよっ。それも『ヨウコ』ですよって」

「ははははは」

「それもね、にこにこしてさらりというのよね。これって仕返し？」

「ふふふ。やっぱり『息子』なんだなあ。お母さんが好きなんだよ」

「いやそれってマザコンやないかしら。息子さんのお嫁さんになる人大変やわ」

「いや、やっぱり息子はお母さんの味方をするんだよ」

「亨さんもそうなの」

「まあまあ。一応、ぼくの母だから、さ。それはそれ。大事なものは葉子に決まってるやん」

「ほんまかしら」

「ほんまです」

割烹「竹村」としばらくお付き合いが続きそうである。

ぴんっ。

今朝もテーブルの上で何かが弾けるような音がした。家には由子一人しかいないので、居間まで響いてくる。由子はダイニングテーブルに歩み寄ると二台のケータイの一方を掴んだ。

テーブルの上の二台のケータイは、一台が由子の、もう一台は夫、由伸のものだった。

由伸が身体の苦痛を訴えて入院したのが六日前、さらに容態が急変し亡くなったのが三日前。告別式を済ませたのが昨日である。二人にとって嵐のような別れの時であった。

享年六十歳。ここ8年間は転移性の癌を患い、入退院を繰り返しながら高校教師の仕事の続けてきていた。送り出した卒業生のうち最年長のものはもう五十歳になる。

二人に子供はなく、家を訪ねてくる卒業生、あるいは顧問をしているクラブの子たちが二人にとっての「子供」のようなものであった。

由伸はよく子供たちのことを由子に語った。だから由子も教え子たちの幾人かのことは憶えてしまうほどだったし、熱心に語る由伸を見るたびに、この人は心底、教師という仕事が好きなのだなあと思ったものである。

由子は様々な事務手続きに没頭することで、底なし沼のようなどす黒い口を開けている悲しみの感情から逃れようとしていた。立ち止まると動けなくなる。そんな予感に耐えていた。

長い闘病期間に比べれば、あまりにあっけない最期に、爆発しそうになる悔しさと徒労感とも闘わなければならなかった。闘わなければやはり、自分が潰れてしまうという予感にも支配されていた。

ぴんっ。

そんな由子とその着信音は跳ね上がらせたのだった。

「これ、見て」

ある中学校の職員室で今村和彦は、後輩の金沢恭子にケータイのメール画面を見せた。

職員朝礼が終わり、同僚の教師たちが授業に散開していく時だった。

「なんですか」

...07 / 10 / 17 9 : 05

F 福村由伸

R E

...すまない、忙しいから今はあえない...

「日付と名前見て」

恭子が一瞬息をのむのが和彦にはわかった。

「な、昨日、福村先生からメールがきたんや。...おまえ、見てたかなあ。最期、柩に故人の思い出の品を入れたやろ。その時奥さんがケータイを入れてたんや」

「わたしは.....」

「で、奥さんが憔悴しきっていたから、なんだか心配になって、今晚伺ってもよろしいですかってメールを送ったんや。

あとで気づいたんやけど、考えてみたら奥さんのアドレスなんて知らへんねん。うっかりして登録していた福村先生のアドレスに送ったんや」

「そしたらこれが...」

「そう。返信されてきた」

「不思議」

「な。不思議やろ。まあ宝物や」

「.....」

二人とも高校時代の担任が福村由伸だった。和彦は熱血漢であった福村に好感を持っていたし、恭子は福村から柔道部の顧問としての指導も受けていた。二人とも頻繁に福村の家に出入りしていたから、妻の由子とも面識があった。福村が不在の時などは代わりに悩み事の相談にのってもらったりもしていたのだった。

そして、ふたりとも福村の影響で教師という職業を選択したのだった。

今では今村和彦にとっては息子に世界史を教えてくれている教師でもあったし、金沢恭子にとっては中学の柔道部から生徒を安心して送り込めるたのもしい恩師でもあった。

渡り廊下を先に行く和彦の背中をみながら歩いていて、恭子の脳裏には一つの思いが渦巻いていた。

黙っていたけれど柩に入れられたものを恭子はしっかり見ていた。本、手紙、家の庭で咲いたという薔薇...。ケータイはなかった。そもそも金属類は柩に入れるのを拒まれることを恭子は自

分の父親が亡くなったときに知っていた。

...今村先輩の話は嘘。先生のケータイ、生きてるんやわ。それはたぶん...

...07 / 10 / 17 12 : 35

F 金沢恭子

『三年生の三村康子、膝の手術にいきました。術後の経過は良好です。高校進学までには完治するとのことですよ』

RE :

『ごくろうさま。リハビリに細心の注意を払って、しっかりやってください』

...07 / 10 / 18 16 : 48

F 今村和彦

『クラスの進路相談で先生の高校希望者が数名いました。本校全体では去年の倍になりそうです。わが母校でもありますが、人気の高さに驚いています』

RE :

『最近の進学実績と自由な校風が受け入れられているのだと思います。あとは君たちのおかげでもあります。ありがとう。とても嬉しいです』

ぴんっ。

由伸のケータイにメールが着信した。覗き込む由子。しばらくそのままの丸い背中を夕陽が暖めている。

...07 / 10 / 20 15 : 35

F 金沢恭子

『先生、明日から研修旅行です。晩秋の北海道にいきます。一週間後、お土産を持ってお邪魔します』

RE :

『君にはそそっかしいところがあるから、忘れ物にはきをつけて。いってらっしゃい』

その後も二人からほとんど毎日メールが届いた。今村がケータイを見せびらかしたからだろうか、それどころか他の教え子からもまるで足跡を付けるようにメールが届き始めた。

そしてそのひとつひとつに返信がかえってきた。

一週間がたち金沢恭子が北海道から帰ってきた日のことだった。その頃には、まるで先生が生きているようだ、という評判が駆けめぐっていた。

...07 / 10 / 27 20 : 35

F 金沢恭子

『京都駅に着きました。これから先生のお宅にお邪魔してもいいですか。お土産をお渡しするだけですけれども。今村先輩も一緒に伺いたいそうです』

RE :

『おかえり。うん、来るのはかまへんよ。今村君も一緒なら都合がいい。このケータイもそろそろ「お葬式」にしたいと思うんだけど。どうだろう』

...07 / 10 / 27 20 : 40

F 今村和彦

『夜遅くにすみません。金沢と一緒に伺います。金沢から聞きましたがケータイの「お葬式」、もう少し待ってください』

ぱたん。

ケータイを閉じると、由子は仏壇の前を整え、玄関をさっと掃き、珈琲を淹れる用意を始めた。珈琲が大好きでお酒が飲めなかった由伸は、教え子としゃべるときにはいつも一緒に珈琲を飲んでいたのである。

子供のいない夫婦だったけれど、子供が帰ってくる日の母親はこんな気持になるのかしら、台ふきで何度も何度もテーブルを拭きながら由子はそんなことを考えていた。

...とうぶんケータイも続けなくちゃいけないかな...

由子が夜の窓をみると、微かに笑っている自分の顔が映っていた。

ぴんっ。

またメールが届いた。

十一月のはじめ、秋がようやく深まりはじめたある日の夕暮れのこと。

「外がすごいよ。綺麗な光だよ」

亨は帰宅するやいなや、葉子に声をかけた。靴をはいたままで、声は上ずっていた。

「夕焼け？」

「ううん。通りの空気の中に光が霧のようにまざってるんだ」

え、そうなのといいながら葉子は窓の外へ視線をむけた。

「わたしは風が気持ちよくて窓開けてたの」

微かな風が窓から入ってくる。

「ああ風もいいよね」

「でもその光、どんなだろ」

亨が、出ようか、といったとき、葉子はもう玄関に立っていた。

亨と葉子は夕暮れの町を歩いた。

「もう太陽は沈んでいっているのよね」

「うん」

「これは残照？光が街に残って空気がほんわりと橙色に染まっているみたい」

「いいよね」

「うん」

通り面した垣根の山茶花は常緑の葉ばかりで、花はまだ咲いていなかった。ふたりは明るい方へと歩いていく。

「暑くもなく寒くもない。眼が痛いくらい明るくもないし、だからといって暗くもない。こんな感じ、好きなんだ」

「なんだか時間が止まっているみたい。それに気持がやわらかくなるわよね」

明るい方へ歩いていくと、そこは古いお寺の土塀が続いていた。取り残されたような光もゆっくりと群青に染まりはじめてはいるのだけれど、土の中に光が蓄えられていたかのように土塀に

挟まれた通りは明るかった。

土塀の切れ目には槇の垣根が続き、空気が一気に緑黒色になる。塀の上には黒々とした金木犀や椿の緑の葉がみえる。

「亨さん、セザンヌのね、オーヴェールの風景を描いた絵があるの。この雰囲気、あの絵に似てる」

「セザンヌ？」

「先月、市立美術館で観たの。...この土塀の色が似てるせいかなあ」

「ふーん」

「土壁の家と緑と紺色の屋根しかない絵なの」

「ずいぶんとシンプルな...」

「その絵の特徴はね、季節がないことなの」

「見てもわからない？」

「わからない。季節のサインがどこにもないの。都市だとか家の壁だけの絵だったら季節が消せるけど、田舎の自然の風景を描いて季節をわからなくしているのは珍しい」

「それは作者の意図？」

「そう。展覧会のパンフレットにかいてあったわ」

「見た人それぞれの印象で変わるんだ」

「秋のような春のような、朝のような夕暮れのような昼のような、晴れているようで曇っているようで雨が降り出しそうにも感じられて」

「真夏と真冬はどう」

「うーん、そういわれればそう感じる人もいるかも。雪の降らない常緑樹の冬もあるし」

「で、葉子は...」

「私は 今、ここ、この気分で、その絵を思いだしたの。家にポストカードがあるからあとで観てね」

「ぼくはなんだか優しい気持ちになれるな」

「わたしも」

葉子は黒い長袖のTシャツにタイトなジーンズ、亨は白いTシャツの上に細かなチェックのシャツを羽織って、ルーズなジーンズで歩いていた。すれ違う人の中にはジャケットの人もいれば、半袖のTシャツだけの人もいる。夜更けと早朝には少し冷え込むのだけれど、日中は暑くも寒くもない日が続いていた。

二人が味わっていた光の霽のような空気もゆっくりと消えてゆき、夜の色が濃くなっていく。からんからん、と葉子がつっかけている塗りの下駄をならす。二人は電車の軌道に沿った道に出た。大きくカーブしているその脇にコスモスが群生していた。軌道敷地内に異彩を放っている

。誰かが植えたのだろう。

そこに大きな黒い影が手を伸ばしていた。二人はその傍らを通り過ぎる。

老人が長く伸びたコスモスの茎から枯れた髭のような葉を一生懸命擦り取っていた。

「今日はさ、っていうかさっきの光は、さ」

「うん」

「一瞬だけ季節が消えたのかもしれないね」

「だとしたらおもしろいね」

街に、ぼつりぼつりと灯りがともりだした。

二人の前方に白いワンボックスカーが輪郭を滲ませて駐まっていた。その白い「箱」のせいで道幅が狭まり、車が離合できないほどになっていた。

亨と葉子の傍らを、制服姿の女子高校生の乗った二台の自転車がゆっくりと追い抜いていく。長い髪がなびき、紺色のハイソックスと短いスカートから覗く白い腿が上下している。前からヘッドライトを点けた車が近づいてきたけれど、彼女たちはお構いなしに道の真ん中に自転車を進めていく。車が減速して...止まった。

「おんなのこがとおりますう」

そういいながら彼女たちはゆっくりと走っていった。

車の運転手に聞こえるような声ではない。

「自分にむかってしゃべっているみたい」と葉子。

「ああやって『おまじない』を唱えながら女の子はなんでも通り抜けていくんだよなあ」

亨が半ばあきれたように呟いた。

「それでもないのよ」と向き直って葉子は真顔。

「いつまでも女の子じゃいられないもの」

長い髪の二つのシルエットが揺れながら遠ざかっていく。

「夫婦ものがとおりますう」

車の横を過ぎながら葉子がそうやって亨の手を握った。

亨は黙って笑顔を返す。

「ずっとずっと、とおりますう」

二人は笑いながら繋いだ手をぶんぶんと振る。

東の空に月が浮かんでいる。冬の月だった。

(了)

*Here, there and everywhere

(Lennon, McCartney) Beatlesのアルバム「REVOLVER」に収録

*ポール・セザンヌ：「カルチエ・フル，オーヴェール＝シュル＝オワーズ」（風景，オーヴェール）

「亨さん、そろそろ散髪しようか」

とても天気の良い寒い日曜日の朝、葉子が声をかけてきた。とりたてて用事もないし、前回から時間が経っていたのでやってもらうことにした。

ぼくはいつも葉子に髪を切ってもらう。ぼくの髪はいつもとても短い。

短い方が絶対、似合うから、と葉子が言うのでそれにしたがったのだ。同じことを今までにぼくに言ったのは母親だけである。いいとか悪いとかじゃなくて、あんたは短い方がいいんだってば、というのが母親の口癖だった。ぼくが高校の頃から背中の中あたりまで髪を伸ばしていたから、そりゃあ「口癖」にもなる。もちろんロック・ミュージシャンにあこがれてのことで、ぼくのアイドルたちは皆、長髪だった。

「伸びたよなあ」

「うん、『屋根裏さんちゃん』になってる」

「???なにそれ」

「あれ、言わない？」

「言わないよ」

「髪が伸びて...ほら、寝癖がついてるやん」

「うん」

「それ、『屋根裏さんちゃん』」

「ええっ、いわへんよそなん。中京（京都市中京区）だけの言葉？」

「違う違うそんなことあれへん。知りあいの神戸出身の人もゆうてたよ」

「ありゃりゃ。いやあー知らないなあ」

伸びた、といっても3センチになったぐらいである。葉子はぼくの髪をバリカンを使わずに、鋏と剃刀で5ミリぐらいに切る。坊主頭のように坊主頭ではない。同じようで微妙に違うのだ。むしろスキンヘッドに近い。最初はまるでパンクスみたいになるかなと思っていたけれど、着ているものが全然違うからそうはならなかった。慣れてしまえばむしろすっきりして気持ちがいい。洗うのが楽だし。

床の日当たりのいいところに新聞紙を敷き、真ん中に丸椅子を置く。ぼくはTシャツ一枚になり、首にビニールシートをしっかりと巻き付ける。日差しを受けていないと寒いぐらいだった。

葉子が濡れタオルで髪を湿らす。冷たさが神経を走ってくる。

ぱちん。ぱちぱち。鉄の音だけが静かな日曜日の朝に響きはじめた。

空は晴れているのだけれど、きらきらと縫い針が舞うように雨が降っていた。北山時雨である。水滴からの反射光が目には痛かった。

「前からどれぐらい経ったっけ」

「えーっと、こないだ母校の先生の学校葬があって、あの前後が忙しかったんだよね。あの頃からだから...」

「もう、ひと月になるわね」

「ああもうそんなになるのかなあ...。そういや、あの頃はまだTシャツで平気だったよね。いまじゃセーター着てるもん」

「急に季節が変わったのよね...。亨さん寒くない？」

「ああ、平気平気」

「早いとこ、仕上げちゃうね」

月曜日の朝、アパートを出て駐車場へ歩いていく。

ぼくは髪を短くしてから帽子に凝りだした。夏は汗が流れてくるからスカルキャップやバンドナ、冬は冷たいからニット帽が欠かせない。他にもパナマ帽や烏打ち帽、各種のキャップまで結構、持っている。今日はお気に入りのグレーの毛織りの帽子を被った。軽くて耳まで覆えて暖かである。

歩いていくと、路上に小さな白い輪が沢山ついていて、この一週間、毎朝見る光景なのだけれど、これは「どんぐり」が車に砕かれて飛び散った白い粉である。両側の家から老人や女性が出てきて門掃きをしているから、すぐに綺麗になるのだけれど、一日でまた沢山の白い輪ができていく。

今日は薄茶に砕かれた粉の輪もあった。よく見ると羽根のついた種だった。楓かモミジの種だろうか。

いつもの出勤の道をミニバンで進んでいき、金閣寺の交差点で信号待ちをしていると、右手の休憩所で白いニット帽の男を見つけた。耳当てのついた「ぼんぼん」付きの毛糸の帽子を被っている。天神さんの縁日に、アジアや南米の衣料を売っている屋台でアルパカで編んだインディオ

の帽子を売っていたのだけれど、それとよく似ている。

ぼくには可愛すぎる、と思えて買うのを躊躇したのだけれど、今、目の前にいる男にはとてもよく似合っている。

不思議な雰囲気を漂わせた男だった。とても背が高く、擦り切れた葡萄茶のスカジャン（通称・ヨコスカジャンバーの略）に洗いざらしのだぶだぶのジーンズを穿いていて、極端に痩せていた。痩せているけれど姿勢はとてもよくて、空を向いている眼はきらきら光っていた。細い頸には濃いグレーのマフラーをぐるぐる巻にしている、がさがさのジーンズのウエストを荒縄で縛りつけていた。そのジーンズのポケットからはいろんなアクセラリーが外に垂れ下がっている。そして少しあみだに被った白い帽子から覗いている、まっすぐな前髪は金髪に染めてあった。

ボヘミアンのようでもあるし、一昔前の言い方をすればヒッピーのようにも見える。だけど、実はこの男、毎日、金閣寺の交差点付近にいるのである。昼間に通る時もよく見かける。たいてい観光客の女の子と話し込んでいる。ナンパしているのか、道を教えているのか判然としない。昼前ぐらいにはたいてい女の子と手を繋いでたり、一緒にアイスクリームを食べたりしている。

確かなのは旅行者ではない、ということである。近くに派出所もあるし警備員もいるから悪いことはできないと思うのだが、つきまとわれているのか、顔をしかめて男に手を振って拒絶している観光客も見たことがある。

それでも毎日この場にいるところをみるとそれほど悪いことはしていないのかもしれない。信号が変わった。

右折し、少しいったところで車を駐めた。何かが心に引っ掛かった。帽子もそうだけれど、あの身長にあの顔...

なんだろう。ぼくのなかの記憶の何かと引っ掛かったような気がした。

なんだろう...。車を降りた。

学生時代、中原中也にかぶれて中也が飲んでたという酒場で泥酔しては喧嘩ばかりしては酒代を彼女に払ってもらっていた自称詩人のNという奴がいた。おなじころ髪を緑に染めて自分と同じくらいに背の低い女の子と、河原町三条の路上で抱き合ってはキスばかりしていたフォークブルースシンガーTがいた。やはり同じ頃、ギターの天才といわれ、何人もの女の子をヒモのように渡り歩いていたYがいた。

そんな過去に知り合った男たちのイメージが、前でぶらぶらしている白い帽子の男の背中に渦巻いていた。

...あいつらはみんな女を泣かせたんやなあ...そんな言葉といっしょに。

「しょうがないな」

なにが「しょうがない」のかわからないまま、口をついた独り言はそんな言葉だった。

ぼくは歩き出した。

男は寒そうである。両手をポケットに突っ込んで少しうつむいて、靴で路上に落ちている、どんぐりを転がしている。

(くるくるくる)

ああやって毎日、女をもとめてうろついているわけだ。

それにしてもその男は目立つ。もう何人かの女の子がその男のほうに視線を奪われているのがわかる。

...あかん、あかんぞ...

なにが「あかん」のかももう一つわからないまま、そんな言葉がアタマの中に響いている。 ぼくは男に近づいていった。

追いつき、追い越し、振り返って顔を真正面から見た。とても澄んだ眼をしていた。

白い顔で長い睫の美少年だった。

違う。

ぼくの心に引っ掛かったのはこいつのことじゃない...

大型バスが駐車場に入ってきた。観光客の第一陣が到着したようだ。ばらばらと降りてくる観光客の姿を見た時、ぼくはとっさに、まだシャッターの降りている土産物屋のあるビルの非常階段をかけのぼった。

踊り場から下を覗いてみる。美少年がゆらゆらとそのバスから降りた若い女性たちに近づいていくところだった。道路にある市バスのバス停にはまだ出勤途上の人たちもいた。

「屋根裏さんちゃん！」

ぼくは道に向かって思い切り大きな声でそう呼びかけた。

すると美少年は思わず、といった感じで頭のとっぺんに手を当ててきょろきょろと辺りを見回した。

歩道を歩いていた何人かが無意識になのかどうなのかわからないけれど、歩きながら頭に手を当てた。バス停の何人かも頭のとっぺんに手を当てた。観光客の何人かも頭に手を当てた。

何人かがそんな光景を見て、くすくすと笑いだした。少女たちが少年の脇をすり抜けていった。

ぼくは車に戻り、発進させた。ずっと胸がドキドキしている。

走りながら横を見ると、白い帽子の美少年は不思議そうな顔をして立ち尽くしていた。

ふむ。

どうやら「屋根裏さんちゃん」は「全国区」のようである。早速、葉子に伝えようと思う。

(了)

*作者注

「屋根裏さんちゃん」が全国に通用するかどうか、ぼくの回りでも意見が分かれるところです。小説の中ではこういう扱いにしてみました。



「スズキミツエさんをお願いします」

振り絞るような老人の声がまた電話口から聞こえた。夜、十時。今週に入って四度目の同じ電話である。

月曜日。最初に出た妻の葉子は「どちらにおかけです。違いますよお」といって切った。続けてかかってこなかったのが気にはしなかった。

火曜日の夜、再びかかってきた。相手の言葉はまったく同じで、葉子は同じように応対し電話を切った。けれど、その話を聞いた時、葉子の表情に不安な気持ちが少ししみ出してきているのに亨は気づいた。

水曜日。電話に出たのは亨だった。

何も言わずに、切った。切ったけれども震える声が耳の底に残った。

最初の言葉が「スズキミツエさんをお願いします」なので、同一人物なのだろうと二人は考えた。しかしそれ以上はいろいろと推理してみても、多分、老人の男性であろうことぐらいしか

考えつかない。

「何かを伝えたいんやろね」

「ボケてるかもしれないな」

「最初に女の私が出たから何度もかけてくるのかしら」

「葉子を『ミツエ』と思いこんで」

「そう」

そして四度目である。

...このままではまたかかってくる。はっきりさせておいた方がいい...

受話器を握ったまま亨はそう考えた。

亨はしゃべってみることにした。

「何番におかけです？」

「.....」

「こちらはXXX-XXXXですよ。間違えてませんか」

「.....」

「誰か家の方はおられませんか」

受話器を叩きつけたくなるのを堪えながら亨はいった。

返事がないまま、受話器の中でブザーのような音がする。...公衆電話だ...

「ミツエさんをお願いします」と再び老人の声。

がちゃん。硬貨が追加されたようだ。

「お願いも何も、ここは違います。どうしたんです。ねえお爺さん、そんな切なそうな声出されても、こっちは迷惑なんです」

亨は電話器のモニター画面にでている相手の番号をメモして切ろうとした。

...後でこちらからかけてみよう、何かわかるかもしれない...

「ミツエさんの珈琲を...」

老人とおぼしき男の声は泣いていた。

「はあっ？」

「あ イイクラさん どうしました」

遠くからそんな声が聞こえて、床を早足で近づいてくる靴音が聞こえ、やがてその声が受話器に出た。女性の声だった。

「もしもし。あ、夜分すみません、こちらXX病院です。わたくし看護師の鈴木と申します。そちらは？」

「あの、そちらの老人から電話が続けてかかってきて困ってるんですけど」

「あ...はい...ほんとうに申し訳ありません。この方はうちの入院患者さんなんです」

そこは病院に付属するホスピスだった。老人は人生の末期を迎えるべく入所しているとのこと。普段はしっかりとしているのだけれど、極々希に、理解に苦しむような行動をとることがあるのだという。この電話もそのうちの一つのようなだけれど、単なるいたずら電話ではなさそうだ。

「差し支えなければ 何とっていたのか教えていただけないでしょうか」

「最初は『ミツエさんをお願いします』とって、さっきは珈琲がどうか」

電話の向こうで溜息をつくのが聞こえた。

「やっぱり...。これが初めてではないのです。私どもも調べたんですが...あの失礼ですけど、スズキミツエさんのご親族の方ではおられませんよね」

「違います」

「その方の珈琲をのみたいらしいのです。人生の最後近くになって突然それを思いだしたみたいで。うろ覚えの電話番号をかけては間違えて。その番号の組み合わせをかえてはかけてるみたいなんです」

「家族の方はおられないんですか」

「まったくお独りの方です。...あの、電話は二度とかけないようにこちらでしっかり管理いたしますので、申し訳ございません。どうかここはお納めいただけないでしょうか」

「ええ。うちは電話がかからなければいいんですから」

亨は看護師の声の後ろのほうで、ゆっくりと立ち去っていくスリッパの音を聞いた。途端に、たまらなく虚しい気持が亨を襲っていた。

もう夜も更けていたけれど、一段落がついたので、ふたりはホットミルクを飲みながら少しだけ話した。

「ホスピスといえば...治癒の見込みのない人...とっていいのかな。そういう人たちが人生の末期を過ごす場所として選択する場所だよ」

「知ってる。あそこのホスピス有名なもの。だけど、入るのに大変な額のお金がいるみたいよ」

「孤独な資産家、なのかな」

「謎のスズキミツエさん」

「昔の彼女かな」

「なんだかさみしいね」

12月になって電話は二度とかかってこなくなった。

土曜日の夕方。

仕事を終え、亨は五条通を走っていた。春日通りとの交差点につくと巨大なイルミネーションのドームが姿を現した。ここから南へ、数ブロック先まではローム社本社の敷地である。

11月の終わりからクリスマスまで敷地内はイルミネーションが溢れ、光の海になる。その入口にあたる五条通と春日通りの交差点の角には、巨大なドーム型のモニュメントが建つ。ちょうど五角形を貼り合わせたようなドームで、その上を青白いLED（光半導体）がロープのように走っているのだった。

イルミネーションを見る車で五条通は渋滞していた。そのために二度の信号待ちをしなければならなかったけれど、その間に亨はケータイでそのイルミネーションを撮影しておいた。

「まるで外側に『星』を貼り付けたプラネタリウムみたい」

家で、亨のケータイの画像を見ながら葉子が言う。

「これ樹を中心にして建ててるんだよ。まだ見たこと無い？」

「ない」

「いく？」

「いく！」

食事を済ませてから、二人は出かけた。

20分ほどで五条通に着いた。少なくなったとはいえ、まだ車が列をなしていた。二人を乗せた車はその流れに乗り、ゆっくりと春日通りを南下していった。

「凄いね」

「多分、京都では一番規模が大きいはずだよ」

「そうやろねえ」

時々溜息をつく葉子の顔は、車窓から外を向いたままだ。

あたり一面に光り輝いているLEDはローム社の製品でもあるので、デモンストレーションの意味もあるのだろう、灯りはこれでもかというぐらいに豪華である。

途中、光の池のようにになっている本社玄関前を横目に見ながら、車は花屋町通まで出る。そこで車をUターンさせて、北上しながらもう一度イルミネーションを味わった。

通りには人々が灯りを見上げながら歩いている。家族と、恋人と、老夫婦で、犬と、いろんな組み合わせの人たちが歩いている。葉子は車椅子の老人が若い女性に押されて進んでいるのを見かけた。老人が口を半開きにし、眼を細めてイルミネーションを見上げていた。

「あの電話の老人、イクラさんだっけ、あの人はクリスマスに何か見ることが出来るのかしら」

「あそこはカソリック系の病院だから、きっと病院内に何か飾り付けもしてあるよ」

「独りなのよね」

「そうだ」

駐車スペースもないので、車はそのまま北上した。

「強い光を見た後だから街全体が暗くみえる」と葉子が言う。

「そういえばこの先に修道院があるよ」と亨。

車は直進を続けた。丸太町を越えて通りの名前が佐井通りに変わり、さらに北へ進む。やがて踏切を渡ると、そのむこうに大きなグランド現れた。カソリック修道会が運営する中学高等学校である。左手に学校、右手に教会をみながら車は進んだ。他の車はほとんど走っていない。

修道院にもクリスマス月間ということで、立木に色の塗られた電球がいくつか飾り付けられていた。それは今、二人が見てきた最先端のテクノロジーを駆使した光の洪水ではなくて、闇に押し潰されそうなほどの小さな光である。

「こういうのもいいよね。静かで」と葉子が言う。

道には誰も歩いていない。さらに車を進めると学校側のずっと奥に光の塊が見えた。校舎とグランドの間は石畳の道があって、開放されていた。その途中で車を止めて二人は光へ歩いていった。

校舎の中央はまるで教会のような造りになっていて、大きなステンドグラスを透かして光が外へこぼれていた。その横にはヒマラヤスギのような樹が一本だけあって、樹全体が電球でデコレートされている。光の塊にみえたのはこれだった。凄まじいばかりの光を見てきた二人にはあまり感じるものがない。

「これね、樹が小さくなったんだ」

「どういふこと。先端を切ったの」

「ううん。前の樹が枯れちゃったんだよ。枯らしたようにも見えたけどね」

「じゃあこれは若い樹」

「うん。春に植え替えていたのを車から見たんだ」

「樹には良くないのかしら」

「どうなんだろうね。幹を電飾でぐるぐる巻にして、そのうえ枝にも全部だもんね」

二人はさらに石畳を進んだ左側の闇に小さな光のアーチがあるのに気がついた。樹を離れてそちらに歩いていくと、それがマリア像を囲む電球によるシンプルな飾り付けだとわかった。葉子は亨の腕に自分の腕を絡ませ、ぴたりと身体を寄せた。

「うーさむい」と葉子。

目の前には幼いイエスを抱くマリアの等身大の立像があった。

「あの爺さんの病院にもマリア像、あるんだろうな」

亨は震える声を思いだした。もうイイクラ老人は寝ただろうか。そして「スズキミツエ」の夢を見ているのだろうか。

その時、亨は看護士の名前も「鈴木」だったことに気がついた。ひょっとしたら老人の記憶が混乱して、一番頼りになる女性、あるいは好意を寄せている女性の名前が「鈴木」にすり替わっているのかもしれない。

だとしたら...

それこそ「スズキミツエ」はいくら捜してもみつからない。永遠の謎のままだ。だけど老人の中で美しいマドンナの像が結ばれて、そのまま記憶が閉じられる方が...

「手を合わせたら、おかしい？」

ふいに葉子がいった。

「そんなことないよ。葉子の気持ちなんやから」

「なにかをお願いするとかそういうんじゃなくて、ただ手を合わせたい気持ちになったの」 亨は黙って肯いた。葉子は手を合わせて目を瞑る。

夜は更けていく。雪が降りそうな気配が夜空にはあって、マリア像の頬はてらてらと輝き続けていた。



午前5時、上村満江の一日は珈琲豆を碾くことから始まる。ミルは外側が樽型の木製で中に金属の箱が埋め込まれている。若い頃からずっと使い続けているものだ。

そのミルをゆっくりと回す。歳をとってからはさすがに掌が痛いけれど、だからといって、キッチンカウンターの下に収納してある電動ミルを使う気にはならない。よかれと思って購入したものの、モーター音のけたたましさに一度使っただけで片づけてしまった。自分が大好きな朝の静けさを自分自身の手で壊すわけにはいかないと思ったからだ。

コンロには鍋がかけられていて、傍らでは珈琲を淹れるための長い注ぎ口のポットが鍋からのお湯を待っている。年金生活者になってからも変わらない朝の習慣が進行していく。

ダイニングキッチンと六畳一間のアパート暮らし。5つ年上の夫が亡くなってから、身寄りのない老人として、身の回りを整理し、晩年を過ごすべく、このアパートに引っ越してきたのは65歳の時だった。生活用品、什器、たくさんあった本もレコードもほとんど始末し、本当に大切にしたいいくつかだけを手もとに置いていた。ステレオセットも処分し、今はCDラジカセだけである。

サイドテーブルの上に置いたそのCDラジカセから毎朝必ず聴いている音楽が小さなヴォリュームで流れていた。"I`ll be seeing you"。ビリー・ホリデイの歌である。

働きだした若い頃から好きな歌だった。きっかけは、たまたまジャズ・クラブで聴いた男性シンガーの声だった。たちまち魅了され、そのライブに通り詰めるうちに二人は言葉を交わし始めるようになった。そして、売れないジャズヴォーカリストの彼が彼女のアパートに転がり込み生活を共にするようになった。もちろん毎朝その男といっしょにコーヒーを飲んでいた。ちょうど今とおなじくらいの時間に。

彼女はその声に「天分」を感じていた。そんな男の声を聴いたことがなかったし、彼の唄うバラードには抗しきれない魔力を感じていた。その彼が持っていたレコードがビリー・ホリデイのもので、彼は毎日繰り返し繰り返し聞き、その唄をコピーしていた。

ビリー・ホリデイは女性である。彼は女の声を持つ男だった。

「女の声」はカールマン症候群という病気のためで、彼はまるで「その声」と引き替えのように身体の成長が大人の手前で止まってしまっていた。それ故、ちいさい頃からの偏見と虐めによって彼の精神状態は不安定なままだっらしいのだけれど、歌が自分を救ってくれた、と彼は彼女に何度も語ったものだった。

事実、歌っている彼は堂々と輝いていて、部屋に一緒にいる時はいつも穏やかな時間が流れていた、と満江は感じていたし、今でもそう思っている。

彼女はある程度働きながら支えていく覚悟を決めようとしていたのだけれど、声を糧として生きていこうと決めていた彼が次第に有名になり、よりメジャーな舞台である東京へと出て行くことが決まった時、二人の関係は終わりを迎えたのだった。彼女はこの街に残り、近郊に住む両親から離れないことを選んだのだ。それまで出会ってから僅か一年間の出来事だった。

彼のヴォーカルはは東京でも評判を呼んだらしい。しかしCDが発売されることもなく、ライブの情報も途絶え、時たまあった連絡もなくなった。

それから長い月日が過ぎた。彼女は結婚し、病院の事務職を定年まで働き退職した。子供はいない。

まだビリー・ホリデイのCDはあり、時々、彼の残していったライブのテープも聴く。あの声だけは本当に凄いと今でも思っていた。最近、カセットが壊れて聞けなくなってしまっているけれど。

満江は珈琲を飲みながら白い紙と鉛筆をテーブルに用意する。

「猫の系図」を書くのだ。

満江はこのアパートに引っ越してきてから、物干しにやってくる野良猫の世話をずっと続けている。室内で飼うことは禁じられているけれど、大家が物干しで面倒を見ることは許してくれたのだ。

猫というのは不思議だ、と満江は思う。まるで援助してくれる人間が判るかのように、その前に姿を現すからだ。そしてふいに現れるのと同じように、ふいに消える。それも不思議だった。子猫を引きつけて現れることもあったし、そのまま置いていくこともあった。それも謎。だけど満江は猫の姿を見るとかまわずにはいられないくらい猫が好きだった。

先月、アパートの一階に引っ越してきた、やはり独居老人の葛原典子も大の猫好きで、猫がやはりそれを見逃すはずもなく、やがて老女二人は塀づたいに垂直に行き来する猫たちに引き合わされることになった。

今、面倒を見ている猫は5匹。姉弟、従兄が入り交じっていて、亡くなった猫も含めてその関係を典子に教えてやるための系図づくりである。

満江が嬉しかったのは、葛原典子が猫好きばかりでなく、ジャズも好きだったこと。

葛原の部屋に招かれてお茶をよばれた時、部屋にはジャズが低いヴォリュームで流れていて、満江が毎朝ビリー・ホリデイを聴いている、と告げると典子は目を丸くして大喜びしたのだった。

「婆さんのジャズファンなんて若い子には想像もつかないんだろうけれど、私は若い頃、山下洋輔の追っかけだったんだから」

そういう66歳の典子と満江はすぐに友達になった。

「こんにちは」

玄関で声がする。満江が扉を開けると近所の電器店の若い子が立っていた。

「ラジカセの修理ってことで伺ったんですけど」

亨がCDラジカセの修理依頼の電話を受けて上村満江の部屋にやってきたのだった。部屋に上がり、ラジカセを点検する。

「ファンクションキーがバカになってますね」

「そうなのよラジオからCDに戻そうとしてなかなかもどかないの」

「カセットのスイッチもおかしいですね」

「それもねえ…。ここ二、三日聞けなくて…。直るかしら」

二人の間にどちらのものが判らない溜息がこぼれた。

「あのですね、直らないことはないです。でも高くなりますよお。このラジカセクラスなら買った方が安いです」

「そんなに修理は…」

「高いです。っていうか中を全部変えないと無理なんですよ」

「困ったわねえ。聴きたいテープがあるのに…」

「カセットテープですか」

「これなの」

「これもまた古いですねえ」

「もう20年以上昔のもの。テープが摩耗するから、これまでに二回ダビングしたわ」

「オリジナルは滅茶苦茶、古いやないですか」

「はははは」

「そんなに大切なものならCDにしはったらいいのに」

「そんなのできるの」

「できますよ。何ならサービスでCDに焼きますけど」

「げえっ、CDって焼いてつくるの」

「ええ…っていうかCDに音を移し替えること、できますから」

「いくらかかるのかしら。わたしら年金生活者だから…」

「サービスでやりますよ。パソコンでできるんです。それとラジカセなら一万円以内でこれよりいいものは、いくらでもありますから」

亨が正午にお昼に家に帰ってきた。連絡があったので葉子は昼食を二人分用意して待っていた。チーズハムトーストとオレンジジュース、バナナ、珈琲というメニュー。亨はカセットテープを自分のスタレオセットに入れて、そこからラインでパソコンに繋いでからテーブルに着いた。

「あれをCDに落としこむの？」

「うん、うちのパソコンならできるんだ。録音ソフトもあるしね」

「もうテープで聴く人も少なくなるよね」

「うん。でもお年寄りにはまだまだ多いよ」

「で、これをつくってあげてラジカセを売るわけ」

「そっ」

「まあサービスのいいこと」

「一台売るのも大変なんだから。そうやって繋いでいかなきゃね。次に冷蔵庫がイキそうだったし」

亨は葉子の倍のスピードでチーズハムトーストを食べ、オレンジジュースをぐんぐんと飲む。

「お婆さんが大切にしているテープってどんなだろ」と葉子。

「演歌かなんかじゃないかな」

「でもそれならCDでも聞けるでしょ」

「廃盤ってのもあるし、何か大切な音源なんだろうな」

「じゅりーー！！だったりして」

「あり得るね」

亨はまっさらなCD-Rをパソコンにセットして、音を入れていく。その間に亨は店に行き、新品のラジカセを手にして戻ってきた。

CDは出来あがっていた。そのCDと古いテープを手にして起ち上がろうとした時、カセットケースのラベルにちいさく鉛筆書きされたタイトルに目が留まった。

...You don't know what love is 飯倉隆...

「おいおいおいおい」

亨は坐り込んで、できたばかりのCDをプレイヤーにかけた。

ライブハウスで録音したのだろう、音の状態は悪い。イントロに続いて、まるで女のような声でバラードが流れ始めた。振り絞るような声である。それは紛れもなく、ついこないだ耳の底で震えていた電話の老人の声だった。

...葉子、これ「イクラ」さんと違うか...そう言おうとして顔を上げると、葉子がスピーカーにじっと耳を傾けていた。

その頃、満江の部屋では「猫の系図」の話はとうに終わっていて、二人は珈琲を啜りながらジャズの話をしていた。

「おいしいわあこの珈琲。どこのブレンド？」と典子。

「北大路堀川を東にいったところのお店で売っているの。昔からずっとそこなのよ。酸っぱくないでしょ」

部屋には、カセットプレイヤーが壊れたままのCDラジカセからジャズ・ヴォーカルが流れている。

典子がCDのジャケットを手にとり、読み始めた。

「そんなにのめり込むほど聴いてはいないのよ。レコードは全部整理したし、CDも少ないの。立派なオーディオセットも場所をとるだけぐらいにしか思ってなかったし」

と、満江は言う

「わたしはねえ、溜め込む方なのよ。今の部屋もね、壁の一面がステレオとCDで埋め尽くされてるぐらい。だけど上村さんのコレクションも立派なものじゃない。『厳選』じゃないの。ビリー・ホリディのこんなの持っている『婆さん』なんていないわよ」と典子。

「葛原さんはどんなのが好きなの」

「ビル・エヴァンスを高校の時に聴いて好きになって...それからだから、彼のは全部持ってる。あとはビッグネームのものかな。名盤あさり、ってかんじ」

「山下洋輔、聴いてたんでしょ。凄い」

「若かった頃よねえ...正直いっちゃうと、あのパフォーマンスというか演奏スタイルにまいっちゃったの。知ってるでしょ?...うん、あの叩きつける指と歪んだ顔と角刈りの頭、ね。かっ

こよかったなあ。今も聴いてるの。今は今で渋いわよお。」

「ふふふ」

「あ、あ、もちろん音もよ。ライブを欠かさずに通ってたの」

「わたしもジャズクラブ。いま、手もとにないけど凄いヴォーカルを聴かせる男がいてね…。今、電器屋さんがテープをCDに入れてくれるの」

「ああ、今はそんなこともできるんだ。聴いてみたいな」

「なんて声なの」と葉子。

「これ、電話をかけてきたイクラ氏だよね。まさかジャズ・ヴォーカリストだとは思わなかったな。この声だもの…忘れないよ」

葉子と亨はスピーカーの前に並んでぺたんと坐り込んでいた。

「うん、そう思う。電話ではなんだか癖のある声ぐらいにしか思わなかったけれど、わたしもずっと耳に残ってた」

「なんだかしみてくる歌だなあ。あとで病院で確かめてみるよ」

「お婆さんはスズキミツエさんなの？」

「いや上村さん。下の名前は聞いてないなあ」

「ひょっとしたら何かの事情で名前が変わったのかも」

「と、いうことはスズキミツエさんがいた、と」

「わおわお」

新しいCDラジカセと一枚のCD-Rを満江に手渡ししながら、亨は言った。

「あの、このテープのヴォーカル聴かせてもらいました。とてもいいですね」

「あら気に入っていただけなの。いいでしょう。もうずいぶんと古いですけどね」

「あの、失礼を承知で伺いますが」

「はい？」

「あの、上村さんは、ミツエさんというお名前ではないですか？」

「ええそうですが」

「以前、スズキミツエさんと名乗ってはおられませんでしたか」

「ええ」

亨は自分の家にかかってきた間違い電話のこと、それがこの街でスズキミツエを捜している老人によるものだったこと、そしてその老人の名前が「イクラ」であることを告げた。

「カセットケースに名前が書いてあって、あれっと思ったんです。で、声を聴いてみて間違いないと思ったんですよ。あの電話の声の老人と一緒に、って。だってこの声は間違いようがないですよ」

上村満江は目を見開いたまま黙っていた。黒いカーディガンに包まれ細い腕と小さな肩が少し震えていた。

「私を捜している？」

「ええ。あの東の山際にあるカソリック系のB病院のホスピスにおられます」

「何故、私を」

「ぼくの所への電話では珈琲が飲みたい、と」

満江は言葉を探しているようだった。

「なにになに、どうしたの」

真っ赤なセーターの胸の上に丸い老眼鏡をさげて葛原典子が玄関まで出てきた。

「わけありなら、ちょっとあがんなさいよ」

典子はまるで自分の家のように振る舞っている。

小さな丸い卓袱台の回りに三人が坐った。まず亨が語り出した。

B病院に問い合わせたところ、飯倉隆はかつてジャズ・ヴォーカリストだったのだけれど、上京後、身体を壊し歌をあきらめ、いろいろな仕事を経て資産家の女性と出会い、その女性と暮らしてきたのだという。その女性が亡くなると、遺言によりその資産を受け継ぎ、いくつもの飲食店を経営してきた。ところが治る見込みのない病気に冒されていることが判明して引退。今、その人生の最後の時を迎えるべく、この街に帰ってきたのだという。

「その人生の最後に満江さんの珈琲を思い出したっていうの」と典子。

「ええ、そうだと思います」

「うーん、どうなんだろう。虫がよくない？」

「もう年寄りですから言ってもいいでしょう。むかし、短い間ですけど私たち一緒に住んでたんですよ」

満江が語り始めた。

「悪い思い出は何もないんです。そんな憎みあうとか辛い別れとかじゃなかった。別れる時もそうならないようにしようって二人で決めたぐらいだから」

「そんな、綺麗すぎるわよ、満江さん。自分の夢のために去っていった男なんでしょ」

「違うのよ、典子さん。それはそれでいいのよ。彼がメジャーな舞台で唄うことは私も望んだことだもの。それに私も結婚して、夫と一緒に飯倉さんのテープを聴いたりしていたんだもの」

「まさか『私、昔この人と...』なんて...」

「ええ言ったわよ。彼はそれでも私が好きだってってくれた人なの」

「ねえねえ電器屋さん、その珈琲ならね北大路堀川を東へ行ったところの焙煎屋さんで売ってるからね、あんた持っていったげて」

「でも、イイクラ氏はもう長くないようなんです」

「珈琲が飲みたいんやったらその珈琲を飲んだらええのんちゃうの」

上村満江は飯倉隆と別れた後、結婚。それからは母もよんで三人暮らしだったという。母の介護

もし、そして夫の最後も看取ったのだという。

「それから気ままな独り暮らしをしてきました。けどもしその方が飯倉隆さんだとしてもお会いしたくはありません。私たちはあの時で終わっていますから。それにもう...歳をとりました」

満江の目はまっすぐに亨の目を見ていた。

「けどこのテープを大切にされてきたじゃないですか」

「だからこそ、なんです」

「ねえ、一度聴かせてくれませんか、その歌」と典子。

亨はできたてのCDをまっさらのCDラジカセで再生した。

「綺麗な声ねえ。なにか切ない気持になるわね」

「ええ」と亨。

上村満江は黙って飯倉隆のヴォーカルを聴いていた。

一週間後、B病院付属ホスピスの個室で飯倉隆が珈琲を飲みながらバラードを小さな音量で聴いていた。前日、病院に珈琲と一枚のCDが届けられた。手紙が二通添えられていて、一通は飯倉隆宛、もう一通は看護士の鈴木宛だった。

鈴木は、飯倉のために珈琲を淹れて病室へ運んだ。飯倉は黙って珈琲をのみ、同封された手紙を読んでいた。鈴木にはその手紙に何が書かれているかは判らない。けれど、部屋に流れているのが若かりし頃の飯倉隆の声であることは自分宛の手紙に書かれていた。

鈴木はじっと飯倉の横顔を見ていた。

45年前。冬。

左京区一乗寺の古い映画館からオールナイトの三本立てを見た若いカップルが、早朝の街へゆっくりと出てきた。当時はやっていた任侠映画が立て続けに上映されているあいまに、珍しく「青春映画」の三本立てが組まれていたのだ。二人のお目当ては「ウエスト・サイド・ストーリー」。

凍えそうな寒さの中、紺のピーコートと赤いチェックのマフラーの女の子が背の低いアーミージャケットを着た男の腕にしがみついている。二人の頬は紅く染まっていて、まるで浮かれるように男が歌を歌う。

...マリア、マリア...

透きとおった高い声に誰もが振り向いていた。

(了)

あかるくて、洗われていて



葉子にとって年末の用意は関東屋の白みそと播磨屋の丸餅を買うことで終わる。そこに出かけるまでは大掃除をしたり、年賀状の宛名書きと投函をしたり、近所のスーパーで野菜や魚、肉を買いこんだりと、普通の人たち同様、年の暮れならではの忙しい毎日が過ぎていく。

最後にこの二つの店に行くのは家から遠いというのも理由の一つだ。亨に頼んでもいいのだけれど葉子は毎年、一人で自転車に乗って行くことにしていた。

白みそと丸餅は京都のお雑煮には欠かせないものなので、それを関東屋と播磨屋で買うことは葉子がちいさい頃から祖母と母親がずっと続けてきたことだった。母から関東屋の白みそは祖母の若い頃から最良にしてきたと葉子は聞いたことがある。

毎年店頭で注文していると、自分が二人と同じ流れにいるような気がして、なんだか嬉しくなる。実はその気分を味わいたくて、二つの店に行くことを最後にとっているのである。

亨の実家も京都だから、お雑煮のスタイルは葉子の家とは基本的に変わらないけれど、関東屋と播磨屋というところまでは決めていない。

今では亨と葉子の間では、葉子の「流儀」がもうすっかり決まり事になっていた。

家を出て通りを南下する。葉子は通りがずいぶん明るいことに気がつく。春から秋までずっと通りを覆っていた両側の家からのモミジや桜の大きな枝からすっかり落葉しているからであった。吹き抜ける風は冷たいけれど、通りは一年で一番明るい。

午前中まで降っていた冷たい雨が道に薄く残っていて、光が反射して目が痛い。道はまるで金色の帯だ。

関東屋は夷川通りの御幸町に、播磨屋は烏丸丸太町を上ったところにある。葉子は先ず、より遠い関東屋に行く。途中、今乗っている自転車を買った自転車屋の横をとおっていく。店の奥行きが1メートル程しかない店で、横に20メートル続いている。一階の前面はすべて硝子戸になっていて、まるでショーウィンドウがそのまま店になったような外観である。

葉子と亨の家の近くにも自転車屋はあるのだが、今から何年か前に関東屋に味噌を買いに行く

時に見かけて、当時、欲しかった買い物自転車はここで買う、と決めたのだった。

その原因は異様とも言えるほどの整理整頓の徹底ぶりが強烈に印象に残ったからだった。

狭いので何台も展示はできない。それでも6種類のサンプルが床と天井からつるされていて、各種パーツが白いパンチボードに陳列されていた。そして使い込まれた各種工具が赤いパンチボードにまるで陳列されているようにひとつひとつ収まっていたのだ。そのすべてが硝子越しに見えた。

その頃、葉子は関東屋まで歩いて行って、店の端の出口の近くでチューブをいじっている店主とおぼしき男を見たのだった。彼の足元には自転車独特の工具が綺麗に収まったツールボックスが開けてあった。それを見ておもわず脚が止まった。それらの工具もそして壁にフックで片づけられている工具も、ぜんぶ「端」を揃えて片づけてあったのだ。アタマが全部揃っていて、並びも平行、斜めになっているものがない。道具はすべて使い込まれているようで、それでいて傷んでいない。汚れも付いていない。

そんな観察をしていて生理的な快感のようなものを感じた葉子は、その興味からここで買う、と決めたのだった。どんな男なのか話してみたいという気持ちが実はほとんどだったのだけれど。

家に帰って亨にそのことを話すと亨も興味を持ったようだった。亨も道具を大切にしようと思ったけれど、そこまで神経細かくないなあ、という。

「そういう人はいるんだよね、職人さんで。道具の手入れを欠かさないとにかくぴかぴかにして、ぴっちーと整理している人」

2週間後、葉子は自転車を買いにいった。亨も一緒だった。

店主は30歳ぐらいの感じである。ニット帽を被り、顔の半分は黒々とした髭に覆われていた。締まった顔はなんだか求道者のようでもある。とても低い柔らかな声をしていた。

買い物の自転車はすぐに決まり、防犯登録の用紙を書き込み店主に渡すと店主が驚いて声を上げた。

「こんな遠いところからうちまでわざわざ？」

「ええ、前から決めてたんです。へへ、気になってて」

「え、なにか」

「なんだか道具がとても丁寧に片づいているでしょ。まるで道具屋さんみたいに。それに硝子戸はぴかぴかだし、ディスプレイもシンプルで店の中に塵一つ落ちてないし、どんな人がやっているのかなあって」

物珍しそうに道具を見ていた亨も葉子の所へ戻ってきた。

「ほんまによう片づいてますねえ。ぼくなんか神経疲れてしまうかも」

「いやあそれはそれはありがとうございます」

店主はあまり人には言わないんですが、といいながらも、ここまで徹底的に綺麗にする理由を葉子が熱心に訊くので、ぽつぽつと語りだしたのだった。

彼は小さい時からとにかく自転車が大好きで、高校時代にロングツーリングを始め、大学時代には輪行でアメリカを走ったほどだったそうだ。

そのアメリカで彼はアーミッシュの村に行ってみたのだという。いまだに馬車を使って中世そ

のものの暮らしを続けるキリスト教の一派の人たちである。

「どんなふうだろうと思って行って見て、そこの人たちの暮らしぶりに感動しましてね。特にその特産でもある木製の椅子の素晴らしさに打たれたんです」

今では一般にも売り出されていて、そのスタイルに愛好者も多いんですよといいながら、店の奥にある、無垢の細い木で組まれたシンプルそのものの椅子を指さした。

「こんな素敵な家具をうみだす現場がしりたくて、工房を訪ねてみたんですよ。そしたらまあ、キッチンと片づいていて、塵一つ落ちていなくて、無駄なものが一切ないんです。きちんと、というより犯しがたい何か高潔な精神のようなものを感じましてねえ」

クリスチャンではないし、偏屈だなどと思う部分もあるけれど、その生き方に強く共鳴したのだという。

「他にもいろいろな教えはあるんでしょうけど、それからはその工房のように『ものを創るには先ず片づける。徹底的に細かいところにこだわる』というぼく流に解釈した流儀をつづけています。たぶん日本にも同じような流儀はあるんでしょうけどね。だけどぼくはあの工房に出会っていなかったら店なんて持てなかったと思ってます」

「ご自分が変わったんですか」

「ええ。なにごとにも大事にするようになりました」

亨が工具の手入れぶりにしきりに感心して、見習わなきゃと呟いていた。

葉子はその時、瞳を輝かせて語っていた店主を思い出していた。店は年末なのでもう閉められている。あの人はどこで暮らしているのかなと、ふと思った。

(きっと家の中も綺麗に片づいているんだろうな)

葉子の乗った自転車は御幸町の関東屋に到着。この店はとても古い歴史があるけれど、建物のスタイルはそのままに、何度も建て替えてきているのだろう。店のなかはシンプルそのものである。

「すみませーん」

「はいはい」若い娘さんが対応してくれた。

「白みそ1キロください」

何人かのお客さんがパンフレットを読んでいる。観光のひとのようだ。

円錐状に盛りつけてある味噌樽から白いしゃもじでぴたりぴたりと掬い取り、計りにのせる。

「はい、おまたせしました」

支払いを済ませると、いつもの年のように声をかけられた。

「御所の宗像神社の福銭ですう。どおぞお」

「やあ、おおきに。毎年ありがとう」

葉子がそういうと娘がにっこりと笑った。

この味噌屋さんは御所にある宗像神社の御用であるのか、年末に買いに行くとき朱で「寿」「宗像神社」とかかれたとても小さなのし袋を渡してくれる。その中には五円玉にちいさな紅白の紐がついて入っているのだった。福に「ご縁」がありますように、と。

関東屋をでて自転車は折り返し、烏丸通りの播磨屋へ向かう。「おかき」で有名なこのお店のお餅がとてもおいしいのを見つけたのは、葉子の母だった。それまでは北野の市場や近所の公設

市場でかっていたのだけれど、一度食べてからはずっとここである。

立派な建物の二階が売り場なのだけれど、ここも売り場は拍子抜けするほどシンプルである。まっすぐに進み、丸餅を二袋買う。数分の買い物である。

帰り道。強い西風に煽られながら葉子が空を見上げると、雲が全部吹き飛ばされて真っ青になっていた。わあ、と葉子はこころのなかで呟くのだった。

夜、亨が正月の玄関飾りを買って帰ってきた。和紙を合わせてつくった紅白の円形の注連縄である。小さな稲穂がさしてある。

「かわいい」

「ええやろ。シンプルで」

「うん」

「正月の準備はどお」

「だいたいできた。あした頭芋炊いたり、年越しそばの用意するぐらい。だけどうちなんか楽だよ。家が近くだからおせちもお雑煮もまずそれぞれの実家にいって食べるでしょ」

「まあね」

亨と葉子は二人揃って元旦に亨の実家、二日に葉子の実家に行くことにしていた。

「おかあさんは大変だよ」

「来年ぐらいから手伝いに行こうかな」

「うーん、ぼくは二人だけのほうがいいんだよね。仕事が休みで、せっかく葉子とずっといられるんだし」

「いやあ、ありがとお。なみだがでる」

「ほんまやで」

「うんうん。へへへ」

大晦日は部屋を綺麗にして、二人でのんびりと過ごした。何度もキスをして、なんども腕をかめた。亨に抱きとめられたり、亨にしがみついたりしていた。

窓の外では風はますます強くなっているようで、向かいの家の松が大きく揺れている。空にはちぎれ雲さえない。気温はどんどん下がっていた。

「年が明けたら雪かな」

「『雪おこし』っていうほどでも...」

「ないんやけどなあ」

元旦。

「おめでとおさんどす」

葉子がふざけて舞妓さんの真似をする。

「ことしもよろしゅうおたのんもうしますう」

と、亨も真似る。

午前中に実家に行くけれど、とりあえず葉子のつくったお雑煮をたべ、二人だけで初詣に行くことにした。

「亨さん、いっかい宗像神社いってみいひん」

「いつも関東屋さんで五円玉もらってるけど、そういえば行ったことないね」

実家ではお酒が入るので二人で歩いていった。途中、あの自転車屋さんの横をとおった。カーテンが閉じられている。葉子がふと見あげると二階の窓のカーテンが開いていた。奥行き一メートルの家である。二階は倉庫だろうと思っていた。店主の横顔が見えた。珈琲を啜っている。

「ええ！住んではるのお」

「葉子、何でそんなに小さな声になるの」

葉子が二階を指さす。

「あああっ」

亨が大声を上げた。

二階の店主がこちらを向いた。亨が手を振る。店主がお辞儀をする。ひげ面が微笑んだようにみえた。葉子が頭を下げる。

「びっくりした。あんな狭いスペースに住めるのかしら」

「あの人ならできるよ」

「まさかシュラフで寝てたりして」

「あの人ならやるよ」

「きっとゴミなんか一つも落ちてないんでしょうね」

「あの人ならね」

空は晴れ上がり、頬がいたほど冷たい。亨の腕に回した腕にぎゅっと力を込めた。

風はますます強く、うつむいて歩く二人の頭上で空気がますます澄み切っていくようであった

。

「だけどあの人結婚出来るかなあ」と亨。

葉子は声を出さないで笑った。

(了)

●参考

アーミッシュ

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%BC%E3%83%9F%E3%83%83%E3%82%B7%E3%83%A5>

宗像神社

<http://www.munakata-jinjya.or.jp/index.html>

一月の静かな朝、街を冷たい風が吹き抜けていく。

橋の欄干の上に、とても痩せた一人の若者が立っていた。肩まで伸びた髪と白いシャツの裾とジーンズが風に揺れて、皺の影が波のように身体の上を走っていた。

彼はずっと空を見あげていた。空は青く、そこからは何日も雨が落ちてきていない。橋をゆく人たちは皆、彼に無関心であるけれど、橋の反対側の欄干にもたれた数人が、それとはなしに彼を注視していた。葉子もその中にいた。

彼は欄干の上に立ち微動だにしない。欄干はとても太い丸太でできていて、彼は裸足だった。あまりに動かないので、南を向いて顔を上げた彫像のようだ。相変わらず風は彼の身体に纏い付いている。

どれぐらい時間がたっただろう、彼はゆっくりと右腕をまっすぐに挙げ、右手をぴんっと立てた。つづいて左脚の腿をゆっくりとあげた。手に上流から飛んできた紙くずが絡みつき、左腿の上に雀が止まった。そのまま動かない。

午前になり、日差しは春のようになった。いつのまにか葉子は実家近くの通りを歩いていて、前を身体にぴったりとした黒いキルティングコートと真っ赤なスカートの少女が歩いていた。

しばらくいくと、少女の肩に松の枯れ葉がいくつも落ちてきて、少女は古い寺から通りに突き出ている松の枝を見上げた。すると猫が彼女の背中に飛び乗った。

少女は驚いた様子もなく、黒猫を肩に載せたまま橋に向かって歩いていく。

次の瞬間、葉子の前にはリクルートスーツとおぼしき黒のスーツの女子大生が歩いていた。着慣れていない服なのだろう、葉子には、まるで服が人の張りぼてを引きずって歩いているようにみえる。

葉子はその女子大生が穿いている黒のスリッポンがずっと気になっていた。どうしたわけかストッキングにつ包まれた右足が歩くたびに踵から脱げそうになるのである。左足は大丈夫なの

だけれど、右足はどうしても蹴った時に踵が飛び出そうなる。葉子は、はらはらしながらそれを見つめていた。しかも、その靴には何故か見覚えがあるのだ。

橋の欄干に立つ若者は両手を胸の前に合わせていた。いつのまにか橋の西詰めの病院の屋上の縁にはトンビたちがずらりと並んで川を見下ろしていた。欄干の上には若者以外にも数人が腰掛けている。灰色のスーツの中年男性。あるいは銀と金にデザインされたトレーニングウェアに身を包んだ初老の女性もいる。それ以外にも人がどんどん増えている。やがて猫を肩に載せた少女が橋の上に到着。少女も橋の上に佇んだ。葉子も前に行く脱げそうなスリッポンに気をとられながら、彼女といっしょに橋に到着。

...あ、今日は爆風の日だ！...突然、葉子は気がついた。

もうすぐ双曲線を描いて爆風が降りてきて、この橋の上から舞い上がる。

...みんな爆風を待っているんだ。けど「爆風予報」あったかしら...

「もしもし」

葉子が女子大生に声をかけた瞬間、まっすぐな川の上流の上空、山と山の隙間で、どおおおおん、と爆裂する音がした。

女子大生は上流を見つめた。巨大な白煙の輪がこちらに降りてくる。

「あなた、靴を脱いだ方がいいですよ」

「え」

「もう、間に合わないけど」

と言いつわりなうちに、風速100km/hの風が橋の上に降りてきて人々をさらっていった。

「おおおお」

一瞬、待っていた人たちから歓喜の声が聞こえ、たちまち轟音にかき消えた。葉子も女子大生も宙に浮かんだ。女子大生は両足から靴が脱げている。灰色のスーツ姿の男、金銀のトレーニングスーツのおばさん、などなど。真っ赤なスカートの少女の背中には黒縞の猫がしがみついている。さすがに子供はいないけれど、老若男女が両手を広げて空を飛んでいる。

葉子はなんとも知れず気持ちがよくなってきて、みんなと同じように手を広げた。

「あああ」と声が漏れる。

みんなで光に向かっていく。皆の先頭に立っているのはジーンズを穿いた長髪の若者である。背中がとても美しいと、葉子は思う。

...あれ、亨さん！？...

四條大橋を越え、五条大橋を越え、新幹線をまたぎ、伏見桃山城を左手に葉子たちはどんどん高度を上げていく。右前方に八幡の男山が見えてきた。

...いったいどこへいくんやろ...

葉子がそう思った途端、葉子だけスピードが落ちた。あ、と思った。

...だいたいなんで飛んでるんやろ。

...そもそも何で爆風なんやろ。「爆風予報」??

...え、私、何してんの?

疑問が浮かぶたびに葉子の高度が落ちはじめた。女子大生は靴のないまま飛んでいく。あああ、と葉子が声をあげると女子大生が振り返った。就職活動をしていた頃の自分の顔をしていた。

「げええっ！」

先頭を行く亨の背中が光に白く輝いて、どんどん遠ざかっていく。

「いやや いやや いややああ！」

葉子は墜落していった。木津川の河川敷が見える。死ぬ、と思った。

瞬間、河原の砂のなかから太いロープのようなものが盛り上がると、葉子をつかまえに来た。葉子は必死の思いでロープに飛びついた。飛びついた瞬間、大きな安心感に包まれて葉子は気を失った。

眠りから目覚めると、葉子はベッドの中で太いロープのはずの亨の身体にしがみついていた。

「なにがそんなにいやなんや」と亨が頭を撫でている。

「もおお、どこに飛んでいったんよ」

亨の声をいつもより柔らかく感じる葉子だった。ちいさくとんとんと亨の胸を叩くと、二、三粒の砂が光った。

(了)

鳥のコロニーが駐車場近くの竹林にあった。毎朝6時頃になると竹林は騒然とし始める。鳥たちがさえずり始めるのだ。あるいは雛の声も混じっているのだろう。甲高い声が耳につく。それが数分。それから一斉に鳥たちが集団になって竹林から飛び立っていく。それが台風などの激しい天候の日を除いて毎日繰り返されるのだけれど、亨はだいたいその頃に駐車場にくるものだから、いつも車の傍らで飛び立つ様子を見上げてしまう。

その羽ばたきの音は道行く人の視線を空に吸い上げるような力があつた。

その日は冬の曇天を黒い点描の波がうねるように鳥たちが飛び立っていった。そこへ昨日から亨の仕事を手伝っているアルバイトの大学生、波多野が駐車場にやってきた。長身の痩せた身体を黒いジーンズと黒いパーカーでつつみ、襟を立ててている。肩までの髪が風になびいていて彼も空を見上げていた。

「凄い数ですねえ。なんていう鳥なんでしょう」

波多野の横顔はどきりとるほど白い。純白でも、アイボリーでも石膏でもない白。彼が面接に来た時、店中に一瞬沈黙が走ったのを亨は憶えている。みんな驚いたのだ、と亨は信じている。何故なら亨は生まれてこの方、こんな美しい男にであったことはなかったからだ。彼は20歳である。

「わからないんだよね。地上には降りてこないし、それにあの竹林には近寄れないだろ」

「はい」

と、いって波多野が竹林をみる。竹林のまわりは家に囲まれていた。

「ぼくも鳥の名前が気になって竹林に近寄ろうとしたことがあるんだけど無理なんだよね。それぞれの家の裏庭が面しているようではあるんだけど」

「うーん、たしかにそうですね。それに結構高いところを飛んでいきますね。雀じゃないな」

「うん、雀じゃないよ。...さあ、仕事にかかるか。帰ってきたらまた見ることができるし」

「あ、そうなんですか」

二人は車に乗り込んだ。

今日の仕事はCSアンテナの取り付けである。それを三軒こなす。

亨が屋根に登りアンテナを立てて調整する。波多野は下からのサポートとテレビを見ながら同調のチェックだ。あまりあわない時は亨が屋根の上から横浜にある本社まで携帯で問い合わせをしたりもする。もちろん屋根の上と部屋とのやりとりは無線だ。

波多野は忙しい時にはいつも来てくれる「バイトさん」。基本的な知識も今では相当身につけていて、亨はずいぶん助かっていた。

その日は一日中曇天で風はなかった。屋根の上から朝の鳥たちがどこに行ったものやら、とときどき捜してみるけれど、空を悠々と飛んでいるのはカラスばかりだった。

亨は葉子のつくってくれた弁当、波多野はコンビニの弁当で昼食をすませると、ミニバンを電
車道沿いの広い通りの路肩に駐めて、二人で休んだ。

「ラジオ聴く？昼寝？」

亨が運転席から後部座席に座っている波多野に声をかけた。

「いまかかっているFM局好きなんで、できれば...」

「O. K.」

お————。お————。

托鉢の雲水の声が通りに響いた。ふーん、昼間に歩くななんて珍しいな、と亨が呟いていると、五人の編み笠を深くかぶった雲水たちが車の横を通り過ぎていく。この寒さのなか藍染めの法衣に素足である。さすがにトンビのようなものをまもってはいるけれども。

「『天竜寺僧堂』か」

亨が前垂れに書かれている文字を読んだ。

「あれは嵐山の天竜寺、ということですか」

「そうだよ。托鉢にでるのは禅寺の坊さんたちがほとんどだから、『妙心』とか『大徳』とか書いてあるんだ」

「最近、観光客相手に偽物がいるとかニュースでやってました」

「まあ托鉢してるのは禅寺だけじゃないけどね。寺の名前が書いてないのはぼくは信用しないんだ」

「今のは？」

「正真正銘のホンモノ」

お————。お————。

雲水たちが通りにばらばらに展開していく。

「花村さん」

と波多野が声をかけた。

「うちの田舎の方では『狐がえり』ってあるんですよ」

「じぶん、どこやったっけ？」

「美山です」

美山とは京都市街から北へ山をいくつか越えたところにある、丹波の最南端の町である。最近の市町村合併で南丹市の一部となり、こちらも拡張された京都市右京区と接している。合掌造りの残る、その名のとおり美しい田舎である。

「ちょうどあんな恰好をして子供たちが集落の家を回るんです。あんな坊さんの恰好じゃなくて全員黒マントを着てね」

「君もやったん」

「ええ」

「美山って広いよね」

「川谷っていう集落だけなんですけどね」

「ふーん」

「家の前で、ファーていうんです。そうすると家の人のでてきて祝儀を渡してくれるんです」

「へえ、年に一度」

「一月に」

「『狐がえり』っていうぐらいだからお稲荷さんと関係があるのかな」

「ぼくもよくわからないんですけど、ただ昔からずっと続いているんです」

で、おもしろいのが、とって波多野が亨に少し顔を近づけていった。

「みんなで回っている間、人に会ったらさあっと隠れないといけないのです」

「へえなんでやろ、見られたらあかんにかがあるわけや」

「そうらしいんですよ」

とって波多野が黙るので亨がルームミラーを見ると、美しい狐の姿が映っていた。

「おおお！！」

と、言って亨が振り返ると波多野が長い睫と透きとおるような瞳で亨を見つめ返した。

「あああごめん缶コーヒー、呑むか？」

波多野がにっこり笑って肯いた。

お————。お————。

雲水たちの声が遠ざかっていく。

午後からの作業も順調に進み、無事店に帰った。

亨は報告をすませ、波多野は日当をもらった。それから二人で片づけを済ますと、車で駐車場まで戻った。波多野のアパートもそれほど遠くない。

強い北風が吹き出して、雪がちらちら舞いだしていた。

「美山は雪だろうね」

「たぶん積もってますね」

竹林の手前、高圧電線に朝の鳥たちが集まり始めていた。

「凄いから見ててごらん」と亨がいている間に電線は鳥たちで埋め尽くされていく。

「ヒッチコックみたいですね」

「だろう」

と、いいながら亨が波多野を見るとトニパキのような目になっていた。けれども亨はもう驚かなかった。

「あれでたぶん全員が揃うのを待っているんだろうね。もう少しすると飛び立って竹林に戻るんだよ」

すぐに鳥たちが一斉に電線から飛び立った。町ゆく人が皆見上げている。鳥たちはぐるうんと大きく旋回したと思うと竹林に姿を消した。

波多野は黙ってそれを見つめていた。

「じゃあ、お疲れさん。また頼むよ」

「ええ。また電話してください」

黒ずくめの細い後ろ姿がしなやかに歩いていくのを見送ると、亨は家路についた。

夕食の時、話題は「狐がえり」になった。

「へえ、丹波と丹後では違うのね」と葉子は言う。

「若狭とか舞鶴のあたりだと狐は田畑を荒らすからって、昔は『狐狩り』をしてたんだって。その名残のような風習が残ってるってきいたことあるわよ」

「波多野君たちはその日だけ『きつね子』といわれるんだってさ。ひょっとしたら美山の方では狐を狩るんじゃないくて、奉って田畑の無事をお願いしていたのかも」

「お稲荷さん？みたい」

「でもそんな話しててさ、後ろの席に狐がいたら怖いよね」

亨は昼に見た幻影のことを話した。

「ほんとに見たの？波多野君に言ってないでしょうね」

「そんな失礼なことは言わへんよ」

「ならいいけど、またまた亨さんのアタマがトんだんだわねえ」

それから二月の寒さは続き、雪は何度か積もった。私立大学の入試が終わると学生相手の商売は四月まで忙しくなる。電器店もそうだ。

新入生の新規の下宿生活に伴う、いろいろな家電をセットにしての販売だ。店の近くに大学があるという地の利を活かすことで、店もしのいできたところも随分とあるのだ。すでに何件か成約しているものもある。

亨はそろそろ配達を波多野に手伝ってもらおうかと、社長に相談してみた。何軒かまとめて納品する時は二人で、という指示だった。今、亨はスケジュールをまとめているところである。

今日も駐車場に行くと、鳥たちが飛び立つ。それを見送り、車に乗り込む。
変わらない毎日。

あと何日かで再び波多野と一緒に仕事をする。気が利くし、良く動くし、助かるなと亨は思う。

亨は車のルームミラーを覗き込んだ。磁器のように白い波多野の横顔を思いだしていた。

(了)

一月も半ばを過ぎてから、街には凍えるような寒さが居座り続けていた。ずっと曇天で、雪は時折、降るのだけれども積もることはなく、冷たい強風が吹き抜けるばかりだった。だからだろうか、最近、外での仕事が多い亭が、喉がいがらっぽいんだといいながらよく咳をする。

そこで葉子は昔、母親に作ってもらった「金柑シロップ」を作ることにした。葉子自身の体験ではたしかに喉にはいいはずだったから。

葉子は行平鍋の底いっぱい金柑を敷き詰め、ひたひたまで水を入れると、砂糖を加え、混ぜながらレンジの火をつけた。

弱火でことごと煮つめながら外を見ると、みぞれ混じりの風の中、二軒隣の庭でプランターに球根を植えている主婦の姿が見えた。何もこんな日に、と葉子は思ったけれど、そういえばチューリップの植え付けは冬だったことを思い出す。子供の頃によくやったものだった。

主婦の黄色いウィンドブレーカーが強風にばたばたと揺れている。足元には四隅を石で留めた新聞紙が敷かれ、そこには球根が転がっていた。もう緑の芽を吹いている。

少し遅いかな、と葉子は思う。

確か自分たちは12月にはもう植え付けは終えていた。きっと何かの事情があって遅れたんだ、ひょっとしたら忘れていたのかな、だけど芽が吹いた球根をホームセンターでは売っているし....。

チューリップは冬の終わりぐらいから加速をつけたように伸びていき、3月から4月にかけて花を咲かせる。花が終わってしまえばと球根を掘りだして、物置の上の棚に新聞紙を敷いてその上に並べておくのだった。そして冬に再び植え付ける。植え付ける時に、前に植え付けた時より球根は一回り大きくなっていた。子供の頃の葉子はそれが不思議で、球根は空気の栄養を吸い取っているのだと信じていた。

あれって結局どうだったんだろう。

葉子はふとそう思いながら鍋のなかを菜箸で静かに混ぜる。すると金柑の香りがたちのぼり、気持はいつべんに鍋に戻った。

金柑の表面の硬さがとれているのが色で感じられる。だいたい色が優しくなった、と葉子は思う。

30分ほどたっただろうか、葉子は火を止め、レンジから鍋をおろした。窓から外を見ると主

婦の姿はなく黒々としたプランターの土が綺麗にならされていた。

シンク横の作業台には昨晩から水に浸けられた金時豆がある。葉子は金柑をシロップごと瓶詰めにする、次は金時豆を炊きはじめた。これも水と砂糖。醤油をを少しだけ入れる。甘さを引き立てるには塩をほんの少し入れること。それも母から教えてもらったことだった。

亨が帰宅。寒そうな顔をしている。すぐに風呂。それから夕食。その前に葉子が「金柑シロップ」をお湯で割って差し出した。

「お、いい匂い」

「喉にいいから」

「うん……甘………実も食べるの」

「もちろん」

「おいしかった。ありがとう」

「風邪ひいてない」

「大丈夫」

夕食は肉じゃがと塩鯖、ほうれん草のおひたし。金時豆はちいさな器にいたけれど、二人とも大好きなので炊いた半分を食べてしまった。

片づけが終わると葉子は黒豆を出してボウルに入れる。ざらざらという音にテレビを見ていた亨が顔を上げた。

「また金時豆？」

「黒豆。喉にいいんよ」

「黒豆も好きだな」

「甘いおつゆが、ね」

母から教えてもらった「皺にならない炊き方」の成功率は今のところ70パーセントぐらいだけれど、上手に炊こう、と葉子は思う。

黒豆を水に浸して亨の横に坐ってくつろいだ途端、昼にみた主婦の背中を思いだした。

「チューリップか」

「なにになに」

葉子は球根を植えていた主婦のことを話した。

「球根が太ること知ってる」

「花が咲き終わってからだろ。葉っぱと茎だけ残して放っておくと光合成をして球根が太るんだ。掘り出した時に大きくなってるよな」

「あれはやっぱり土の中で大きくなってるんだ。私は空気を吸って大きくなるんだって思いこんでた。錯覚なんやね」

「はは、そうだったらおもしろいやん」

「そうやね。放っておいたら物置いっぱいになったりして」

「そこから屋根突き破って芽が伸びて」

「巨大チューリップが咲いたりして」

「はははは」

翌日、横殴りのみぞれ混じりの強風が吹き荒れるなか、葉子は公設市場に買い物に出かけた。途中、球根を植えていた庭の横を通った。近くで見ると球根はもう芽が吹いていて表面に小さな緑が点々とついている。うまく伸びていけばいいな、と葉子は思う。

その家の庭には梅の木があって、もう花の蕾が膨らんでいた。冬の真ん中だけれども、もう春は動いている。歩きながら他の家の木々も見るとコブシも芽が大きくなっていた。

家では黒豆を電気鍋でゆっくりゆっくり炊いている最中である。豆に皺をつけたくないので早く帰ろうと急いで買い物をしていると、八百屋で昨日、球根を植えていた主婦と出会った。マスクをしていて小さく咳をしている。主婦の目がうろうろと動き、止まり、まっすぐに手が伸びる。

「まいどおおきに。はいっ金柑やね」

葉子の横で八百屋のおかみさんが声をかける。葉子の唇の両端が少し上を向いた。葉子が売り場を覗き込むと、タラの芽があった。

「ええっ、もうタラの芽でてるんやね。早いなあ」

「そう、ぼちぼち出だしてるよ」

「真冬やのにね」

「もう春はすぐやで」

気がつくと葉子の横でマスクの主婦がいっしょにタラの芽を覗き込んでいた。おばさんの声に二人で顔を見合わせる。

どちらともなく会釈。

八百屋のおかみさんがマスクの主婦に金柑を渡しながら

「奥さん、風邪ひいたん？喉？」という。

マスクの顔がこくんこくんと肯く。

「黒豆もいいんですよね」と葉子。

「そうそう」とおかみさん。

主婦の眉間に寄っていた皺が緩み、マスクの上で目が優しくなった。金柑は主婦の買い物籠にすぽんとおさまる。

「タラの芽ももらうわ」マスク越しにくぐもった声。

「わたしもください」と葉子。

「それと黒豆も」と、ちいさい会釈を葉子に向けながら主婦がいう。

「花、綺麗に咲くといいですね」

葉子がそう言うと、主婦の目は半円になり目尻いっぱい皺が浮かんだ。

(了)

いつの頃からか、季節の変わり方がとても乱暴になった気がする。

「大陸」に住んだことのある友だちから、まるで線を引いたように季節が変わる話を聞いたことがあるけれど、これでは同じだ。

いきなり暖かくなった。

話を聞いた時は春と秋が短いんだね、と応えたように思うのだけれど、いつの話で、話していたのが誰だったかすっかり忘れてしまった。

線を引いたように、ではないけれど、春はいつも東から息を吹いてくると思っている。普通、東風は雨をよぶ風といわれているけれど、私は二月の終わりから三月にかけての東風は春をよんでいると信じているのだ。

それまで冷たい風が徹底して北西か北北西から吹いてきていたから、毎年あれっ、と思う。少し暖かい風だから、そのせいでもあるのだろうけれど。

東風が吹き始めると、すぐに気温が上がりはじめ、晴れた空を冬とは違う方向に雲が次々と駆け抜けていく。俄に雪ではなく、雨が降ってくる。そんな日々が始まる。

そしていつか気温が下がらなくなり、冬は終わるといよりも忘れ去られていく。

今、その風が吹いていた。近くの山で日曜日の静けさを破るようにチェーンソウの音が響いている。冬の間枯れた木を始末しているのだろうか。私はベランダに出て頬と身体に受けていた。

待ちかねていたものが、ふいにやって来た気がした。別に春を待っていたわけではないのに、気温や風向きが変わると、ああこの日を待っていたんだと思う。

待っていることを忘れていた、ということに気がつく。

いつだって、なんだってそうなのかもしれない。「待っていたもの」は待ち焦がれてもきやしない。待つことを忘れた頃にやってくる。

昨晚、亨さんとずっと愛しあった。その感触を風が撫でていく。

ふたりの約束で日曜日の朝は洗濯機も掃除機も動かさない。部屋と部屋の周りはとても静かだ。亨さんはまだ眠っているみたいだ。

朝の風と光を独り占めしているようで、このうえなく贅沢な気分になる。

とても気持ちがいい。

ウグイスが啼いた。

姿は見えないけれど多分「あの」つがいだ。町内でずっと餌付けている人がいて、町内の様々な枝先で啼いているのは同じウグイスにちがいない。

そういえばウグイスの群れは見たことがない。たいてい「つがい」がいるだけ。そういう習性なのだろうか。

チェーンソウの音のピッチが速くなった。エンジンが駆動するたびに冬が崩れていく気がする。どんどん破れていけばいい。

風が呼吸をするように強弱をつけて吹き始めた。急に雨が来るのかもしれない。

遠くに梅の木が見えた。灰色の靄のような枝の中に紅の点描が浮いている。近所の庭のチューリップも随分伸びてきた。その傍らの、地面から咲いているような花はクロッカスだ。

世界にゆっくりと色が戻ってきている。

「何か見える」

亨さん声がいきなり頭の上でした。胸の上で亨さんの腕が交叉する。

「起きたん」

「うん」

「暖かくなったね」

「うん、いい天気」

その言葉が耳の奥で響いて、止まった。

私たちのあいだで沈黙がきらきらしている。

気持ちがいい。

「梅林、いきたいな」

「もうほとんど満開やろね」

花の匂い埋もれたいと思った。

「御所までいこう」

「うん、その前に食べよう。珈琲淹れたし」

台所の方で、ちんっと音がした。昨日買っておいたベーグルが温められていて、亨さんが珈琲の入ったマグカップを渡してくれる。

「春やね」

「うん」

いつものように向き合っの朝食。ベーグルをほおぼって、珈琲を啜っていると外がみるみる暗くなっていく。あ、というまもなくいきなり俄雨がベランダにしみを付けだした。いつのまにかチェーンソウもウグイスも聞こえなくなっている。

「あーあ、何この天気」

私は立ち上がって窓にむかった。あんなに晴れていたのに。まだ青空も少しだけ覗いているのに。

「待ってれば、すぐ止むよ」

こめかみに亨さんの指が触れた。

私の指は待ちかねていたように、すっと応えていた。

私にはまだ忘れていた「待っていること」があったのだろうか。まるでそんなふうに亨さんの指先を掴んでいた。

(了)



「もう大変やったんやから」

朝食の用意を調べ椅子に腰をおろすと、葉子は昨晚、苦しめられた夢の話をもたしゃべり始めた。亨がテーブルについて朝の珈琲を飲んでいる時から話はずっと続いている。

「うーん、別にうなされてたりはしてへんかったけどね」と亨。

葉子の見た夢とは、玉葱を延々とみじん切りする夢だった。切って切って切りまくったあげく、まな板からボウルに移す時にすべてひっくり返してしまう。そしてまた一から切って…。その繰り返しという夢を一晩中見ていたのだという。

「ああ、聴いてるだけで、しんどくなってくる」

「でしょう。朝起きたらぐったりしてるんだもん」

「実際に手を動かしてるわけは……ないよなあ」

亨は葉子の顔をじっと見つめる。やつれた様子はない。

「何かこう、体の中からサインが出てるのかな」

「うーん、どこかが痛いとか具合が悪いってことはないんやけど」

「なんか気になるなあ」

「ううん。だいじょぶやと思う。それに私、くたくたになる夢、何度か見たことがあるし」

「どなんん」

「フルマラソン、完走した夢」

「ぶ」

「あの時も起きたら、ぐったりしてた」

「……」

「しんどかったけど、あ、私マラソン走れる、ておもたもん。ふふふ。ねえ、実際には走ってないのにね。へへ。それにね」

「まだあるの」

「家中の大掃除する夢もあった。しんどかったな」

「なあ葉子、ほんとにどこも悪くないのか」

「うん大丈夫」

「なにか精神的になものなのかなあ。なんかとても辛いことでもあった？」

「いやそんなんやないから」

どこか具合が悪くなったらすぐに病院にいきや、と言い残して亨が仕事に出て行った。葉子は片づけをしながら、どことなく疲れた気分を感じ続けていた。眼の芯に熱がこもっているような気さえする。

…所詮夢なのになあ…

葉子は凝った首をぐるんと回した。

昨晩は満月だった。夕暮れてすぐ、東の山際の空に月が輝いた。葉子は帰ってきた亨とベランダに出て、いやあまんまるやねえ、といいながら月を眺めたのだった。

沈丁花の香りが鼻をついた。

それからご飯を食べて、満月だからってヴァンパイヤの話をして、Pet Shop Boysのヴァンパイヤの歌を聴いて、…そして眠る。なにも疲れる夢を見る理由なんてない。昨晚のことを反芻しながら葉子は首を少し傾げた。

夢は水面に浮かんでいる氷山の一角なのかもしれない、と葉子は思う。あの夢の下に自分でもわからない大きな「氷の塊」のような暗い感情があるのかもしれない。

…「みじん切り」の下に！！！！…

だけど、私のは「やり遂げた」夢だからまだいい。亨さんよりましだもの、と葉子は心を立て直すのだった。

亨が何年に一度かみる悪夢とは、受験勉強に追われている夢だ。それも前日で、しかも何もできてなくて、焦りまくっていて、と亨は出かける前に言っていた。そっちの方がはるかにしんどい、と葉子は思うのだ。

小説を読み耽る以外に何をしようというわけでもないまま、その日はあっという間に暮れていった。さて、と葉子は晩ご飯の支度をしようと立ち上がって、今日は何にもする気がない自分に気がついた。

なんだか結局「玉葱のみじん切り」を引きずってしまった。料理したくないなあ、と溜息をつく。

だけどつくらなきゃ。

そのまま冷蔵庫の置いた本棚に向かう。サイズを測って亨がつくってくれた本棚だ。そこには料理の本や切り抜いたレシピのファイル、料理のエッセイなどが並んでいる。たいてい毎日ここから献立を引き出しているのだ。じっと書棚を見つめた。

あたまのなかでカチンと音がして、葉子は一冊を抜き出す。

「森瑤子の料理手帖」。葉子は小説以外でも彼女の本は全部持っていた。

昔から苦しい時に重宝するスピード料理がここには載っている。

...森さんのは早いだけじゃなくておいしいし、亨さんも好きだし。...

選んだメニューは二つ。「ヨロン丼」と「ホットグリーンサラダ」。

ふたつともとても簡単。「ヨロン丼」はオイルサーデンを缶から出してフライパンで炒め、醤油をじゅっとまわしかけ、そのままご飯にのせて、上から葱を散らすもの。

「ホットグリーンサラダ」は冷蔵庫にあるありったけの緑の野菜をボイルして、その上から多めのオリーブオイルオイルでおじゃこを炒め、熱々のまま野菜の上からかける。胡麻をふってもいいし、お醤油も。

両方とも下準備だけしておいて、亨が帰ってきてから始めた方がいい。あつあつが命、なのだ。

葉子は器の用意を始めた。

藍の模様が入った丼をふたつ。お皿は...やっぱり藍の模様が入ったお皿だ。二枚のお皿は伊万里焼きである。亨と葉子はこのお皿が気に入っていて、親しみを込めて「贗伊万里」とよんでいる。

街中のこぢんまりとした「器屋」で買ったのだ。小柄な女の人が一人でやっていて、彼女はトレードマークのようにいつもインド更紗のスカーフを首に巻いていた。店内には若手陶芸作家の作品が主に置かれていて、いつもサンダルウッドのお香が焚かれている。黒い柱に漆喰の壁という雰囲気も好きでふたりでよく覗いていたのだった。

値段が手頃、というのもお店のポリシーのようだった。一点ものの高価な大皿もディスプレイされてはいたけれど、器は使わなきゃ意味ないですよなあ、と葉子たちはなんとも同じ台詞を聞かされていた。「贗伊万里」も一枚500円である。

伊万里だと気がついたのは葉子だった。

「これ、綺麗だなあ...伊万里ですか？」

「そうです『古伊万里』ですよ」

「あ、じゃあ高いんだ」

「だけど皿は平積みしてある。」

「オリジナルはとても高いです」

「そういいながら彼女はにっこり笑った。」

「ということはコピー」

「そうなんです。古伊万里のとても素敵な柄のお皿を手に入れたんですよ。普段使いにぴったりと思ったんですけど、とても高価だし、まして一枚だけでしょ。普段使いできるようにプリントしてもらったんです」

「プリントできるんですか」

「ええ。形もほぼ忠実に再現できるんですよ」

店内には若手作家の個性の塊のような作品が並んでいるのだけれど、それにしても普段使えるものしか店にはおかないという。

「器は使わなきゃ。それにこのお皿なんか大きさも手頃でしょ。それに折角綺麗な柄なんだから」

「いいもの」ならばオリジナルとかコピーにはこだわらないのだろう。

まして遙か昔につくられたお皿であれば、今の時代に蘇らせた方がおもしろいかもしれない、と葉子は思った。

「ええやん、これ」

「亨の一言で五枚を買った。」

ありがとうございます、といいながら、おかつぱの黒髪をきらきらさせてレジに向かう彼女のちいさな背中が、葉子にはとても遅しくおもえたのだった。

「ただいま」

「亨が帰ってきた。」

「シャワー浴びてね。上がったらすぐにご飯にするから」

「今日、なに」

「ヨロン丼」「お、いいな。久しぶりだよな」

「亨がシャワーを浴び終えて、外に出る音がしてから葉子は一気にメニューを仕上げた。「こっちはホットグリーンサラダか。森さんでまとめたわけだ」

「そう、簡単にしちゃった。あれ、亨さんもこの本読んだっけ」

「うんレシピというよりエッセイで読んだ」

亨はもぐもぐと食べていく。

「これ『麿伊万里』やね」

「うん」

「このお皿のこの藍色だと...」

「ん？なに」

「サラダの緑よりも黄色や茶色があうかも」

「そっかあ、茶色ねえ...」

亨が上目遣いに葉子を見ている。目が三角だ。

「なになに、なんか行ってよ」

「...ドライカレーとか」

「あ！！」

「おお」

「また玉葱のみじん切りやんかあ！」

「へへへへ」

「いけずやわあ」

亨の、明日のお弁当が危うい。

(了)

●「森瑤子の料理手帖」講談社

花曇りの月曜日、亨さんを送り出してから散歩をした。

お気に入りのコースがあって、それはとても狭くてぐねぐねと曲がりながら続いていく道。カーブの先に必ず花の咲く木があるからだ。まず大きなミモザの木がある。近所で春の到来を宣言するように咲くのがこの木だ。鮮やかなレモンイエローには毎年はっとさせられる。次のコーナーにはほとんど同じ頃に咲く梅があり、その下には水仙がある。

ミモザの花はとうに終わって、緑の葉が旺盛に繁りだしていて、梅にも新しい葉がでていた。梅の向こう側には、パラボラアンテナのような枝振りの巨大な赤松がある。天皇の火葬塚で、ぐるりを普通の家を取り囲んでいる。住宅街のまんなかに御陵や火葬塚が突然現れるのもこの街の特徴なのだ。火葬塚の北側のアパートに波多野君が住んでいる。

どうしてるかな。

そこで西へまがっていくと道のカーブに沿って椿の垣根を作っている家があり、その先に石榴の木がある。椿は赤い花をいくつも道にこぼしていて、石榴はまだ冬枯れのままだ。そこで北へ曲がると地道になる。

ここには大きな家庭菜園があるのだけれど、まだ何も植えられていない。

桜の花びらが目の前をはらはらと落ちていく。

曇り空が重くなった気がした。雨が降りだしたら桜は散りはじめるだろう。

紺のスーツを着たご近所の栗本さんの奥さまが向こうから歩いてきた。毎朝とてもゆっくりと犬にあわせて歩いていた栗本さんの姿を見かけなくなったとおもっていたら、一月に犬が亡くなったのだと、人づてに聞いていた。18歳だったという。

私は犬が好きで、見かけるといつも声をかけていたのだけれど、犬が亡くなってから会ったのは初めてだった。

何故か緊張する。

目尻のあたりに涙の跡が残っているように思えてしまう。昔、飼っていた犬が亡くなってからしばらく、何かの拍子に思いだしては涙ぐんでいた経験があったからかもしれない。

「おはようございます」

「おはようございます。なんや雲行きが怪しおすね」

「ええ、雨が降ったらもう桜も終わりでしょうね」

「でも御室はこれからですよ」

「ああそうそう、御室桜は遅いんですよね」

「私ね、小さい頃『御室桜』とか『御室のおたふく桜』ていわれてましたんえ」

「え、それって...」

「ハナが低い」

「あはは」慌てて口を手で押さえたけれど「あはははは」

「また犬を飼いましてん」

突然、話が変わった。

しゃべらずにはいられないという様子である。

「また柴犬ですねん」

「ええっ、よかったですやん」

「うちはずーっと続けて柴犬をこうてきたけど、わたしももう歳ですよん。それにうち、年寄りばかり三人でっしゃろ」

栗本さんの家のご主人とお爺さんとの三人家族である。ご夫妻は60歳を越えていて、お爺さんは80歳を越えている。

「癒しにもなるから飼いなさいと『先生』がいわはるんです。そやけど犬より先に私らが死にますわ、て『先生』にゆうたんですけどねえ」

「先生」というのはどうも主治医のようだ。

「犬が残されたらそのほうが可哀想でしょう」と栗本さん。

「そうですねえ。難しいところですねえ」

「そしたらね、あんたらが死んだら柴犬の面倒は必ずわしが見るからて、ゆうてくれはったんですよ。わははははは」息と唾を吞んで「それなら、て」

私は栗本さんの背が伸びているような気がした。それとなく足許を見たけれど普通のパンプスである。

「柴犬やったら賑やかになるでしょう」

「まあ、また大変ですわ」

大変、大変、といいながら嬉しくて仕方がないという顔、輝いている。悲しみも残っているのだろうけれど、きっとそれを覆うような喜びなのだ。「先生」もこの人たちの生活には犬が欠かせ

ない、と診たにちがいない。

「半年ですねん」

柴犬の歳も教えてくれる。

「もうすぐ散歩デビューですね」

「そうですねん。またぐいぐい引っ張られますわ」

困ったという笑い顔。

「そやけどね」

こんどは秘密を打ち明けるような顔。

「オンナの口にしましてん」

「あらま」

「ずっと『オトコの口』やったから。『オトコの口』はやんちゃでしょう」

栗本さん、柴はメスでも気が強くて「おてんば」ですよといいそうになったけれど、言うのはよした。きっとそれもまた楽しみになるのだもの。

栗本さんは駅の方へ歩いていった。

スーツの肩に桜の花びらがのっている。背筋がすっとのびている後ろ姿。

去年の冬、歩く速さを犬にあわせて、様子をうかがい覗き込むように背を丸めて歩いていた栗本さんの背中ではない。その前の年も、その前も、犬が弱りだしてから栗本さんの猫背ばかりみてきたからだろうか。

私も前を向いて歩き出した。家に戻る最後のカーブにソメイヨシノが満開で咲いている。そこから花びらが私に向かって流れてくるのだった。

(了)

●「御室桜」京都・御室仁和寺に咲く桜。ソメイヨシノよりも遅れて咲き始める。樹高が低いのが特徴。

雨上がりの朝、波多野は珈琲を飲みながら開け放たれたカーテンの向こう、目の高さにひろがる巨大な赤松の枝振りを眺めていた。澄み切った空気の中で枝先の滴が輝いている。

大学に入学してからずっとアパート2階のこの部屋に住んでいるけれど、この部屋に決めたのは、アパートの前面いっぱい広がる赤松に圧倒され、引き込まれたようなものだった。

アパートの前には約10メートル四方の土地に1メートル程の盛り土があり、ぐるりを黒く低い柵がめぐらしてあった。南側に小さな門がついていて、その脇に看板がある。

「『堀河天皇火葬塚』です」

まるで波多野の視線を見透かしたように大家が言った。

中央に一本の巨大な赤松が根を下ろしていて、その枝が敷地いっぱい放射状に広がっていた。赤松以外には何の植栽もない。

火葬塚の北側が波多野の住んでいるアパート、東西は大きな屋敷がそれぞれある。南側には幅1メートルほどの狭い路地が塚に沿ってあり、その向こうに民家が連なっていた。

とにかく巨大な赤松だった。波多野は「天然のパラボラアンテナ」と感じた。そしてこの松の横で暮らす、とその場で決めたのだった。

いまだにその樹の姿に飽きることはない。部屋を訪ねてくる友人にも、先ずこの樹を紹介する。「どう、これ凄いやろ」と。

吹き渡る風が松葉を振るわせる音だけが聞こえて、あとは何の音もしない。そんな朝が波多野は特に好きだった。珈琲をのみ、今日一日のことを考える。いや朝ばかりではない。本を読んだり、レポートを書いたりする時も顔を上げるといつも赤松が目に入るように机と椅子をセッティングしていた。赤松を見るたびに体と心が「何か」に反応している感覚がするからである。

じっと向き合っても植物がしゃべるわけではない。

ただ「言葉」によってではないけれど、植物はなにかを語っている、と生まれ育った田舎の深い森での経験から波多野は信じていた。それはさまざまな気配によってであった。

それは天気急変を告げるものであったり、なんともいえない恐ろしさであったり、突き抜けるような解放感であったりした。森にいただけでそのような気配を感じることができたのだ。

波多野は植物にも意志があり、人や動物の「想念」に反応することを電位差で説明した学説を大学に進学してから読んだのだけど。まるで自分の感覚が証明された気がして小躍りしたものである。

故郷の森の人を圧倒する存在感を思えば、そんなことはあたりまえのことではあったのだが。

ただ鉢植えの植物や草花でさえ「そう」なのだとしたら、巨大な樹や古い樹、あるいは古い森などはもっと大きなものに反応してきたんじゃないかと想像するのだった。例えば故郷の森は太古からの記憶を受け継いできたに違いない。そこに生き、死んでいったものたちの想いすべてを受け止めてきたのだろう。そしてこの赤松ならば、この古い街に起きた出来事であるとか、人々の考えや思ったことどもに反応してきたのだろう、と。

まるで耳を澄ますように張り巡らされた枝だとおもいながら、その葉音に耳を澄ます波多野だった。

南側の路地を走る女の子の姿が目に入った。大学キャンパスでも見かけるし、大学近くにできたベーカリーのレジにも立っていた。たぶん学年が下で、同じ大学に通っているのだろう、と波多野は思っていた。

彼女が走り始めたのは一年前の、まだ肌寒い三月だった。波多野のアパートからみると赤松の枝の網をすり抜けるように走っていく姿は少年のようだった。体がほとんど上下動せず、膝が上がらない。

そして足音がしなかった。そのことに波多野はひどく興味を惹かれた。

彼女は毎朝走っていた。いつでも髪は短く、紺のトレーニングウェアに包まれた体はとても細く、そしていつでも足音がしなかった。

彼女のことを気になりだし、しばらくすると彼女が走る頃には必ず起きているようになった。その姿を見ることが楽しみになったのである。

幻想がうまれていたのだ。

...まだ宙に浮かんでいられる体...

そんな幻想である。

小さい頃、山を夢中で駆けめぐっていて、瞬間、重力が消えた、と覚えることがあった。あと

から振り返ってよくもあんなところを駆け下りてきた、と思う時も何度もあった。あの感覚。少し地面から浮かんでいるような感覚。ほんの瞬間だけけれど、それをいまだに維持している少女だとしたら...。。

一年が過ぎた。...やはり...波多野は今年になって感じたことを頭の中で反芻した。

「足音」が聞こえるのだ。

地面を踏みしめる音。地面を掴み、蹴りつける音だ。

波多野は失望していた。「宙を走る」ということがたわいない幻想だとは承知のうえだけれども、あからさまに幻想がかき消えたことに妙にいらついていた。

夕刻。

喧噪のキャンパスから波多野は静かな町へ帰ってきた。

がらがら

金属音が通りに響く。夕陽を全身に浴びて、おばさんが煙草の自販機に新しい煙草を積めているところだった。ほかにする音といえば風の音だけ。誰も通りを歩いていなくて、車も通らない。空は抜けるように青かった。

やがて音は止み、おばさんは店の中に入り、通りは夕陽があふれるほどに満たされた。波多野以外に誰もいない通りは、ますます光を孕んで膨らんでくるかのように見える。

足音がした。朝、聴いた音だ。波多野は目を細めて前方を見た。彼女だった。正面から走ってくる。波多野に彼女の変貌はすぐにわかった。

ゆっくりしたリズムで体が上下動をしながら近づいてくる。グレーとレモンイエローののトレーニングウェアに包まれたからだ。柔らかな肩の線、胸のうつくしい影、細い首。

冬が終わり、彼女はもう「少年のような少女」ではなくなっていた。

彼女は一重の涼しげな眼で波多野を一瞥すると、まっすぐに前を向き、全身に光を浴びて走っていく。

美しい、と波多野は思った。

すれ違いながら、なおも姿を追うと、波多野は彼女の肩に松葉が一つ乗っているのを見つけた。

...赤松?!...

波多野の心に何かが響いた。彼女に惹かれている自分の心を何かぐいと後押ししているように感じていた。

胸が熱い。

(了)



「こんなところで見つけるなんてなあ」

亨は車に乗り込むと、おもわず呟いた。亨はついでしたが駅の西側にある花屋で小さな白い花の鉢を買ったのだけれど、それは葉子がずっと捜していた花だったのである。

亨は助手席にビニール袋に入った鉢花をそっと置き、エンジンをかけた。

一昨日、葉子は祖母の三回忌の法事のために実家の菩提寺にいった。その帰りの市バスの車窓からこの花屋を見つけたのだ。

「なんだか白い小さな花が沢山ディスプレイされていたの。一度いってみたらおもしろいかも」と、葉子。

葉子がそういう言い方をする時は「見てきて欲しい」という意味だと亨はわかっていたから、次の日の仕事帰りによってみたのである。

平屋のこぢんまりとした店で、葉子の言うように通りに面して小さな花の鉢がたくさんディスプレイされていた。全体の印象は白、それぞれが小さな鉢に植えられ、いっぱいの花をつけていた。観葉植物とハーブの苗もある。

四つ角に面して店があり、パナマ帽の若い女の子が水遣りをしながら角を曲がっていく。花で埋め尽くされた壁のあいまに開けっ放しの入口があった。

中に入ると右手に薔薇や百合やかすみ草などの生花が収納されている大きなガラスケースがあり、正面左には使い込まれた木の作業台があった。長い髪の若い女性はその奥にいて、こちらに背を向けていた。

ふーむ。

亨はぐるっと店内を見回して、もう一度外へ出て、花を詳しく見ていった。

...ふわっとした十字形の白い花...

何年前になるだろう。結婚してからか、結婚前か、時期は忘れたけれど、葉子が一番好きな花を形容した言葉を亨は覚えていた。

そんな形状の花を何度も買って帰ったぐらいだから忘れるはずもない。

そのたびに「ありがとう」といいながらも、いつも葉子は「残念、これ、ちょっと違う」というのだった。

葉子の「一番好きな花」の名前は「ブヴァリア」という。花屋で見たことはなく、亨の持っている植物図鑑にも載っていない。ただネット上ではその姿は確認できて、ネットで買うことはできた。だけど葉子はそれをしようとしなかった。

この花をいつも置いている花屋さんを見つけたいから、というのがその理由。街で花屋を覗くと、いつも「ブヴァリア」を捜していた。

亨の心が小さく躍った。目の前に葉子の説明したとおりの花がある。これだ！と直感した。と、同時に葉子がこの花にこだわる理由も思いだした。

...あの花を初めて見た時、私が死んだら柩の中をこの花で埋め尽くして欲しい、とおもったの...

縁起でもない、と亨がいうと、

うん、だけどその花なの。それぐらい好きなの。できることならいつでも見ていたい、という。

そんなに好きな花だからこそ、注文するのではなく普段からちゃんと置いている花屋さんで買いたいと葉子は強くいつづけたのだった。自分と同じ感じ方をする人を捜すような口ぶりだった。

それが多分、今目の前にある。丁字のように花がつき、その先のふくらみが割れて「ふわっと

した十字」になっている。亨の心はまた小さく躍りだした。手を伸ばし鉢を手にとる。ネームプレートが付いていた。

「ブヴァルディア」

んっ？鉢を戻す。亨は思案する。違うのか、読み方の違いだけなのか。違っていたら馬鹿らしい。もうにっこり笑っての「残念」は聞きたくなかった。

小さく溜息をつきながら顔を上げ、他のディスプレイされた花たちを眺めた。パナマ帽の女の子が水遣りのホースを持ちながらこちらに帰ってくる。

「いらっしゃいませ」

ハイティーンという印象のその子の顔の向こうに「母の日にお花のプレゼント」とチョークで書かれた小さな黒板が目に入った。

そうだ、11日は母の日。毎年、葉子と連名でお互いの母親にアレンジメントを贈っていた。今年はまだ予約をしていない。

「母の日の花、お願いできますか」とっさに声が出ていた。この店にもっと関わっていたいという気持ちが亨の心にあったのかもしれない。

「はい。中でお聞きします」

店内で長い髪の女の子にパナマ帽の女の子が声をかける。

「ありがとうございます。どのようにしたいしましょう。鉢花か生花か...」

作業台の向こうで長い髪の女の子がこちらに向き直った。

「あ、えーっと...」

とって、亨は言葉につまってしまった。毎年、同じ店で全国共通のギフトパックを使っていたので、てっきりその注文用のパンフが出てくると思っていたからだ。

「あ、うちはこちらでアレンジをさせていただいて、それと別に箱代と宅急便の送料が千円かかりますけど...」

長い髪の女の子は見透かしたようにそう言うと、目を少し曇らせた。

「いいですよ」亨はしっかり肯く。

途端に女の子の目がまっすぐ亨に向いた。

「京都市内にふたつなんだけど」

「はいっ。だいじょうぶです」

「じゃあ、それぞれ3000円ぐらいのアレンジメントで。あ、それと箱代+送料、ね」「はいっ。で、どんな感じで...」

「ひとつは赤基調で、もう一つは白基調で。花の種類は任せます」

赤が亨の、白が葉子の母親の好みである。これは毎年変わらない基準だった。

宅急便の用紙に記入し、代金を払うと領収書を渡された。

...グリーン・アオヤマ・シスターズ...おもしろい字体のスタンプがおされている。

「シスターズって...」

「ええ姉妹でやってます」

「がんばってはるんやね」

「へへ」

亨は思いきって尋ねてみた。

「あの、表に『ブヴァルディア』って花がありますよね」

「はい」

「あんな花の形をしている『ブヴァリア』って搜してるんですけど」

「あ、同じです」

「え」

「ブヴァリアは別名ブヴァルディアなんです。たぶん英語の読み方とフランス語の読み方の違いやないかとおもうんですけど。綺麗な花でしょう」

「そ、それも一つ買います」

家に帰り、亨は葉子に声をかけた。

「あの花屋さんに行ってきたよ」

「どうだった」

「うん、感じのいい店だった。姉妹でやってるんやて。花の選び方や置き方とか店の細かなところに手作り感があるっていうか、いい感じの『手つき』がみえる店、っていうか」

「あ、いいなそんな感じ」

「うん、だからついでに『母の日』のアレンジメント、予約しといたし」

「あ、もうその時期やね。ありがとお」

「で、これ」

白いビニール袋から鉢花を取り出した。

「あ、ブヴァリア!!!」

葉子の目が輝いた。

「いいえ、これはブヴァルディアどす」と亨はすましていう。

「なに、ゆうてはんの。これブヴァリアやんか。わあ、あったんやね。嬉しい」

「いいえ、これはブヴァル...」

といったところで亨は笑ってしまった。

「そうだよ。ブヴァリア」

葉子が笑いながら亨の背中をぽんぽん叩いた。

「とうとう出会ったわけやね」

「うん」

「今度はふたりでお店に行こう」

「うん、うん」

「葉子さん、この花の株、たくさん育てなきゃね」

「え、ちょっと待って。どういうこと」

小首を傾げた葉子の眼がくるくるっと動いた。

(了)

5月半ばを過ぎ、初夏のような陽気が街を包んでいた。それでも日が落ちると気温は一気に下がっていく。また日がずいぶん長くなって、夜の帳が降りるまで、あたりはわりと長い間群青色に染まっていた。

波多野はそんな夕暮れの街をゆっくりと歩いていた。深い紺色のシャツと黒いパンツが風に揺れている。彼はこの時間の街を歩くのが好きだった。

まるで時間が止まっているような感覚になるのだった。そして切ないほど懐かしい感情に襲われる。その感情が好きだった。

いつもの喫茶店に入り、外を眺める。

いつか水兵の恰好をして夜を歩こうか、と波多野はふいに思った。理由は自分でもわからない。ほとんど衝動に近い感覚である。

自分が水兵になった現実の「風景」を思い描いてみた。水兵の姿をして群青色と夜の中を歩くと、どんな気分になるのか…。自分が「何」になるか。自分に「何」が現れるのか…。

そんな想像を消すようにまた彼女の姿が脳裏に現れた。このところ波多野の心をとらえて放さない彼女。赤松の向こうを走る彼女だ。

水兵はたちまち消えた。

早朝は夜よりひんやりとしていて、ジョガーたちはほとんど長袖の上着を着ている。

目覚めた波多野は珈琲を飲みながら、アパート前の赤松の向こうを駆け抜けていく彼女を待っていた。

彼女は半袖のTシャツだった。白い腕に朝日が輝いている。

彼の心は決まっていた。

それまでも何日かキャンパスで彼女の姿を捜していた。

キャンパスが広いといってもランチがとれる場所は限られている。そのことに気がつくとすぐに彼女はみつかった。

混み合う前のオープン・カフェ。円テーブルに彼女が一人でいた。光沢のあるターコイスブルーのスカートと膝下まである紺色の編み上げのロングブーツ。焦げ茶の長袖のTシャツを着て

いる。

波多野はゆっくりと近づいていった。

「ここ、いいかな」

顔を上げ、黙って肯く彼女の前にはサンドイッチとアイスコーヒーが置かれていた。波多野は椅子を一つあげ、テーブルにアイ스티ーを置いて波多野は座った。

「毎朝、走ってるよね」

座るなり、波多野は彼女に声をかけた。

彼女はアイス・コーヒーの入った紙コップに口を付けたまま動きを止めた。眼だけを波多野に向ける。

「あ、ごめん。びっくりするねよね。ごめん。ぼくの部屋からみえるんだよ。君の姿。あの赤松の横のアパートに住んでるんだ」

彼女はその姿勢のまま肯く。

「はっきり言うけど、綺麗です。いつもみとれています。とにかく話がしたくて君を捜してたんだ」

彼女が伏せていた眼を上げた。綺麗な二重瞼のしたで眼が光る。丸い顔にえくぼができた。

「...あ、ありがとうございます...でいいのかな...。これって...」

「波多野っていうんだ。波多野勝（はたのまさる）文学部三回生」

「先輩ですね」

「こんなふういきなり話しかけるしかチャンスがなくて。ごめん、びっくりした。もう少し話してもかまわないかな？」

彼女は茶色のキャンバス地のおおきな鞆をテーブルの上に置いて

「いいですよ」

と、言ってまっすぐに波多野を見た。

「サークルに入ってるの？陸上とか」

「いいえ。ただ走るのが好きだけで」

「気持ちよさそうに走ってるもんね」

「波多野さんも走ってるんですか」

「大学に入ってから走ってないなあ。育ったのが田舎だから、子供の頃は走り回っていたけど。走るのは好きだよ」

「どちらなんです」

「京都の美山。丹波っていったほうがいいけどね」

「わたしは四国です」

「そうなんだ。...毎日どこまで走るの」

「金閣寺と仁和寺と赤松を三角形で結んだかんじかな」

「毎朝？」

「毎朝。朝から結構車が多いんですよ。ウォーキングとジョギングの人も多くてけっこう賑やかなんです」

ふたりが話し込んでいるのをランチに集まりだした学生の何人かが見つめている。ほとんどは女子だ。それは波多野の美貌を日々観察しているような視線だった。

「よかったら名前を教えてくださいませんか。なんて呼んだらいいのかな...」

「『なおみ』です。鈴木尚美」

「じゃあ、尚美さん。これからも君とあっているいろいろと話できるかな」

「はい。いいですよ。だけどわたし、波多野さんが考えているような女の子じゃないかもしれませんよ」

「ぼくは何にも考えてないよ。だから君がどんな女の子でもかまわない。とにかく君のことを知りたいんだ。違うとかダメとかはいつでもいつでもいつかいいし。君に従うよ？」

「じゃあ波多野さんのことも全部教えてくださいませんか」

「もちろん」

「じゃあ...彼女いないんですか」

「いないよ」

「うっそだあー。女子が放っておかないですよ」

尚美は自分に注がれている周囲の視線を感じていた。そして目の前にいる女性的な美しさすら感じさせる波多野の容姿を思えば当然だと思っていた。

「いや、そんなことないんだって」

「まあ、それもそのうちにわかりますよね。私に彼がいるかもしれないし」

「んっ??」

「ふふ」

「何のお話ししましょ。うーん、走るのが好きなのに...少しも走らないんですか。散歩でもいいけど」

「散歩はするよ。アパートからどんなお寺でも行けるから。お寺は静かだし空気がいいし。君もこのあたりに住んでたら知ってるだろう。だけど朝の五時、六時だと龍安寺か妙心寺しかはいれないけどね。あ、それとたまに八十八カ所もいく」

「八十八カ所!!」尚美の顔が輝いた。

「今は歩いてますけど、以前は走ってました。こんど一緒に歩きましょうか」

通称「御室八十八カ所」。御室仁和寺の裏手の「成就山」に四国八十八カ所を模した八十八のお堂がある。短い距離だけれど結構きついアップダウンをしながらこの祠を回っていくと最後に

結願所に辿り着く。

できたのは1827年。当時は誰もが四国へいくというわけにはいかなかったので、そういう人たちのために山を開いたのだった。「本家」各霊場の砂を、山に点在する各お堂に埋め、「巡礼の道」ははじまったという。

「道」は誰もが自由に歩けるようになっている。波多野はスポーツクラブ所属の大学生や高校生、あるいはジョガーが走っている姿を見たことがある。しかしあくまでも本来は拝礼しながら歩く道なのだ。年配の方たちがゆっくりと山を回っている姿がやはり目立つ。

今朝も朝の路地を鈴木尚美の姿が駆け抜けていく。

波多野は携帯を開く。尚美のアドレスと番号が登録されている。

...今日もあいたいな...

そう思った途端にメールの着信音になった。尚美からだった。

「今から御室を歩きませんか。よければそちらに戻っていきますけど」

波多野はすぐに了解の返信を送り、長袖のTシャツを着て外に出た。

「おはよう」

尚美は膝下までの黒いスパッツと白いTシャツで現れた。

「おはよう」と波多野。

お互い、眩しそうに眼を細める。

歩き始めた。

住宅街の細い道を二人並んで仁和寺へ向かう。もっと早く辿り着ける広い道もあるのだけれど。せっかく朝早く歩いているのに、車の音と排気ガスを浴びたくはないと二人の意見が一致したのだった。

軒先に鉢植えのアマリリスが大きな花を咲かせていて、それが何軒か道しるべのように続いていく。

やがてこんもりとした境内の林がみえてきた。まっすぐ歩くと境内を囲む壁に突き当たる。左

へ行けば南の正門へ、右へ行けば北裏の土塀に回り込んでいく。八十八カ所の入口は寺の向こう側、西側の通用門から10メートルほどいったあたりだ。ふたりは右へ回った。

「この道、いいでしょう」

「うん、山には入らなくても、一人で歩いている時はよくここを通るよ。いつも風が抜けて気持ちがいいし。静やし」

二人の左手には土の中に瓦を並行に何層も埋め込んだ黄土色の塀が続いていた。塀の向こうには広葉樹が続き、日陰が道を覆っている。右手は聾学校のグラウンドの「のり面」で、細長い草が旺盛に繁っていた。

やがて北西角につく。右側に木々が茂っていて、奥にお寺がみえる。ここが八十八番目のお堂。結願所だ。角を左に曲がり、右側の住宅地の奥に「一番札所」という看板がみえる。つまり出発地点と到達地点がとても近い。立体の山のなかを円を描いて歩くわけだ。

野良の子猫が五匹、境内の角と道の間の草むらにいた。誰かが世話をしているのだろう。人を見ても逃げない。きょとんとした顔をあげて二人を見ていた。

「お、トラ、元気か」

金茶の縞模様の猫に波多野が声をかけた。

「あ、タクヤひさしぶり」

同じ猫に尚美が言う。二人は顔を見合わせた。波多野から指さしながら順番に名前をいっていく。

「ヒメ、コジロー、ナリタヤ、ハリマヤ」

そのあとをなぞって尚美が言う。

「ミーシャ、マツオカ、エビゾー、おかき」

「他の散歩してる人たちもきっと『自分だけの名前』をつけてるよね」

「うん。やっぱご飯あげたり世話してる人のつけた名前が『本名』になるのかなあ」

ふたりはほとんど歩いていった。

一番札所から山に入っていく右手に、「まむしに ちゅうい」と黒々と筆で書かれている。

山に入った途端、濃い緑の影に包まれ、空気が変わった。二人とも自然と深呼吸をし、鳥の声のする方に顔を向ける。

狭い道を二番、三番、四番...とお堂の前を過ぎていく。勾配が急になり始め、道も歩きにくくなっていく。不揃いの階段だったり、補修したアスファルトが崩れていたり。

道が狭いので二人並んでは歩けない。波多野が前を歩く。

「波多野さん歩き慣れてますね」

後ろから尚美が声をかけた。

「田舎は山ばかりだもん。しょっちゅう歩いてたし」

「もっと息が上がるかなって思ったけど…」

「残念でした」

お堂とお堂の間はそんなに開いているわけではない。常に次のお堂がみえている。勾配はどんどん急になる。昔からある道。道ばたに古い梵字の刻まれた石柱がある。昔はこれが目印だったので。急坂の途中で真新しい石柱がみえたので波多野は足を止めた。

是より土佐國「修行の道場」第二四番から第三十九番

側面には「京都高知県県人会」とある。

「前に歩いた時はなかったなあ。なるほどね全部、四国八十八カ所の再現だから、ぼくらは高知縣を『通過する』ところなんだな」

「へへへ。私の出身縣です」

「あ、そうなんだ」

再び歩き出す。

しばらく行くと平坦な地道になった。緑の影が晴れて光が直に道に当たる。空が広がった。頂上が近い。

広がったところに弘法大師の像が建っていた。

二人は歩みをゆるめた。道を少し外れたところに愛宕山を眺望できるポイントがある。

「いってみる？」

と、波多野がいうと、尚美は肯いた。

ずっと丹波地方へ続く山々を背後に、ひときわ高い山を波多野が指さした。

「あれだよ。京都で一番高い山。登ったことある？」 「ううん」

「あそこには頂上に神社があって、京都の人はけっこう登ってるんだ。ぼくも登った」

「なんの神様なの」

「火の神様。京都の家の台所にたいてい『火洒要慎』ってお札が貼ってあるよ。あれは愛宕さんのなんだ」

「あ、それ、バイト先の厨房でみたことある」

「バイトって？」

「お好み焼き屋さん」

波多野が指先をずっと右へふった。

「あの山のむこうあたりがぼくの出身地。美山だよ」

再び歩き出す。

道の両側に山躑躅の薄桃色の花がいっぱい咲いて、甘い香りが流れていた。

「なんだか私たち、昔から一緒だったみたいに歩してる」

尚美は感じたままに言った。気がつくとなら肩を並べて、波多野の息づかいだけを聞きながら歩いていたのだ。

「息が合うんだよ」

「そうか...」

息が合う。ほんとうにそうだ。かなり速く歩いているのだけれど、ただただ気持ちがいい。それも独りで歩いている時よりずっと。

...うまくいきすぎだ。...尚美は少し癪にさわった。

「ねえ波多野さん、くどいようだけど恋愛で苦しんだことないでしょ」

「え、なんで」

「だって、初対面でいきなりずばっと話しかけて来た時だって、自信満々だったから。全然折れたことがないようにみえたもん」

「そんなことないよ。何度も振られたことがあるし...」

「ふーん」（うっそー）

「結構あのときは必死だったんだよ。それに回りくどいのはいやだから」

「うん。回りくどいのは...」

道が急な下りにさしかかり、会話が途切れた。

眼下に京都市街がみえる。道は複雑に折れ曲がりながら、一気に下るかと思えばまた急に登る、という具合だ。ほとんどヘアピン状態のカーブには必ずコースを外れて、下っていく踏みしめられてきた道がある。それも数が多い。

「こっちに歩いたことある？」

「ううん、これ抜け道でしょ」

「ショートカットコースだよ」

その道の先には灌木越しにお堂の屋根がみえている。三つか四つ先のお堂だ。

「走ったり、トレーニング目的の人にとって見ればこっちの方がスムーズなんやろけど」

「だけど八十八カ所を巡る道なのに」

「どう回るかは自由なんだ」

「わたしも別に拝んで回るわけじゃないけど、ズルしてるみたいで、なんだかいや」
「ぼくは山が荒れるからいやなんだ。ほら地面が剥き出しになって、雨でえぐれてる」
「ほんとだ。ダメですよこれ。抜け道を歩くのをやめよー」
「やめよー」

二人の息が合っている。

前方にゆっくりと歩く灰色のジャージ姿の男が現れた。絶好の散歩コースでもあるので、山の中で時折、歩く人と遭遇する。ふたりはすぐに追い越した。道が狭いので声をかける。

おはようございます。おはよう。横、通ります。はいよ。

二人は前へ前へと歩いていく。

是より伊予の国 「菩提の道場」 四十番から六十九番 京都愛媛県人会

「『四国山地を越えた』んだ」

「うん」

しばらくいくと先程抜いた男性が前方にまた現れた。「抜け道」を歩いているのだろう。また声をかける。

「すみません横いきます」「ああ、どうぞ」

尚美の声が少し尖って、相手の声はさっきよりも小さい。

下り道は一度完全に下まで降り、そこからまた軽い上り下りを繰り返して最後の八十八番に近づいた。

またあの男が前を歩いていた。もうこれで三度目である。

「ねえ、ちょっと変...」

尚美がちいさい声でいった。

「わかってるよ」と、波多野。

二度目に追い抜いたところからここまで「抜け道」は存在しない。まるで宙を飛んだように男は二人の前に現れたのだった。

「またあいましてね」と波多野。

「きっちり歩くんだね君たち」

男はマリナーズの帽子を目深に被っているので表情はわからないけれど、真っ黒に日焼けしているのはわかった。

「おじさんも朝から歩いてるんですね...いや飛んでるのかな」

「ふっ」

「そうやって人を驚かしたりして」と尚美。

「いや、ひょっとしたら君たちは飛べるのかと思ってさ。そんな雰囲気してるから」

「ははは、なんて答えたらいいんだろ？」波多野は尚美をちら、と見た。

「『そんなやつおれへんやろおお』」

尚美が低いうなり声で漫才師のまねをした。

「ちえっ。なあんだ」

男の姿が、ぼんっ、と消えた。

「この道はいろんなことがあるよね。四国の『本家』でもいろいろあるらしいし」

「おじさんなのに...やんちゃだなあ。子供なんだから」

最後のお堂でご本尊に手を合わせる。ふたりは帰路についた。

「ねえ波多野さん見て」

尚美が指さしたところには張り紙があった。お寺の方が標語として張り出したのだろう。一番札所にあった「まむしにちゅうい」と同じ筆跡だ。

『朝は神 昼は人間 夕されば獣に近き心悲しも 求めよ仏の道』

「『真溪涙骨集より』って書いてあるけど」

「真溪涙骨は明治生まれの反骨のジャーナリストだよ。こんなところにね...。ふーん、おもしろいな」

「弘法大師じゃないんだ...。だけど今はどうだろう。獣と人と、どっちが道をはずしているんだか」

「うーん。そうだよなあ。『朝は神』か...。あの人が化身だったらおもしろいね」

「え、なにの」

「『朝は...』の」

「神様も遊ぶんだ」

「いや、あの姿で歩く人を見守っているんだよ。きっと」

波多野は来た道の方を見上げた。尚美も一緒に見上げると、七十番台のあたりにに灰色の男の背中がみえた。まっすぐにじっと立っている。

「夕されば獣に近き心...か」

波多野は小さく呟いた。

「神も獣も人も、みんな一人の人間の中にいる。どう生きるかは自分で決めるしかないんだ」

「て、ことですね」尚美が付け足す。

二人はすこしのあいだ黙った。

「家にアイスティーあるからこない？」

「あ、いいですね。アールグレイだったりして？」

そうだよ、と波多野が言った。

「ぼくらもちょっと飛んで帰ろうか」

尚美が微笑んで肯く。

ふたりはゆっくりと走り出した。

(了)

梅ジャムと薔薇を吸う象

シンクの窓辺にはうっすらと黄色く熟しはじめた梅の実が金箎にとってあり、甘い香りが部屋へ流れていた。香りは日に日に強くなってきていて、葉子はジャムづくりをはじめることにした。青梅であったなら梅酒にしたし、量がもう少し多ければ梅干しにしたのだけれど、近所の上村さんからいただいた梅はどちらにするにもちょっと「はずれ」ていた。

朝の食卓はそんな話で始まった。

「亨さん、梅ジャムって食べたことある」

「結婚してからジャムといえばマーマレードかブルーベリーぐらいでしょ。子供の頃にあったかな」

「そうよね、私もそう」

「砂糖で煮るの？」

「はちみつ。作り方はとてもシンプルだから丁寧にやるね」

「楽しみだな」

「量はたぶん少ないけどね」

「ところでミニバラの薔、全部あかんかったん？」

亨はそういいながらベランダに出ている小さな鉢たちを眺めた。ブヴァリアの鉢、ハーブの鉢と並んでミニバラの鉢がある。去年葉子が買ってきた薔薇で、白いちいさな花を咲かせる。名前は「C l o u d i a」。

今年も5月になって薔がどんどん膨らんで二人で楽しみにしていたのだけれど、これからという時に突然萎れ、次の朝には折れるほどになり、そしてとうとう薔の部分だけが枯れてしまったのだ。

「残りは後一つ」

「きょう、社長の奥さんに聴いてみるよ。社長の家の庭は薔薇が沢山咲いてるし、店にもミニバラの鉢が置いてあるから、なにか教えてもらえるかも」

「あ、ぜひぜひ。咲かせてあげたいもの」

「じゃ、行ってくる」

亨が腰を上げた。

葉子は梅をボウルにいれ、水をたっぷり注ぐと、そのまま一時間ほど浸けておいた。水の中の梅の実には、最初不思議なことに透けて見えた。錯覚かしら、と葉子は何度も目を凝らしてみたけれど、薄い皮の内側にまるで透明な蜜がつまっているようにみえる。葉子はじっと飽きるまで見ていた。

亨は朝の打ち合わせをすませると、社長の奥さんである桂子さんに薔薇のことを尋ねてみた。個人経営の電器店で、桂子さんは経理事務をしている。

「うちのミニ薔薇のことで、ちょっと教えて欲しいんですけど」

「おいおい花村、そいつが薔薇のこと話し出したらとまらへんぞ」

社長が眉間に皺を寄せて笑いながら言う。

「あら亨さん、どうしたの。何でも聴いてちょうだい」

「あのですね、花が咲く手前で蕾が全部萎れてしまうんですよ。で、ぐにゃと折れて枯れちゃうんです。

花が咲かなくて…」

「あ、それね。象が吸うのよ」

「は？象。『ぞお』ですか」

「そう、象」

「花村、現場に行くぞ。薔薇のことは帰ってから、な」

「はいはい」

「帰ってきたら、どこに隠れてるか教えてあげるから」

「象が、ですか！！」

「そう」

葉子は梅を茹で、さましてから種を取って皮ごと裏ごしをしていた。もうこの段階で梅の量はかなり減っている。網の上からへらでごしごしと梅の実を網に擦りつけていく。

あとはこの梅と半分の量のハチミツをあわせて煮詰めていけばできあがりである。裏ごしをしたものを鍋に入れると、葉子は買い物に出た。ハチミツも買う。

自転車で通りすぎる家々の植栽の中では薔薇と紫陽花が目立っていた。葉子は少し悔しかった。

…なんとか咲かせたいな…

食料品店に行くと、いつもの近所の顔ぶれがない。お年寄りがぽつんと一人だけ店の中をゆっくりと歩いているだけだ。レジにも若い「お嫁さん」が入っていて、おかみさんがいない。葉子はハチミツと果物を籠いれ、レジに向かった。

「なんだか、静かですね。おかみさんがいてはれへんからかな」

「テレビドラマの再放送みてはりますねん」

「お嫁さん」がにんまりと笑う。

「あ、そうかあ。いつもの人たちもいないなあっておもてたんです」

「ふふ。いまだにすごい人気がありますね」

「ふーんそおなんだ」

家に戻ると梅とハチミツを混ぜ合わせ、ことごとと煮ていく。きつすぎると硬くなるし、弱すぎると水分があまり飛ばない。気をつけて煮詰めていく。ことごと、ことごと。

葉子は食卓の椅子をレンジの前まで持ってきて、文庫本を読み出す。何度も鍋の様子を覗きながら。（ことごと、ことごと）（ぱら ぱら）

それほど時間もかからずに梅ジャムは完成した。あとはさまして瓶に詰めればいい。

亨はその日の予定の最後、冷蔵庫の納入を済ませて店に帰ってきた。桂子さんが店にあるミニ薔薇の鉢を手に待っていた。

「いい、虫の気持ちになって考えるの」

「はい」

「この薔薇でいちばんおいしそうなところはどこでしょう」

「うーん」

「新芽と若葉と蕾なのよ」

亨は黙って肯く。

「うちのもよく象にやられるの」「はあ」

「でね...若い蕾があったらよーくみるの。こういうとこにいたりするわけよ」

ふたりで新しい蕾をじっと覗き込んだ。

「ほらっ」「あっ」

桂子さんが蕾から何か黒いものをむしり取った。

「これよ」

「...象だ」

その夜、亨と葉子の顔が「C l o u d i a」に吸い付けられるように並んでいた。最後の蕾がまたぴんっと立っている。そのあたりを二人で「象」を捜していた。

「それが蕾のエキスを吸い取っちゃうんやね」

「そうそう...葉の付け根にもいるとか...」

「これじゃない」葉子が若葉の付け根に隠れている虫を見つけた。

「どれどれ」そうやって亨が顔を近づける。

「うん。これこれ」

亨が掌に載せたのが「バラゾウムシ」だ。体長は2ミリ程度。小さな虫だけれど薔薇の蕾を台無しにする虫である。

「これを横にすると...」

といて亨が指先で転がした。莖に刺さるように長く伸びた鼻のある姿は超ミニチュアの象そっくりだった。

「あ、象だわ」

「一件落着やね」

「手で取るんやね。クスリは使わないんだ」

「うん。薔薇の薬剤には猛毒のものもあるし、奥さんも使わないって。自分たちが食べる野菜は無農薬にこだわったりするのに、その家の庭で強烈な薬品使ったりするのはおかしいって」

「そうやねえ。体壊してまで使うことないし」

「天敵もいるしね」「何」「蜘蛛と蜂」

「蜘蛛、大事にしよう」

テーブルに戻ると円柱の瓶に山吹色のジャムが置いてある。

「こんなできました。少ないでしょ」

「煮詰めるとこうなるんだ」

「舐めてみる」

亨はスプーンで少し掬い、ぺろりと舐めた。

「甘いね。おいしい」

葉子の顔に笑みがひろがった。

二人でテーブルに座るともう一度薔薇を見る。

「さっきも気づいたんだけど、薔薇の新芽、若葉、新しい茎、全部血の色をしてるんだよね」

「そうね。まるで動物みたい」

「流れているのは透明な樹液なのに」

「あの色はいのちの色なんでしょう」

「うん」

亨は葉子の唇を見る。紅色が蛍光灯に光っていた。

亨の指が唇に触れようと伸びていく。

(了)

葉子が彼女の存在を知ったのは三年前、父が腎臓の具合を悪くして入院した時だった。

毎日、着替えや差し入れを持って母と交代で通っていた病院は大きく、入院生活に必要な大抵のものは病院1階にテナントとして入っているコンビニで買うことができたのだけれど、葉子は自分の昼食（お弁当）をとうとうそこで買うことができなかった。父が厳しい食事制限を受けていて、母がそれにつきあうように塩分の少ない野菜中心の食事に切り替えて（「ちょうどいい機会だからお母さんもダイエットしようっと」）いたからである。葉子はなんだか一人だけ「気ままな」食事をとってはいけない気になっていたのだった。そんなふうだったから昼食時になると葉子は気詰まりになって病院の外に出ていた。

官庁街なので多くの食堂があり、弁当の路上販売もあった。結局その弁当を葉子は日替わりで選んでいた。

病院の前は短いけれど片側三車線の広い通りである。突き当たりに府庁があり、通りの東側のほとんどを病院が占めていた。立派なケヤキ並木が二車線と三車線の間が続いていて、路上では一日中木陰が揺れていた。その威容のために車がおもわずスピードを落とす、櫛のドームのような通りだった。そんな櫛の根元のベンチで葉子は弁当を食べていたのだった。

病院は南北に三つの大きな病棟で構成されていて、葉子の父はまん中の病棟の五階に入院していた。

ある日の午前11時半。葉子は弁当を買うために早めに外に出た。前の晩、葉子は母から「たまたまみつけた素敵なお弁当」のことを聞いていたのだ。

「あなたぐらいの年の若い女の人でね。いいのよ。無農薬のお野菜だけでつくっているお弁当なのよ。ただあのあたりは路上販売は午前11時半からという決まりになってるの。でね売り出すとすぐに売り切れちゃうみたい。おかあさんは買えなかったんだから」

目印は大きな緑色のパラソルと黄色いリヤカー。葉子は母のその言葉をアタマのなかで反芻しながら、通りを見渡した。いたるところに弁当屋がいる。

見つけた。

そこは歩道でも車道でもない並木の生えているむ分離帯。彼女はレモンイエローに塗ったり

ヤカーを駐めて、キャンプで使いそうなどとても大きなパラソルを組み立てていた。

細いジーンズ、白い大きなシャツ、バスケットシューズ、うしろでまとめられた真っ黒の髪。そんな後ろ姿に向かって葉子は近づいていった。

...あのうお弁当、いいですか...

と、声をかけるつもりだったのだけれど、どこにいたのか、目の前をパジャマ姿の患者や、一車線を潰すように止まっているタクシー運転手や、入院患者の付き添いとおもわれるサンダル履きのおばさんたちが葉子の前に重なるようになってきた。

「準備中やのにごめんねえ。またお弁当ちょうだい」

「わしも」

「うちにも」

「ぼくも」

「ああ、あの私も」葉子も後ろからつられていってしまった。

「ははは、このんは早よ言わな売り切れてしまうさかい。ははは」

おばさんが振り返りながら葉子にいった。

「はいはい。いつもありがとうございます」

そう言いながらこちらを向いた伏し目がちの彼女の顔はまだ20歳代のようにみえた。

彼女はパラソルを組み立て、リヤカーの商品にかけていた生成りの布をとった。プラスチックの弁当箱がきちんと収まっている。輪ゴムがかけられ、割り箸が添えられている。

すぐに並んだ順番で売れていった。葉子の番だ。

「えーっと、種類は...」

「野菜を使った精進弁当一種類だけなんですよ。よろしいですか」

「はい、それ下さい」

「すみませんねえ、手作りなもので種類がなくて...」

お弁当を手渡されて、リヤカーの中を覗くと数が少ない。20個ぐらいしか持ってきていないように葉子には思えた。

「へえ、それおいしそうやん」

それまで話を聴いていた亨が口を開いた。亨は日曜日に出勤した代休。家でごろんとしていた。

「ほんまに一人で作ってはったんやろねえ、それからも売ってる数が増えたようにはみえへんかったし」

「あれ？こないだたしかあそこで事故なかった？」

「いや知らへんけど」

「たしか車椅子の人が弁当を売ってはる人のワゴンにぶつけられてん。だからワゴン車での路肩販売は全部禁止になったと思うよ。手売りの人たちも歩道では禁止。たしかにあのへん走っていて危ないな、と何度か感じたもの…。病院の隣は警察本部やから禁止の指導は厳しかったんちゃうかな」

「ほならもういてはれへんかも」

「葉子見にいこ」そうって亨はたちあがった。

「あかんかったら他所でこうたらええやん」

11時過ぎに二人は自転車で家を出た。空は曇りがち。蒸し暑かった。

ゆっくりゆっくりと南へ。そして細い通りを東へ。二人は碁盤の目の街ををL字に進んでいった。病院手前の、最後の大通りで信号を待っていると、まっすぐ前でリヤカーを手で引いている女性がいた。

亨が葉子に声をかける。

葉子は黙っておおきく肯いた。

信号を渡って、二人はそっと彼女の後ろについた。それほど大きくないリヤカーで、大きなアルミの箱のようだった。胴体はレモンイエローにペイントされていて、上には緑色の大きなパラソルがたたんで載せられていた。彼女はグレーのTシャツに黒い細身のジーンズ。モカシンの靴をはいている。

…なんだかたった今、普通の家からでてきたみたい…と亨はおもった。

時間が早いので、二人は、するするとそのまま彼女を追い抜きケーキ屋さんによった。食後のものを先に買ってから病院の自転車置き場によって、急いで病院前へいった。

「あら」と葉子は言ったきり次の言葉を失った。

確かにワゴン車はいなくなり路上でも弁当は売っていなかったけれど、櫛並木の下分離帯のスペースというスペースに弁当屋がいたのである。みなリヤカーである。みな緑のパラソルを広げている。

「こんなことになってるなんて。昔はあの人が分離帯に一人だけだったのに…」

「葉子、黄色、黄色」

ふたりで歩きながら黄色いリヤカーを探した。わりと早くに見つかったのだけれど、ぴたりともう一台のリヤカーが横付けしていて、やはり大きな緑のパラソルを広げている。

「はいはいらっしゃい。いろいろありますよ。焼肉、生姜焼き、これは天ぷら、ね」

おばさんが威勢よく声をかけてくる。

立ち並ぶ弁当屋のリヤカーのなかに黄色が見えた。その横で彼女が俯いてカバーをとっている。

、亨が威勢のいいおばさんの脇をすり抜けながら

「お弁当二つください」

「ありがとうございます」

彼女が顔を上げた。

三年前と少しも変わっていない、と葉子は思った。野菜の天ぷら、煮物、お浸し...それと生麩！

「あのう、よかったら『ごはん大盛』はいかがですか」

「あ、大盛あるんだ。いいですよ。いくらです」

「同じです」

「同じ??」

「ご飯炊き過ぎちゃって。てへへ。大盛が二つだけできちゃって」

「はあ」

彼女は照れくさそうに苦笑いをした。

「ずっと一人でやってはるんですよね」

「そうです。あ、以前にも？」

「はい」

「ありがとうございます。相変わらず種類しかできなくて...」

「おいしいって評判ですよ」

彼女の頬が少し赤らんだ。

「へへ」

そういつている間にパシャマ姿のおばあさんが来たり、わざわざ車を降りて買い求めに来る人がいる。どうやらリヤカーに二段重ねた分で完売のようである。そうなるまでそれほど時間もかからないように葉子たちには思えた。隣のおばさんの大きめのリヤカーには各種の弁当が満載されていて、そちらも売れていつている。しかし、通り全体ではとんでもない過当競争だ。

葉子と亨は弁当を持って通りを渡り、ずらりと並ぶ弁当屋たちを見た。そのなかに一つだけ黄色のリヤカーがある。それはずっと変わらない彼女の位置を示しているようだった。葉子には誰も奪えない彼女の色のよう思えた。

薄い、ぼんやりとした、けどしっかりと目に残る黄色なのだった。

(了)



梅雨の中休みのような日差しの中、葉子は午前中に買い物にでかけた。

北から涼しい風が通りを吹きぬけている。昨日のような雨の日は寺や神社の境内の森にこもっている鳥たちが、今日は元気よく街を飛び回っていた。

この街は山に近いせいか鳥が多い。カラス、鳩、雀以外にもウグイス、キツツキ、メジロ、ヒヨドリなどがいて、お寺の池には鴨とアヒルがいた。

葉子は肉屋の前の路上、高さ3メートルほどの宙空で、ツバメがくるくるとせわしなく旋回しているのをみつけた。

葉子は商店街の低空を猛スピードで滑空していくツバメの姿をよく見るのだけれど、そのような飛び方を見るのは初めてだった。

ちょうどそちらに行くところだったので、ツバメをずっと目で追いながら近づいていった。するとツバメはすっとはす向かいの文房具店の軒先の庇の裏に飛び込んだ。

そのままでてこない。

...巢やわ！！...

葉子はそう直感すると、文房具店の赤いビニールの庇の下に入って壁との間を仰ぎ見た。

巢があった。

雛は相当大きくなっている。口を開けて帰ってきた母鳥にむかって懸命に鳴いている。

二、三分だろうか、じっと巢を見上げていると、傍らに文房具店のお婆さんがいつのまにか並んで立っていた。

「雛、もうおおきいでっしゃろ」

「ええ」

二人とも巢を見上げたまま言葉を交わした。

「寒うなったら暖かいとこまで飛んでいかんならんし、早う大きうなって、体力つけて、飛ぶ稽

古をせなねえ」

「ほんまにそうですね」

そういいながら葉子が顔を横に向けると、背の低いお婆さんの頭越しに扉が半開きになった店内が覗けた。葉子はこの店に入ったことはない。

「うちには毎年来はるの。毎年来てここに巣をつくらはんの」

おばあさんは困ったような顔をしながら、ふほほほと笑う。

店内は静かだ。この時刻だから、というよりもいつも暇なような雰囲気が出ている。この街に限ったことではないのだけれど子供の数がどんどん減っていて、この地区でも小学校の統廃合の計画があるぐらいだ。その影響を受けているのだろうか。葉子はそんなことをちらりと考えた。

「ところで奥さん、万年筆は使わはりますか」

いきなり話題が変わって葉子は言葉につまる。おばあさんは葉子の顔をしっかりと見つめている。

「あ、あの、手紙はぜんぶ万年筆です。え、え、だけど...」

「おお！！実はうちは万年筆の修理もしますねん。というかそれが専門ですねん。簡単な修理やったらうちでしまっさかい、何かお困りのこととか...」

「わかりましたわかりました。何かあったらお願いしますね」

「はいはいいつでもどうぞ。メーカーの人もここには来てくれますん。だから大抵のことはできまっさかい」

葉子はもう一度ツバメの巣を見上げた、赤いビニールの庇で守られてはいるけれど、そのビニールは色あせて古びている。その庇を支える白い鉄パイプと壁の間に巣が作られていて、相変わらず雛たちが鳴いていた。

「だけど、しょっちゅう肉屋さんに来てるのに、全然気がつきませんでした」

「あのねえ、年寄りのたわごとやおもて聞かせてくださいな。このツバメがね、奥さんみたいな万年筆を使う人を呼んでくれているみたいですねん」

「ふふ、いいですね」

「いや、ほんまにそうなんです」

お婆さんが店の中を振りかえった。狭い店の一番奥は上がりかまちになっていて、そこ誰かが腰をおろしていた。

「波多野君！！」

「あら、お知り合いで」

葉子は波多野と並んでおばあさんの（鴻巣さんという）いれてくれたお茶をいただきながら、二人の話を聴いた。

波多野もやはりツバメの巣に気がついて店の下で見上げているところを、お婆さんから声をか

けられたという。ただし、去年のことだ。

旦那さんは三年前になくなって、お店はお婆さん一人でやっているということ。二人で店をやっている時から万年筆とガラスペンの品揃えでは有名だったということ。そんな話がお婆さん口から淀みなくながれた。

「ぼくも万年筆が好きなんですけど、ウォーターマンのカートリッジは大学の生協にもなくて、街のまん中まで買いに行かなきゃならなかったんです」

「わたしはシェーファー。それにモンブランのも街にいかなきゃね」

「なんでもありますよお」

そういいながら、おばあさんが「ジャポニカ学習帳」のならんだ棚の下の引き出しを開けてみせた。葉子はたちあがって覗き込んでみる。ずらりと各メーカーのカートリッジが入っていた。

「凄い」

「こっちもね」と、いって隣の引き出しを開けるとインク壺がずらりと入っていた。もちろんコンバーターもある。

「でね」と、こんどは水性ボールペンの棚の裏へ手招きする。

そこにはぴかぴかのガラスのショーケースがあり、ガラスを練り上げたようなガラスペンが何本も並んでいた。その横には万年筆が並んでいる。そこは狭い店内でも特別な場所という雰囲気漂っていた。

「わあ」

「メーカーの人もきはる、ていうたでしょ。ガラスペンは主人が力入れてたの。好きでねえ。私は万年筆。おすすめは国産どす。漢字と仮名にはね。書きやすいわよ。それとメンテナンスもね」

おばあさんは老眼鏡の奥の大きな目をきらきらさせている。

「ぼくはおばあさんに勧められてガラスペン買ったんですよ」と波多野。

「へえ、でもインクがすぐ切れるでしょ」

「いや、それが結構もつんですよ。こうインク壺につけるでしょ、毛細管でインクがするすると上がってね。インクが減って、またつけて。それがリズムになったりするし。うん、いいですよ。」

「そうなんだ」

「そうどす。最近硬質ガラスのしっかりしたものがありまっさかい綺麗な字が書けますよお」とおばあさん。

「今日何か買ったの？」

「今日は買ってないけどノートや原稿用紙もこの店で買いますよ。ツバメも気になるんで時々覗

いてたんです。そのうちにこうしておばあさんがお茶をいれてくれるようになって、いつのまにか用がなくても時々、話をしに来るようになって。おばあさんがしんどそうだったり用事の際は店番も時々してます。ぽつぽつですけど万年筆の愛好家 comes んですよ。うちの大学の教授もいます」

「ねえ、こんな男前の学生さんが、ばあさんの相手してくれはるんですよ」

そういっておばあさんは、ふほほほほ、と笑う。

「ツバメのことも気になるし私も覗こうかしら」

「どうぞどうぞ」

「ぼくだけだとうるさい人もいるらしいし」

「なにか？」

「いやあ最近近所の年寄りが、鴻巣はんのところはツバメだけやのうて、人間の『ツバメ』も手にいれはったっていいよりますねん。ふほほほ。そやろ？波多野はん」

三人は並んで座り、そろって笑った。

視線の先の店先では雛がまだ鳴いている。

(了)

午前六時。お盆を過ぎ、この時間には涼やかな風が葉子の頬や腕を撫でていくようになった。今日は火曜日。葉子は黄色い市指定のゴミ袋を持って、古いお寺の門前へと歩いていた。そこはちょっとしたロータリーのようになっていて、まん中に大きな芙蓉の木があった。その根元が集積場所である。

葉子がカラスよけの網をどけて袋を押し込んでいると、おはようございます、と背中から声をかけられた。腰をかがめたまま振り返ると、眼鏡をかけた背の低い細い女性が、やはりゴミ袋を手に立っている。四月に葉子たちの住む路地へ引っ越してきた村井さんだった。

「おはようございます」と葉子。

村井さんは会釈をしながらゴミ袋を一番上に置こうとした。白いTシャツの袖口から二の腕が覗けてみえた。

刺青があった。

花村家の向かいに蜂岡の婆さんの家があり、その右隣が大宅さんで左隣が村井さんの家だった。二年ほど空き家だった家をリフォームして、娘さんの新学期に合わせて引っ越して来たのだった。リフォームには半年ほどかかった。その間に、それでなくても路地の人たちにいろいろと難癖をつける蜂岡さんから早速クレームがついている、と近所の噂になっていた。

村井家の前にはミニバンがぎりぎり駐車できるスペースがあり、（今では濃紺のミニバンが駐まっている。）その排気にあたる塀の部分にステンレスの板が立ててある。蜂岡の婆さんが、「うちの塀」に排気ガスが直接あたる、と文句をつけたのだ。

また、まだリフォームが始まる前だというのに、一家三人がそろって近所の挨拶回りにやって来たこともあった。きれいに包装された洗剤を手に、つまらないものですが、といいながら。

人のよさそうな丸い顔をした旦那さんと、華奢な体で眼鏡の奥さん、奥さんをそのまま小さくしたような娘さん。静かで穏やかな一家だった。

引っ越しはおろか工事もまだだしそもそもなんの迷惑も被らないのに、ちょっと丁寧過ぎるくらいの挨拶だな、と思っていたら、蜂岡さんが『あんたらは挨拶もなしで非常識や』と責めたら

しいよ、と葉子は大宅さんから聞いた。

大宅さんはリフォームの大工さんから『なんや他にもいろいろいわはるけどあのお婆さんはいつもああなんでっか』と尋ねられたのだという。

大宅さんは椿の一件があったので、『もちろん』と答えた。

それ以外には何事もななかつたかのように村井さん一家は引っ越してきた。

村井家がほかの家とずいぶん違う間取りなのは、すぐにわかった。玄関の横がお風呂なのである。そして夜になっても路地の側には灯りがほとんど漏れてこなかった。要するに村井家は裏庭に「向かって」暮らしているのであった。路地に「背中を向けて」いるようにリフォームしたのだ。（他の家は全て家の一番奥に風呂があった。）

確かに路地とはいえ軽四やバイクも通るし、近所の立ち話も聞こえてくる。そんな音を避けているのだろう。と葉子は思っていた。

変わった習慣があることも路地全体に知れた。晴れの日はいつでも靴を全部外に出すのである。天日干し。ミニバンがあるときはその屋根の上に子供の靴までずらりと並べるし、車がないときはコンクリートの上に並べるのだ。

葉子はお風呂のことも靴のこともまったく気にならなかった。亨も同じだった。しかし他の路地の住人たちがヒステリックなほど気にしていることを知ったのは、地蔵盆の日だった。

京都市内ではほとんどの町内にお地蔵さんがいる。路地の突き当たりだったり、誰かの家の角地だったり場所はいろいろだけれども、小さい祠にお地蔵さんが祀られている。祀られているのは「子育て地蔵」で、町内の子供たちの無事と成長を願って、普段から花をあげたり掃除をしたり、と町内の誰かが必ず世話をしているものだった。

そしてお盆が「五山の送り火」で終わった頃、各町内で「地蔵盆」が行われる。

祠の回りにテントが立てられ、ゴザが敷かれ祭壇が組まれる。もちろん車は通れない。祭壇には赤い毛氈が敷かれ果物やお菓子といった供物と花が飾られ、また小さな膳にご飯が盛られて供えられる。その前でお坊さんが読経をし、町内の人たちが手を合わせるのだ。お坊さんが帰るとゴザの上や、道に出された床机で老人や女、子供が食べたり遊んだり。

路地が子供たちの遊び場に変身する。

昔はお酒も出たし、景品の当たるくじ引きまであったそうだけれど、最近では子供の数が減って地蔵盆が取りやめになる町が続出していた。葉子たちの北隣と南隣の町でも、もうやっていない。

それでも孫が生まれたので、とって取りやめになった町から葉子たちの路地まで足を運ぶ人もいた。そういう人たちは町内が老人ばかりで、とても地蔵盆を運営できなくなったのだった。もちろん参加は強制ではない。大宅さんの隣の白井さんはキリスト教を信仰しているので参加し

ない。しないからといって別段何かがある、というわけではない。葉子も設営や買い物や会計の手伝いはするけれど、お地蔵さんに手を合わせたことはなかった。仏教を信仰しているわけではなかったから、町内の行事と考えて参加していたのだ。

その日、村井さんは顔を出さなかった。この路地に住んでいる唯一の子供のいる家庭なのだが。葉子は自分も積極的に参加しているわけではないし、だからどうとも思わなかった。それに夫婦共働きの家からは参加しようにもできない。しかし、なにやら路地の人たちが村井さんは非常識だ、と非難している。

何かと思ったら、地蔵盆のことではなくて非常識な時間にお風呂に入る、というのだ。午前四時に入るから、という。

そのことは葉子も知っていた。亨が早朝出勤するときに早めに朝食の準備をしていると、路地の斜め前からシャワーの音が聞こえてくるのだ。

「ご主人が夜勤とかじゃないんですか」と大宅さんがいう。

ところがその声は黙殺され、気持ち悪い、なんや怖いわ、と声が渦巻く。

「だってご自分の家でしょ。好きな時間にシャワー浴びようがお風呂入ろうがかまわないやないですか」と葉子。

「だけど毎日靴も干すし、なんや気味悪いわ」

「ははは、変わってるけど害はないでしょ」

そういったら葉子は数人から睨まれた。まるで、あなたは何も知らないのよ、と言いたげな視線だった。

ああそうなのか、と葉子は思った。この人たちはとにかく村井さんが憎たらしいのだ。理由はわからない。若くして家を買取りリフォームする経済力を持っているからか、ひょっとしたら若いから、というそれだけが理由なのかも知れない。それにしてもいかにも「みみっちい」と葉子は思った。アホやないか、とも思う。だけどこの「みみっちい悪意」が束になって人を追い込むことだってあるのだ。

「まちがいなく刺青やったよ」

葉子は家に戻ると、珈琲を飲んでいる亨にいった。

「ふーん。どんなん？柄まで見えたん」

「なんだか模様やった。茨の蔦がデザインされたような...」

「それやったらタトゥーやね」

「洋風ってこと？」

「日本の刺青なら唐獅子牡丹とか昇り龍やんか。タトゥーは薔薇とか十字架とか...こうアクセサリーみたいな感覚でいれてるよね」

「アムロちゃんみたいな」

「そうそう。野球だとカブレラみたいなかんじ。だけどたぶんシールじゃないかなあ。簡単に落とせるやつ」

「ああ若い子に流行ってるやつやね。だけどあの静かな雰囲気の『おかあさん』がね...ちょっと意外やった」

「まあ今はなんでもありやから...。ぼくは平気やけど。そうそう、友達でバンドやってる奴がいるんやけど、そいつが二十歳のときにサソリの刺青を肩に彫ったんよ。それがとんでもないことになって...」

「えっ、どないしたん」

「奴、太ってしもてね。サソリがザリガニになってもうたん」

亨が仕事に出て、葉子は洗濯物を持って二階の物干しに出た。外を見ていると子供たちがランドセルを背負って集まっている。夏休みも葉子が子供の頃よりも短くなったのだ。集団登校に子供を連れて他所の町内からも親たちが四、五人ついてきていた。

村井さんの奥さんもいた。白いタンクトップを着て、まっすぐにきりっと立っていた。眼鏡がきらりと光っていて、左手でしっかりと娘さんの右手を握っている。葉子には何人かの親が村井さんの後ろに回って何となく村井さんの肩の辺りを見つめているような気さえした。

ひょっとしたら地蔵盆のときに悪口をいってた人たちはタトゥーのことを知っていたのかも知れない、と葉子は思った。

...知っていたら口から火でも吹き出そうなぐらいの悪口がでたんやわ...

...そういえばさっき芙蓉の木の下でまるで私に見せつけるように腕を振り上げたような...

あれっ、タンクトップ？と葉子は目を凝らした。

刺青...タトゥーがない。

村井さんが空を見上げるように顔を上げた。葉子と目が合う。葉子が会釈すると村井さんは丁寧にお辞儀をした。そして顔を上げると舌をぺろりと出した。

(まあ！！そういうことなの)

葉子はくすくす笑い出した。

(了)

晴れ渡った暑い日が続いていた。その日も朝のうちに気温は30℃をあっさりを超えていて、通りを歩く人の姿はほとんどなかった。

葉子はテーブルの上に上半身を乗り出し、まるで何かに到達しようとするように手を一杯に前につきだしていた。口は微かに開き、目は一点を凝視している。

視線の先はテレビ画面。今まさに北京オリンピック、水泳男子百メートル平泳ぎの決着がついたところだった。葉子が手真似をしたように日本のキタジマがゴールに到達した。キタジマ優勝。

午前中に決勝があったから日本の多くの家庭では主婦や子供や老人が葉子と同じように深い溜息をついたり、歓声を上げたことだろう。多くの勤め人たちは会社でこっそりパソコン画面をひらいて知るか、それとも昼食を食べながら食堂のテレビで知るのだろう。

葉子はテレビのスイッチを切った。

画面の歓声が消えると、通りの静けさが余計に感じられた。

アスファルトは熱を孕み、その上を車が走り去る。何故か音が聞こえない。

はるか上空から姿の見えないジェット機の轟音が降ってくる。

姿の見えない蝉の声がして、背中を光らせながら音もなく蜥蜴が走る。

ほんのたまに日傘の黒い影を連れて人が歩いていく。

木が揺れているから風はあるのだろうけれど音がしない。

姿の見えないヘリコプターの音が遠くから近づいてくる。二キロメートルほど南の高校のグラウンドからサッカーの練習をしている部員たちの声が聞こえる。

...音がみんな空から降ってくるみたい。姿はなにも見えなくて...

葉子はふと思った。

...見えるものには音がないし...

今年の夏は例年よりも異様に思えるほど暑く、そして一日の中でも天候が恐ろしいほど豹変も

した。空が破れたような突然の大雨。そしてまた強烈な日射し。その繰り返し。そのうえ三日前には地震もあった。

ずんっ、という音にならない音の感触が体に残っている。

だからなのだろうけれど、近所の人とは買い物先で話していても、電話で母と話していても必ず『今に何かが起こるわよ』という言葉が聞かれた。だれもがそんな予感に浸ってしまったら、ほんとうに「何かが起きそう」に思えてしまうから不思議だ。

何も起きていない、のに。

朝刊をひろげ、折り込み広告をチェックしていると、近くのカソリック系私立R高校の案内状があった。ここでは毎年、大文字の送り火の夜に屋上を地域住民に開放する。そのための地域限定の案内状だ。

昨年、葉子と亨は家から北にある大学の屋上に行った。そこは「左大文字」に近すぎてその字がはっきり見えなかった。「大文字」は見ることはできたけれど。高校の屋上からは二つとも見ることができるようだ。

チラシから入場券を切り取るようになっていて、そこに四人まで名前が書き込めるようになっていた。

夕方、亨が帰宅。顔と腕がいつそうこんがりと陽に灼けている。

葉子がコップに入れて手渡した冷えた麦茶を一気に飲んで、ふうーと息をついた。

「キタジマ、凄かったね」

「あ、どうやった？」

「優勝。世界新で」

「おお。やったやん」

「見てて力はいっっちゃった」

「ちょうど現場にいたからなあ。昼休みは車の中で寝てたし」

「静かな日陰、あったん」

「うん。今日は上御霊神社の近くやったから」

亨はテーブルの上に置かれた案内状を見つけた。

「お、今年はR高校にするの？」

「うん、大学の屋上、あまりよくなかったでしょ。一度いってみてもいいかな、って」

「うん。行こう行こう。『入場券一枚につき、四名様まで』か...」

「誰がいる？」

「波多野はどうか」

「美山の実家に帰ってるんとかうかな」

葉子が夕飯をテーブルの上に調べていくあいだに、亨は携帯で波多野に連絡を取った。

「波多野、来るって。今、実家にいて、十六日には京都に戻ってるって」

「じゃあ三人やね」

「あと一人いるらしいんやけど、まだはっきりわからないんやて。その用紙は当日受付に渡したらええんでしょ」

「うん。当日書き込めばええの」

二人で夕食をとる。二人は食事のときにテレビを見ない。話ができないからだ。

「最近、街がとても静かなの」

「こんなに暑かったら誰も外に出えへんよ」

「子供たちも全然いいひんし」

「熱中症がこわいかな」

「でもプールには行くんでしょ」

「そりゃプールには行くよ」

「なんだか『何かが起きそう』ってみんないうの」

「よく空が破れたような雨が降るし」

「奈良はここ何日かずっと夕方になると空が破れてるみたい」

「大文字もわからへんよ。大雨が降ったら中止やし」

食事が終わり、テレビをつける。短いニュースの時間だった。オリンピックの開会と同時に始まった戦争の映像が流れた。太った血まみれのおばさんが叫んでいる。背後では建物が破壊され燃えている。だけど音がない。『誰か助けて』とテロップが流れた。

...翻訳されなければ悲鳴も理解できないの?...と葉子は思った。亨は黙って画面を見ている。

...もしあそこでわたしが日本語で『助けて』と叫んでいたとして、その映像がたまたま国際配信されたとして、どれだけの人が『わたし』の言葉がわかるんだろう。「身振り」で感情はわかるはず。テロップなんて要らない、ともいえるけど....

...だけどあのおばさんはほんとうに『誰か助けて』といているのだろうか。恐ろしい呪詛の言葉を吐き散らしているのかも知れないし、『この下に子供がいる』と叫んでいるのかも知れない。だれかが翻訳していたとしても、画面のテロップを信じられる？まさかロシア語？グルジア語？....

「酷いな」

と、亨が呟いた。

あっという間にニュースが終わった。テレビ画面から戦争の「音」は聞こえてこなかった。

八月十六日。京都では「五山の送り火」の日だ。東から反時計回りに「大」「妙法」「舟形」「左大文字」。ぽんっと西の嵯峨に離れて「鳥居」と、五つの送り火が夜空を焦がす。亨たちの町内からは通りの隙間や金閣寺付近までいけば、「大」と「左大文字」がやっと見える程度だ

った。R高校や大学の屋上からは移動しなくてもその二つを見ることができる。

午後七時三十分。波多野が若い女性を連れて花村家にやってきた。長い足、小さな頭、長い髪。白地に細かなブルーの花模様の入ったサマードレスを着て、素足にサンダルを履いていた。

「まあ、あがりいな」と、亨。

亨と葉子は波多野から初めて鈴木尚美を紹介された。テーブルの向こうに二人が並んで座っている。

「彼女なの？」と葉子が訊くと、波多野は小さく肯いた。

「ほんとに」と尚美に訊くと、尚美は大きく肯く。

「ほほお、美男美女やねえ」と、亨。

「花村さんのところもそうやないですか」と波多野が言うと、葉子が「へえおおきに」と猫なで声を出したものだから、尚美の目が点になった。

「尚美さん、実家のお盆は？」

「実家は四国なんですけど、今年は早めに帰ってきました。バイトもあるし」

「ふーん、大文字は」「初めてなんです」

受付時刻にあわせて四人は外に出た。若い二人が並んで前に行く。葉子は尚美を眺めていた。...きれいな顔、しなやかな細い体。自分にもあんな頃があったかしら...

亨を見ると、後ろに手を組んで下を向いて何かを考えるようにして歩いている。

R高校屋上。午後七時五十分。

人数を区切って入場しているため混雑はしていない。四人は頭を回して上空を見上げた。

いちめんの群青がゆっくりと闇に変わろうとしていた。太陽はとっくに姿を消しているのだけれど、西の山際にはまだ黄金の余韻が残っていた。

午後八時。

屋上ざわつき、携帯やデジカメがそれぞれの手の中で動き始める。大文字が点火された。ゆっくりと火が「大」の形になっていく。

人の声が風の音に融けていくようだ。葉子は「おおーん」という声のような音が空に響いたように感じた。

...街の声の塊なのだろうか。ちょうどキタジマが勝ったときもこんな音が聞こえたのかも知れない。それとも、「送り火」のいわれのようにお盆に帰っていた魂が天に戻って行く音...

葉子は頭を傾げて耳を澄ました。

「何か聞こえますか」いつのまにか横に波多野が立っていた。

「え？へへへ、気のせいだと思うけど」

「なんだか空にむかって何かが響くような感じはしますね」

「あ、わかる」

二人から少し離れたフェンス際で、亨が指を空に向け尚美に何かを語っている。たぶんここからは見えない「妙法」や「舟形」の位置を教えているのだろう。

雨の予感を孕んで潰れた積乱雲が闇にのまれて、空はみるみる闇に変わっていく。

「何も起きなければいいんだけど」

葉子が呟いた。

「なに？」 亨が葉子に聞き返した。

「ひとりごとひとりごと」

ずっとむこうで山が焼けていた。葉子はもう一度耳を澄ませた。

もう何も聞こえない。

(了)

葉子は掃除機が嫌いである。だからといって掃除が嫌いというわけではない。

たとえば亨の友達に、ほんの少しの塵を見つけただけで、たとえ真夜中でも部屋中をくまなく掃除しないと気が済まないという男がいるのだけれど、亨は葉子に「そのレベルに近いよ」と言ったことがある。

葉子が掃除機を嫌いな理由は、まずモーター音である。最近では静かなものがあるのだけれど「ういーん」という音が嫌いなのだ。同じ理由で珈琲も手で碾くし、フードプロセッサもつかわない。

次に重いこと。結婚する前に亨の部屋で掃除機をつかって掃除をしたことがあったのだけれど、まるで鉄の塊を引きずっているような気分になってげんなりしてしまったのだ。

そして風が巻き起こること。その排気の匂いも我慢できない。出ない機種もあるのだけれど、それにはたいてい煩いモーター音があるか重いのだった。たしかに箒よりも軽い掃除機はあり得ないし、箒よりも静かな掃除機もない。

葉子の実家も掃除機を使わない、祖母、母、と伝わってきた掃除方法を葉子も実践しているのだった。（使わないから嫌いというわけではないのだが）

新聞紙を水に浸け、小さくちぎって床に撒き、それを箒で掃き集める。塵は飛ばずに新聞紙につくからそれで大抵きれいになる。それから拭き掃除。とにかくこまめに拭く。

葉子と亨の住まいはそれほど広くないし、子供もいないけれど、それにしても家の中はいつもきれいだった。

爽やかな風の吹く晴れ上がった朝、いつものように葉子が珈琲を淹れようとしてポットを持ち上げた時だった。開け放した窓からの少し強い風が前髪を乱した。手もとが揺れた。

珈琲ミル掃除用の小さなブラシにお湯がかかってしまった。するとどうしたことが、あっというまにナイロン製の小さなブラシはちりちりになってしまった。

「あれま」と葉子。

朝食の時にそのブラシの話になった。

「ブラシがこんなになってしもたねん」

「棕櫚（しゅろ）のちいさなブラシならええのんちゃう。三条まで行って見てこよか」と亨。

棕櫚の箒。葉子の実家で使っている箒だ。

「棕櫚」と聞いて葉子は反射的にその音を思い出す。

床だけでなく空中や人の体の中まで掃いているように響いてくる音。葉子は子供の頃、そんな気分になるのが好きだった。

「だけど棕櫚の箒は高いもの」

「部屋で使うのは高いけど、小さいのは安いよ」

三条大橋のたもとに有名な箒屋さんがあって、棕櫚の箒はどんな種類のものでもここにいけば手にはいる。亨はその店に寄ってこようと言うのだ。

「うん、ええんやけど...」

「あれ？他になにかあるの」

葉子の気持ちの中に、こつんと引っ掛かるものがあった。たしかに三条の箒屋さんに行けば職人手作りのいいものが手にはいるだろう。だけど壊れたからすぐ新しいのを買う、というのが気に入らなかった。祖母はお金をかけずいろいろ工夫して家事を楽しんでいたようにみえたし...。葉子がサインペンで机に書いた落書きを蜜柑の皮でさっさと落としたのを見たときはびっくりしたものだ。

葉子は首を廻した。...なにかないかしら...。シンク横の棚に古いマグカップに入れた何本もの歯ブラシが入っていた。未使用のものや二人が使い終えたものをきれいに洗い上げて貯めてあるのである。葉子は細かな掃除に歯ブラシを使っていた。

「あ、あれがちょうどいい」

歯ブラシを手にとってきて、亨に見せる。

「使こうたのんて弱いことない？」

「これは古いけど未使用。うん、これをミル専用にしよう」

「ふーん。葉子さん、無理せんでええんよ。いつでもこうたるさかい」

「ははは。どうもないって」

「葉子さん、その歯ブラシ」

「ん？」

ちょっと貸して、とって亨が歯ブラシの柄を手にとった。

「これたしかホテルのだよ...たぶんホテルニューオータニ」

「...神戸？」

「つまり結婚前」

「えーっ、未使用のままずっと持ってたんやわ」

神戸、ハーバーランド。ほとんど埠頭のすぐ近くにあるホテル。結婚前に一度、京都以外でデートしようと二人で決めた。行きたい先は二人とも神戸だった。

日が暮れてから二人で旧居留地にあった「ドンナロイヤ」へイタリア料理を食べにいった。それから神戸の街を散歩して、三宮で亨が銀の指輪を揃いで買った。そしてホテルのバーでゆっくりと呑んだ。

二人でホテルに泊まったのはその一度きりだった。

「思い出やね」

「うん」

亨と葉子の顔にさざ波のように笑みが流れる。

「またいこうか」

「いきたい」

(了)

亨が朝の路地へ出ると、はす向かいの村井さんがしゃがみ込んで靴を洗っていた。もうミニバンは出た後で、軒下には例によって家族の靴がずらりと「虫干し」されている。

子供の桃色の長靴、焦げ茶のワークブーツ、先の鋭く尖った黒いバックスキンのブーツ、などなど。

奥さんは路地にお尻を向けてしゃがんでいたものだから、Tシャツがずり上がり、白い腰が亨の目に入った。くっきりとタトゥーが肌の上に浮かんでいる。

（墨だ...）亨は思わず足が止まりかけた。

「おはようございますう」

足音を計っていたかのように村井さんが振り返った。黒いTシャツにブルージーンズ、素足にサンダル、黒縁の眼鏡。服装もメイクもまったくの普通の人である。普通と違うのは耳できらきら輝いている細かないくつものピアス。（粒ダイヤ？）そしてタトゥーだ。

葉子が腕に見たのはシールだったようだけれど、腰のタトゥーは間違いなく彫ってある。「おはようございます」

亨は一度息を吞んでから挨拶すると、足早に車へ向かった。

...また路地に小さな波紋がひろがるのだろうか。...

亨自身はなんの関心もなかった。

それより仕事。今日はアルバイトの波多野が来る。

現場は御所の西、護王神社の近くだ。烏丸通りから神社の北側を西へ向かう。

「このあたりなんやけどな」

神社の横に車を駐めて、亨は車を降りた。

車に残った波多野は、雲ひとつない、抜けるような青空に見とれていた。

青空から視点をすーっと降ろすと亨が通りをいったり来たりしている。やがて亨は立ち止まり、携帯をかけはじめた。左右を見て、振り返る。道路を渡る。路地に入り、出てくる。また左右を見て、視点を上げて歩き始める。また携帯をかける。首をこきこきと左右に振り、小さく何度か肯く。天を仰ぐ。また携帯。大きく肯き、再び携帯をかける。細かく何度も肯く。西の方を見

つめる。また大きく肯く。

そうして車に帰ってきた。

「わかりました？」

「ほんまにもう、社長め」

社長から渡されたメモを波多野に見せながら亨が説明する。

「護王神社の北側を西へ。正解はこれだけ。『室町通りに出る手前の南側の吉田さん』は『室町通りと新町通の間の北側の吉田さん』の間違いやった。しかも先方に電話してくれっていうんで、かけたら間違ってる、104で聴いたら末尾が一番違い」

「どうやったら一番だけ間違えるんでしょうね」

「たぶん漢数字で縦に書いてあったんやろね。『二』と『一』は縦書きで続いているとよく間違えるから」

「なるほど」

「さあいこうか」

車を少し走らせて、通路の手前で車を駐めた。ここからは車は入ることができない。細い通路が通りから北へ続いている。二人で車を降りて石畳を歩いていく。突き当たりに光が溜まっているようにみえた。

そこに出ると一面、まっしろなオシロイバナが咲いていた。甘い香りがむせるほどに立ちこめている。思わず立ち止まった二人は、右手奥に家を見つけると、そちらに向かった。静かな家に静かな中年の女性が一人、目がきらきら光るトイプードルと暮らしていた。

通されたリビングには大きなディスプレイ画面のパソコンが一台、大きな机に載っていて、あとはソファがあるだけ。壁一面が本だった。本の隙間にスペースが空けてあり、そこにテレビを置くように指示される。パソコンは駆動していて、YouTubeの画面から音楽が流れていた。

アンテナとテレビの据え付けを二人でこなし、休憩をとる。

近くの児童公園にあるヒマラヤスギの木陰に車を停めて、二人でコンビニへ飲み物を買った。波多野が、このコンビニチェーンでしか売ってないミルクティーを買うというので亨もつきあった。

「これいいですよ」

「何で？」

「茶葉が二倍なんですよ」

「ふーん、チャイなんだ」

「いや、茶葉が二倍のミルクティーなんですよ」

「いや、だからチャイだろ」

ぐびぐびぐび。

「うん、チャイに近いなあ」

「だから茶葉が二倍のミルクティーなんですよ」

「こんどうちにこいよ」

「は」

「葉子のいれてくれるチャイ、おいしいよ」

二人は木陰に戻った。公園の低い柵に腰掛けて、すっかり秋めいた風を浴びながらミルクティーを飲む。

「さっきの家でY o u T u b e流してたやん」と亨。

「ええ」

「びっくりしたよ。ロバート・ジョンソンやもん。あのおばさんが聴くんだもんなあ。あ、ブルース聴く？」

「全然わかりません。なんだか古い音楽なってるな、とおもいましたけど。花村さんはY o u T u b eみはりますか？」

ネットで全世界を網羅する動画サイトY o u T u b eには、有名無名プロアマチュア問わず、ありとあらゆる人たちの動画が登録されている。

亨と葉子は二人の趣味でもある、古いブルースやソウルの動画を検索しては楽しんでた。

「音楽がほとんどやけどね」

「あれ、もの凄く沢山投稿されてるでしょう」

「ああそれこそ『海』みたいにひろがってるよね。ああそうそう。面白い女の子がいたんや」

ある日、葉子と亨はいつものようにブルースとソウル系のライブ映像を検索をしていた。たまには日本のものも、と絞り込んでいって偶然見つけたのだった。

「関連動画のほうに、その女の子のサムネイルがあって。おもしろそうだからそれ見てみよう、って。そしたら...めっちゃいいんだよ」

夜9時。

波多野はパソコンの前に坐ってY o u T u b eの画面を見ていた。亨に教えてもらった女の子はすぐに見つかった。金髪のファニーフェイス。歌っているのは波多野の知らない曲ばかりだけれど、なぜだか声が耳に残る。次々と聴いていった。

「苦い涙」「沖縄ベイブルース」「コーヒールンバ」「俺の家には朝がない」...

背景は赤や黒や緑のビニールレザーの椅子のようだ。スタジオなのかカラオケボックスなのか。多分同じ場所だろう。バストアップの画面だけなのだけれど彼女がなかなかカメラ目線にならない。歌詞を目で追っているのだろうか。

彼女の視線が飛んでいると、画面に孤独が貼り付いてみえた。俯いて髪が揺れると画面に夜の匂いがした。

おや、と波多野は思った。画面で彼女が涙目になっている。曲は「どしゃ降りの雨の中で」。歌詞の切なさとおverラップしておもわず画面を覗き込むようにして聞きこむ。

...失恋したのかな?...と思ったら、画面について本人のコメント「花粉症バージョン」。

次は「五番街のマリー」。曲の最後で笑顔が弾けた。初めて見た笑顔だった。

彼女より歌がうまい人はきつといるんだろうけれど、歌が好きでたまらない気持ちがとてもよく伝わってくる。最近のデータをみるとオリジナル・ソングも歌っているようだ。

波多野は携帯をかけた。

「もしもしぼくだよ.....あの、遅いけど今から来ない。.....うん...一緒に聞きたい歌があるんやけど.....ごはん?食べた。尚美は?.....あ、そうか...うん、うん...いやいいよ。茶葉二倍のミルクティーがあるし...うんうん...冷蔵庫に買い溜めてるし...うん。ははは...じゃ、待ってる」

もう一度「どしゃ降りの雨の中で」を聞く。

...これはほんとに花粉症バージョンなんだろうか。歌がとてもリアルに聞こえるんだけど...

今からやってくる尚美はなんて言うだろう。波多野は膝を抱えて彼女が来るのを待っていた。

(了)

十月の町。

夏の間には伸び放題だった垣根や庭木の剪定に、庭師が忙しい。と、いってもここ数年の間に、剪定する庭師の姿を町内で一年中みるようになった。「剪定の時期」というのはそれほど厳密ではないらしいのね、と主婦たちが庭師の姿を見ては苦笑いをしながら話しをしている。

葉子は街を歩いていて、それらの木々がかなり厳しい剪定を施されているように感じていた。例えば三軒隣の二階まで届いているソテツはてっぺんの緑の新芽一つを残して全部葉を落とされたし、その隣の老夫婦宅では、玄関横の芙蓉が花盛りだというのに根元数センチで全部刈られてしまい、おばあさんが青い顔をして立ち尽くしていた。

芙蓉は春になればまた旺盛に枝を伸ばしはじめ、そして大きな葉を繁らせ、薄い和紙のような白い花を咲かせるのだろうし、剪定の四日後にはてっぺんの新芽が扇子のようにひろがったソテツも、その棕櫚に覆われた幹に沢山の葉を繁らせるのだろう。そうわかっているけども「なんだかさみしいねえ」という人がいる。かと思えば「やれやれさっぱりしたねえ」という人もいて、そんな人たちが剪定された木の前で立ち止まるとは、「ほんまにねえ」とお互いの意見を認め合っている。

そんな十月の町。

十月はまた金木犀の咲く時であった。

ご近所よりも早く剪定を済ませていた日本画の大御所で、近所の人たちから「センセイ」といわれている人の邸には、南側の白壁の上にさらに高さ5、6メートルの金木犀の「壁」があった。（「センセイ」の邸は路地の北の突き当たりから東へ数メートルいったところにある。）そして路地の南端からさらに南へいったところには、いつでも法然上人がらみのポスターが貼られているお寺があって、その山門の横には土塀を越えて高さ3メートルの金木犀が球状に刈り込まれていた。その裏隣には庭師の手を入れずに伸び放題の金木犀のある家があり、一方、「センセイ」の邸から西へ三軒いった家にも幅5メートルほどの金木犀の垣根があった。

今それらがすべて満開になっている。町中が金木犀の香りにうずもれていた。中でも「センセイ」邸の金木犀の「壁」は上から香が流れ落ちてくるようで、多くの人が思わず立ち止まるほどだった。

葉子と亨の住んでいる町はこのような香が至るところにある。カソリック系の高校には長さ1

00メートルはあるクチナシの垣根があるし、山に近い大学にも延々と続く沈丁花の垣根がある。少し広い通りの路肩には季節になるとオシロイバナがいっぱい咲いた。そして金木犀である。

またこの街は「画家の街」でもあった。葉子が知っているだけで「センセイ」を含めて三人の日本画の大御所の家があったし、若手画家のアトリエも数多くあった。

画家を引きつける何かがあるのかも知れないけれど、若手が集まる最大の理由は家賃の安さのようだった。

市民の高齢化がすすむとともに、この町でも古い空き家が増えた。その多くは路地にある手狭で傷んだ家である。リフォームするにも解体するのにも、結構お金がかかるものだからそのままに置かれていたのだ。そこを若い画家が家賃の安さからアトリエとして借りているのだった。葉子たちの住む町内にもアトリエを構えている女性がいた。

「センセイ」の邸から南へ行くとオシロイバナの通りにでる。そこから細い路地が南へ伸び、路地に沿って四軒の家が並んでいた。家はすべて傾いでいたし、瓦が欠けた家もあったけれど、どの家でも生活が営まれていた。それがある日突然、一斉に引っ越しが始まり、次の日には家が解体された。そして次の日にはもう駐車場として地面はならされはじめたのだった。ただ一軒の家を除いて。それが彼女のアトリエだった。

前三軒がなくなったので今まで隠れていた一番奥の家が顕わになった。平屋で築四十年以上の木造の家である。彼女は頑としてそこからの立ち退きを拒否したのだった。大家と彼女との間でどんな話し合いがあったのかわからないけれど、彼女は立ち退きをまぬがれた。ただし駐車場を縦断しないと玄関に辿り着けなくなったけれども。

このことをきっかけに路地の人たちはみな彼女のことを知ったのだった。

背の低い痩身の三十代の女性で、いつも胸をはっている印象があった。長い髪をなびかせてミニサイクルでアトリエに通っていた。

その家は目立った。建っている場所もそうなのだけれど、鏡のように舗装された駐車場と対照的に、その継ぎ接ぎだらけの壁のためにさらに目立った。玄関以外、壁のすべてにトタンが貼られていたのだ。

だけどよく見ると傾いだままの屋根ではあるけれど瓦は新しくなっているし、玄関の引き戸も建具屋さんが新しいのをいれているのを亨が見かけていた。メンテナンスは施されているのである。

葉子と亨は、駐車場の向こうにこの家が現れたとき、少し話題にしたことがある。ほかにも細かな修理がしてあるのを亨がみつけていたからだ。

「あのトタンの壁の上にも窓があったんやと思うよ」

「わかるの」

「足場板が二枚、壁に直接打ち付けてあるんや」

「足場板って？」

「工事現場で建物の回りに組まれる足場の…。ほら鳶の人が組んでる細長い板。普通、ほとんどアルミやけど、簡単な現場なら今でも木の板なんや」

「ふーん。だけどあの家って元々土壁でしょ。ひび割れているんかも。そやけど板で塞ぐなんて大胆というか…なんか凄いね」

「まあなんにしても外の光が入らないように徹底しているんとちゃうかなあ。トタンとトタンの間も目張りがしてあるし」

「そういえばセンセイの家も雨戸が開いたの見たことないね」

「画描きは日光が嫌いなんかな？」

「画材が日に灼けるからとちがう？それに日射しによって色が違ってみえるとか」

「うーん、どやろ。そういえば、うちの親父は日のあたらない部屋にしか本を置かへんかったなあ」

「ひょっとしたら音とちがう？」

「音を遮断？」

「そう。だって二つの家とも、裏はわからへんやん。『トタン』の裏は竹藪やし、『センセイ』の裏はお寺やからね。表からの音をシャットアウトして制作に励むという…」

「ああそれもあるかも」

ある夜、仕事が遅くなった亨は、帰り道で「トタンの壁」の家の玄関外に灯りがついているのに気がついた。玄関の横にはミニサイクルが駐めてある。亨は制作が始まったんだな、と思った。

玄関上の灯りは裸電球だった。そしてミニサイクルの横に床机が出され、そこに座った男女の姿が照らされていた。長い髪の女性と、細い肩に丸い頭の男性。

…センセイ？…

亨は直感した。通りで何度か見かけた姿に間違いはない。

手には缶が握られていて、二人の影がゆうらゆうらと揺れていた。何を話しているかはわからないけれど笑い声が聞こえてきた。その日はまるで夏の飛び地のように暑い日だったので、亨には夕涼みのようにも思えた。手に握られているのはたぶんビールだろう。

次の日は快晴だった。午前中に買い物に出た葉子は金木犀の「壁」の下で木を見上げている「トタン壁の家の画家」に出くわした。彼女は大きな画帳を抱えている。

「こんにちは」画家が葉子に声をかけた。

「あ、こんにちは。ねえ凄い金木犀ですねえ」

「ほんまに。満開ですね。思わず見とれてました」

「スケッチですか」

「そうです。こんな天気の良い日には外に出ないと」

...お日さんが嫌いなことあれへんやん...

「ほんまにねえ」

葉子はそのまま歩いて金木犀の切れたところから邸のほうを見た。相変わらず雨戸は閉まったままである。振り返ると彼女は顔を上げたまま目を閉じていた。香を全身に浴びているようにみえた。

次の瞬間、彼女は「金木犀の壁」から角を廻って姿を消した。その先は行き止まりで「センセイ」の家の裏木戸だけがある。

葉子はゆっくりと歩いていった。駐車場がみえて、トタンの壁がみえた。前の晩、亨が言っていた床机は片づけられていて、ベージュのミニサイクルがぽつんと駐めてあった。

(了)

一昨日あたりから街中の金木犀がいっせいに散り始めた。おまけに二日続いた雨が木を洗い、路肩は金色の小さな花で埋まっていた。それでもしぶとく枝に残っていた花が、今朝は噴き出すように落ちてくる。なんだろう、と目を凝らしていると、枝の中で雀が遊んでいた。繰り返し繰り返し潜り込んで飛び出してくる。そのたびに花びらが舞い上がり散っていくのだった。

また今朝は蜘蛛の糸が光を浴びて空中を飛んでいた。軒先だとか垣根の近くではなくて道のまん中をふわあっと流れていくのだ。

いったいどこからどこへ行くのだろう、と目で追うのだけれど、雲ひとつない青空を背景にすると、それはすぐに透明になってしまい行き先がわからない。

そろそろ蜘蛛の子が飛んでいく季節かな、と葉子に聴くと、「まだ早いんとちがう」という。東北地方で「雪迎え」というこの現象は、晩秋の京都でもみることができる。でもそういわれてみればまだ十月だ。「せっかちな子もいるんや」とぼくが言うと、「そういえば誰かの小説にあったよね」と葉子が言う。ふたりでさっきから名前を挙げながら歩いている。

なかなかわからない。

ぼくの肩にはアルミの5メートルまで伸びる梯子が載っている。これから葉子と近所の石榴の木まで行って、収穫の手伝いをするのだ。石榴の木は「トタン壁」の画家の家の裏手、20メートルほどのところにある。四軒の家が二軒ずつ向かいあって建っていて、それぞれの前には軽自動車一台分の幅の地道がある。そしてさらに道幅の倍はあるスペースがその間にあって、石榴の木はその一番端に立っていた。

ぼくは店の車で前を何度も通っているので木の存在はよく知っていた。毎年沢山の実がなり、ほとんどが地面に落ちて壊れるか、鳥に食べられてしまっていた。

最近、たまたま四軒のうちの西南端の家から大型液晶テレビの注文があった。

取り付けをしながら、世間話ついでに「何故、石榴を収穫されへんのです」と奥さんに聴いてみた。今年もすでにたくさんの実がついていたからだ。すると、「ほんともったいないですねえ」という。「そやけど長い脚立を近所の誰も持ってへんし、高枝切り鋏もありまへんねん」と。それなら手伝いましょう、ということになったのだ。

店から大きな脚立を借りた。葉子は、今日はお休みやのに、と不満げだったのだけれど、手伝う、と行ってついてきた。葉子は大宅さんから借りた高枝切り鋏と竹籠を持っている。籠の中には軍手と剪定鋏が入っていた。

石榴の木の前に着いた。それにしても不思議な形状の土地だと思う。何故この四軒の家の間がこんなに不自然に開いているのだろう。四軒の南側は道路、北へは東側も西側も家が続き、この不自然な広がりやを塞ぐように家が建っていて、普通車一台がやっと通れる道がその脇を北へ抜けていた。つまりここだけロータリーか広場のようになっているのだ。

その「広場」のシンボルのような石榴の木は手入れもされずに伸び放題。その背後には四軒それぞれの家庭菜園がある。一つには立派な秋茄子ができていた。もう一つはダリアばかり。その向かいの区画はトマトの枯れ枝が積まれていた。そしてその隣はススキと牡丹の木が植えられていた。そして菜園全体は一段高く盛り土になっていた。

葉子が大きな石榴の木をみあげている。ぼくは南端の吉田さんの家をノックした。吉田さんはすぐに出てきて、ご近所、よんできます、と一軒一軒回り始めた。のんびり、というよりもスロモーションのように四軒の家から、ぱらぱらと人が出てきた。皆、老人である。皆、背が低く、皆、微笑んでいた。お爺さんが三人、おばあさんが二人である。

「さあ獲りましょうか」と葉子が声をかけると、まるで巨木に向かう子人のように、ゆっくりと老人たちが木にとりついた。ひとりのお爺さんが背伸びをして手の届くところの石榴をとろうとした。背伸びした瞬間掃いていた草履が脱げた。はは。静かな笑い声。枝から落ちて途中で引っ掛かっている実をとるおばあさんもいる。曲がった腰のまま樹の回りに落ちた実を拾うおばあさんも。それやったら掃除やんか。

ぼくは脚立に上り剪定鋏で手の届く範囲の実をとっていった。実はてらてらと深紅に輝いている。葉子は高枝切り鋏で慎重に一つずつ獲っていた。その横でひとりのお婆さんが微笑みながら指図してる。口がゆっくり動いているのだけれど何を言っているのかわからない。葉子が頷きながら鋏を移動させている。樹が囁くような声に包まれて、ここだけ空気が柔らかくなったように感じる。日射しも暖かだ。

脚立を移動させて木の横に廻ると、お爺さんがひとり脚立に上った。転落しないように下につく。ゆっくりゆっくりと二、三個の実をとると降りてきた。にこにこ笑っている。

大きな木といっても、よってたかって実をとるとそんなに取り終えるまで時間はかからない。気がつくとも実を捜して獲っているのはぼくと葉子だけで、他の老人たちはゆるゆると床机を出し、お茶の用意を始めていた。

脚立の上から空き地のほうを見ると、菜園がきれいな長方形でできているのがわかった。そして草の覆っていない端のほうにまっすぐに続く低い柵のようなコンクリートがみえた。

瞬間、ここに家が建っていたんだ、と直観した。

...あれは基礎のコンクリートだ...。だとすれば、菜園の部分だけが盛り土のようにも当然に思われてくる。道と地続きになっているこの石榴の木のところは庭か玄関の横だったんだろう。手を止めて架空の家の姿を菜園の上に想像してみた。

下の植えているものを区切っているところも壁の基礎コンクリートだとすると細長い町家の姿が浮かんできた。

「亨さん」下から葉子の声がした。

「だいたい獲ってしもたね。降りてくる？」

「電器屋はん、お茶にしまひょ」吉田さんから声がかかった。

「若い人がいるとあつというまや」と、お爺さんが言う。

「鳥に少し残しといたたら良かったかなあ」というお婆さんも。

「たしか木の上の方にはまだ少し残ってますよ」

「いやあ優しいんやねえ」

「吉田はん。このお茶おいしおすなあ。宇治でっか」

「静岡のんどす。静岡のが私、好きでんねん」

「へええ」「へえええ」「ほああ」

「葉子さん、ここは家が建ってたんやと思う」と、ぼくは葉子にいった。

「え、なんでわかったん」

「上から見てたら、建物の基礎がみえたんや。ここに縦に家をいれたらすんなりおさまるやろ」

「ああそういえばそやね。路地に挟まれて家が並んでいる形になる」

「あのう」葉子が吉田さんにたずねた。

「はいなんでっしゃろ」

「ここには昔、家が建っていたんですか」

床机に並んでいた小さな老人たちが静かになった。

「ええそうですけど」吉田さんは微笑んでこたえた。

お爺さんたちは、皆俯いた。

お婆さんのひとりが眩しそうに目を細めて肯いている。

「遠いところに旅立たはったんです」

「もうずいぶん昔の話でっさかい...。住んではった人が亡くなって、長い間家が放ってあって、

しまいに荒れ果てだしてねえ。住んではった人の関係の方は、いつまで経っても誰も来いしませんでした。そのうちに家も朽ちだしてねえ。古い古い家やったから…」

「ほいで、片づけはじめたんどす」別のお婆さんが言う。

「みんなで？」

「ええみんなで。少しずつ少しずつ」

「そりゃ、あんさん、傾いた家が一軒あると、狭い町内全体が打ち棄てられたみたいにみえまっさかいねえ」

と、もう一人の婆さんが言う。

「「あのお、だけど土地の持ち主は…」

「いはりましたよ。藤井さんです。ほらその駐車場もそう」

吉田さんは振り返って「トタン壁の画家の家」の向こう側を指さした。

「で、ちょうど私ら四軒は庭がなかったから、土地を借りよか、いうことになってね。みんな植栽が好きやったしね。もしよかったら私らに貸してほしいゆうて頼みにいきましてん」

「ほんまわね。駐車場にされるんがかなんかったんですねん」と、ひそひそ声が後ろから聞こえる。

「そしたら家を解体する条件で借りることが出来まして」

「地代は四等分でね」

お婆さんたちが、かわるがわる、しわくちゃの手を揉みながら語る。

「石榴の木は残したんですね」と葉子。

「そうです。そなん、よう切りまへんよ。生きてる木を切るなんて…」

「そやけど手入れできんようになってねえ。ほったらかしですわ」

ふふふ、と老人たちが静かに笑う。

「『遠くに旅立つ』って…」葉子がぼくに向き直って訊ねた。

「亡くなったんか…それとも『よぬけ』か…。で、継ぐ人が誰もいなかったんや」

「なんとかしようとかは考えられへんかったんやね」

「突然やったらどうする？例えば二人が突然、とか…」

「そんなあほなこと言わんといて」

葉子は顎を引くと、地面を見つめ黙ってしまった。

ぼくは石榴の樹を見上げた。濃い緑の葉が輝いていた。鋭い棘が風を切っている。菜園を見た。雀が飛び回っている。金木犀に飽いたのかな。

草に覆われたコンクリートが覗けてみえる。菜園全体は光を吸って膨らんでいるようだ。

老人たちを見た。細い肩に光が載って、微笑んだままの顔を深い皺がさらに鋭く彫っていくようだった。

(了)



ある朝、路地の北角、北村さんの家の前に大きな菊の鉢がずらりと並んだ。菊は人の頭ほどもある大きな白と黄色の花を咲かせていて、それぞれ五つずつあった。

路地でこれほど大きな花が、こんなにたくさん置かれたのは初めてのことで、通りがかった人は皆脚を止めた。北村さんは他にも沢山の植栽を家の前に並べていて、朝夕必ず出てきては、水撒きや植物の様子を点検していたものだから、そのたびに質問責めにあっていた。

「やあ、どないしはったんこれ」

「立派やねえ」

そのたびに北村さんは、「これはセンセイの鉢なねん」と答えていた。「センセイ」とは隣の、沢山の菊を育てている老人のことである。自宅のガレージを菊栽培のための占有にして沢山の鉢で育てているのは外からも伺えて、また、かつて花がコンテストで賞を獲ったこともあったので、植栽をしている人たちは「センセイ」と呼んでいた。

北村さんはそのセンセイのところへ通って栽培方法を教えてもらっていたのだった。今月になって増えすぎたから、といって株を譲ってもらったのだという。

「どないしたらこんなに大きくなるん」誰もがそう訊ねた。

「わたしらようしません。あのお...液肥、おまっしゃろ。水で薄めるの。それをバケツいっぱいを作って鉢ごと浸したりしはりますねん。そなんわたしらようしいしません」

北村さんはその都度、そう答えていた。

そして菊は日ごとに大きくなっていった。硬い花が空気を孕んで膨らむように丸く大きくなっ

ていった。花卉の一つ一つまでもが大きくなっているようであった。

「大きくなっていくってというのは、あれは花が解けつつあるんだよ」

波多野は部屋で尚美にそんな話をしていた。

「散っていく前触れってこと？なにか乾いた見方…。私は、瞬間、きれいって思いたいな。そういえば散り際がいちばんきれい、っていう人もいるわよね」

「菊は花が開いてから数日かな。薔薇は蕾が割れてから数日。椿も。開ききった花はいやなんだ。散るのがみえてくるから」

「だけどダリアやアネモネはきっちり開かないと綺麗じゃないとおもうけど」

二人の肩はぴたりとくっついている。ついさっきまでは胸と胸をあわせていた。お互いの頬を求めた手は、今、片手が重なっている。空いた手には紅茶のはいったカップ。

「うん…そうだよ。花によるね」

こんな話になったのは尚美が今朝、ジョギングの途中で見た菊の「変容」のことを話したからだ。

日の出がすっかり遅くなり、まだ朝霞が灰色に漂う中を尚美は走っていて、北村家の菊を横目で捉えたのだった。見えた瞬間、空中に水が湧いた。

「湧いているようにみえた」というのは後から附けた形容で、その時はほんとうに空中に水が「湧いて」見えた。

思わず足を止めると、それは大輪の白菊の花だった。花の中央に向かって花卉が柔らかく蠕動していた。たしかに菊なのだけれど、そんな菊は見たことがなかった。それはどうみても「泉」だった。

尚美はあっけにとられた。しかし、もっとよく見ようと顔を近づけると花卉の動きがぴたりと止み、大きな白菊が静止しているばかりなのだった。

「不思議でしょ」

「今度その菊の前でまたそういうふうに見えたら目を閉じてみたらどうだろう」

「え」

「たぶん音が聞こえてくるよ」

波多野たちがそんな話をしている頃、買い物に出た葉子は信号待ちをしていた。すると一目で就職活動中とわかる女子学生が横にやってきた。黒いパンツスーツ。パンツの脛にまっすぐな折り皺がはいっている。

…アイロンあてなさいよ。前の晩からスカートハンガーにまっすぐにかけてきなさいよ…

思わず葉子は心の中で呟く。

…頭が小さくてスタイルは抜群にいいのに…あーもったいないなあ…でもいいな。凜々しくて。初々しくて…

信号が変わる。女子学生が胸をはって歩いていく。

...眩しいな。一日が終わり、ほっこりする頃に皺は消えているんやろな...と、葉子は思う。空は晴れ渡り、少しひんやりとした風が北から吹いてくる。葉子は心も体もこの季節に親しんでいる感触を味わいながら歩き出した。

果物と野菜をたくさん手にしての帰り道、車が二、三分だけまったく通らなかった。その時、葉子は自分の住んでいる町にたくさんの鳥がいることに気がついた。耳の中にたくさんの種類の啼き声が飛び込んできたのだ。

思わず立ち止まって、石榴の木の方や、竹林のある方に顔をあげる。
...なんて、澄んだ声なんだろう...

次の日の朝も晴天。

日々、空気は澄んでいくようだった。気温もなだらかに下がり続けていた。

「鳥を呼べたらいいね」と葉子が朝食の時に亨にいった。

「毎朝、ベランダに来て啼いてくれたらいいのに」

「そりゃあいい」と、亨。

「だけど糞とか大変だぞ」

「そんなの平気。へっちゃら。それより亨さん、鳥の種類わかる？」

「だいたいわかるよ。このあたりだと雀、鳩、カラスの他にメジロ、ホトトギス、ヒヨドリ、それに龍安寺の池には鴨がいるし。こっちにはこないけどね。他にもいるよ」

「聞き分けるの大変そう」

「あのね、ちょうど今、ほら、朝早いから鳥たちがたくさん啼いてるやん」

「うん」

「ちょっと目を閉じてみて」

「.....」

「わかる？」

「うんうん」

「よく聞こえるやろ」

「うん」

「耳だけにした方がいいんだ」

「あ、面白い音も聞こえる」

「そうそうその調子」



「言われたとおり目を閉じてみたの。そしたら『しゅんしゅん』って。澄んだ低い音が聞こえ

たの」

紅茶を飲みながら尚美がいう。ジョギングの帰りに波多野の部屋にやってきたのだ。

「うーん、おもしろいね。菊は？」

「残念ながら、ぱっと眼を開けたら静かな菊の花でした」

「そう」

「でも目を閉じるとほんとにいろんな音が聞こえてきたの。ほんの短いあいだなのに」

「ほんとに菊から水が湧いていたら、なんかいいな」

「錯覚なんだとわかってるんだけど…。だけど、綺麗な音だしそう思っただけかな。ふと鳥かもしれないっておもったんだけど」

「きっとさ、目には見えないものなんだよ。耳で聴くしかできないもの。ほら目で見ると判らないものってあるでしょ。だから耳でしかわからない存在。たしかに鳥かも知れないけどね」

「目を閉じたときだけわかるもの？」

「そう」



静かな昼下がりに。葉子は亨に言われたように、もう一度目を閉じてみた。カラスの声ぐらいしか聞こえないけれど、ちいさく何かの音が聞こえる。

...しゅんしゅんしゅん...

きっと綺麗な鳥なんだ、葉子はそう思って眼を開けた。

透明な空気がゆっくりと流れているのが見えた。

(了)

街を歩いていて風に頬を撫でられた。熟れた柿の表面に指先で触れたときのような感覚がした。

指先と頬が同じように感じるの？と思った次の瞬間、風が指になって私の頬が柿になった気がした。少し驚いたけれど、なんだか新鮮。

私は目を閉じて歩いていた。

こんどは左手から豆が爆ぜるような音がする。そしてアスファルトに転がる音。それを踏みつぶして歩く。

とうとう我慢できなくて眼を開けた。どんぐりが道にたくさん落ちていた。

風は暖かい。もう一度目を閉じる。無理かな...雨の匂い。瞼の裏が橙色に染まる。

また光が強くなったのかな。



私も勝さんも田舎の実家に帰れば犬がいる。勝さんのところは柴犬の「ゆり」、私の家には白い雑種の「おとみ」。昨日は二人で犬の話をしていた。「ゆり」は17歳。人間でいえば90歳を越えたぐらいだ。いつ逝ってもおかしくないほど衰えてきているのだけれど、日本犬は強いからね、と勝さんは澄んだ目を私の鼻の頭にむけていっていた。もう眼も耳も駄目なんだけど鼻だけはしっかりしていてね、状況判断を嗅覚だけでこなしているんだ、と。

我が家の「おとみ」は五歳。元気澆刺としている。よく歩きよく食べる。ただ雷が苦手だ。ある時など父と表に出ていて雷に遭い、父の手を振り切って縁の下に潜りこんで、ひいひいと泣いていたことがある。

「おとみ」は神社の鳥井脇にダンボールに入れて捨てられていたのだった。母が見つけて、そのまま抱えて帰ってきたのだ。雨が続いた週で、その日も雷が響き雨が降っていた。生まれてやっと目が開いたぐらいの「おとみ」はあらん限りの声を張り上げて泣いていたのだという。

「きっと怖かったんだよ」という台詞が家族の間で何度もかわされた。雷が鳴るたびに怯えてどこかに逃げ込もうとする「おとみ」の震える背中を、母だけでなく父も私も「大丈夫」と声をかけながら、さすってやったものだった。

そのことをいったら、きっと「おとみ」も雨が来るのは判っているんだよ、と勝さんはいう。「うちの『ゆり』はね、眼が見えなくても散歩をねだるんだ。よろよろとしか歩けないのに外に行こうって催促する。まあ排泄は全部外でやる犬だから、どうしたって外に出るんだけどね。そ

んな犬なのにどうしたって出ないときがあるんだ」

「体調が悪いとか」

「うん、そういう時もあるけど、大抵はそういうとき、すぐに雨が降ってくるんだよ。それに雨が降っていたら絶対でない。だからうちでは『ゆり』は雨の匂いが判るってことになってる」

「なるほど。人間は判らない...」

「親父は山に仕事でよくはいるし、ぼくも子供の頃よく山で遊んだけど、天気判断は匂いじゃないよね。風向きと雲。目、だよな」

「雨の匂い、か...」

「きっと『おとみ』も判ってるんだよ。ただ雷は匂いがしないのかな」

「ねえ、妙な話だけど『おとみ』は『ゆり』みたいに耳が聞こえなくなったら、恐怖のトラウマが消えることになるのかしら」

「どうだろう。『ゆり』を見ていたら目と耳が駄目になってから、鼻の感覚がより鋭くなったような気がするんだよ。だから「おとみ」さんも今は耳に響くゴロゴロっていう音に怯えているのかもしれないけれど、実は雷にも『匂い』もあって、歳をとったらこんどは匂いに怯えたりするかも」

「意地悪な発想。それじゃ『おとみ』がかわいそう」

「ごめんごめん。うんそうだなあ、ずっとそばに人がいて、とことん安心してくれればいいんだよな」

そういえばこんな曲があるよ、といって勝さんがCDをかけてくれた。

“love is blindness”。

「オリジナルはU2なんだけれど、このカサンドラ・ウィルソンのが好きなんだ」

歌声に背骨が震えた。

「なにか背中を流れた」

「透明で冷たくて」「そう」

「『恋は盲目』でいいのかな？それにしても哀しげな歌」

「『恋は盲目』っていうと、あなた以外は何も目に入らないっていう熱烈ラブソングに思えるよね。この歌のは比喩じゃないんだよ」

「え？眼が見えない、ってこと？」

「『私は何も見たくない』って歌っているんだ。『私を夜で包み込んで』って。タイトルを訳すなら『盲目になることこそ恋』のようなニュアンスかな」

「なんだか谷崎みたい」

「『春琴抄』だよな。シチュエーションは勿論違うけれど、通じる世界かも。ほら”Take my heart”って...」

「あ...うん。歌ってる。心を差し出しているのね」

「自分のすべてを捧げ尽くすという感覚」

「男が歌うのと女が歌うのでは微妙に意味が違うけれど本質は同じよね。静かな歌だけれどとても激しいのね」

私たちは黙った。愛し愛されている人間には五感はむしろ邪魔なのかしら。そして眼の見えない犬、音に怯える犬。犬たちは私たちをどう思っているのだろう。

目を上げると勝さんの手と目が私をつかまえていた。



瞼の裏の橙がどんどん濃くなっていく。また我慢できなくなって眼を開けた。

真っ赤なドウダンツツジが目の前にあった。

もう一度目を閉じた。暖かな風の中に時々、硝子の破片のような冷たい一陣が混ざっている。これからもっと寒くなる。そんな直感がする。

そういえば犬たちにも皮膚感覚があるんじゃないかしら。目と耳と鼻だけじゃなくて、体全体で何かを感じているんじゃないかしら。もしそうだとしたら...

震えていた「おとみ」の背中感触が思い出された。...もっともっと抱きしめてあげなきゃ...

静かな裏通りを目を閉じたり開けたりしながら歩いているうちに、結論に辿り着いた気がした。目を閉じるとどう世界を感じるのか知りたかった。そして考えてみる。大切な人やもののこと。love is blindness...

大学は11月祭。南門で勝さんと待ち合わせてバンドと一緒に聴きに行く。背が高いから門の横に立っている姿がすぐにわかった。

「待った」

「全然」

「もう冬だな」「もう冬よね」

『雪の降りそうな匂いがする』二人が同時に同じことを言った。

いっしょに笑った。まるで皮膚が繋がっているみたいに。

いっしょに空を見上げた。

冬晴れ。雲ひとつない。

(了)

●参考「New moon daughter / Cassandra Wilson」
(TOCJ-5996 Blue Note)



まるで泉が湧いているように見えた鮮やかな白菊も、裾のほうから紫に染まりはじめた。季節は冬に変わろうとしていた。

葉子は月曜日の朝食のための買い物を済ませて家へ帰る途中である。明日は朝食会なので籠の中はいつもより果物が多めだった。

きっかけは昨晚。亨の話からだった。それでなくても不景気な上に金融恐慌が重なって、消費がめっきりと冷え込み、亨の勤める電器店でも売り上げが伸び悩んでいるのだという。そのためアルバイトは当分雇わないことになったのだ。亨自身の雇用だって「安心はしてもらえない」と亨は言った。

波多野君は新しいバイトを見つけたのかしら、と葉子が呟くと、学生たちも経済的に苦しいんだろうな、と亨。それなら週に一度でいいから朝食、ごちそうしてやらない、と葉子が提案した。尚美さんもよんだらいいじゃない。うちも賑やかになるし、と。

ちょうど葉子の実家の家庭菜園から、二人では食べきれないほどの野菜が届いていたこともあった。

亨がその場で連絡を取ってみると、二人とも是非に、ということだった。「タスカリマス」とまで。毎朝のジョギングを走り終え、シャワーを浴びてから支度を調べて二人でやってくるという。

葉子は歩きながら波多野の美しい顔をおもった。まっしろな肌、大きく黒い目。なにより特徴的な長い睫。ああいうタイプの子が経済的に苦しむ姿をどう想像したものか、イメージがまった

く湧いてこない。頬がこけてげっそりと痩せているのかしら…。同じように尚美も。長い脚と小さな顔。すらりとした立ち姿…。顔にうすい陰でもさしているのかしら…。

だけど若かったら何とか出来るはず。「私たち」だってそんなに裕福ではなかったけれど、なんとか「スマート」にやってきたのだから。葉子はそう思う。

「スマート」の、また違った意味を葉子は学生時代に知った。教えてくれたのはニューヨークからの留学生メアリだった。メアリは裾の綻びたTシャツや穴の開いた靴下でも繕って着続けるようなタイプの女の子だった。一事が万事その調子で、いかにお金を使わないで暮らせるかどうか。それが「スマート」かどうかの違いなのだ、とメアリは胸をはったものだった。学生ならなおさらだと。

彼女にお金がないわけではない。それどころかホストファミリーを斡旋したボランティアの人によれば実家は資産家だという。

メアリによれば「スマート」とはそういう文脈での「賢さ」という意味なのだった。

彼女は京都市内ならどこに行くのにも歩いて行動していたし、食事はもちろん安い食材を工夫しての自炊である。

つまりは京都でいう「よく始末する人」のことなのだ、と葉子は理解したのだけれど、Tシャツを繕って着続けるようなタイプの日本人は皆無だった。メアリの姿にあきれれる人がほとんどだった。だけど葉子は妙にひかれた。なんかおもしろいやん。スマートというよりクールやんか、という具合に。自分の行動指針にきっぱりとしたがっている姿が好きだった。そして葉子も出来るところはメアリに倣ったのだった。

そんなメアリだけ高価なノートパソコンを当時からばりばりに使いこなしていた。使うところには使うのだ。

亨と知り合った頃にそんな話をしたら、そういうやつは結構いる、とすぐに返事が返ってきた。楽器、車、パソコン…生活費を切りつめて一流品を手に入れるってよくやることやんか、と。だけどそれで体を壊したらダメ。苦しがるのもダメ。それはスマートじゃないのよ、と葉子はいった。モノを持たないことを楽しむってことなの、と。

ふーん、といいながら苦笑いしていた亨の顔を葉子は思いだした。そうでも思えなきゃ貧乏やってらんねえ、といった顔…。

ふふふ、と思い出し笑いをしながら葉子は玄関の戸を開けた。

月曜日、午前六時。

亨も葉子はとっくに起きて、朝の支度をしていた。葉子はミネストローネを仕上げているところ。

サツマイモ、金時にんじん、玉葱、セロリ、ニンニク、ベーコン...すべて細かいサイコロに切
って炒めてから、ブイヨンスープでくつつ煮込む。塩を少し。胡椒をひとつり。

野菜は全部もらい物だ。

パンは上七軒のナトウラの全粒パン。柿とバナナとリンゴをスライスして添える。柿は近所で
獲れたもののお裾分け。それにヨーグルト。亨は珈琲を淹れる。生乳も壺ごと、でんっと置く。
それから葉子は目玉焼きをつくる。サニーサイドアップ。

今日は葉子自慢のスープ皿に盛りつける予定だ。亨がお皿を並べ、スプーンとフォーク、バタ
ーナイフをセットし、横にお箸を置く。トースターにパンを入れ、バターとブルーベリージャ
ムを冷蔵庫から出した時、玄関から声がした。

「おはようございます」

「はいはい。入ってえ」

すみません朝早くから、といいながら波多野と尚美が入ってきた。葉子は調理台から二人を
見た。やつれている様子はまったくない。

亨がダイニングテーブルに二人を座らせて飲み物を訊く。二人とも珈琲。サーバーから珈琲を
注ぎ、カップを渡しながらか亨が波多野に声をかけた。

「おまえまだあの『チャイ』みたいの、飲んでるの」

「あ、『茶葉二倍のミルクティー』ですか。いや、自分でいれてます」

「だよなあ。これはぼくの意見なんやけど、お茶をコンビニで買うぐらい馬鹿らしいことはあれ
へんよ。自分で淹れたらどれだけ飲めるか」

「確かに」と尚美が応えた。

「さあさあさあ」といいながら葉子がミネストローネをスープ皿によそおっていく。

「お好みでパルメザンチーズふってね」

「ジノリですね」とお皿を見て尚美がいう。

「あ、わかるの」

「わかりますよ。この白さ」

「一発であてた人、初めてかな」と亨が言うと葉子が肯いた。

「結婚した時にこのお皿だけは頑張って揃えたの。五枚だけだけどね」

「うわあいいなあ」

トースターからパンが飛び出る。亨はそれを尚美と波多野に渡す。

「どう。バイト何かみつかった」

「いや今はしてません」

「生活費、大変なんとちゃうの」

「仕送りでなんとか」

「ふーん」

「ちゃんと食べてるの」と葉子。

「田舎から野菜とかお米も送ってもらってますから」

「尚美さんも、ちゃんと食べてる」

「ええ、時々二人分つくって一緒に食べてます」

「そりゃそうだよな。折角『ふたり』なんだから、ひとりひとりで食べることないよな」と亨。

トースターからパンが飛びでる。亨は葉子に渡し、自分の皿に一枚を置く。

朝日が部屋に溢れだした。

「本とか大変でしょ」

「図書館でだいたいすみませす。っていうか済ませませす。それより学内のパソコンの環境がもう少しよくなって欲しいんですけどね」

「なるほどね。今どうなん。みんなノートパソコン持ってくるの」

「ええ。多いですよ」

「じゃあ通信費も結構かさむやん。携帯とネットのプロバイダと。それと電気代か」

「いやあ、やっぱり食費ですよ」

「ああそのへんは変わらへんねんな」

小さな笑い声がテーブルの上にふわふわと積み上がっては消えていく。

太いニットで編まれた紺のセーターに包まれた尚美の腕が葉子の前を斜めに横切る。バターケースを掴んだ手がその先にあって、亨はその手が綺麗だな、と思う。

葉子はスープを啜るために俯いた波多野の顔に、瞬間、どうしても目が止まってしまう。なんて綺麗な瞳なんだろう…。

尚美は朝日に目を細めながらマグカップを口元に運ぶ亨の手をみつめる。指が気になる。波多野は少し俯いた葉子の首筋に視線が行く。まるで四人が四人とも瞬間的にお互いに見とれるような瞬間がたびたび訪れる。

そんな気持ちは言葉にならず、テーブルの上で軽く渦巻いて、少し熱をもっては、ふっと消えていった。

「尚美さんって専攻なんでしたっけ」葉子が顔を上げて訊ねた。

「日本美術史です」

「画は描かないの？」

「描きませせん。観るばかりです」

「波多野は国文だったよな」

「はい」

「小説とか、書かないの」

「書きません。読むばかりです」

「まるで兄妹みたいやね。似たもの同士というか」

尚美と波多野が顔を見合わせて、くすり、と笑った。

「ミネストローネ...おかわりありますからね」

「ありがとうございます」

いろんな種類の食べる音がテーブルの上に転がる。その音が亨には心地よく聞こえてくる。それにこの二人はほんとに屈託がないな、と亨は思う。一緒に食卓を囲んでいるだけで体の拍動が違うような気がする。...「朝食会」正解だな...。

亨が視線を感じて顔を上げると、葉子と目が合った。

...そうでしょう？...葉子の目が語りかけていた。

「みんな『朝の時間』があるでしょう。それにあわせて動いてね」

と、葉子がテーブルを見渡している。

「はい」「はいっ」「ぼくは行くよ」

亨がゆっくりと立ち上がった。

朝日の光線が亨の体で折れた。部屋に光がきらきらと散らばる。全員が目を細めた。

...みんな微笑んでいるみたい...

「行ってらっしゃい」

葉子の声がいつもより上ずった。

(了)

ハイウェイバスでの一夜が明けようとしていた。バスは名神を京都南インターで降りて、国道一号線を北上し、JR京都駅を目指している。妙子は窓の外を見ていた。

妙子は東京から京都に帰ってくる時はいつも料金の安いハイウェイバスと決めている。国道筋の風景なんてどこに行っても変わらないと妙子は思っていて、バスの中ではたいてい本を読んでいるのだけれど、京都到着が近いというアナウンスを聞くとつい東寺の五重塔が視界に現れるのを心待ちにしてしまうのだ。あれを見ると、ああ京都だ、となぜか安心するのだ。

東寺の前を通過。妙子は京都に帰ってきた。

京都駅から実家までは、まず市バスで最寄りのバス停の一つ手前まで行き、そこから街を歩いて向かった。タクシーで帰ってもいいのだけれど、早朝の京都を歩いているうちにだんだん街へのいとおしさがこみ上げてくる感覚が、妙子は好きだった。

冬風の朝を妙子は歩いた。

冷たいけれど柔らかい風、と妙子は感じる。きっと日射しのおかげ、と空を見上げれば、雲一つない青空である。冬のとても寒い晴れの日には、空が割れそう、といつも思う。

細い路地を通り過ぎていく。家々の軒先にある鉢植えの植物は朝露に濡れているけれど、朝日の当たらないところの、たとえば薔薇の葉などには白い細かな霜が降りていて、鈍く銀に輝いていた。この輝きが融ける頃には家に着くだろう、と思う。

そういえば、と妙子はバスで隣に座っていた若い男を思い出していた。記憶に引っ掛かっているのは彼の荷物のせいだった。明るいグレイのスーツにトレンチコート。紺に小さな山吹色の模様が入ったネクタイがとても似合っていた。その足元には大きな紙袋が一つ。上に黒いポーチを載せているので何が入っているかは判らなかつたのだけれど、海老名を過ぎたあたりでバスが急ブレーキをかけたのでポーチが床に落ちた。おもわず妙子が目で追うと、紙袋の中が覗けた。そこにはおそろしく古い型の電気釜とトースターだけが入っていた。

電気釜とトースターを持ってこの人は京都に帰るのだ。

そう思うといったい京都の彼の帰る先はどんなところだろうと想像してしまい、なかなか寝つけなくなってしまった。三ヶ日あたりまでははっきり起きていたように思うけれど、うつらうつ

らとして気がつくとも津を過ぎたところだった。熟睡した記憶はない。

そう彼の帰る先…。

そこには着替えも何もかもあるのだろうけれど、電気釜とトースターだけがない所なのだ。たぶん。例えばいつもお鍋でご飯を炊いている優しい彼女の待っている家、とか。

彼女はきっとトーストは食べないんだ。いつもクロワッサンばかり食べていて、男の人はどうしてもトーストを食べたいからトースターを持って帰る、とか。

「持って帰る？」妙子は歩きながら独り言を呟いた。

だけどもしかしたら彼の全財産が電気釜とトースターなのかもしれない。とにかく京都に腰を落ち着けて自炊をしながら暮らしをはじめようとしているのかもしれない、とか。

寝つけない妙子の横で寝息を立てている男から、ほんの少し酒の匂いがした。ちらっと横の男を見ると、プレスのかかったスーツの衿に小さな虫食いの穴があった。

たぶんこの男の人は東京へはもう戻らない。そんな直感が心を埋めた。

家が近くなってきた。京都市の街並み保存の指定された町内に妙子の実家はある。開発が規制されていることもあって、街並みはほとんど変わっていない。たまらなく懐かしくなる。街全体がゆっくりと熟れて、そして枯れてゆくような雰囲気がある。東京にも古い街はあるけれど、こんな匂いのするところはない。ただ崩れるに任せていくようにみえる街は、毎日、丁寧に掃き清められている。そしてやわらかな視線の人たちが暮らしている。東京から京都へ帰省するたびに妙子はそう強く感じるようになっていった。

「あれえ、妙ちゃん？」背後から声をかけられた。振り返ると幼なじみの顔があった。

「葉子？」

サンダルでぱたぱたとかけてくる顔は葉子に間違いなかった。

「いやあひさしぶりやなあ。帰ってきたん？」

「うん、うちのおかあちゃんが風邪で寝込んでるいうから早めに帰ってきてん。年末年始のこと、動きがとれへんみたいやし」

「うちもやねん。昨日、母さんが硝子のコップ洗うてて掌を切ってしもてん。何針か縫うぐらいの傷なねん。そやから『戦線離脱』。昨日の晩から実家の手伝いにきてん」

「そら大変やね。ところでどないしたん？こんな早ように」

「コンビニ。トーストのパンが切れてて」

二人でしばらく並んで歩いた。

「旦那さんは」

「うん元気してるよ。妙ちゃん、まだ独りなん」

「うん。…なかなかねえ」

「ふーん、仕事は」

「おんなじ。広告制作の会社」

「そうかあ」

ふたり肩を寄せて路面を見ながら話していた。風が正面から吹きつけてきていた。

「じゃあ」

そうって葉子が顔を上げ、コンビニへ向かいながら妙子に声をかけた。

「おばちゃんによろしいゆうといて。あ、それから妙ちゃん、おやすみ」

「え」

「あんた目が真っ赤え。寝てへんねやろ」

「そやねん寝られへんかってん」

二人は手をあげて微笑みながら別れた。

「ただいま」

玄関をあけると珈琲の匂いがした。台所にいくと父が珈琲を淹れていた。とても小さいヴォリュームでモーツァルトの40番がかかっている。いつもと同じ我が家だ。

「お帰り」灰色の頭が振り返った。

「母さんは」

「寝てるよ。ずいぶんよくなっはきてるんやけどな」

その時、パジャマ姿の母が台所に入ってきた。

「おかあさん、ただいま。どうなん具合は」

「お`が`え`り`」

「うわあ酷い声」

「バン`がない`や`ろ`おも`で」

「なにゆうてるかわからへん」

「あ食パン切らしてたか」

父は毎朝、トーストを食べる。これもずっと変わっていない。

「もう病人は寝てなあかんやろお。あとは私がやるさかい寝てて」

「ぞう`があ`。ごめ`ん`」

「そやで寝とき寝とき」

「かあさん。お、や、す、み」

母がとほほ、という笑みを残して寝室に戻っていく。

「父さんマフラー借りるね。コンビニに行ってくる」

妙子は居間にあった父のマフラーを首に巻くとサンダルをつっかけて表に飛び出した。コンビニに葉子がまだいるかもしれないと思ったからだ。高校生の頃から葉子はコンビニに行くとき必ず立ち読みをしていたからだ。

足が軽い。心が弾んでる。

路を渡る時、向こうの大通りをどこかで見たトレンチコートの男が大きな紙袋を手に提げて歩いていた。妙子はあれ、と思わず立ち止まった。そしてすぐに駆けだした。コンビニのガラス窓の向こうに葉子がいたからだ。雑誌を読んでいる眼がたまらなく懐かしかった。

もう少しだけ話がしたかった。

(了)



正月も四日を過ぎた。日曜日である。

正午前、亨は北野の天神さんへ初詣に向かっていた。

毎年三が日は百万人近い初詣客で混雑する天神さんだけれど、四日ともなれば落ち着いているはずだった。

こういう時、大抵一緒にいる葉子はいない。

葉子は、割れたコップで掌をふかく切ってしまった母を手伝うために、年末からおもに実家にいた。元旦には亨も葉子の実家にゆき、二日は亨の実家に二人で顔をだした。

ようやく三日は二人だけで過ごしたのだけれど、今日、葉子は東京から帰省している幼なじみの妙子と実家近くの神社にでかけている。

天神さんは、亨の通った小学校の学区の中にあつた。小さい頃から路地という路地を歩き尽くしていたから、亨は天神さんに抜けるいくつもの路を知っていた。一人歩きの気楽さもあって、亨は子供の頃「開拓した」狭い路の一つを歩いていくことにした。

(とおりゃんせ とおりゃんせ ここはどこの細道じゃ 天神さまの細道じゃ)

ふいにこの唄が亨の頭に浮かんだ。

そういえば子供の頃、この唄を口ずさみながら街を「探検」していた記憶がある。
この歌を覚えたのはいつのことだろう。幼稚園か保育所か。あるいは母親が歌ってくれたのか。
この唄が路を探させたのだろうか。路が唄を思い出させたのだろうか…。

空は全体に曇っているけれど、ところどころで雲が破れている。そこから斜めに光線が地上に降り注いでいるのが見える。南の方角にいくつか。東にも。強い北風が雲を裂いているようだ。
亨は横断歩道を渡りはじめた。渡り終わるとすぐに北へ歩いていく。脚が地面を踏みしめるたびに体の中に残ったわずかな夜の記憶が響くようだった。まだ手にも脚にも葉子の余韻が残っている。

小学校の南側で路地を東へ折れる。灰色の塀が続く路を歩き止まりまで歩き、すぐに北へ向かう。

前方から孫であろう女の子と手を繋ぎ、腕に買い物籠をぶら下げたお婆さんがゆっくり歩いてきた。光がお婆さんの髪を銀色に輝かせ、女の子の黒髪に輪となって載っていた。お婆さんが子供に言い聞かせるように唄をうたっている。

とうどのとりと　にほんのとりが
さかいのはしをわたらぬさきに

亨は即座に思いだした。母の唄では聞いたことがなかったけれど、祖母がうたっていた唄だ。
(唐土の鳥と　日本の鳥が　境の橋を渡らぬ先に)

ななくさなずなで　ほおほおよ

お婆さんが続けて歌う。

「ほおほおよおおー」女の子がおもしろがって復唱する。

七草の唄である。正月七日、京都では夜が明けると禍いを持った鳥がやってくるので、その前に七草粥を食べるという習慣があった。「渡らぬ先に」とは未明のこと。

さすがに夜明け前に七草粥は食べなかったけれど、七日の朝は決まって七草粥だった。あの女の子も自分と同じようにお婆さんから言い伝えを聞いているに違いない。

南下していく二人の先には市場がある。七草を買いに行くのだろう。

亨は北上を続ける。すると建物の陰に東へ続く舗装されていない路地の入口が見える。亨はそこへ入っていく。

どんどん狭い路へ、どんどん静かな方へと亨は歩いていく。その路の先端から石段が降りていて、狭いけれど深い川に行き着いた。紙屋川である。

誰もいない。

小さな鉄の橋が架かっている。橋の渡った向こう側には堤がある。秀吉が京を分断すべく造った「御土居」とよばれる堤防の名残だ。もうそこは天神さんの境内なのだけれど、その向こう側のざわめきはまったく聞こえず、水の流れだけがあたりに響いていた。

橋を渡り石段を上がると「御土居」の端に出て、そこから御土居を越えるといきなり本殿に出るのだ。亨は橋の上に出ようとして気がついた。自分の回りがずいぶん明るいのだ。どんどん狭いほうへ、静かなほうへと歩いてきたこの路は、どんどん暗い方へと歩く路だった。

建物の陰、塀の陰、木陰...陰の中を歩いてあげく明るい本殿前にぽんっと出るのが...。今日はずいぶん明るい。亨は思わず空を仰いだ。光線が亨を包んでいた。

紙屋川を渡ってくる冷たい風と、秋まで陰をつくっていた葉のすべて落ちた川横の大きなモミジの枝の上から降ってくる光を浴びて、亨は橋を渡る。石段を登り、御土居へ向かう入口に立つ。右を見ると強い光が差していた。右へ続く道は梅林の外周に沿った路だ。亨は光のほうへ向かうことにした。

(どうぞ どうしてくだしゃんせ)

金網越しに梅林を見ると、蕾が膨らんでいた。春が近づいている。

参道の横にでた。光はさらに強く、参道の人々にまんべんなく降り注いでいて、そのなかに亨も入っていった。

切れ切れの雲から気まぐれに降ってくる光。そのなかに葉子もいて、自分のように空を眩しそうに見上げていないかな。そんなことをふと思う。

眼を細めながら空を仰ぎ見る葉子の姿を想像する。それだけで自分と繋がっている気がする。それだけで。

(いきはよいよい かえりはこわい)

亨は携帯をかけた。

...あのさ、七草買って帰るから...

葉子の弾んだ声が返ってきた。

(了)



日本画家のアトリエ南裏にある雑木林が切り払われるという話が、一月の半ば頃に町内の一部で囁かれ始めた。やがて誰もが「どうなるんやろねえ」と話題にし始めた頃、林の西側にある誰も住んでいない古い大きな家の解体がはじまった。

椋鳥の群れが巣を作り、コロニーのようになっていたのは、この古い家の奥にある、四方を家に囲まれた誰も中に入れなかった雑木林である。

いつも行く八百屋の店先で葉子が聞いた話では、家と林は遺産の分与のことで、なんと20年近く親族間で争っていた物件ということだった。話し合いはまとまらず、結局、裁判で決着がついたのだという。

誰がどのような分与を得たのかはわからないけれど、あの古家と雑木林を手に入れた人間の最初に下した決断が、古家の解体と雑木林を更地にすることだったのだ。

ある日を境に毎朝九時になると、チェーンソウの爆音が町内に響いた。その音の下で人々の囁きはずっと続いた。

例えば葉子が「そういえば近くの枇杷の木に見たことのない鳥が来るようになりました」というと、「画の先生のところの梅の木にウグイスがきていましたよ」とか「カラスが異様に低く飛ぶようになったと思いません」などと、おもに鳥たちの話がざわざわと盛り上がる。

...みんな実のところ椋鳥がどうなったか気になっているんやわ...

葉子は鳥の話をする人の表情に、そんな気持ちを感じていた。もちろん葉子自身の気がかりで

もあった。

取り壊されている古家の前の道は、亨が毎朝、駐車場へ向かう道である。その家の前から緑の影が払われて、どんどん明るくなっていく様子を葉子は亨から聞いていた。

「ほんとに根こそぎやわ。かたっぱしから切り倒してる。前に住んでいた人がいろいろと植えていたんやね。玄関の両側から道を覆っていた楓とか...」

「あの紅葉は素晴らしかったやん」

「もう切られちゃったよ。その奥に何本も棕櫚が植わっていて、その奥に何があったと思う」

「なんだろ。棕櫚でも意外なんだけど」

「バナナの木」

「こんなに寒い冬があるのに？誰も手入れしてないのに？」

「不思議やけどね...。そんなふうに毎朝、通るたび奥の方の樹が見えてくるんや。夕方にはもう切られているやけどね...バナナも今日行けばなくなってるやろな」

「棕鳥の大群のいた林は...」葉子の口から思わず言葉がこぼれた。

「あれなんと櫛の樹やったんよ。櫛の樹が四本並んで立ってたんだ」

「それも...」

「うん、なくなった」

亨から、道の雰囲気が変わった、といわれても葉子はその前を歩く気がしなかった。そうすれば樹の残骸や切り株を見てしまうことになる。そう思っただけで不快になるのだった。

亨は、棕鳥たちがチェーンソウが鳴り響いたその朝には姿を消していたという話を現場の人間に聞いたそうだ。

「ぼくも一番気になっていたのは鳥のことやから」と、亨。



波多野は窓の向こうの赤松の枝にカラスがたくさん留まっていることに気がついた。堀河天皇火葬塚を覆っていた一本の赤松の、今日が最後の日である。カラスたちがまるで別れを惜しむように並んでいる。

夏、いつになく葉の緑が冴えないな、と思っていたら、あっといいうまに茶褐色になった。それは波多野が実家のある田舎でも何度か見たことがある光景だった。マツクイムシのために枯れてしまったのだ。

四方を住宅に囲まれていたため、騒音などの発生について付近住民との調整をしていたのだ

ろう。赤松の伐採について大家が通告してきたのは一週間前のことだった。

波多野の横には尚美が座っていた。尚美も伐採のことはすでに知っていて、赤松から目を離さずにいた。

尚美は毎朝、この松の向こうをジョギングしていたし、波多野が尚美を見初めたのが「赤松の向こうの尚美」だったことも、最初に声をかけられたその日に聞いていたから、なにか心が動くのだった。

「もう枯れているのよね」

「ほとんどね。だけどまだ微かに生きている気がするな」

「こんな立派な枝振りの赤松なんて見たことがなかった...」

「10メートル四方を一本の枝で覆い尽くしていたんだもの」

「あ、お婆さんが出てきた。わかる？」 「うん」

アパートから赤松を挟んだ向かい側の家の前に老婆が出てきて、赤松をじっと見上げていた。「昨日、塚の門の前で赤松を見ていたら、話しかけられたんだ。この赤松、樹齢が三百年をこえてるんだって」

「堀河天皇が亡くなってから植えられた樹でしょ。いつ亡くなったんだろ。勝さん、パソコン貸して。ウィキで調べてみる」

赤松の周りに造園業の人たちがばらばらと散開し、伐採の準備を始めた。

すぐに尚美が波多野の横に戻ってきた。

「もう900年も前になるのね」

「ということはこの樹と同じ年齢を生きたとして、赤松は少なくとも三代は続いたんだね」

チェーンソーが唸りを上げた。たちまち声が聞き取りにくくなる。

「もういい。樹がバラバラになるの見ていたくない」

と言いながら尚美は立ち上がった。赤松の向こうでは老婆が家に入り、戸を閉めた。

「『この先の景色』 見てみる？」 波多野も立ち上がった。

「『この先』？」



葉子は洗濯物を干すためにベランダに出ていた。どうしても向こう側にあった緑の塊を探してしまう。そこはとうに透けてしまっていて、空が広がっているばかりなのだけれど。

...なんだか街が間抜けになってしまった感じがするなあ...

亨はそうやって仕事に出かけていった。

ジーンズを伸ばして干す。顔を空に向けて目を細めた時、斜めに視界をよぎるものがあった。
...雀？...

もう一度飛んでくる。

「むくどり！」

葉子は思わず声をあげていた。



波多野と尚美は堀河天皇火葬塚のすぐ横の馬代通りを北に向かって歩いていた。波多野は「その先の景色」がこの道の先にあるという。

「きぬかけの路」を横断してまだ北上する。道はくねくねとした坂に変わり始め、右に金閣小学校が現れた。

「小学校の裏に回り込まないといけないんだ」

二人は右折し住宅街の中に入っていく。やがて東西と北を住宅に、南を小学校に囲まれた四角い空き地に出た。

「まん中、見て」

波多野にいわれて尚美はフェンス越しに覗いてみた。

「ずいぶん大きな切り株...古いわね...。あれ、松なの」

「たぶんね。ここは白河天皇火葬塚」

塚は斜面の途中につくってあって、南側の小学校側からは見上げる形になる。そこには小さな階段がついていて、南側から北に向かって拝する形になっていた。堀河天皇の塚と同じ構造である。ぐるりを背の低い生け垣で囲っているところも同じ。まん中に松が「あった」ことも。

尚美は南側から塚を見上げた。堀河天皇の塚とは違うものがそこから見えた。青空だけを背景にした高さ三メートルほどの若い松だった。

「これは黒松だと思う。次はこの松の枝ががここを覆っていくんだ」と波多野。

「この黒松が朽ちたら...」

「その頃はまん中の切り株が土になっているから。そこにまた松を植えるんだろうね」

「赤松だといいな」

「そうやってずっと続いていくんだろうね」



椋鳥は一羽ではなく、いくつもの軌跡を葉子の目に残して北へ飛んでいく。洗濯物を急いで干し終えた葉子は、ダウンジャケットを着こみ毛糸の帽子を被ると表の道へ飛び出した。まだ電線に絡むように多くの椋鳥がバラバラに飛んでいる。しかしバラバラなのだけれど、まるで飛行の軌跡が一本の大きな綱を編んでいるように全体は一つの方角に向かっていった。その後を葉子はついていった。

...新しい林、新しい巣、こどもの鳥は...

通りを二筋、北へ行くと椋鳥たちが一軒の家の庭に集まってはそこからまた飛んでいくのを目撃した。中年の痩せた女性が深紅のカーディガンのポケットに手を突っ込んで庭を見ている。彼女は葉子に気がつき、振り返って微笑んだ。

「むくどり？ですか」

「ええ。気になって付いてきちゃいました」

「あまり騒々しいから外に出てみたの。そしたら、これ。こっちへ飛んできたのね」

「ここは...」

「ふふ私の家です。あの『林』から飛んできたのは偶然なのかなあ。それとも...ね」

女性が庭の樹を指さした。庭には大きな合歓の木があって、その奥に大きな葉の樹が覗けて見えた。

「あれひょっとしてバナナですか」

「そうなの。冗談半分で植えたら育てね。あそこの林の解体作業、毎日見ていたの。そしたらうちと同じバナナの木があるじゃない。同じことをした人がいるんだと思ったら楽しくなっちゃった。だけどねえ...」

「え？」

「植栽が好きなことって遺伝しないのね。まるで緑の虐殺だった」

「ああ...」

椋鳥たちが彼女の家のバナナを目印に飛んできたのだったらおもしろいな、と葉子は思った。鳥たちはさらに北へと飛んでいくようだ。この先には山が連なっている。たぶんその中に新しい巣が出来るといえるだろう。



「そういえばさ、花村さんの家の近所で小さな林が丸々一つなくなっちゃったんだよ」

「あ、知ってる。深緑の影があったのに」

「たぶん造成地になるんだろうね」

波多野と尚美は入試のはじまった大学を迂回しながら帰ってきた。

「あれ葉子さんじゃない？」

大学の南端に隣り合ったのイチョウ並木道を葉子が歩いていた。葉子は大学裏の山裾からの帰り道である。二人が手を振る。葉子も気がついた。

「散歩なの？なんだか二人並んでいると眩しいわね」

「葉子さんだって顔がきらきらしてますよ」

「何かいいことでもあったの？」

三人の声が弾んだ。

(了)



二十数年ぶりに遺産相続問題が解決した通称「雑木林のある家」の解体は、街路や隣接する家々に新しい日射しもたらした。

大正期に建てられたという屋敷と、椋鳥たちが住み着き、ほとんど林と化していた庭が全くの更地になったのだから、当然のことではあった。

整地作業は徹底していて、葉子は掘り起こされた木々の大きな根がダンプカーに満載されて運ばれていくのを何度か目撃した。

樹の残骸が転がっているのを見るのが嫌で更地の前を通らないようにしていた葉子だけれど、そうやって根の残骸を見てしまったり、近所の人たちが、なんとなくにこやかな表情で、あかくなかったねえ、と口々にいうものだから、とうとう今日、買い物に行く途中、更地の前を通ってみることにしたのだった。

この街でこんなに広い地面が顕わになったのは何年ぶりのことなのだろう、と葉子は先ずその広さに驚いた。そしてそれ以上にその明るい茶色に引きつけられた。

以前、亨と一緒に石榴をとりにいった老人たちの「畑」は、老人たちの髪に似た灰色の土だったし、自分たちの街にこんな土があるということが葉子には思いもよらないことだった。

地面はまだ均らされておらず、大きな穴があったりうねっていたりしていた。その様子がまた土に力強い印象をあたえていた。なるほど、植栽好きの人が「なんでもすくすく育ちそうな土やよ」と言っていたわけやわ、と葉子は思ったのだけれど、そればかりかその土が、おいしそう、と感じている自分自身に驚いていた。

...ほんまに「おいしそう」な土　なんでやろ　色かな　匂いかな...

土に見とれていた葉子がようやく八百屋に向けて歩き始めると、前を、二人の女性が京都の地図を見ながら歩いていた。すると前方から黒いコートに灰色の帽子を被った女性が小走りにやって来て、女性たちに飛びつくようにして何事か訊ねている。二人が振り返り葉子の方を指さす。黒いコートの女性は二人に軽く会釈をすると、葉子の方に早足で向かってきた。

「どうしはりました？」

葉子から声をかけた。

近づいてきたのは顔に深い皺の刻まれた老婦人だった。

「犬、見いしませんでした？」目が大きく見開かれている。

犬を連れて八百屋まで行き、店先にある駐禁のポールにリードを結わえて買い物をしていたのだけれど、戻ると犬がいなくなっていたというのだ。

おとなしい子やおもてたのに、いくあてもないのに、犬はアホなんやろか、と犬を責める言葉が次々と出てくる。

「あの二人が、あの道を東へ走っていった、ていわはりますねん」

『あの道』とは、今、葉子が立っている道とT字に交差している道である。葉子はそこを左折してきたのだ。

「ほな私が見てるか、すれちごうてるはずですねえ」

「遭うてませんか？」

「うーん、おうてないです」

犬種はミニチュアダックスフント。雄で名前はココアという。

葉子は、自分がぼおっと土を見つめていた背後を小さな犬が走り抜けていく姿を想像した。

「お家はどちらですのん？ひょっとしたらもうお家に帰ってるかも」

「そう思っていま戻ってきたんです。いいしませんでした。ああどうしよう。娘に怒られる」

「娘さん？」

「わたし、娘と二人暮らしですねん。娘は犬を子供みたいに可愛がっていてねえ。昼間は働きにでてるんで私が見てますねんけど...ああどうしよう。怒られる」

今にも泣きだしそうだ。

「もうじきに夕方やし、はよ見つけなあきませんね。うん、私も探してみます」

「あ、おおきに。ありがとうございます」

老婦人はそう言い残すと、そのままT字路を東へ曲がっていった。

葉子は老婦人の困難を助けようと思ったわけではなかった。「犬がアホ」だの「娘に怒られる」だの、自分のことばかり言いつのる老婦人に僅かだけれど反感さえ抱いていた。

...勝手な人やわ、きっとリードかてええかげんに結わえてはったんちゃうやろか...

そうではなくて、迷った犬は何らかの理由でパニック状態になった可能性が高く、ますます出鱈目に動き周り、交通事故にであうことが考えられたからだ。またこの厳寒の時季だからすぐに弱ってしまうようにも思われた。ましてミニチュアダックスは室内で飼われていたのだろうし、小さくて体力がない。

葉子は路地の一つ一つをみてまわることにした。

葉子は実家で柴犬を飼っていたことがあって、何度も犬の脱走を経験していた。幸い事故は無かったけれど、散歩仲間の犬がとうとう帰ってこなかったり、交通事故にあって亡くなったのを何度か見てきた。

...急がないと...

街には夕方が訪れ、犬の散歩が始まっていた。様々な犬連れに出会うたびにミニチュアダックスの消息を訊ね、見つけたときの連絡先は八百屋の前ということにした。（老婦人から家の住所や電話番号もきいていなかった）

街の辻から通りを探っていると、同じようにしている人たちがいる。数は少なくない。沢山の視線が街を飛び交い、なんだか街が脈打ちだしたような感じさえする。そんな人たちとばったり出くわすと、老婦人の隣組の人だったり、八百屋の買い物帰りの人だったりした。みな老婦人から「娘に怒られる」ときかされながら、ココアを探していた。誰かに保護されているかも知れず、とりあえず警察に電話をしておくことを、今度老婦人に会ったら伝えることをみんなで確認する。

ココアはなかなか見つからなかった。

葉子は街の突き当たりの山を見た。逃げ込んだかも知れない、と思った。以前、山で野良犬を見たという人の話をきいたことがあったからだ。

...山に逃げ込んでいたら大変だぞ。だけどミニチュアダックスがそこまで逃げるかしら...

山に方向に向かって歩き始めると、次の角にシーズー犬を連れた小学生らしい女の子が立っていた。目を瞑って小首を傾げている。

「ココアを探してんの」

女の子は肯いた。

「おばちゃんも探してんねんけど、いいひんなあ」

「わたし、ココアのことよう知ってんねん。あの子、あかんたれやし犬におうたらすぐ吠えんねん。そやから声が聞こえてけえへんか待ってんねん」

「あっそうなんや。ようしてんねんなあ。おばさんも一緒に探すわ」

女の子は小学校五年生で亜由美といい、つれているシーズーは「ゆり」という名前だった。

二人と一匹で少しずつ場所を変えながら耳を澄ませた。そうしてみると結構犬の音が聞こえてくる。

「あれはたぶん柴犬え」

「なんでわかるのん？」

「おばちゃんとかな、昔、柴犬こうててんそやから柴犬の声、ようわかんねん」

「へえそおなんや」

甲高い音が聞こえてきた。

「スピッツ」二人で同時に呟く。

「『雪ちゃん』ゆうんです」

野太い音が聞こえる

「あれはゴールデン？ラブラドルかな。ものすご怒ってるみたい」

「ほんまに…。たぶんラブのケンタやおもうけど。ココアがいったし吠えてんのんちゃうやろか」

亜由美ちゃんが駆けだした。

「あ、ゆりちゃんは」

ピンと張ったリードが緩み、シーズーのゆりちゃんがまん丸い目で二人を見上げた。

「いいよ、ゆりちゃんはおばさんが抱いていくから。亜由美ちゃん、先にいって」

「うんっ」

「ケンタの家はどこなん」

「すずなりさんとかおー」

そう言い残すと亜由美ちゃんは一目散に駆けだしていった。

葉子は、あっと思った。鈴成家は更地になった土地の南側にあるのだ。

ゆりちゃんを抱いて小走りに寺に近づいていくと、野太い吠え声に混じって甲高い吠え声が聞こえてきた。間違いない。ミニチュアダックスが吠えている。

鈴成家の玄関脇から奥の方へ入っていくと、ラブラドルレトリバーを鈴成さんの奥さんが一杯リードを引っ張って止めていて、亜由美ちゃんがココアのリードを握りしめ、ココア、ココア、といいながらなだめていた。

「よしよしケンタ、もういいから」

飼い主になだめられてケンタも静かになった。

「裏の土地で遊んでたんやね。樫の根を掘った穴の中で転がり廻ってたみたい。垣根をくぐってケンタを呼びに来たみたいやわ」

「八百屋さんの店先から逃げたらしいんです」

「遊びたかったんやわ」と、亜由美ちゃん。

ココアは目はきらきらさせていて、鼻の先と口の横には土がべっとり付いていた。

「土の匂いにつられてきたんかなあ」

「犬にしてみれば新しい遊び場やおもたんでしょう」

「そんなに土がおいしかったんか」と、亜由美ちゃんがココアの口と鼻を素手で拭きながらいった。

「やっぱり」と、葉子。

「え？」

(了)



二月になって古い寺の山門脇で椿が咲いた。寺の山門といっても、山門の周りは静かな住宅街で、門からまっすぐ参道を20メートルほどいくと現在の境内になる。山門だけが街の中に取り残された恰好になっていた。

山門をくぐってすぐに左に、椿と木瓜のある長方形の庭があった。それは庭というより空き地のようにみえた。山門の内側にあるどの家も参道側が塀か壁になっているためである。昔、参道に沿って垣根があったためなのだが、今では聚楽色や白が長くつづく壁の端に椿と木瓜の樹が立っているのだった。

庭の所有者はその庭に壁が接している澤田というお婆さんである。葉子が不思議に思っているのはこの椿を町内に古くから住んでいる人たちが「鈴木さんの椿」とよぶことだった。最近、近所の立ち話で知った言葉だったから、その理由もわからないままだった。

澤田さんは今年で79歳になる。中学校の理科の教師を定年まで勤めあげた。夫は4年前に亡くなって、以来ずっと独り暮らし。葉子が知っているのはそこまでだった。

三月が近づくとつれ、椿はますます赤い花を殖やしていった。背の高い樹なのでそれでなくても目をひく。しかも花が簡素なつくりの藪椿系ではなく、八重の洋椿系だったのでいっそう華やいみえた。

ある朝、葉子が玄関前から山門の近くまで角掃きをしていると、山門の内側から近所の土屋さんに声をかけられた。

「見事に咲いたねえ」

「そうですねえ。今年は花の数も多いようです」

「そやけどね」といって土屋さんは手に持った花に目を落とした。

「これ、今、落ちてたんを拾ってみてたんやけど、蕊があれへんのよ」

「蕊?...雄しべ、雌しべですか」

「そう」

そうやって土屋さんは八重の花びらをぐいぐいと押し広げていった。椿の花弁は小さくどこまでも続いている、最後にちいさな赤い豆ぐらいにまでなった。

「ほらね、ないでしょ。そういう花なんやろか」

すると壁の横で戸の開く音。綿入れを着た澤田さんが出てきた。

「おはようさん。ええ天気やねえ」

「おはようございます」

「何、椿の話なの」

「ええ、この花、蕊があれへんゆうてたんです」

「ああ八重には無いのが多いから。ヤマブキでも桜でも八重咲きには雄蕊がないの」

「ああそうなんですか。なんにも知らへんもんやから。じゃあこの椿は実が出来ないんですね」

「八重でも実の出来るのもあるみたいやけど、これは無性花やったとおもうよ」

「なるほど。ねえ、雌しべもないね」

と、土屋さんが葉子に向いて言った。

「え、そんなことないでしょ」

そういいながら澤田さんが花を覗き込んだ。三人の視線の先に土屋さんが手で押さえている赤い豆のような花の「芯」がある。

「機能はなくしているけれど雌しべはあるのとちゃうかな」と澤田さん。

澤田さんが「もっと剥いてみて」と言うと、土屋さんが「無理っぽいです」と、言う。「じゃあ私が」と、葉子が言うと、「私も」と、澤田さんの手が伸びた。

三人の指が花を押さえたものだから、たまらず花びらがはらはらと落ちてしまった。

「あれま、ばらばらやわ」

と、言って土屋さんが「芯」を葉子に手渡す。葉子が親指で強くこすってみた。

ぺろんと中味が現れた。

「あ、雌しべ」

と、葉子が言うと二人の頭が花に覆い被さった。

「あかん。老眼鏡でもみえへん」

土屋さんがつっかけを、ぱたぱたいわせて家に戻っていく。

「どないしました」

「拡大鏡おお」

拡大鏡で覗くと、細かな雌しべがいっぱいに立っていた。

「こんな小さくて細かいのがあったんやね」

「ね、あるでしょ。八重咲きは雄蕊が変形してなくなっていて雌しべだけがあるのが多いの」と、澤田さんも納得したようだ。

「あれえ」

「どないしたん花村さん」

「これ雄蕊やないですか」

また三人の顔が拡大鏡に近づく。

花の芯のまんなかには、雌しべとはあきらかに色が違う、すこし大きめの黄緑の蕊が一本あった。三人が思わず顔を見あわせた。

「これは雄蕊やね」と土屋さん。

澤田さんは、一瞬言葉につまってから「そうみたいやね」

「だけど機能はないのかもしれないですね」と葉子。

澤田さんの手が花からすっと離れた。

「花村さん、この椿はねえ『舞鶴』っていうの。雄蕊...あったんやね。きょうは勉強になったわ」

澤田さんはそういうと、にっこり笑って樹に向かった。花のついた小枝を折り、それを手に家に帰って行く。

「『舞鶴』...ねえ」

土屋さんが呟くように言った。

「なにか気になることでも」

「うん。澤田さんは舞鶴出身やからね...」

「あの、土屋さん。私、前から気になってたんですけど、この椿、ご近所で『鈴木さんの椿』っていうてはらしませんか」

「ああ知らはらへんかったんやね。この椿は鈴木さんが天神さんの縁日で買わはったの」

「で、澤田さんの庭に？」

「二人は姉妹なの。鈴木さんはすぐ近くに住んでいてね。確か舞鶴からお姉さん夫婦を頼ってできてはったんよ」

「仲がよかったんですね」

「いやあどうやろう。鈴木さんは気が強おてねえ。いうたら口も悪くて...。ほら隣に木瓜の木があるでしょ。あれも椿と一緒に植えはってね。これは姉さんの樹、ってげらげら笑わはんの」

「『ぼけ』ってことですか？」

土屋さんは肯いた。

「だけど澤田さんは妹をととても大切にしていたんよ。鈴木さんは難しい病気でね、京都に呼ばはったんも澤田さんで、こっちの病院に通わせはったん。でも亡くならはってねえ」

「そうなんですか」

「あ、なんだか悪いことしてしもたんとちゃうやろか。たぶん妹さんの思い出の樹でしょう。そやのになんとか暴き立てたみたいな...」

「そんなあ。気にし過ぎやて」

「そうですか」

「そうそう、気にしんとき。そもそも名前の『舞鶴』も澤田さんがつけたんやと思うよ。自分らの出身地と同じ名前の椿や、て昔から澤田さんは言わはるんやけど、東寺の縁日で『舞鶴』ゆう椿の、花のついた苗木を見つけはった人がいたの。そしたらこれとは似ても似つかん椿やったんやて」

「そういうことがあったんですか」

「だから『鈴木さんの椿』なんよ」

土屋さんが拡大鏡を手に家に戻り、葉子は途中の角掃きを再開した。

ふと見上げると、木瓜にも花が咲き始めていた。淡い桃色の小さな花だった。

(了)

得意先の上村さんから緊急の修理要請がきたのが昨日。漏電のためにメインのブレーカーが落ちてしまったという。すでに電力会社による点検は済ませていて、漏電は家庭内配線のどこかであることは確定しているのだという。

その日は手の空いていた社長が駆けつけて緊急処置を施した。

どの家のブレーカーも漏電検知システムがついていて、漏電すると自動的にブレーカーが落ちる。ただ、容量オーバーで落ちる場合と違い、その電気がもれている箇所を治さない限りブレーカーは復旧しない。

まず分電盤で枝別れてしている個別のブレーカーを全部切る。それからメインのブレーカーを入れる。そこから一つ一つのブレーカーを入れていって、ぽーん、と再び落ちたらそのラインのどこかから漏れていることになる。

社長によれば漏電しているラインは一つ。一階の半分をカバーしているラインだという。生きてるラインから延長コードを引っ張り冷蔵庫と台所の灯りを確保。トイレは懐中電灯でお願いしておいた、と。

工事は難しくなりそうだった。古い家を10年前にリフォームした時に天井の隅についていた点検孔を塞いでしまっていたのだ。天井に穴を開けなければ配線がわからない。

社長と二人で上村家に出向き、午前中から作業にかかることにした。

「花村君、ひさしぶりやねえ」

上村さんがにこにこして迎えてくれた。ぼくが高校を出てすぐに電器店に就職した時、すでに上村家はお得意さんで、ぼくはクーラーの増設、冷蔵庫の設置、スカパーのアンテナ設置など、何度もこの家に来ていた。

上村さんは61歳の女性。一頭の犬と一緒に暮らしている。旦那さんは一昨年亡くなった。

「こんちわ。大変でしたね。何か思い当たること、ありませんか？」

「怪しいなあって前から思ってるのは、ここ」

そういつて上村さんは天井を指さす。

「三年前、たぶん猫が潜り込んで歩き回ってたんよ。猫が線を嚙って、出ていったんとちがうかなあ」

「そこが劣化した、と」

「そう」

「猫ですかあ。うーん、猫は線が出るまで囓るかなあ」

社長が首をひねった。

「私のお友だちの家は猫は電話のコードやら延長コードを噛むゆうて困ってましたよ」

「だけど感電死してへんでしょ」

「...そういえばそやね」

「ね。わたしはこんなケースで猫を見たことはないですよ。大抵ネズミです」

社長がきっぱりと言った。

上村さんは犬が好きだけれど、猫も大好きで、野良猫にご飯をあげたり猫トイレを裏庭につくったりして、ずっと面倒をみてきた。どれだけの数の猫が上村家を通過していったかわからない。中には長い旅の果てにここで亡くなる猫も多く、それはそれで吊ってきたのだという。

ぼくも社長もやはり猫が好きだ。

先ず天井に点検孔を開ける作業を開始。

社長が分電盤とブレーカーが落ちた配線の見当をつけ、リビングを対角線ではさんだ両隅に孔を開けることにした。きっちり正方形に天井板を切り取り、それぞれにアルミのフレームをつける。それで着脱可能な蓋ができあがる。社長がフレームをつけている間にぼくが天井を覗いて、漏電のチェックをすることになった。

社長の読み通り、穴から梁に沿って何本もの線がまとめられているのがみえた。

奥の穴から見えた場所からは台所、居間のダウンライト、洗面所へ別れていっている。調べてみると漏電箇所はない。それからぼくは息を殺してゆっくりと天井の子細を点検した。ネズミとかイタチとかに遭遇するのはこういう時なのだ。生きているものは逃げていく。そうでないものはうずくまったままにいる。

正面、左、右。異常なし。そして、もう一つの開口部へライトを回した。

ぼくが脚立から降りると、上村さんが目を大きく見開いてまっすぐにぼくの顔を見つめてきた。

。

「ありました」

蓋にアルミフレームをつけた社長がリビングの入口から入ってきた。

「どうやった」

「多分猫です。遺骨がありました。だけど線は綺麗です。まったく囓られていません。社長、漏電はそっちからの『分かれ』のどこかですよ」

「そうか」

「きっとクロちゃんやわ...」

猫のことを後回しにして、先に漏電の修理にかかった。もう一つの開口部から頭をつっこむとそこにも結線がまとめられていた。そこからは家の外壁についているコンセント、亡くなった旦那さんの書庫、トイレ、ガス湯沸かし器、風呂へと線が繋がっている。チェックすると、別れた先で漏電していた。

ぼくは古い線を切って新しい線を引く作業の用意を始めた。時間のかかる作業になる筈だった。

「ちょっと待って。外を確認してくる。これはたぶん…」

と、言い残し社長が家の外へ出て行った。

「やっぱりね」と、戻ってきた社長。

「上村さん、ガスの湯沸かし器が内部で漏電してます。いま、確認しますから」

湯沸かし器のコンセントを抜き、ブレーカーを入れる。

落ちなかった。

結局、湯沸かし器を明日交換することにして、上村家の電気はすべて復旧した。

「さてと猫ですね」

と、社長が言うと、上村さんが肯きながら応えた。

「たぶん『クロちゃん』で、よんでた猫やと思います。三年前に現れて…。ずいぶん歳をとって
いてねえ。大丈夫かなあと思てるうちに消えてしもて」

「ここを最後の場所にしたかったんですよ」

と、ぼくが応えた。

「ここならカラスにもやられない」

社長が肯きながら言う。

「それに下からは上村さんの声も聞こえてくるし…」

「ああそうやねえ。そうやねえ」

上村さんは目が融けてしまいそうな表情になっていた。

「だけど天井裏をお墓にするわけにはいかないし。庭に埋葬しようとおもいます。手伝ってくれ
ませんやろか」

「ええもちろん」

「花村、猫を頼む。俺はお墓つくるし」

「おおきにおおきに」

ぼくは黙って脚立を上った。短い箒で慎重に遺骨を引き寄せる。

それは見事なぐらい崩れずに「そのままの恰好」をしていて、天井板も汚れていなかった。上村さんからもらった真っ白いタオルで何重にもくるみ、下に降りる。

上村さんはそれをそっと抱きしめた。

椿の横が猫のお墓になった。

三人で手をあわせた。

上村さんの何度もの御礼に応え、社長とぼくは撤収した。

「もうすぐお彼岸やし、よかったやん」

「そうですね」

と、答えながら歩き始めると、狭い路地のまっすぐ先、夕映えから群青に変わろうとしていた西の上空に輝く一点の星がみえた。

...あ...

何故か声にならない声がぼくの喉にせり上がってきた。

「宵の明星やな」

立ち尽くしていたぼくの肩を社長がぽんっと叩いた。

(了)

三月のある朝。冷たい風がゆったりと路地を流れていた。葉子は、水のない「川」に体を包み込まれていくように感じながら、いつもの角掃きをしていた。

椿と木瓜の木が並んでいる澤田さんの庭のすぐ近く、日本画家宅の広い庭から、今朝もウグイスの声が聞こえる。自然に寄ってきたのではなく餌付けされたのだ。庭に集まる鳥はウグイスだけではない。メジロやヒヨドリ、雀なども集まっている。早朝であれば、鳴き声だけでなく、金木犀の垣根の上や桃の木の上にそんな鳥たちの姿が見え隠れしていた。

澤田さんは違う事情から、自分の庭で鳥の餌付けを始めていた。蜜柑を横に二つに切り、切った面を上にして木瓜の枝に突き刺している。その数、八つほど。

黒い枝、まだ赤い新芽、濃い緑の若葉、少し残っている桃色の花。そのなかの蜜柑色がひととき鮮やかに見えた。

澤田さんの狙いは「ひよ」対策。（澤田さんはヒヨドリのことを「ひよ」という。）自慢の椿、「舞鶴」と木瓜の花を「ひよ」が食い散らかすからだ。しかも、「ひよ」は蜜を吸いに来るメジロの群れをを蹴散らす。そのことに憤慨していた澤田さんに誰かが蜜柑の方法を教えたいのだ。

そうすれば「ひよ」は蜜柑に夢中になって花びらを食べないし、メジロにもそんなに悪さはしない、と。

そのことはすぐに路地の人たちの知るところとなり、みんなこの餌付けの行く末を見つめていたのだった。

今朝、葉子が木瓜の様子を見にいくと、いくつかの蜜柑がえぐられていた。鳥がついばんでいった証拠である。ひとつは完全に実が無くなっていて、皮が道に落ちていた。

...「ひよ」は、いるんやろか...

背が伸びないように剪定された木瓜は、細かな枝がびっしりと混み合っていた。見えにくくなった枝の間隙に一羽の鳥が止まっている。濃い青みがかった黒が枝の色に似ているせいか、まる

で「だまし絵」のように鳥がいた。

...「ひよ」やわ...

鳥の羽ばたく音が横から聞こえた。聚楽色の壁に沿って数羽の雀が垂直に何度も昇降を繰り返している。

「ひよ」は動かない。

おそらくこちらの存在に気がついているのだろう、と葉子は思う。しかし、「ひよ」は逃げようとはしない。ウグイスやメジロだったらあっというまに逃げているだろう。

「ひよ」がふいに体を震わせたと思うと、蜜柑の一切れにとりついた。くちばしをつっこんで実をついばんでいる。

...澤田さん、やったやん。餌付け、成功してる...

葉子がさらにヒヨドリの動きを観察していると、「『ひよ』やね」と背後から声をかけられた。澤田さんが慄然とした表情をして立っていた。

「餌付け、成功したみたいですね」

「うーん、どやろ。これで花を食べてくれへんかったらええねんけど」

と、澤田さんは心配そうだ。

「メジロがいつもね、五羽で来るん。それが怯えてしもうてねえ」

確かに他の鳥たちの姿は見えない。

「『ひよ』は、あつかましい鳥なんやわ」

澤田さんがそう言うと同時にヒヨドリが羽ばたいて去っていった。

その日の夜、葉子が亨にその話をすると、亨は大好きな庄野潤三の小説の文庫を数冊、本棚から持ってきた。

「庄野家では牛脂をやったり水盤に水をはったりして鳥を餌付けしてるんやけど、ヒヨドリが全部食べてしまったり、水を全部飲んでしまうって書いてはるんや」

「へえ、どの本」

「どこにでもでてくるよ。薔薇と鳥とハーモニカの話はいつもでてくる」

「ヒヨドリって嫌われてるんやね」

「うん。嫌われてる。可哀想に、卑しい鳥って書くんやもん」

「『鶉』か...。ふーん...。そやけど、こんな街の中にもたくさん鳥がいるっていうことが、私にはおもしろいの。『ひよ』でもなんでも」

「ほら、庄野さんが書いてる」※注1

「なんて」

「『ひよどりは、たちが悪い』って。だけど蜜柑を半分に切る方法は庄野家でもやってるよ。メジロに吸わせるためなんやて。と、いうことは、あの木瓜の木にはメジロも集まってきているはずだよ」

「ありゃ。それじゃ余計にいじめられてるかも」

それから数日、葉子はなんどもヒヨドリを見た。蜜柑は日々、減っていき、とうとう全部食べられてしまった。亨がいうようにメジロたちも「ひよ」の目を盗んで吸いに来てたのかもしれないけれど。

その朝、澤田さんは追加の蜜柑を枝に刺していなかった。ヒヨドリが現れていない木瓜の木を前にして、葉子は何か雰囲気が違うと感じた。うるさくはないのだが、視界の中がなにか賑やかなのだ。

目を凝らした。

「鈴木さんの椿」のなかにメジロが五羽隠れていた。名前を知らない黒い小さな鳥もいる。聚楽色の壁の向こうからウグイスの声がした。雀は相変わらずその壁の前で昇降を繰り返している。何かを通り過ぎた気がして横を見ると、朝日に輝く道の上を鳥の影が二つ、走っていく。見上げると鳩だ。その視線の先の屋根の上にはカラスが留まっている。

...鳥がいっぱい！

...あ、たぶん『ひよ』も戻ってくる。...

葉子は小走りに家に戻った。親戚が送ってくれた甘夏を思い出したのだ。横に二つに切った甘夏を持って木瓜の前に戻ると、澤田さんが心配そうに花を見ていた。

「蜜柑、切らしてしもうてねえ。あっ、いやあ甘夏やね」

「これ、枝に刺しましょう」

「すっぱいのん食べるやろか」

「鳥って味覚あるんですかね」

「どうなんやろ」

葉はずぶり、と大きな甘夏の半分を枝に突き刺した。木から離れると、いったいどこにいたのかすぐにヒヨドリが飛んできた。

「あらま。もう『ひよ』が来た」

「いやあ、早いなあ」

葉子は愉快だった。

木瓜の花やメジロたちの事を忘れていた。ためらいなく、くちばしを甘夏に突き立てる『ひよ』の姿が愉快だった。

澤田さんも苦笑いをしている。

木瓜の花が終わると、ヒヨドリはまたどこかへ飛んでいくのだろう。澤田さんは、もう蜜柑を枝に刺さなくなるかもしれない。

...ひよ、うちにくる？

葉子は心の中でちいさく呼びかけていた。

(了)

※注1 「せきれい」庄野潤三（文春文庫）

桜を持って



ゆるやかな朝風とたっぷりの光を浴びて、葉子と亨はベランダから通りを眺めていました。

ここ数日で季節は一気にすすみ、冬の残滓はすっかり消え失せていました。じりじりとすすんでいた桜の開花も八分からほぼ満開に。浮き立つような雰囲気街中に漂っています。

「あれはどこから持ってくるんやろ」と、葉子。

早朝の散歩をしている人たちに混じって、いっぱい花のついた桜の枝を持って歩いている人たちが、ぱらぱらといるのです。その人たちだけはトレーニングウェアではなく、白っぽい普通の服装をしてい、少し俯き加減に歩いています。目印のように桜の花がきらきら輝くので余計、目につきます。

「一人だけなら花泥棒、ともおもうけれど、結構沢山の人が持ってるし、そうやないみたい」
「波多野君が言ってたけれど、桜って枝を折ると、そこから腐りが入って枯れてしまうんやてね」

「うん。だから桜の枝を折るのは余計に悪質なんや。花屋さんで用意する枝つきの花は別やけどね」

「誰かがふるまってはるんやろか」

「『ふるまう』って...」

「例えば、桜の木が切られてしまうとか。で、最後の花をきはったひとにプレゼントするの」

「ははあ、誰かが接ぎ木や挿し木で増やしてくれるかもしれへんしね。そやけど、それやったらトレーニングスタイルで歩いてはる人も、みんな、もらうんとちゃう」

「そういえばそうやね」

葉子が首を傾げると、耳のうぶ毛が朝日に輝きました。亨の人差し指が反射的にのびて、これものに触れるように耳を撫でます。

葉子は首をすくめ、亨の懐に入って体をあずけました。亨はずっと耳を撫でています。

「柔らかいなあ、耳」

葉子は黙っています。

「笑ってる？」

亨は葉子の耳をそっと噛みました。

「ふふふ。さあ、ご飯にしましょ」

葉子が体をするりと反転させて、部屋へ戻ります。

一人残った亨は、まだ、ぱらぱらと続く桜を持った人たちの行く先を見つめていました。

みな同じ方向へ歩いています。合計したらたぶん十数人でしょう。

皆が歩いていく先は山の方向でした。

葉子と亨が並んで山沿いの桜並木の坂を歩いていきます。

夕刻。日が長くなり、亨が帰宅する頃も夕映えは残っていて、散歩しよう、と亨が提案したのでした。

歩いているのは公式には「きぬかけの路」といわれている道路で、金閣寺から始まり龍安寺、仁和寺、鳴滝から広沢の池、嵯峨野、大覚寺、嵐山と市の北西部の山沿いを横断していくので、多くの市民たちは「観光道路」とよんでいます。

信号や交差点が少ないので移動には便利で、亨の乗っているような営業車もよく利用する道です。もちろん観光客も。

朝、桜を持った人たちが向かっていたのは、この道が貫いている山の方向でした。亨が説明しながら歩きます。

「うちから見える道の行き先は龍安寺山か住吉山になるやん。たまたま今日は仕事が福王子のほうやったから、山沿いになるこの道を走ったんや。そしたらまだ桜を持って歩いている人が二人ほどいたねん」

「まだいたの」

「うん、ずいぶん若い子やった」

ふたりは東から歩いていきました。道は山裾にあわせて大きなカーブとアップダウンを繰り返

しています。衣笠山の裾から龍安寺山の裾に向かっていく坂道の下で、電柱が白く輝いているのがみえました。

「最初にあれが目に入ったんや」

二人は黙って歩いていきました。もうしゃべらなくても二人とも何が起きたのか思いだしていたので。

電柱の際に缶コーヒーと自動車の雑誌がおかれ、ガラス瓶にいろんな種類の花がさしてありました。もう一つの瓶には桜が数本さしてあります。

去年の春、夜中に交通事故がここであって、若い男の子が亡くなったのです。道に飛び出した酔っぱらいを避けて電柱に激突したのだ、と二人はあとで知りました。

聞いたことがないほどの沢山のサイレンが山から響いてきて、亨も葉子も、それこそ町内ほとんどの人が外に出たほどです。同乗の人が車体に足を挟まれたために、特殊車両がきたのと、ガソリンが流れ出し火災とスリップのおそれから道路は全面閉鎖されました。今、二人が歩いている山肌に赤いライトがいくつも、長い間、反射していました。「山火事か」という人もいたぐらいです。「信号が少ないし道も広いからスピードがでてしまうんや。山肌に沿ったカーブだから死角も多いし...」その時、亨がそうって唇を囁んでいたのを葉子は覚えています。

「もう一年たったんやね」

「早いね」

「桜が五本さしてある」

「このどこかにお墓があるんやろか」

亨が深い影に入り始めた山を見上げました。

山には各寺の墓地があり住吉山には市営墓地があります。観光道路とはいうものの、お寺は亡くなった人を供養する場所でもあります。この道はそういう場所を繋いだ道ともいえるのでした。

「朝、桜の枝を持っていた人たちも誰かのお墓に向かっていたんやろね」

「この人かもしれないし」

「違う人かもしれない」

「誰かが呼びかけて、桜を用意したんやね」

「きっとお花見が好きやった人だったんやわ」

電柱を離れ、二人は西へ向かって歩きます。夕陽を浴びた二人の影が長く伸び、そのなかに散った桜の花びらが吹き寄せられては白く沈みます。歩いても歩いても影の中に花びらが吹き込んでいきます。

「今度、雨降ったら桜、終わりやろね」

「晴れてよかったね、今日」

「うん」

風が少し強くなるたびに、影の中から花びらが舞い上がり、二人の背中に貼りつき、そしてまた影の中にはらはらと落ちていきます。追いつがるように、じゃれるように舞う花びらも、やがて二人の影から離れ、動かなくなるのです。

(了)



尚美には誰にも教えていない散歩道がありました。と、いっても「碁盤の目」といわれる京都の細い路のひとつです。いつか波多野と二人で歩こうとは思っています。それはもうすぐのことのような気もしてはいるのですが。

その道は尚美が毎朝、走る道にも組み込まれています。

尚美の住んでいるアパートの近所にある妙心寺の境内を北から南へ抜けます。そのまま南下し丸太町通りを越えます。このあたりから道は狭くなります。そのまま南下。道が三つに分かれているところで左折。そのまま東へ。西大路に出ます。ここで左折。西大路を北上し北野白梅町の交差点を左折。しばらく行って北の路地にはいると波多野のアパートがあります。その前を通過して自分の部屋に戻ります。

この街を四角に走るのが毎朝のコース。

このなかの「道が三つに分かれているところで左折。そのまま東へ。西大路に」というところが、尚美のいちばん好きな道の一部です。とても狭い道なのですが歩いていて、あるいは走っていて、あきらかに他の道と空気が違う、と感じる道でした。京都の「碁盤の目」から外れたような、隠されたような道のような気がして仕方がなかったのです。

尚美が愛媛からでてきて、京都の大学へ通うと決まったとき、落ち着いたら必ず会いに行きたい「仏さま」がありました。アパートも、尚美の脚力なら楽々と「仏さま」のいるお寺へ走っていけるところに借りたぐらいです。

それは太秦にある広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像でした。

高校生の時に写真を見ただけでひかれ、それがきっかけとなって天平・飛鳥の仏像にのめり込

んでいくことになった木像です。

京都で、とうとうひとたび「お目にかかって」から、尚美は「仏さま」という言い方しかできなくなりました。何度も何度もあいたい「仏さま」になったのです。

今では世界遺産としても登録され、多くの名刹を誇る京都ですが、桓武天皇が平安京を開いたとき、意外なことに寺はひとつもありませんでした。平城京の反省から、執政から宗教の影響を排除しようとしたからではないかといわれています。

その頃京都にはいくつかのお寺がありましたが、ほとんどが廃寺となりました。

例外のひとつが広隆寺です。このお寺は平安京以前からありました。場所は現在地ではありません。平安京造営のとき「碁盤の目」の外に出たわけです。

尚美が魅せられている道は、その広隆寺へ続く道でした。そのことを知って尚美は、なにか「縁」を感じました。何本かある道の中から自然とその道を選んで走り始めた自分、そしてその道が何か違うと感じた自分なのですから。そしてその道が広隆寺へ続く道だったのですから。

道の名前は「太子道」。太子とはすなわち聖徳太子です。

お寺の縁起には諸説あるのですが、広隆寺が配布している「しおり」には次のように記されています。

広隆寺は推古天皇十一年（603年）に建立された山城最古の寺院であり、聖徳太子建立の日本七大寺の一つである。この寺の名称は、古くは蜂岡寺、秦公寺、太秦寺などといわれたが、今日では一般に広隆寺と呼ばれている。

広隆寺の成立に就いて、日本書紀によると秦河勝（はたのかわかつ）が聖徳太子から仏像を賜り、それを御本尊として建立したとあり、その御本尊が現存する弥勒菩薩であることが廣隆寺資材交替実録帳を見ると明らかである。

（「広隆寺沿革」より）

ただし現在地ではない場所であったようです。しかし秦氏も、蜂岡寺（広隆寺）も平安京以前からこの京都にあったのだから、ひょっとしたら地名も一緒に移動した、とも考えられますが...。あの弥勒像と一緒に。

蜂岡寺がどこにあったのか、という考古学上の研究に、尚美は興味が持てません。重要なのは聖徳太子から賜った弥勒像であって、場所は二次的なもののおもえるのです。

いずれにしてもこの広隆寺のあるあたりは、都となる以前から秦氏の根拠地であったことは間違いありません。現在も「太秦（うずまさ）」という地名が残っています。そして秦氏の子孫たちは現在も京都に住んでいます。「秦」「波多野」などの名で。

なので、尚美がキャンパスで波多野から声をかけられたとき、その美貌に息を呑んだのと同じくらい驚いたのが「波多野」という名前だったのでした。

尚美は今、市バスに乗っています。

わざわざ街のまん中までバスで行き、そこから太子道を西へ向かって歩くのです。月に一度は歩く長い道のりです。大抵の人は「酔狂な」というだろう、と尚美は思っていました。親しくしている葉子と亨も。そして波多野でさえ。

秘密にしているのはそのせいでもあります。そのために現実には引き戻されるのを拒む気持ちがありました。

尚美はこの道の存在を知ってすぐに、歩きたいと望みました。古の人たちと同じように、と。しかし、だからといって尚美は熱心な太子信仰者ではありません。ただただ弥勒像を求める心が自分を突き動かしていると感じ、自分と同じような人たちがまたこの道を歩いたことだろうと確信したのです。「倅いたい」「付き随いたい」そんな気持ちがありました。

千本通りの出世稻荷前で下車。目の前に細い道が西へ向かっています。いろいろ調べた結果、いちばんわかりやすい始点はここだったのでした。

まったく観光とも商業地域とも無縁の道です。道は狭く、微妙にうねっています。それが直線的な「碁盤の目」の道とは違います。建物も空気も「艶が消されている」という印象。道までもが老いているというべきでしょうか。古からの道が先ずあり、そして家々があとから貼り付くようにできたのだらうと、尚美は考えます。

尚美はまっすぐな姿勢で西へ向かって歩いていきます。心の中に、かつて太子信仰を持った数え切れない人がこの道を歩いた、というイメージを描きます。出発地点の千本通りはかつて平安京の中心、朱雀大路でした。太子道はまるで街の中心から「へその緒」のように西へと続いていくのです。

旧い道です。市街地には「太子道」というバス停もあり、その標識のついたまっすぐな「太子道」もあります。しかしそれは新しく整備された広い道で、その10メートルほど北を、微妙

にゆらゆらしながら進んでいるのが、古来よりの太子道なのです。舗装されているのですが、この道の上だけ時間の流れが止まっている...あるいは「違う流れ方」をしているように尚美は感じています。

どんなに太陽が輝いていても、どこかしら「陰」を感じさせる道。光がしみ込んでいくような道。光の棘がすべて刈り取られたような道...

しかも道端には不思議な地蔵の祠が突然現れたりするので。

尚美は夢を見ているような気持ちになることがあります。道に酔っているのかもしれない、と思うときもあります。あまりに強くイメージを描くせいだと思うのですが、自分のその状態が嫌いではありません。現実感が薄れるぶん、何かが現れてくる、いやすでに現れているような気になるのです。多くの人が信仰のために千年以上歩いた道ですもの、とその気持ちを受け入れて歩きます。

風が吹いていて北には緑の塊の双ヶ岡や仁和寺の裏山がみえています。

西へ、西へ。

何かと一緒に歩いてくれています。

西へ....

路はしだいに細くなって、やがて行き止まり。天神川を渡ってすぐに広隆寺です。ここで左へ曲がり新しい太子道へ。車が行き交い、途端に賑やかになります。もうぼんやりとして歩いてられません。

川を渡り再び住宅街を少し歩くと、三条通に合流。路面を電車が走っています。右手に南大門が見えてきました。広隆寺です。

門さえくぐれば静寂に満ちた空間に浸れます。尚美は急ぎ足で進みました。

日常と違う空気のなかに入っていきます。目の前には塵一つ無い石畳みが続いていました。

尚美はまっすぐに進みます。彼女の「仏さま」である弥勒像までもうすぐ。

歩くほどに静寂が深まるお寺なのでした。

石畳の上に人影がひとつ、揺れています。

石畳のずっと先で波多野が微笑んで立っていました。彼の向こうには車止めと満開の白と紅のツツジが見えていて、その奥まで石畳は続いているのでした。風が一瞬強くなり、ざあっと葉の擦れる音が流れていきました。尚美は視線をあげてくるりと周囲を見渡します。さまざまな木々の、様々な色調の緑が重なって揺れていて、境内の空気を解しているようです。風が寺の東隣にあるのであろう保育園から子供の声を拾って、尚美の耳まで運んできます。それも止むと、低い風の音だけが境内を流れているのでした。

尚美は波多野のほうへ、講堂や本殿にも眼をくれずに、まっすぐに彼に向かって歩いていきま

した。

二人で広隆寺にいこう、といだしたのは波多野です。たまにはお寺を歩くのもいいんじゃないかな、連休中であそこなら静かだろうし、と。もちろん尚美が弥勒菩薩像が大好きであることを波多野は知っていたのですが、自分も久しぶりに「お会いしたくなった」のでした。

「ひょっとして歩いてきたん？」

会うなり波多野は尚美の顔を覗き込んでいます。

「わかる」

「そういう顔してる」

尚美は黙って肯きました。けど、西大路から歩いてきたことは黙っています。

「マサルさんは」

「ぼくは嵐電（※注）」

二人は参拝の受付を済ませると、車止めを越えて奥へ歩いていきます。石畳の突き当たりを左へ行けば聖徳太子が楓野別宮とした八角円堂の桂宮院本堂。右手に行けば弥勒菩薩をはじめとする多くの仏像が安置されている霊宝殿です。

波多野は尚美の左手をそっと握り霊宝殿に進みます。

二人で来るのは初めてですが、尚美だけでなく波多野も何度も弥勒菩薩に「会いに」来ているようでした。まして、山深いところとはいえ京都出身の彼ですし、秦氏の末裔でもあるのなら、いろんな事を知っているのかも知れない、と尚美は思うのです。けど尚美の心は「仏さま」だけに向かって走り始めていました。

波多野は藍色のシャツを着ていました。お寺の人たちが境内に散らばって静かに掃除をしているのですが、その人たちも、先程受付にいたご婦人たちも、みな同じ藍色の作務衣をアレンジしたような上着を着ています。胸には白い小さい字で「広隆寺」とステッチが入っています。示し合わせたわけではないのですが、尚美には波多野がまるで同じ「所属」の人のように見えてくるのでした。

その人たちの念入りな掃除で境内には塵一つ落ちていません。満開のツツジの花殻ひとつ落ちていません。石畳に砂粒の一つも落ちていないのです。尚美は歩きながらそのことに感嘆するものでした。

「見事な境内やね」

そんな気持ちを見透かしたように波多野が言います。

「ほんま、清々しい。無駄なものはなんにもないし、これだけ綺麗なところってないような気がする」

階段を数段上がると霊宝殿です。簡素なつくりで、弥勒菩薩半跏思惟像、十二神将像、泣き弥勒、秦河勝夫妻像、少年聖徳太子像など天平から藤原、鎌倉時代までの仏像がずらりと並んでいます。弥勒菩薩半跏思惟像など、国宝第一号であり、千年以上昔のものであるにもかかわらず、他の仏像同様、ガラスケースには入らず観覧者と対面できるようになっています。

照明はかなり押さえてあり、尚美はうすあかりの中の仏像たちから発せられる、いいしれぬアウラが館内に満ちているように感じるのです。声を出すことさえ憚られるようです。

二人は中央の弥勒像の前で立ち止まり、じっと見入りました。

照度が低いので古からの傷みは隠され、ぼんやりとした輪郭全体からやわらかな気が流れてくるようです。

毎日毎日この像の前に立っていたらどんな精神が出来上がるのだろう、ふと尚美は思いました。砂粒一つ落ちていない石畳が脳裏に浮かんでいきます。

二人は正面から、左右から、たっぴりと弥勒像を眺めました。瘦身の小さな弥勒さまです。だけれど尚美は、その肌からまるで生きているような「はり」を感じます。無駄な装飾は一切無く、研ぎ澄まされた美しさそのものの存在が、そっと置かれているようにも。

尚美はそっと手をあわせて、弥勒菩薩半跏思惟像の前からゆっくり歩き始めました。隣には通称「泣き弥勒」が少し後ろにひかえています。聖徳太子が亡くなったのち、その死を悼んで新羅から送られたという弥勒像です。半跏思惟像よりも一回り小さいうえに、影に入っているため、まるで哀しみが黒く凝ってしまったように見えます。

出口近くに「御火焚きのご案内」と書かれていて、護摩木とサインペンが小さな机の上に積まれていました。もう多くの方が護摩木の短冊に自らの願いを書いて傍らの台に納めています。一本二百円。今まで尚美は書いたことがありませんでした。

尚美がぼんやり見ていると波多野が慣れた様子で机の前に立つと、さらさらと願い事を書いて二百円をととても小さな箱にいれました。護摩木は剥き出しになっているので、他人の願い事が読めてしまいます。

みんなが健康でありますように 波多野勝 二十歳

尚美はなぜだか愉快的な気持ちになって、つられるように書いていました。

尚美は書いてから、なんて「おばさんくさい」んだろ、思いましたが、もう消すことはできません。（なんだか酔っているみたい）それに悪い願いごとじゃないし、と気を取り直して納めました。

外へ出ると五月の光が緑色に染まっています。波多野がまちかねたようにしゃべり始めました。

「京都ではね11月に『御火焚き』が各神社で行われるんよ。ほとんど各町内が関係してるんとかうかな。で、さっきみたいに願い事を書いた護摩木を奉納しておく、それを燃やして祈禱してくれはるん。そしてめいめいが紅白饅頭をもろうて家に帰るんや」

「あれ、ここはお寺でしょ」

「ここは特別。聖徳太子のお寺だから。それに真言宗は護摩法要をするからね」

「ねえねえ勝さん、このお寺は聖徳太子のお寺でしょ。なんで空海なの」

「うん。このお寺は何度も荒れ果てたこともあるし、何度か燃え落ちたこともある。で、燃え落ちた寺を再興したのが道昌というお坊さんなんやけど、この人は秦氏出身で空海の弟子やったん。そやからこのお寺は真言宗のお寺なんや」

「秦氏のお寺でもあったのよね」

「そう」

「ねえ勝さんも『波多野』でしょ。末裔になったりするわけ」

「たぶん関係はあると思う。親父もそんなことゆうてたし。そやけど波多野とか秦なんて名前はいくらでもいるし、まあそんなに珍しいものでもないんと違うかなあ」

「はあ」

「渡来人の末裔は奈良や京都、いや日本中にたくさんいはると思うよ。それに秦氏が根拠地にしたのは京都だけじゃないし...静岡とか」

「この御火焚きで亨さんところにも、おうたことがあるんや」

「葉子さんも？」

「うん、亨さんのお父さんと一緒に来てたん。各神社がそれぞれの職種の神様になっていて、例えば新日吉神社は金物の神様やし、広隆寺は建築や建具職人や機織りの神様なんや。亨さんのお父さんは建具職人だから」

「建築や建具職人の神様って...聖徳太子が」

「そう。職人さんたちの祖神。そんなこともあって京都の人はここのことを『お太子さん』っていうんや」

「空海は『お大師さん』だから間違えそう」

「うん『おだいしさん』と『おたいしさん』やね」

「さっきの護摩木、職人さんとかじゃなくて一般の人たちでもいいの？」

「ああ、もちろんもちろん」

さて、数日前の朝のことです。

波多野はいつものように珈琲を持って窓辺に立ち、走り抜けていく尚美を待ちながら外を眺めていました。そしてがらんとした空間になってしまった堀河天皇火葬塚を目の前にしていたのですが、あの赤松が気になって仕方がありませんでした。自分の目の前で伐採されていった、樹齢百年を超える巨木です。

あの木はどうなったのだろう。適当な大きさに切り分けられ処理されてしまったのか、それとも…。

堀河天皇の火葬塚をその枝だけで覆い続けた巨木。誰もが息を呑むような「力」がありました。かりに火葬塚でなくともあの偉容こそ「霊木」にふさわしいのではないだろうか、と思うのです。と、同時に自分の脳裏に浮かんだ「霊木」という言葉の出所がぼんやりと思い出されもします。

誰かが樹木に霊力を感じてくれれば、いや別にそうでなくてもかまわない、どこに植わっていたかという木の来歴に畏れを感じてくれてもいい、あの木が燃やされずに何かになってくれれば、と思うのでした。例えば家の梁でもいいし、あるいは何か彫像でもいい。例えば…。その時「霊木」という言葉を広隆寺にかんする資料で見つけたことを思い出したのでした。

「その時、ここの弥勒菩薩がそうだったと、気がついたんや」

「あの『仏さま』が」

「そう。あれは赤松の一刀彫なんだ」

「一本の赤松からできてるの」

「そう。少し前屈みなのは木が曲がっていたから、という説もある」

「で、気になりだしたわけ？」

「うん、尚美も天平や飛鳥の仏像って行ってたし」

「お会いしてどうでした。久しぶりなんでしょ」

「やっぱり木像って静かに息をしているね。雰囲気だけじゃなくて木は伐採された後も呼吸して

いるわけやから。ほら水分の出し入れみたいにさ。だから『生きてる』」

「千年以上」

「うん」

そう言いきられると納得してしまう尚美です。

「アパートの前の赤松も誰かが彫っているかもね」

「そうだといいんやけど...そういえば聖徳太子は霊木を見分ける力があつたんやて。だからそれを使って六角堂を造らせたりしたんだよ」

「六角堂って『六角通り』（注2）の六角のこと？。あれも太子ゆかりなの」

「ここの奥の桂宮院本堂は八角形の円堂だし、法隆寺の夢殿もそうやね」

「ふふ。なんだか多角形が好きなのね。建築関係の祖神っていうのもなんだか納得」

だけどそれ以上に尚美は建物ではなく弥勒菩薩を思いました。誰かが霊木を授かり、一心不乱にあの像を彫り上げたのでしょ。たぶんずっとマントラ（真言）を唱え続けながら。

二人はゆっくりと境内を歩くことにしました。

「弥勒菩薩もあの大きさに木像だから助かったんだろうね」

波多野が石畳を見つめながら呟きます。

「そうでなかったらとっくに灰になってる」

「何度も火事に遭ってるのね」

尚美はそのたびに多くの仏像を抱えて運び出す人々を想像してみました。それは秦氏の子孫達であったのかもしれませんが。そしてみんな藍色の服を着ていたのかも...

波多野のシャツの裾をぐっと引っ張りからだを寄せる尚美でした。

（了）

（注1）嵐電...「らんでん」と読む。京都・四条大宮と嵐山を結ぶ京福電鉄の愛称。北野白梅町から帷子ノ辻を結ぶ北野線もあり、波多野はこれに乗った。なお神奈川県「江ノ電」とはゆるやかな提携関係にある。車両も、雰囲気もよく似ている。

（注2）六角堂...京都市中京区六角通東洞院西入にある聖徳太子ゆかりのお堂。「六角通り」はここからきている。



日曜日、葉子と亨はテーブルを挟んですわり、朝食後の珈琲を飲んでいます。

「ねえ亨さん、今年はツバメが多いと思わへん？」

「あ...そういえばそうやね」

「ね。うちの周りをたくさん飛び回っているもの」

「例の『甘夏作戦』は関係あれへんよね。ツバメが食べるのは虫やし」

「うん。そういえば去年、万年筆屋さんのシェードの下に巣を作ってたでしょ。結構大変だったんだって。虫を追いかけて体にぶつかってくるんだって」

「ひなが待ってるし、一生懸命なんやね。だけど速いからなあ...けっこう怖いかも」

「おばさん、大変なんやからっていいながら楽しそうなん。今年もけえへんかなあ、って」

「来るよ、きっと。必ず来るよ」

さわやかな好天になるでしょう、とラジオから天気予報が聞こえてきます。花村家では朝から窓を開け放っていました。通りからは薔薇の香りが流れてきます。

「薔薇、さすがにいい香りしてる」

「こんな香り、今年、初めてとちがう？」

「うん、大宅さんが去年の春に香の強い新苗を植えはって、で、花を咲かせないで一年間じっくり育てるから来年期待してて、ていうてはったん。たぶんそれやわ」

「ここまでこれだけ薫ってくるんやから、家の前はすごいやろね」

「さて、と」

葉子はそう言うとキッチンにむかい、山藨（やまぶき）が水に浸けられている大きなボールをテーブルの上に持ってきました。昨日、福知山に住んでいる友人から送られてきたものです。何か収穫があると、こうして宅急便で送ってくるのです。今年も山菜が届いたのですが、山藨がいつになくたくさん入っていたのでした。

「友人」は六十代の男性。かつて、ふたりの呑み友達でした。突然農業をする、といって京都から福知山へ移住して五年が過ぎています。

「たくさん山蕨をいただいたので『きゃらぶき』をつくります。『わたしんち』のやり方です
からちょっと面倒なの。亨さん手伝ってね」

「うんわかった。なにしたらええのん」

「もうさっと湯がいて水にさらしてるから、あとは皮むき」

「こ、これ全部！」

「そう。2キロはあるかなあ」

「げええ。日が暮れちゃうよ。これは人を呼ばなあかんよ」

「ふむ、やっぱりそうか...ということは...あのふたり？」

亨は携帯を耳に当てています。

「あ、もしもし花村やけど。...うん、おはようさん...あのさ、ヤマブキの皮むき手伝ってくれると嬉しんやけど...うん、うん...いや『山吹』やおて『山蕨』...うんうん...いや黄色い花の山吹と違（ちご）て、山の蕨。わかる？あれ！て、おまえ山育ちやんか。人をもて遊んだらあかん。...うんうん、みんなで昼ご飯でどう...うん。ありがと。あ、それと人が多い方がええんやけど...うんうん、じゃ、ね」

およそ十分後に波多野が、十五分後に尚美が花村家にやってきました。早速キッチンのテーブルにつき、皮剥きに加わります。葉子が剥き方を説明します。

「茎の端から爪を立てて、上から三分の一ぐらいのところまで薄皮を剥いていくの。そう、四分
割ぐらいで。で、ぐるりが剥けたら、その端を束にして一気に下に引き下ろすと綺麗に剥ける
から」

「『きゃらぶき』って、どんな...」と尚美。

「『きゃらぶき』って蕨の佃煮みたいなものなの。うちは本来のやり方どおりに皮を剥くんだ
けど、今は剥いていないのが多いと思う。だけど感触が全然違うの。炊いたら食べてみてね」

「はい。...だけど多いですねえ」

「2キロもあんねん」亨が口を挟みます。

「時間を決めましょ。二時間でやります！！」

「はっ、隊長」と、亨。

四人は世間話をしながら皮剥きを続けます。亨が波多野に見しゃべりかけました。

「そういえば、ネットの歌姫、最近聴いてるの」

「最近更新ありましたよ。『グッナイ・アイリーン』いいです」

「それトーコさんのこと？わ、聴こ聴こ」

葉子がノートパソコンを小机ごとテーブルの横に運んできてYouTubeにアクセス。すぐに歌声が流れ出しました。

「優しい声」と尚美がぼつり。

「わたしも好き」と葉子。

男ふたりは黙々と皮を剥きながら聴いています。

「お、底が見えた」

二時間近く皮むきを続け、ボールの落が減り、アルミバットに皮が山盛りになりました。亨の嬉しそうな声に全員が反応します。

「こうなったら速いよね」

その言葉どおり四人のピッチは速くなり、始めてから二時間にならないうちにすべての皮むきを終了。葉子が即座に炊き込みにかかりました。

大きな鍋に昆布だしをはり、そこに落を入れ、醤油をどほどほど入れ炊いていきます。

「落の佃煮だと実山椒もいれるんやけど、『きゃらぶき』はいれへんの。シンプルでしょ」

「わあ楽しみです」

亨と波多野は珈琲を淹れる用意をしています。

「葉子さん、一時間ぐらいだよね」

「うん」

「コーヒーでも飲んでゆっくりしててよ。お昼はどこかに食べにいかうか」

「天気がいいですからね。ほんとに爽やかだし、ちょっと歩いてもいいですよ」

「いいわねえ。出来上がるまで待っててね」

葉子を台所に残し、三人は居間の絨毯の上に腰を下ろし、珈琲を飲んでいきます。

「いい風やなあ」

「暑くもなく寒くもなくからっとしてて…。こんな日は一年にそんなにたくさんないですよ」

「ほんまになあ…映画やったらここで三人とも、うたた寝をしてしまうんや」

「ありそう」

「で、クスノキの葉音だけが聞こえてきて…」

「ほんとに眠たくなっちゃう」

尚美は広隆寺のことを亨に訊いてみました。

「こないだ勝さんといってきたんです。御火焚きの護摩木、納めてきました」

「あ、そうなん。じゃあ11月に一緒にいかうか。えっと22日は何曜日やろ」

「日は決まってるんですか」

「うん、毎年一緒」

11月22日は月曜日だったので、亨はその日の仕事の予定をはずすようにカレンダーに書き込みます。

「あの日は境内も混み合うよ。普段はとても静かなお寺だけどね」

「ええとても静かでした。それに清潔で」

亨のCDコレクションをマサルが見ています。

「何か聴く」

「これいいですね。カーティス・フラワー」

「村上春樹の本がでるまで手に入りにくかったんだよ。でた途端にオリジナルジャケット仕様のCDが再発されたんや」

「リクエストが多かったんでしょうね」

「なんて曲ですか」と、尚美。

「Five Spot Afterdark」

「アフターダーク」

「そう」

「そういえば今月末に新刊でますよね。読みます？」

「もちろん。ぼくより葉子が大好きなんだ。おまえは」

「読みますよ。でも図書館かな」

「だったらうちの貸してやるよ。人気があるから図書館やったらなかなか廻ってこないんじゃないかな」

「ありがとうございます」

「じゃあ私はその次に…」

「いいよ。いいよね葉子さん」

「いいいわよお」

葉子がそう言いながら水飴をスプーンで掬いながら答えます。

「え、水飴いれんの」

「うん、最後の味付け。まるやかになるの」

葉子がそう言った二十分後に「きゃらぶき」は炊きあがり、少ししてカーティス・フラワーのトロンボーンも鳴り終わりました。

「さあできたわよ。味見して」

全員が小皿にとって口に運びます。

「あ、やわらかい」

「うん、やわらかい」

「ほんと、やわらかい」

「でしょ」

四人で皮を剥いた成果がはっきりと出ていました。

もうすぐ昼ご飯の時間です。行き先を決めずに四人は外にでました。少し強いぐらいの風が吹いています。

大宅さんの家の前に来ると薔薇が強い香を放っていました。その横でインゲンがするすると伸び、ツルが支柱を越えて、宙でくるくると踊っています。

「豆のおいしい季節よねえ」と、葉子。

「ソラマメゴハンつくろうかな」

「じゃあ、晩ご飯それにしよう。ぼくがつくるよ」

亨が風に顔を上げて言いました。

「手伝いますよ」と、波多野。

「『きゃらぶき』にあいますよね」

尚美がそう言うと、みんなが肯くのでした。

四人は風の吹いてくる先へ歩いていきます。

...お昼はサンドウィッチかな...葉子はそんな気分をみんなに言おうとしていました。

(了)

硝子ごしには見えないほどの小糠雨が、音もなく降る朝でした。

そして、いつもなら濡れた舗道を流れていく傘たちの姿もまったくありません。

京都で、新型インフルエンザの感染者が確認され、波多野と尚美の通う大学も五日間の休校となっていたからです。

中京区では小学生が、下京区では専門学校生が確認され、両区では小中学校と幼稚園、市立芸大までが休校となりました。

むろん、感染者が確認されていない街全体に感染への恐怖が「伝染」し、観光客はもちろん、道行く市民の数も少なくなっていたのです。

亨がマスクをして仕事に出かけたあと、葉子は窓を開け放ち、静かな街の空気を部屋に取り込んでいました。

マスクはどの薬局でも売り切れになり、当分手に入らないようです。亨が仕事に使うマスクの予備があったのですが、葉子はそれを使いませんでした。

亨の予備のものは、他者との接触が多く様々な場所に出て行かざるをえない亨のためにとっておかなくては、と考えていましたし、そもそもマスクは花粉症や風邪など、必要な人のためにあるのであって健康な人がするものではない、と葉子は考えていたからです。いつもの八百屋での会話でも、話題はインフルエンザのことばかり。

「お嫁さんが入院している産婦人科でマスクが不足してるんよ」と、お婆さんが眼に焦りの色を浮かべていていたので、葉子のその考えはますます強固になっていました。病気にいちばん弱いのは幼児、妊婦、そしてお年寄りなんやもの、と。

また「インターネットをチェックしてたらね」という主婦からは、とても簡単なキッチンペーパーと輪ゴムによるマスク作りのことを聴きました。ある医師がホームページ上で公開しているそうです。「私もつくってん。一分でできるし効果は市販のものとはほとんど変わらへんねんて」と。

そんなこともあり、感冒が弱毒性ということもあって、葉子は病気に対してすっかり落ち着いて

いました。もちろん人混みに行かないことと手洗いをマメにすることは守っていましたが。

雨がさらに細かくなって、降っているのか止んでいるのかわからないほどになり、やがてひんやりとした風が吹き始めました。

ちょうど葉子は朝食の後かたづけをすませ、部屋の掃除も終え、お茶の用意をしているところでした。湯気を払うようにはいつてきた風に楠の香りが乗っています。葉子は流れてきた楠の香りが嫌いではありません。清潔な香だと感じていました。

葉子が思わず外に目を凝らすと、まだ曇ってはいるものの。外がうす明るくなったような気がします。雨はどうやら止んだようでした。

お茶をいれ、テーブルに腰掛けひとりで飲みながら、意識して息を吐きます。いつもの朝の一区切り。人も車もほとんど通らないので、普段耳に届かない音が微かに聞こえてきます。音の発生源はもちろん見えません。

例えば電車の音。二百メートル程南の嵐電の音は早朝なら聞こえますが、普段、日が高くなり出すとほとんど聞こえないのです。今日はそれが聞こえるばかりか、さらにその音よりも低く、くぐもったレールを打つ音が聞こえてきます。もっと南の、二キロ以上離れているJR山陰線をゆく電車の音です。普段はまったく聞こえない機関車の警笛が時折、届きます。

ぴいー。

高校や大学のざわめきや校内放送がまったく聞こえなくなった代わりに鳥たちの声がずっとたくさんいつになく澄んで聞こえてきます。

ちゆるきゆるちゆるきゆる

ウグイスが渡っていく声も聞こえてきます。

ふいに葉子は散歩に出かけたくなりました。外の空気がとても爽やかそうに思えたのです。

葉子の足は自然とお寺の楠へ向かっていました。

深紅のゼラニウムの花が、すっかり艶の消えた長い黒板塀の前でいくつもの鉢に満開に咲いていました。まるで浮かんでいるようです。

背の低い石垣の続く道沿いには、やはり満開のサツキが桃色の玉のように続いていきます。

葉子の目は鮮やかな色たちに喜んでいました。

やがて、前方から道いっぱい広がって四人の老婆達がやって来ました。みんな、まっ白なガーゼのシャツと灰色のスカートを来ています。風でシャツの袖がふわりと膨らみました。みな手には小さな竹籠を持っていました。中には山で摘んできたらしい山菜や野花が入っているのが覗けて見えます。

...何故雨に濡れてないんやろう...

老婆達は、あるいは雨が止むのを待っていたのかもしれませんが。しかし手を繋いで並んで歩く姿は、そんな「想像」を飛び越えた姿に見えました。まるでこの世ならぬもののような気を、葉子は感じるのです。

...靴も汚れていないし...

老婆達は微笑んだ顔のまま、すれ違っていきました。

もう葉子の眼には楠の林冠が映っていましたから、老婆達を振り返らずにそのまま進みました。楠の高さは10メートルほど。お寺の鐘楼の周囲はその楠やケヤキ、ナラなどの小さな林になっています。近づくほどに葉子はそれらの木々の若葉の香りをさらに強く感じるのです。

楠の下で木を仰ぎ見ると、枝が黄緑にもやって見えます。楠の小さな花が満開になっていました。とても高いところに枝が張っているので、葉子には黄緑の「ぼんぼんり」が枝先にでき、それが幾重にも重なっているように見えます。長く伸びて複雑に絡みあう枝は空に伸びた血管のようにも思えます。目には見えない空の力を地に吸い寄せているように。その楠の吐き出す息。若葉から揮発する香。葉子はとても気持ちがよくなりました。

ぴいー。

電気機関車の短い警笛が聞こえます。ここまで届くんだと感心して空を仰ぐと、どうも方向が違います。

ぴっ、ぴっ、ぴっ

連続した短い警笛は、方丈の向こう、お寺の裏を少し上ったところ、そこには大学があるので、そのキャンパスのさらに上手にある山から聞こえてきました。

...山から機関車が下りて来るみたい...

おもしろくなってきた葉子は耳を澄ましながら、山のほうへと歩いていきました。なんの音かはわからないけれど街の音が山に反射して降りてきます。風もまた山から吹き降りてくるのです。それでも楠の香りはまだ漂っていました。

お寺を抜けると、人のいない大学キャンパスの端にも楠の大木が五本並んでいまるのをみつけました。それを横目に山へ向かいます。山を見あげました。黄緑のぼんぼんりが山の中に浮かんで見えます。

シャツの袖が風を受けて膨らんでいます。

流れのなかを葉子は歩いているのです。

(了)



六月に入った途端、梅雨を思わせる連日の雨が続いています。

花村家恒例の月曜朝食会がおわり、尚美は亨の運転するホンダのミニバンに乗って、堺町押小路にある花村工房へ向かっていました。つい先程、ミスタードーナツの前で勝が降りました。

勝は（波多野は最近、マサルとかマサル君とかマサルさん呼ばれています。）、約束どおりに亨から村上春樹の「1Q84」を借りることが出来たので、集中して読むべくドーナツと、それからコンビニで茶葉二倍のミルクティーを買い込み、部屋にこもるつもりです。

「じゃあ」

傘をさし、本の入った鞆を抱えた勝の背中が車から離れていきました。

本は葉子が先に読了していました。亨はまだ読んでいません。勝がその理由を聴くと、「何十万部も売れてる本には、どうしても退いてしまうんや」とのこと。世間が静かになってから読むんや、と。

「ノルウェイの森」の時もそうしたそうです。

「おまえが先に読めよ、その次、尚美さんで、俺はその後でええし」

「いいんですかほんとに。ありがとうございます」

そう言いながら勝は隣の部屋の、壁一面を覆い尽くしている本棚に目をやりました。村上春樹は全部揃っています。

「葉子さん、どうでした」

「うーん、村上ワールドやねえ。『美しい耳の女の子』が久しぶりにでてきたよ」

「あ、『羊をめぐる冒険』」

「そうそう。それでねえ...」

「はいっ、そこまでっ。おれ、まだ読んでないんやから、その先いわんといて」と、亨。

「いわんといて」と、尚美が口まねをしました。

「はあーい」

葉子は、四人がかりで後かたづけをしたおかげで（狭いキッチンなのでかえって混乱しそう

になったけれど)、早くに手が空きました。そこでベランダに出て、昨日、大宅さんからもらった鉢の「検討」をすることに。

鉢に植えられているのは肉厚のぼてっとした葉をいっぱいに繁らせた「月下美人」。高さは1メートルを超えていて、ぎゅうぎゅうに混み合った葉は、ただただ暑苦しく、さらにその隙間から細く鋭いサーベルのようなシュートがまっすぐに突き抜けてもいました。葉子のアタマに浮かぶのは「混沌」という二文字。

けども、この「緑の混沌」からあの夜の宝石のような花が生まれるのです。それはわかっているのだけれど、この滅茶苦茶な「立ち姿」をどうしたものか…。

葉子は意を決し、腕組みを解いて月下美人にとりついた。細かく株の状況を点検していきました。

「あなたに是非『月下美人』をさし上げたいの」

と、家の前で歯医者に行く途中の大宅さんにいわれたのが昨日のお昼過ぎでした。「月下美人」は六月から夏にかけて、夜中に美しい花を咲かせるサボテンに似た植物です。まだ「月下美人」を見たことがない葉子は、少しくうきしながら夕方、大宅家に赴いたのでした。大宅家の裏に通されると、そこには株分けされた月下美人がウッドデッキいっぱいに広がってしまし。葉子は「緑の海」に圧倒され、一瞬、言葉を失いました。早いものはもう花芽が伸び出しています。

大宅さんは「あなたで三代目なのよ」と、まるで後継者に何かを託すようなものの言い方をします。隣町の鈴木さんの家にあったものが株分けされて大宅さんの家へゆき、そこで花を咲かせ、さらにその株分けが花村家にやってくるようです。

葉子は、…私が「グリーン・サム」(注)と見込んでの申し出かしら…と、少しい気になりました。けれど、のたくったワカメでいっぱいになったようなウッドデッキを見ていると、ひょっとしてこれは正直言ってもうスペースがないからでは、と半ば茫然としながら感じていました。と、まるでその気持ちを察したかのように大宅さんがぺこりとアタマをさげるのです。

「ね、わかるでしょ。おたすけくださいませ」

大宅さんがべろりと舌を出しました。

そうして「月下美人」を一株、鉢ごといただきました。何とか家のなかに運び込み、置き場所はベランダに。ところが帰宅した亨が鉢を見るなり「バランス、悪すぎ」といったように、夕食の最中に風に煽られてひっくりがえりました。なんとか洗濯機にもたれかからせて一晩を過ごしたのです。

手もとには大宅さんから借りた「クジャクサボテン・月下美人」と表紙に書かれた小冊子があります。それも一応目を通したけれど、とにかく株を立て直さなければ。

鉢からは三本の莖が立ち上がっていて、そこからいっぱい肉厚の葉が広がっています。それ

を無理矢理まん中に集めて、荷造り紐で結わえてありました。

...これはほんとに手に負えなかったんやわ...

葉子は家にある朝顔用の支柱を鉢にぶすりぶすりと刺し、茎の一本ずつに沿わせて結束をやり直しました。それでもすぐにでもひっくり返りそうです。

...鉢を替えなきゃ駄目かしら...

しかし鉢替えをするには今使っている土と同じものにするのが原則です。鉢の土はやたらと水はけのいい、荒い土です。根まで土を解しとり、まったく違う土にしようかと思いましたが、巨大な株を見ると気がひけます。

...えらいものをもらってもうたなあ...

もう一度腕組みをする葉子の目は一つだけですが花芽を見つけました。

...とりあえずその芽が咲くまで、この態勢でいってみよう...

心が決まりました。葉子は小冊子を開き水遣りと肥料のことをアタマにたたき込みます。

亨と尚美の乗ったホンダのミニバンは烏丸通りを南下していました。カーステからは古いブルースが流れています。ミシシッピ・ジョン・ハート、と亨が説明してくれました。尚美はこういう音楽はあまり聴いたことがないのですが、

「なんだか気持ちのいいギターのピッキング。へえ、ブルースってこういうのもあるんですね。なんだか、からっとしてる」

と、言うときがうれしそうに

「好きなんや。こういうの聴いてると淡々と仕事に行けるんからいいんよ」

と、いいます。

「俺ね」

亨の声が、少しだけあらたまったように高くなりました。

「なんていうか、仕事の前に心に波を立てたくないんや。心がざわついていたらろくな仕事でけんからね」

尚美が黙っていると、少し間を開けて

「それでなくても世間は波立つようなことばかりやし...まあ、車の中で音楽聴いて調整してるんかな」

それは、それだけ心が感じやすいということなんだ、と尚美は思います。

「尚美さんはどんな音楽聴くの」

「パット・メセニーとか...。日本のだとスピッツとか宇多田ヒカルとか。そんなにたくさんCD持ってないんです」

「ヒッキーは葉子も好きだよ」

亨はなんだか嬉しそうです。

仕事の現場に行く前に二人が亨の実家に寄るのはわけがあります。

朝食会のとき、尚美と勝が広隆寺に行った話が出ました。じゃあ「御火焚き」にはみんなで行こう、と話は盛り上がり、もちろん弥勒菩薩半跏思惟像も話題になりました。赤松でできているから半島のものでしょうか、と勝が言うと

「たぶんね。そうそう奈良にもう一つ有名な弥勒さまがあるやろ」と、亨。

「中宮寺の観音菩薩ですね。お寺では如意輪観音としていますけれど、広隆寺の弥勒さまと同じポーズですよ」

尚美がそう言うと、親父が先月までそのお寺に行ってたんや、と亨が肯きながらいいました。

亨の父、花村俊之介は建具の職人で、美術工芸の仕事も多く、文化財の修理も請け負ってきたそうです。二条城や国立迎賓館の仕事もし、最近は奈良の中宮寺の大修理にも加わっていたのでした。

「たしか、『俺の仕事姿が本に出てるぞ』ってゆうてたなあ」

それを聴いた途端、尚美はその本が読みたくなりました。亨がケータイで父親に連絡をすると、数冊持っているから一冊を葉子にくれることになったのです。

御所から堺町通りを南下。御池通にでる一筋手前の町家の前で車は停まりました。前に停まっている黒いホンダのCR-Vから瘦せて背の高い初老の男がひらりと降りてきます。ぴちっと折り目の付いた濃紺のズボンとまっ白なゆったりとしたシャツ。髪はオールバックに綺麗に撫でつけられています。亨にあわせて尚美も車から降りました。

「おはようさん」

「おお、えらいべっぴんさんといっしょやな」

「この子が読みたいてゆうてた子なねん」

「あ、どうも。わざわざきてくれはって。こっちからいってもよかったんやけど仕事先が正反対なもんでね。美術史の勉強したはんねんてなあ。ありがたいこっちゃ」

顔は微笑んでいるけれど視線が鋭く、頭の回転が早そうな人だな、と尚美は感じました。

「おはようございます。鈴木尚美っていいます」

花村俊之介はにこやかに肯くと、手に持っている小さな本の、あるページを押さえて亨に見せました。

...長い綺麗な指。職人さんの指...

尚美の印象は一つずつ積み上がっていきます。

ページを押さえる父の指、それを支えようとする息子の指。二人はそっくりの指をしていました。

「ここ見てみ」

「へへ、仕事してるやん」

尚美が覗き込むと障壁画を修理する俊之介の姿が撮影され載っていました。

「お寺には菩薩像がありますよね」と尚美が言うと

俊之介は言葉を探るように、少し沈黙してから

「うん。あるね。...小さなお寺なんやけど」

そして亨の手から小さな本を取り上げ、まあ仏像のことはあまり書いてないけどよかったらどうぞ、と言って尚美に手渡しました。尚美が礼を言うと、にこやかな笑顔が返ってきました。

「葉子ちゃんは元気か」

「ああ、相変わらず」

「そらよかった。うん。じゃ、俺行くから」

花村家に福知山の友人から再び野菜が届きました。今回の荷物にはよく太ったインゲン豆がたっぷり入っていました。

「こちらでは蛍が乱舞しています」

と、書かれた小さな和紙の便箋が添えられていました。

京都市内でもそろそろ蛍が飛ぶ頃だけれど、あちらの蛍はスケールが違うんだらうな、と葉子は思います。まして友人が住んでいる場所が「天座」という地名なものだから余計にそう思えるのでした。

葉子の「月下美人」は、どんどん大きくなり、ますます緑の怪物のようになってきました。朝日が当たるように工夫し、しかも雨が当たらないように吹きぶってきたらビニールのカバーを掛けるようにしました。花芽は少ないのですが、一つ、また一つと噴き出してきていて「夜の宝石」への期待は嫌が応にも高まってきています。

葉子が月下美人の鉢を点検している頃、亨は佐井通りと下立売り通りの交差しているあたりで軒下にずらりと月下美人の鉢を並べている家を見つけました。ミニバンを路肩に駐めて見に行くと、花村家のものよりもずっとすっきりしています。おそらく剪定が済んでいるのでしょう。花が咲くまでは怖くて手が出せない、という葉子とは対照的に花芽のついたままばっさりと切って小さな素焼きの鉢に突き刺してもいます。そんな鉢がいくつも並んでいるのです。

白いランニングシャツを着て、麦わら帽を深く被った老人が水遣りをしていました。手も腕も真っ黒に日焼けしています。

「こんにちは。これ『月下美人』ですよ」

「あ。はい」

「こんなに切っても花が咲くんですか」

「あ、花芽がついてるのは間違えて切っちゃったんやけどね。多分、大丈夫。こいつは強いから」

「剪定していかないと駄目ですかね」

「ああいくらでも大きくなるからね、黄色くなったり皺が寄ってるやつは切ったほうがいいよ」

「なるほど」

『緑の怪物』のようになった株を前で途方に暮れている葉子の姿が脳裏に浮かびました。「ほら、ここに剣のような若いシュートがあるでしょう。これをある程度の高さで切ると、そこから平たい葉がでてきて、その葉に花芽がつくんですよ」

何ともいえない笑顔を亨に向けて、老人はそう言います。

「花はさぞかし...」

「見たこと無い？まあ息を呑むぐらい美しいから。あなたも栽培してはるの？」

「ええ、株をもらい受けて」

「ああそれはよかったですね。大丈夫、きっと花を見ることができますよ」

老人は「なんて幸運な人なんだ」と言わんばかりの表情です。

尚美は花村俊之介からもらった金色の表紙の本を読み始めていました。小冊子といってもいいくらいの薄い本です。表紙は菩薩半迦像（寺伝如意輪観世音菩薩像）と同じくらいに有名なこの寺の宝である「天寿国繡帳」を拡大したものかと思いましたが、どうやら花村俊之介も修復にかかわった障壁画を拡大したもののようです。金地の上を鳳凰が舞っています。

平成の大修理について具体的な説明がぎっしりと書かれていて、半分は英語で書かれていました。英文はこの本の執筆者に京都在住の中世日本研究会のカナダ人女性のもので、ニューヨークにあるワールド・モニュメント財団理事長の短い挨拶文が寄せられていました。この寺に現存しているさまざまな「モニュメント」の価値が世界的に認められていることを尚美は再認識します。

実際、海外の財団からの支援が今回の修理に大きく寄与しているようでした。

...なにしろあの微笑みだもの...

尚美は菩薩半迦像の微笑みを思い起こします。数年前、尚美は奈良・斑鳩までこの寺を訪ねたことがあるのです。京都に比べてひなびた印象のある奈良の、さらに静かな里に建つ法隆寺に寄

り添うようにあったこ小さな寺でした。

広隆寺の弥勒菩薩がどこか冷ややかさを秘めた凜とした微笑みだとすれば、中宮寺のものは見るものを包み込むような優しさに溢れた微笑みだ、と尚美は思うのでした。

尚美は部屋の横壁を見ます。そこにはアルミフレームに入った菩薩半迦像の大判のポスターが掲げられていました。

まだマサルの来たことのない部屋。このポスターが部屋にあることももちろん勝は知りません。本は美術関係のものがほとんど。広隆寺と中宮寺の二つの菩薩像の美しさに惹かれるままに日本美術史の勉強をすすめてきました。

人間の想いと指はこんな素晴らしいものを創り出すことができる。その指を支える心や暮らしとはどんなものだろう、尚美はいつもそんなことを考えるのでした。

そして、この先この研究が自分なりに何か一つのまとまった形をとり、それで区切りがついてしまった後でも、この微笑みを一生傍らに置いていたいし、置いているだろうと思うのです。魅せられたままにいる自分でありたいとさえ。

「尚美、あれはクスノキだよ。知ってると思うけれど」

朝食会の時、マサルが尚美に言った言葉を思い出しました。広隆寺半迦像の赤松と中宮寺半迦像のクスノキ。朝鮮半島と日本。昔、それぞれの国に自生していた木です。仮に赤松があっても、おそらく日本に赤松を彫る技術はなく、また、朝鮮半島にクスノキは自生していませんでした。

彫る人の民族の違いが表情の違いに出るのかしら、だけど渡来系の仏師かも知れないし…。それとも木材の性質が菩薩さまの表情にも関係するのかしら、と尚美はずっと考えています。つまり、仏師が自らの描くイメージのままに彫るのではなくて、実はその木に『彫らされている』のだとしたら…とも。尚美は立ち上がってもう一度そのポスターを見入るのでした。…『彫る』ってなんだろう…

マサルは村上春樹の「1Q84」を読みつづけていました。読んでいる間は本に集中し、三十分に一度くらいの休憩をいれ、ドーナツとミルクティーを口に運びます。このインターバルだと途中で邪魔が入らないかぎり、いつまでも本を読み続けることができました。

この作品にひかれる要素はいくつもありましたが、夢と現実が表になったり裏返ったりする物語にぐいぐいと巻き込まれていきました。どちらがどちらでもあるように思えてきます。現実がほんとうにそうであるのか疑い続けながら、もうひとつの現実もどこかにあるとする見方。あるいは現実が簡単に崩れてしまうのだとする認識は仏教的ですらある、と感じていました。

最近、尚美と広隆寺と中宮寺やそれぞれの菩薩像について語りあった中にもなにかそれを表す言葉があったように頭に光が灯るのですが思い出せません。

思い出せないまま長編小説を読む悦楽に身を任せながらBook 2を読みすすめていると、尚美から電話がかかってきました。

「どう、おもしろい？」

「ものすごく。そっちは？」

「うん、修理の具体的な様子がとてもよくわかった。特に表御殿の屋根が面白いの。銅なの」

「銅って、平たい銅板のこと？」

「ううん、本瓦の形をした銅板瓦」

「銅を瓦の形に加工してるの？」

「うん」

「そんなのあるんだね」

「やっぱり重たい瓦は建物にかなりの負担をかけるし、地震の時にはその重みで建物が潰れたりするでしょう。阪神淡路大震災の時も凄かったし。これだと重さが十分の一なんだって」

「全体のバランスはどうなんだろう」

「それがねえ写真で見たらいい感じなの、いっしょに斑鳩に行きましょうよ」

「うん。それってどうなんだろう。どういうふうに輝いているんだろうね」

マサルは尚美の声を聴きながら、横にいて欲しい気持ちが膨らんできました。肌に触れたいと無性に思うのです。読んでいる本のせいかもしれません。

マサルは現実と「もう一つの現実」が表裏になっていて、夢の中で夢を語っているような「1Q84」の大雑把な説明をしました。

「これがさあ、広隆寺か中宮寺の何かに引っかかるんだよね」

「それはたぶん『世間虚仮』のことだと思う」

即座に答えが返ってきました。この世は常に移り変わり何物も実体のあるものはない。世はみな仮の姿、虚の姿であるという意味です。「世間虚仮 唯仏是真」は聖徳太子が常に口にしていた言葉として伝わっているのです。「天寿国繡帳」に刺繍された言葉でもありました。

「ふーんなるほどね…。ということは現世のものはそんな確固としたものじゃないということだよ。ちょっと通じてるかな…。まあいいや。それはそうと逢えないかな。こっちにこない」

「読書は」

「Book 2の途中なんだけど、ここまできたら中断しても平気。いつでも物語に戻るよ」

尚美が現れたのは二時間後でした。

葉子は夕飯の支度をしたあと、もういちど月下美人の鉢に水を遣るためベランダに出ていました。ぶ厚い葉の一枚ずつ点検しているとまた新しい花芽を見つけました。勢いよく吹き出してい

ます。そして朝確認した花芽がぐっと伸びていました。小さな歓声を上げて亨をベランダに呼び出します。

尚美と勝は静かに本を読んでいた。夕食はふたりで定食屋に行きさっさと食べ終え、すぐに部屋へ戻ってきました。読書を再開する以外にやることがなくなるまで、二人は肌を触れあい何度もキスをしていましたから、尚美はB o o k 1から読み始め、勝はB o o k 2を今夜中に読み終えてしまいそうな勢いです。

尚美の携帯にメールが届きました。葉子からです。

「月下美人」の鑑賞会を一週間後あたりにしようと思うの。そちらの都合を教えてください。花の都合に合わさないといけないけどね。とにかく素晴らしく美しい花だそうだから深夜になるけどよければどうですか。

尚美が黙って微笑みながら勝にメールの画面を見せます。勝はにっこり笑って肯きました。

「初めて見る花だなあ」

「わたしも」

尚美が返事のメールを打ち始めます。

もう夏のような夜でした。

(了)

梅雨の只中だった。亨は洛西ニュータウンの現場に向かってミニバンを走らせていた。大規模な団地ではなく、その区画のすぐ隣の戸建ての住宅のアンテナ修理である。今日も墨を撒いたような空からじくじくと雨が降り出した。亨はフロントに雨粒を確認するときゅっと気持ちを引き締めた。今年は普通の雨降りではないからだ。亨はその異常さに何度かで食わしていたのである。たぶん自分と同じように現場で仕事をしている人たちも敏感に感じとっているだろう、とすれ違う営業車たちがワイパーを駆動させるのを見ながら亨は思うのだった。

梅雨の傾向として毎年、指摘はされていたものの今年は特にひどいゲリラ豪雨である。 だいたい半径2, 3キロメートルの範囲に、一時間で40ミリ以上の猛烈な雨が降るのである。それが市内を動き回る。

まあ、それでもぼやくより慣れるしかないな、と亨は思うのだけれど、あまりの凄さに茫然とすることが多い。ついこないだは京都市南部の久御山町でその雨に遭遇した。「バケツをひっくり返す」という形容も引込むような雨。滝だった。もちろん前はまったく見えず、道路から見える直線の用水路があつという間に溢れ、亨の車は「川の中」にいた。

恐怖を感じ、用水路から遠く、数メートルでも高いところへと車を回し、息をひそめるように車を駐めた。それ以上動くところどこに突っ込むかわからないからだ。（後で聞いたニュースによると一時間に60ミリの雨だった）

案の定、また前が見えないほどの大雨になりだした。幸い高台なので冠水することはない。しかし前が見えない。たぶん一時間か二時間のことである。亨は車を止め、訪問先へ携帯で少し遅れる旨の連絡を入れた。すると先方も窓の外がまっ白なほど降っているとのこと。危ないからゆっくり来てください、と心配されてしまった。礼を述べて、次は北区の店へ連絡する。すると、店番の奥さんから「こっちは降ってないわよお」とのんびりした返事が返ってきた。...これなんだよなあ...

「予定よりも店に戻るのが遅れそうです」

「はいはい了解」

亨はハンドルに両手を置いて、水煙でまっ白な外を眺めながら、ラジオのスイッチを入れた。

季節が季節なので話題は雨のことばかり。予想を訊かれた若い女性天気予報士が「今週はずっとぐずついた天気が続くでしょう」と、きらきらした声で語っている。

それにしてもこの異常さはどうだ。亨は考える。よく言われる地球温暖化による異常気象だとしても、それだけではないような気がするのだった。先日報道されていたのは太陽の活動は低下しているということだった。そういう周期に入っているのだと。ということは地球は間氷期に向かっているはずだ。それと温暖化ガスとが組み合わさるとどうなるのだろう。

...無茶苦茶なはずだ...

そう考えながらガソリン車に乗っている自分。...やれやれ。

助手席に目がいく。先日、尚美が乗っていた。短いスカートから伸びた白く長い脚と美しい姿勢を思い出す。その時、確かにはっとした自分の気持ちも。

...ふーん...

亨はダッシュボードの中からCDを選びはじめた。雨の音が脅迫じみてきたので、気を紛らわせたいと思った。亨は神経質そうにクリアケースをめくっていく。雨上がりに、いや雨が降っていても屋根に上るのだから。修理は待たない。心を平らにしないと...

(俺はなにを気にしてるんだ)

今日に限ってCDはどれもこれもピンとこない。顔を上げるとリヤウインドウの外もまっ白になっていた。前を見る。後ろを見る。亨は自分が車の中でちょっとした孤立状態になっていることに今更ながら気がつく。瞬間、恐怖感が心を掠めた。

途端に葉子のことばかりが思われはじめた。顔が脳裏に浮かんできただけでいとおしさが心に滲んでくる。まっすぐ見つめてくる真っ黒い目も、小さな可愛らしい乳房も、おかつぱの髪も、しゃきしゃきとした声もなにもかにも好きだ。自分のすべてだ、と亨は思う。さっき、ちらりと想った尚美の姿はすっかり消え失せてしまった。

亨は助手席をぱんぱんと軽く叩く。(仕事は大丈夫だ。)口からハミングが流れ出した。ワンコーラスを繰り返し繰り返し続ける。

...R a i n d r o p s k e e p f a l l i n ` o n m y h e a d...

亨が小さい頃から、父の俊之介が家の中でも車の中でもしょっちゅうハミングしていた曲である。いつの頃からか自分もハミングするようになっていた。

昔、ドライブに連れて行ってもらった時、「いつもその曲ばかりハミングするんやね」と訊いたら、「単純に好きだけや」と父は言った。「映画でこの曲が流れるシーンもな」、と。父が高一の時に観たという、その曲が流れる映画を亨は中学生の時に観た。

父の車はそのころからずっとホンダだ。今でもハミングしているのだろうか...

亨の眼は豪雨の外をみつめていたけれど、頭の中には映画の曲が流れたシーンがひろがって

いく。

...光が溢れていて、二人の幸せな笑い声が自転車と一緒にくるくる回って...

亨の気持ちが軽くなる。

亨はハミングしてみた。...ぱっぱっぱ ぱっぱっぱ ぱぱぱぱぱ...

ふと亨はラジオのチューニングを変えてみた。この季節、リクエストなどで特集されるのは雨にまつわる曲が多い。どこかの局でこの曲を流しているかも知れない、と閃いたのだ。亨はチューニングをスキップしていく。雨は激しくなり、外からは俯いた亨の姿もほとんど見えなくなっていた。

曇り空がいよいよ怪しくなってきたので、葉子は月下美人の上に透明なビニール傘をかけていた。花芽を濡らしてはいけない、と聞いていたからだ。花芽のうち一つは朱色に噴き出して伸びていき、二つは灰がかった白で、もう蕾はかなり膨らんできている。その芽の伸びようは、まるで小さな蛇のよう、とに葉子は思う。いきなりではないだろうけれど開花が近いのは確かだ。

緑の怪物のように繁った葉はそのまましてあるけれど、鉢に三本もある株のうち、まだ花が咲きそうにない株を抜いて植え替えの決心はついた。栄養分や水分の取り合いになっているのだし、花はちゃんと咲いて欲しいし。

遠雷が響いた。遅れて稲光。見上げた葉子の額に雨粒が落ちてきた。「ほら、来たあ」といながらビニール傘の位置を調整する。そういえば亨は今日、屋根に上る仕事だと言っていた。妙に不安になる。台所に戻り、ラジオのスイッチをいれる。

...洛西ニューウンのXXさんから、メールでリクエストです。あー、あちらはもの凄い雨やったようですね。小さな川が急に増水してびっくりしはったそうです...こちらスタジオのある北区はどうでしょう...ん、今、降ってきた?...ね、なんだかゲリラ豪雨とかいいますよねえ...

葉子は思わず携帯をかけた

「ごめん、作事中に」

「お。どないしたん」

「いやラジオで洛西が大雨やゆうから」

「あ、もうあがったよ。そっちのほうの空が真っ黒やわ。こっちはだいじょぶやし」

「ふう、よかった。じゃね。ごめんね」

「かまへんかまへん。お、いい曲聞いているやん」

「なに？」

電話の向こうでラジオが鳴っていた。

...この季節、この曲もリクエストが多いですねえ。じゃ、おかけしましょう。バカラック・サウンドの白眉、B. Jトーマスで「雨にぬれても」...

ぱっぱっぱ ぱっぱっぱ ぱぱぱぱ

R a i n d r o p s k e e p f a l l i n ` o n m y h e a d

(了)



梅雨の中休み。気持ちよく晴れた日です。久しぶりの乾いた朝風が月下美人の株元にしゃがみ込み蕾を観察する葉子の背中を撫でていきます。

ここ二、三日で急速に膨らみをました蕾は掌に余るくらいの大きな紡錘形をしています。葉から伸びた花芽はまるでへその緒のように伸び、ある日からまっすぐ上に向けて反転をはじめました。重力に逆らうその姿は力強く、それだけで葉子をそわそわさせていたのです。

...そろそろ開花するんじゃないかしら...

その「へその緒」の先端にある蕾は正面を向いてぴたりと静止し、膨らみはじめたのでした。萼が赤みを帯びまるで血管のように白い紡錘形の本体をはっています。葉子には見慣れた草花とは違い、まるで動物のようにおもえました。

どうにも気が落ち着かないので、葉子は大宅さんに蕾を見てもらうことにしました。朝、大宅さんはミニチュアシュナイザーのキース君と散歩に出かけてきます。それを待ちぶせすることに。

大宅さんに声をかけると、キース君を抱えて花村家のベランダまであがってきてくれました。そして蕾を観るやいなや

「今晚ですよ、今晚！！」と少し興奮気味に葉子に向き直ります。

「咲きますか」

「咲くわよお！！わあ三つもある。株が若いからよねえ」

先に咲いた大宅さんのところでは、午後八時から咲き始めたといいます。満開が午前0時くらい。例年より早かった、と。この蕾の様子だともっと早いかも、というのです。

「こう、ぐーっと開いて、後ろまで反り返るほど開きますから。宝石みたいに綺麗だから。おた

のしみにー」

そう言うと大宅さんはにっこり笑ってキース君と帰っていきました。

こうして開花の日は気忙しく訪れたのでした。葉子はすぐに勝と尚美に、それから亨にも連絡しました。

夕方6時、みんなを招集した時間です。帰宅した亨が蕾を覗き込むとすでに一つが開きかかっています。

「おーい、もう咲いちゃうよ」

「まだこれからゆっくり開いていくから」

花村夫妻がそんなやりとりをしているところへ勝と尚美がやってきました。すぐに尚美は葉子を手伝って配膳をし、勝は亨と二人で月下美人の鉢を食卓から見える室内へと移動させました。

「葉子さんから聞いてましたけど確かに『緑の怪物』ですね」

「ワカメが土から生えてるみたいやな」

と、亨が言うと

「もうほとんど昆布っ」と葉子。

テーブルに献立が並べられました。

ご飯は十穀米が炊けました。万願寺唐辛子はさっと焼いて鰹節をぱらぱらとかけたもの。かんぱちと紋甲烏賊、鯛、中トロのお造り。それから「きょうは私が焼いてみたの」と葉子が言う鰹の照り焼きです。

「えらく奮発したやん」と亨。

「へへ」

「ありがとうございます」

二人がぺこりと頭を下げました。

亨は黒い瓶に蠍の版画のラベルがはられている焼酎を氷いっぱいのグラスに注ぎ、ちびちび飲みながらおかずをつまみはじめました。そのボトルの蠍のを見ながら、おもしろいなあ、といった勝も焼酎。葉子と尚美はビールです。

葉子は「ビール飲んじったらご飯、駄目かな」などと言っています。

「カロリーですか」と尚美。

そうしている間にも花はゆっくりとひろがっていきます。紡錘形の先端が開き、丸く口が開いていくようです。中のまっ白な薬が網のようにひろがってゆくのも覗けています。「なあ波多野、あの花なんか連想せえへん？」

「ええ」

「花というより動物の口、というか...」

「エイリアン」

「そう。一瞬俺もそう思たんよ」

「花が開いたらそんなこといえなくなるから」

葉子がそういうと、

「素晴らしく美しいものほど醜いところから変身しますよね」と尚美がいいました。

「比例してるかも」と勝。

そういえば蓮も泥から茎を伸ばすし、シャコバサボテンもごつごつした葉から目の覚めるような鮮やかな色の大きな花を咲かせます。大宅さんが手に負えなくなった土から昆布が生えたような姿をさらしている月下美人をみながら、葉子は「そんなものかな」と思います。

やがて男たちに口を連想させていた花は孔雀のようにひろがりはじめました。それにともなって強い香も流れ出します。

「こういう姿になると...」

「なんとも豪華ですねえ」

男たちはいつのまにかタタミワシをぽりぽり食べながら蠍の焼酎を飲んでいきます。

「香も強烈なんだ」と葉子。

「うーんなんだろう。ニセアカシアを強くしたようなクチナシを酸っぱくしたような」

「甘さ控えめって感じ」

「そうそう」

女たちは香の話題に盛り上がります。

「悪くないわね」「そうですね」

花はとてもゆっくりひろがっていくので、夕食の片づけは四人かがりで一度にやっつけてしまいました。狭い台所を八本の手が手品師のように動きました。テーブルにはタタミワシとグラス、そして「蠍」だけが残っています。

亨が鉢の前に腰をおろし花をじっくりと眺めます。花はまた一段と大きく開いてきました。

「ふーん。瞬間、瞬間はなにも変わっていないようにみえるのに、たとえば五分間、この花の前から離れていてまた見ると、あきらかに、まったく変わっているんだよなあ...。『時間』ってこういうふうに過ぎていくんやなあ。改めていうのもヘンやけど」

「なにも変わっていないようで、実はすべてが刻々と変わっていったって、自然の現象を見るとよくわかりますよね」と、勝。

「うん、時間の流れって普段はこういうふう意識はしないもんな」

「蓮の開花を待ってる時もそうですよ。なんだか時間の主導権を花に握られてしまっているような気分になります。花のためにだけ時間が流れているような」

男二人は「時間」の話に頭をめぐらしているようです。

月下美人はいよいよその本性を現し、精巧な細工に満ちた純白の大輪を空中に浮かべつつありました。

「思ったより開いていくのが早いわね」

葉子はそういいながら、他の三人を見回すとみんな無言で、花に魅入られています。

「なにか音楽でもかけへん」

と、葉子が提案しました。頬を紅く染めた尚美が、はっ、と我に返ったような表情をして「一度私に選ばせてください」、と立ち上がりました。

しばらくすると花村家のCDコレクションから尚美が一枚のCDを持ってきました。

「これ、いいんじゃないかな、とおもって」

それはアメリカの様々な自然環境の音、例えば鳥の声や滝や波の音などを録音したものにクラシック音楽を被せているコンピレーションアルバムです。

「あ、それ10年以上前に雑貨屋さんでこうたんやわ」

「ナチュラル志向の」「そうそう」

「ドビュッシーが入っているからいいかな、と」

「へえどれどれ」

そうやってマサルがジャケットを手にとりクレジットを読んでいます。亨がそこから盤を抜き取り、プレイヤーに挿入しました。

音楽は”R I V E R I E”。下地のネイチャー・サウンドは”Night in a Southern Swanp”とあります。”Don` t Feed the Alligators”という説明はジョークかな、と勝は思います。

「R I V E R I E...『夢』ですね」

「そんな音楽だなあ」と亨。

波の音と鳥の声とドビュッシーが混じりあい、部屋の中はますます夢幻の雰囲気になり満ちてきました。四人はしばらくその音楽を何度もリピートします。

午後九時。花はますます大きく開きました。まっ白な大輪が三つ輝いています。ワカメだとか昆布だとか言われていた肉厚の葉のヴォリュームを圧倒する強さと繊細さがあります。...放射してくる力が凄いね...これは四人全員の感想でした。

「大宅さんが言うようにこれは『宝石』やなあ」と亨が呟きました。

「そういえばドビュッシーの音楽も宝石だ、と島崎藤村が巴里でいったんですよ」

「国文にいったるとそういうことがわかるんだ」

葉子がそういうとマサルは苦笑いです。

午後九時半。花はそろそろ限界まで開いたようです。全員がケータイで画像を撮りました。まず亨が仕事があるから、と重たくなった体を寝室へ運び、それから大学生の二人があとかたづけをして、礼を言いながら帰って行きました。

葉子は静かになった台所で椅子に腰掛け、月下美人の花を見ていました。毎日、欠かさず様子を見てきた甲斐があったとほっとした気分もあります。もういちど小さい音でドビュッシーをかけ、亨が飲み残した「蠍」を啜っていました。なかなかいい心地です…。

二時間後、テーブルに頭を載せて寝入ってしまった葉子の顔を亨がそっと覗き込んでいます。ふと気がつくともベッドの横に葉子がいないので起きだしてきたのです。そのまま葉子を抱きかかえ寝室へ。横目で見えた月下美人は花をゆっくりと閉じ始めていました。もう「花の時間」は終わったんだな、と亨は感じます。

蛍光灯が消された台所の闇の中で、一夜限りの宝石は音もなく骸になっていくのでした。

(了)

2009年7月22日、日本の陸上で46年ぶりに皆既日食が観測されました。もっとも皆既日食を完全に観測できたのは硫黄島で、他の地域は部分日食となりました。もっとも曇り空か雨で見えないところがほとんどでしたが。

京都では8割程度の日食が予測がされていました。

前日から続く梅雨末期の雨は降ったり止んだりを繰り返し、朝の空は一分の隙もなく灰色に覆われていました。葉子と亨はいつものように朝の準備をし、食事を摂り、いつものようにその日を駆動させていきます。机の上には今日のための遮光グラスが二つ置いてあります。

「京都も八割欠けたら暗くなるんやろか」

「そんなにならないんと違うかな。それにこの梅雨空やったら暗くなっても雲のせいなのか日食のせいなんかわからへんよ」

「そうやね。今日はもうあきらめたほうがええね」

「木漏れ陽っていったやん」

「そうそう、桂とか欒とかイチョウとか...大学の横の並木道と光雲院の土壁と...ポイントも決めてたんやけど。影の隙間の光が全部欠けてるのって、想像しただけでおもしろいもん。...だけど、ま、しゃあないね」

ところで昨晚、尚美と勝が祇園祭の「ちまき」を届けてくれました。亨と葉子はもう何年も宵山にも山鉾巡行にも出かけていません。京都を代表するお祭りではあるのですが、案外、京都市民の中には祭りにでかけない人が多いのです。もちろんほとんどの人は宵山の群衆に埋まって、四条通りをゆらゆらとそぞろ歩いたり、鉾や山の偉容に感心して見入った経験を持っています。亨と葉子も子供の頃から十代のある時期までは熱心だったのですが、歳とともに四条にはでけなくなりしました。仕事や家事が優先されることがいちばんの理由ですが、祇園囃子が聞こえない自分たちの町でさえも、祭りの雰囲気染み渡っていますから、それを感じるだけで十分、と葉子たちは思っていました。高校生や中学生の女の子が少し俯き加減に浴衣姿で出かけていく夕暮

れがあれば、もういうことはありません。

ただ「ちまき」だけは別なのです。多くの京都の家では玄関の上にこの「ちまき」を張り付けます。「神さま、この家のものは『蘇民将来の子孫』なのです。どうか無事息災にお守り下さい」という厄よけの「目印」なのです。毎年これを新しいものに取り替え、古くなったものは神社に持っていきます。亨は仕事の出がけに新しいものと取り替えてゆきました。ふたりが持ってきてくれたのは月鉾の「ちまき」です。

そして宵山の夜には「お祭りの食事」。鰻の落としや鰻きゅう、鰻の照り焼きに、鰻寿司など。そしておいしいお酒と。もちろん勝と尚美も招きました。

静かになった部屋に午前の時間が流れていきます。葉子は洗いものと掃除をすませると、シャワーで体の汗を流しました。それから葉子はお気に入りの白いシャツを着て自分のために珈琲を淹れようとしていました。

台所の外には再びベランダに置かれた月下美人があり、新しい花芽が二つでていました。葉子が何かの気配を感じて窓の外を眺めると電線に燕が一羽、留まっていた。また細かな雨が降り出しているのに頭を上げたまま動く気配がありません。

...どうしたのかしら...

そう思いながら珈琲を淹れる作業に集中します。ポットを置き、カップに珈琲を注いでからもう一度電線を見ました。燕はまだ居ます。カップの横には昨日から夢中になっている江國香織の文庫本が一冊。

けどどうも燕が気になります。

葉子の想像が動き出しました。餌がとれないで途方に暮れている。相方が帰ってこないで心配してあたりを伺っている。ヒナに何か困ったことが起こった...。どうもブルジョーな想像になってしまいます。

...何故あなたはそこから動かないの。ひなは待っていないの。また雨が降ってきたらずぶ濡れになるでしょう...と、葉子は目で燕に伝えようとします。燕は動きません。

珈琲を飲みながら文庫本を数ページ読み、もう一度窓の外を見ました。雨は止んでいましたが、燕は電線に留まり続けています。灰色の雲がその向こうで流れ始めていました。燕が飛行する時、Wにひらく尾が今はしっかりと閉じられ、まるで淡い灰色の背景に刺さっているようです。なんてスマートなんだろう、と葉子は少し見とれていました。

突然、雲からわき出たように電線の向こうに燕が現れました。くるりと旋回しています。

...あら、つがい...と葉子が思った時、電線の燕が飛び立ちました。待っていたのかしら、と思わずベランダに出て燕の行方を追いました。雲がもの凄い速さで動いています。

「ああっ」

葉子の口から思わず声が漏れました。雲が霞んだ向こうに欠けた太陽が見えたのです。その下を二羽の燕が滑空していきます。燕も太陽もあっという間に消えました。

「どうもお」という声が道路からします。紙でできた四角い遮光グラスをかけた大宅さんが空を見上げて指でO. Kサインをつくっていました。

「あらあら」

葉子の口元はたちまち緩んでいきました。

(了)

注：蘇民将来についてはこちらを参照されたし。

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%98%87%E6%B0%91%E5%B0%86%E6%9D%A5>

八月になっても梅雨は明けていません。今日もどんよりと曇って蒸し暑く、時折、ばらばらと強い雨が降ったり止んだりしています。今年の梅雨は、いったん降り出すと空が割れたような勢いになり、京都でも各地で被害がでていっているほどでした。今日もそんな不気味さを孕んだ予報がでています。マサルは今日も大学の図書館で過ごしていました。

もちろんすでに夏期休暇にはいっていますから、キャンパスにはそれほど人影はありません。それでも図書館は結構な数の学生たちで賑わっていました。マサルと同じように卒論の調べ物をするものや、論文を書いているもの、司法試験の勉強をしているものもいます。だけれども、やはり「マサルと同じように」下宿の電気代を節約する、あるいは暑さから逃れるというのを第一の目的としている者も大勢いて、そういう連中はラウンジでゆったりと新聞各紙をひろげていたりします。

マサルは二階の日本文学系の書架近くのテーブルに陣取り、ノートを広げ本を読み耽っていました。もちろん卒論の課題と考えている正岡子規の全集も積んでありますが、このところ毎日読んでいるのは文庫本と新刊。新刊は高村薫「太陽を曳く馬」です。この本までの「晴子情歌」「新リア王」という三部作の先行する二冊を再読し終え、書架に戻したところでした。文庫本は伊東静男詩集です。これは自分のものを毎日持ち歩いています。

高村薫三部作に登場する、人格が引き裂かれるような悩みと苦しみを抱えたある登場人物の生き様にひかれ、夢中になって読んできたのですが、作品中に登場するたくさんの本の中の一つに伊東静男があり、その詩から引用されたフレーズが忘れられなくなったのでした。

私の放浪する半身

これがそのフレーズです。さてどの詩のどこにあったのか...覚えはあります。（それはマサルの持っている伊東静男詩集のいちばん最初の詩でした。）

マサルは伊東静男については高村薫を読む以前からその詩を読んでいましたし、また彼の「子規の俳論」は卒論のために、となんども読み返していました。「子規の俳論」は伊東静男の京大

文学部国文科における卒論でもあり、彼はこの論文により首席で卒業したのです。

マサルの頭の中では、伊東静男が京大卒業後、大阪の住吉中学に赴任し、その教え子に庄野潤三がおり、おおいに薫陶をうけた彼がのちに小説家となり、その庄野潤三の「家族小説」の作品群を愛読する自分がいて、現代の作家の中でも特に庄野潤三作品を、それこそ「愛している」ように読んでいと表明している江國香織がおり、その江國香織作品を葉子が大好きである、というところまでの微かなループができていました。

そこで夢中になっている小説の中にひょっこり伊東静男が現れたものだから、ちょっとした一撃をみまわれた状態だったのです。

『私の放浪する半身』とは誰か。何なのか。いつか高村作品を離れ、小説のような説明も指示もない詩の中をマサルはいったりきたりしていました。

詩は伊東静男の代表的な詩集「わがひとにあたふる哀歌」に収められた「晴れた日に」という詩です。

(作者注：以下引用部分の著作権については作品発表後50年が経過しているため、文化庁の手引きを参照の上、消滅しているものとします。)

老いた私の母が
強いられて故郷に帰っていったと
私の放浪する半身 愛される人
私はお前に告げやねばならぬ
誰もが
その願心ところに
住むことが許されるのではない

『私の放浪する半身』は、まさにこの詩のキーワードとして二度登場します。詩句の前後を読んでいるとそれは

「愛される人」であり「命ぜられてある人」のようです。そして
「誰もが その願心ところに 住むことが許されるのではない」ので、遠くに離れて住んでいる
ようです。そしてそれが
「愛されるために お前は命ぜられている」のです。

私は言ひあてることが出来る

命ぜられてある人 私の放浪する半身
いったい其処で
お前の信じまいとしてゐることの
何であるかを

マサルは何度も読みかえしていました。やがて「引き裂かれたもの」という言葉がマサルの中に沈んできました。「恋人」と読む人もいれば、「兄弟」と読む人もいるだろう。いや「親子」でさえあり得るぞ、とマサルは思います。そしてこの詩の持っている「空気」や「心への手触り」に浸っていきました。

...もしこれが一人の人間の中での出来事だとしたら。例えば破れた魂であるとか...

そう思いつくところでは「お前の信じまいとしてゐることの 何であるかを」という言葉が想いの中に沈んできました。

...信じまいとしていること...

マサルは詩集を机の上に置き、窓の外の濃い緑の桜葉を見つめました。自分自身が雪深い田舎の出身だからか、「月山」であるとか「晴子情歌」などの雪の描写のでてくる作品には特に惹かれます。だけど伊藤は九州・諫早出身であり、それ以外は京都と大阪で暮らしているようなのです。

しかしこの詩は雪深い土地が舞台なのです。四月にまだ一メートルの雪が里道に残る土地...。そこに「私の放浪する半身」はいるようなのです。読んでいるうちに自分の心が共振しそうになるのは、自分がまるで雪深い故郷に自分が魂の半分を置いてきたからだろうか、そかんなことまでマサルは考えます。

...やはり「引き裂かれた愛する人」なんだ！...

いきなり頭の中で直感が光りました。

...だとしたら「半身」とは、なんて直截な、なんという烈しさだろう...

「どうしたの」

マサルの口が半開きになっていたからでしょうか、マサルが声のほうに顔を向けると尚美が怪訝そうに覗き込んでいました。マサルが毎日図書館にいることを知っていたので、尚美は時間が空いているときは必ず顔を出していたのです。

「ちょっと詩の中に入り込んでいたんだ」

尚美が詩集を取りあげ黙読します。何度読んでるんだろう、とマサルが思うほど尚美はそのページから顔を上げませんでした。

「幾通りもの読み方が出来そうな詩」

「詩の感情を掴もうとして...掴まれていたのかな...」

「『信じまいとしていること』に想像と思考が伸びてく」

「例えば君が...」

「どうでしょう」尚美がマサルの言葉を遮っていました。まるで「私が半身なの？」といわんばかりの眼でマサルを見返して。

「もう何時だろ」「お昼前」

二人はランチをとるために外に出ました。

雨が上がり、のっぺりとした灰色の空が解れていました。青空さえのぞき、光線が走り出している街の向こう、比叡山の下あたりから斜め上に向かってかかる虹を尚美が見つめました。

「へえ珍しい。二本の虹」

二人で並んで窓の向こうを見ると、普通の虹の上にもう一つの虹が薄く見えます。

「確かに滅多に見られないんだけど、比叡山の方角には時々でるよ。メスの虹だよ」

「メス？」

「虹には雄と雌があるんだ」

「生きものなの？」

「虫へんの漢字だろ。中国では龍という見立てなんだよ」

そういうとマサルはノートに漢字を三つ書きました。

「これが雄の『虹』、こっちがメスの『蜺』。『霓』とも書く」

「虫へんに兕？」

「そう『兕』の旧字。『兕』って、古代中国の子供の髪型からできた漢字なんだ。ほら、まん中で分けて両側をまとめて立てるような髪型あるやん」

「あ、『ひみこさまあー』！」

「そうそう。それが『兕』の原型。それと虫とを組み合わせると双頭の龍である『蜺』としたんだ。日本ではツクツクハウシがこの漢字」

「国文だと...」

「じゃなくてもわかるよ。面白い本があるんだ。このことをきちんと書いた白川静先生は京都の大学にずっとおられたんだよ」

「おもしろそう。本、持ってたら...」

「ああ、どうぞどうぞ」

マサルは虹を見つめます。その向こうに薄い副虹のあるメスの「蜺」。色の順番が虹とは逆になっています。今にも消えそうなぐらいの「蜺」です。

マサルの頭に再び「半身」という言葉が閃きました。今見ているのは虹と虹の半身のようなものだ、と。

...私の 放浪する 半身...

まるで合わせ鏡のような「もう一人の自分」。あるいは故郷の美山にいるなにものか、それとも今横にいる尚美なのか。それとも...。そしてそれが今にも消えそうな「虹の半身」と同じようにやはり強いられた存在だとしたら。妙なさみしさが心にひろがってゆきました。それが何か、言い当てることが出来ないままに。

マサルは尚美の腕をいつのまにか掴んでいました。

(了)

●参考文献

伊東静男詩集（思潮社・現代詩文庫）

字解・白川静（平凡社）

常用字解・白川静（平凡社）

庭のつる薔薇・庄野潤三（新潮文庫）巻末に江國香織との対談

晴子情歌・高村薫（新潮社）

新リア王・高村薫（新潮社）

太陽を曳く馬・高村薫（新潮社）



八月中旬、兵庫県で多数の犠牲者を出した豪雨が、その凶悪な雲を引き連れて京都までやってきた夜、花村家の月下美人は11個もの花を咲かせました。部屋中というよりも家中が甘い香りでむせかえるほどになり、亨と葉子はたまらず鉢をベランダに戻したのでした。

雨の飛沫を浴びながらゆっくりと花は閉じてゆき、今年の月下美人は終わりました。

次の日の朝、花骸を捨てたあとも月下美人の薫りが残っているベランダに、乾いた涼しい西風が吹いてきました。葉子はとても気持ちがいいのでしばらくその風を浴びていました。久しぶりの優しい風の感触です。

昨夜の豪雨の被害を伝えるラジオの声が外まで聞こえてきました。それを聞くともなく聞いていると、福知山の友人が心配になって、携帯電話をかけてみました。昨夜の大雨による被害は兵庫県中部の佐用町で最も酷く、その東である兵庫県の朝来でもかなり降ったようなのでした。友人が農業をしている京都府福知山市天座は朝来に近かったのです。

煙草と酒と太陽に灼けた声はしかし、元気いっぱいでした。確かに豪雨ではあったけれど天座は大丈夫だったとのこと。ただ稲の生育状況はあまりよくないそうです。

「ところで葉子ちゃんのところ、ゴーヤ食べる？」

「もちろん。二人とも好きですよ」

「あんな苦いの、好きなん。ふーん。じゃいくつか送るわ」

「はあ...あ、ありがとう」

たしかに好き嫌いどどの野菜を作付けするかは関係無いといえは無いのだけれど、なにかヘンだな、と思いつつ、やっぱりお百姓さんにだって嫌いな野菜があるんや、と葉子は妙に納得したのでした。

福知山では夜になると、もうクツワムシが鳴いているそうです。

「体があいたら被災地にボランティアでいこうと思うんや。ほな」

友人はそうって電話を切りました。

数日後、亨はクーラーの取り付けにいきました。「突然クーラーが止まったの」、と連絡してきたお得意様（犬と暮らす婦人。庭にはたくさんの植栽がある）は「明日からお盆休みやったんですよ」という亨の言葉に目を丸くして「ああ間に合ってよかった」というのでした。そして「私はいいんやけどこの子がね」と犬の頭を撫でるのです。

犬は十八歳。腰椎が悪く、「おむつ」をしていて、まっすぐに歩けなくなっていました。「この子が暑さを我慢できないから」、と。

クーラーは1997年製でした。亨はポンプがお陀仏になっているのを確認し、そして今日取り付ける新しいクーラーのパンフを婦人に渡しながら、「最近の製品は昔のに比べて電力消費が少ないんですよ」と、説明します。ふーん、という婦人の声は床に向かって降りていくのでした。

古いクーラーをはずすと隠れた壁紙にはカビがついています。それを見ながら亨は「それに内部を自動で掃除する機能もついていますから」と、付け加えます。表に回り室外機をはずすと、中には観葉植物の蔓が侵入していました。蔓を引き抜いていると全身から汗が噴き出し、容赦ない夏の光線は眼を刺してきます。たまらず顔を上げタオルで汗を拭くと一瞬、ひやりと乾いた風が触れていきました。

（あれ？涼しい）

「このへんちょっと綺麗にしますね」

そうって亨は室外機周りの蔓や雑草を引き抜いていきます。窓が少し開いた窓から、「まあそんなことまでやってくれはるの」と、婦人。

「機械の中まで蔓が入ったらまずいで」

庭がずいぶん荒れてるな、と亨は思います。婦人は亨の目線を観察でもしていたのでしょうか、亨がそう思った瞬間「犬が年をとってから庭のことまで手が廻らなくなってねえ。枯れちゃっても仕方ないわよね」と、いうのでした。

全体に雑草が生い茂り、例えば塀の横の木槿の根元には白く丸まった花がらがたくさん転がっていて、いくつかは茶色に溶けだしていました。また日陰には蘭系の植物の鉢がいくつも並んでいるのですが、どれもこれも節から高芽ができ、白い根が空中に噴き出していて絡みあっています。そして多くの古い茎が痩せて艶を失い枯れつつありました。

白い小さなプレートに名前が書いてあります。

オンシジウム、デンドロビウム、シンビジウム....。

「ふむ。じうむじうむじうむ、と」

そんな亨の呟きが聞こえたのでしょうか、婦人が外に出てきてその鉢の一つを持って家の中

に入っていました。ずいぶん急いでいる様子。無言でした。

亨の作業は順調に進み、やがてクーラーが動き始めました。

「助かったわ」

ほっとした表情の婦人は、手に小さな深緑色の鉢を持っています。テーブルの上には新聞紙が敷かれ、安全剃刀と土が載っていました。

「これね、庭を綺麗にさせていただいた御礼。デンドロビウムの株分け。綺麗な花が咲くから。ね、邪魔やなかったらもらってちょうだい」

亨が作業している間に、婦人は高芽をひとつ、古い茎の節から白い根ごと剃刀で切りとって小さな鉢に植えていたのです。

「少しずつでもこういうことやんなきゃね。あなたがせつせと庭の掃除をしている姿を見てたらなんだか恥ずかしくなっちゃってね。犬のせいばかりにして私、何にもしてなかったわ。あなたにこの鉢を渡そうと思ったらできたんだもの、ちょっとずつでも綺麗にしなきゃね。」

そうって、にこり、と笑いかける婦人に、亨は、ぺこりとお辞儀をすると「ありがとうございます」と一言。鉢を受けとったのでした。

花村家のテーブルの上に小さな深緑色の鉢が置かれています。デンドロビウムの新しい葉はてらてらと光っていて、茎はどこまでも伸びそうな精気を放っていました。

今日は八月十六日。お盆の最後を彩る五山の送り火の日です。去年はマサルと尚美といっしょに近くの高校の屋上まで行きましたが、今年は二人とも里帰りをしています。

「洛星高校の屋上に行く？」

「うーん、今年はなんだかぶらぶらしたい」

八時の点火のだいぶ前に二人は外に出ました。目指すは嵯峨野です。五山の中で滅多に見ることが出来ない「鳥居形」を久しぶりに見てみることにしたのです。嵐山ゆきの電車で揺られて終点まで。駅からぶらぶらと嵯峨鳥居本の山のほうへ歩いていきました。同じ市内でもあきらかに闇の深さが違います。

嵯峨野には平安時代からの史跡もたくさんあるし、大覚寺の裏山の菖蒲谷池周辺からは先土器時代の石器までたくさんみつかっています。なにより開発規制のために大きな建物もネオンも一つもなく、自然環境にかぎっていえば古の雰囲気を一ちばん残しているともいえるのです。

「嵯峨野ってなんだか歴史が剥き出しになってるみたい」

と、葉子がいうと

「いい田舎が残ってるよね」と、亨。

そして二人とも夜を歩いているだけで何故か懐かしい感覚になるね、と。

やがて行く先の山肌が明るくなりました。どうやら送り火の点火時刻になったようです。闇の空に白い煙が見えました。暗い通りのところどころには人が塊になってさらに深い暗がりをつくっています。その人のかたまっているところが見えるポイントなのです。デシカメのフラッシュが光っている塊もあります。その一つの塊に二人は近づいていきました。

「もっと先に行く？」

「ううんこのへんでええやん」

住宅街の路地のむこうに、鳥居の形に燃え上がる山肌が見えました。

「ああ久しぶりに正面から見たなあ」

「うん子供の時以来かなあ」

近所の人や僅かな観光客たちなのでしょうか、集まっている人たちの声がかくぐもって聞こえます。

...何だか夢の中のよう...

葉子はちょっと不思議な気持ちになりました。みんな確かに何かしゃべっているようなのだけれど言葉になっていないのです。人たちはみな闇の中にいて顔が見えません。その人たちがゆうらゆうらと揺れながら、なにごとか声にならない声で囁きながら送り火を見ているのです。

...え？これは？この人たちは？...

なにかわけのわからない違和感と予感に神経が反応し、葉子は亨の体にぴたりと寄り添いました。すぐにかがしりした亨の大きな手が葉子の肩を抱きとめてくれます。

「葉子、さすがに嵯峨野の夜は涼しいなあ」

「うん」

「もう夏も終わりやね」

「うん」

葉子は亨のシャツの裾をきゅっと握りしめるのでした。

(了)



普段、町内ではあまり聴くことのない大声が葉子の耳に聞こえてきました。声の主はどうやら四軒隣の土生さんのようです。路地で老人会の人と立ち話をしている脇を何度か通り抜けたことがあるので、その声には聞き覚えがありました。ベランダで洗濯物を干す手をちょっと止めて耳を澄ますと、「いやそやから土生さんに...」という声が聞こえてきました。それは間違いなく大宅さんの声です。

「わしはいやや ゆうてんねん わからん人やな」

土生さんの激しい声でその会話は突然断ち切られました。戸をぱちんと閉める音のあとは、いつもの静かな路地に戻りはしたのですが。

葉子は、毎日大宅さんと顔を合わせます。それは二人が八百屋とスーパーで午前中の同じ時間帯に買い物を済ませてしまうからです。大抵、どちらかで出会うのでした。その日は八百屋で葉子は大宅さんとばったり。

「朝、土生さんとこいつてはったでしょう。なんや大きな声が聞こえてたけど」

「あ、やっぱり聞こえた？いやあ困っていてね。実はお地藏さんの祠の土台が虫にやられてぼろぼろになってるんよ。それで修理してもらおうと思うて町内の人に了解とって廻ってるんよ。花村さんとも今日、行こう思ててん。でな、そうしようおもたら、修理の間、お地藏さんをどこかに移さなあかんやんか。職人さんも移してくれるならやりますよ、ていうてはんねん」

路地の突き当たり、中田さんの所有する学生マンションの壁を背にして、この路地のお地藏さんは祠に安置されていました。

「あれは土生さんが毎朝...」

「そやろ」

京都は地蔵信仰発祥の地です。現在でも各町内、いや各路地という単位でお地蔵さんが奉られています。新しい宅地の造成や道路の拡張などのために、それこそ道ばたに雨ざらしの状態になっているものも含めるとその数は見当もつかないくらいでしょう。ほとんどの町内や路地では高さ1メートルほどの石垣を組んだベースの上に小さな社や祠を据え、その中に子育て地蔵菩薩と大日如来との二体の石仏が収められています。高さが40センチくらいのもので、二体ともよだれかけをしていて、そこには路地に住む人や、その血縁である児の名前が書かれています。町では当番を決めて常にお花を供えていましたし、毎日、誰かしらが線香をあげて子の健康を祈願していました。子供の健やかな成長を願うためのお地蔵さんなのです。

土生さんが、そのお地蔵さんの前でお経を唱えだしたのは今年に入ってからでした。カセットデッキを道路に置いて、テープを流しそれにあわせて自らも般若心経を唱えるのです。子育てとはまったく縁のない土生さんの、突然の「お勤め」に町内一同びっくりしたのですが、だからといって信心を止め立てする人もいませんでした。ただ異様に大きいテープのヴォリュームと、やたらとならされる鉦の音が午前五時の路地にはうるさく、案の定マンションから苦情が出たのでした。土生さんはそれでもおかまいなしにテープも鉦も続けていたのだけれど、老人会の方から「テープは邪道や」といわれるとすぐに、テープを止め、老人会のカラオケ大会で「あんさん、あんなに鉦を鳴らすのは、お経のやり方、まちごうてまっせ」といわれると鉦も止め、今ではぶつぶつと般若心経を唱えるだけになったのでした。

...なむはんにはあはーらーみーたーからはじまる般若心経。葉子は法事や地蔵盆の時に聞くその経の「ぎゃあてえぎゃあてえはらぎゃあてえ」という部分の音が面白く、そこだけおぼえているのですが、土生さんのはなんだか水道の垂れ流しみたい、と感じていました。

「町内でもいちばん熱心にお地蔵さんに向きあってはる人やから、大切なお地蔵さんに移すの手伝ってください、てゆうたんよ。女の手では無理やし。そしたら『いやや』の一言でおしまい」と大宅さん。

「いやや、ってなんでやろ」

「『そんなん下に置いておいたらええやろ』ていわはんねん」

「雨ざらしになるやん」

「そやろ。そやからどの町内でも祠やお社つくってんねんやんか。それが何が気に喰わへんのか、しまいに『あんたらとは宗旨が違うんや』やて。どんな宗旨やねん。ほんまに」

「まあまあまあ」

土生さんは70歳くらいのお爺さん。西陣織りの下絵を描いていたといいます。奥さんと二人暮らし。仕事はリタイアしていて、毎日、家からは民謡やらムード歌謡を唄う声が聞こえてきます。町内の評判はすごぶる悪く、みな、あの人は偏屈や、といいます。カラオケやお祭りで気心の知れた老人会のメンバーとは和気藹々と語りあっている姿がみられるのですが、同じ町内の人間とは口も聞かず、挨拶もしません。

それどころか右隣の家の椿が塀よりも高く伸びたら自分の敷地の外なのに枝をへし折り中に投げ込んだり、たまに家の前を角掃きしたら「鈴木さんの椿」の根元にわざわざゴミを棄てたり、雪が降ったら石のはいった雪玉を左隣の家の壁にいくつも投げつけたりするのです。そしてそのいちいちを町内の人に目撃され、その都度もめてきました。

「それでねえ、断られたしお地蔵さんどうしようと思てね。お地蔵さんは古いでしょう、わたし怖くて」

「怖い？」

葉子はちっともそんなふう考えたことも感じたこともありませんでした。聞いてみると、大宅さんはこの町内に来る前は上京の、由緒ある古い神社の近所に住んでいたのだそうです。もちろんその町内にもお地蔵さんはあり、今回と同じように祠が傷んだので修理することになったそうです。その間、お地蔵さんをどうするか町内で話し合ったところ、自分の家のガレージを提供したご夫婦がいたというのです。

「修理が済んですぐに、そのご夫婦が二人とも亡くなったんよ。そしたら...お地蔵さんをガレージみたいなところに置くからや。粗末に扱ったからやゆうて、えらいいわれて。うん、偶然なんや。たぶん偶然なんやろけど、気い悪いやんか。またそんなことあったら...」

「そら...ねえ。そらまあねえ。そうやねえ」

「で、ここのお寺に預かってもらおうと思って話聞いてきたの」

それは葉子たちの町内にある古い禅寺です。

「どうでした」

「そしたら、魂を抜いてあと、奥の御本尊の脇に置いてくれはるらしいの。ただしお地蔵さんを運んでくれたら、という条件付き」

つまり、職人さんも、土生さんも、お寺の和尚さんさえも、たぶん大宅さんもお地蔵さんを動かしたり触れたりしたくないんや、と葉子は思いました。

「で、花村さんのとこ、どうやろお。運んでくれへんやろか」

「え！うち！！」

その夜、葉子は亨に事の次第を説明したのです。

「あ、ええよ。日が決まったらゆうてよ」

あっさりとして亨は答えました。葉子も亨も京都育ちですが、子供の頃地蔵盆で遊んでいたお地蔵

さんを「守る」立場になったのはこの町内に来てからのことです。二人ともお地蔵さんがそこまで畏怖されている、とは知りませんでした。お地蔵さんを粗末に扱ったものに仏罰がくだる、という単純な因果に葉子は半信半疑でしたが、たとえそうだとしても、今回のことはお地蔵様のためにやることなんだから「よきこと」なはず。よもや亨に変なことは起きない、とっていました。だけれども葉子は亨が「いややで」といつてくれたら即座に大宅さんに断ろうとも思っていたのでした。けれど亨はすました顔をしています。

「たしか二つあったよね」

「地蔵菩薩と大日如来」

「一人で二つはしんどいなあ。こういうときこそあいつ呼ばなきゃ」

「波多野君？」

「そう。マサルに手伝ってもらおう。それにあいつ、こういう事にやたらと鋭いやんか」

...やっぱりちょっと気にはなってるんだ...

快晴。気持ちのいい風が吹いています。

最初に予定した日は仏滅だったので延期になり、大安の日曜日の朝、いよいよお地蔵さんを運び出します。祠の前に大きな椅子が置かれ、紫の座蒲団が和尚さんを待っていました。

町内の人たちがほとんど集まりましたが、土生さんはいません。老人たちは皆一様に腰やら脚を痛めているので床机に腰掛けています。葉子も亨もマサルもみんなと同じように数珠を持って和尚の到着を待ちました。尚美もマサルについて来ています。やがて袈裟に身を包んで禅寺から和尚さんが歩いて到着。椅子に腰掛け、線香を立てると、合掌をし、じっとお地蔵さんを見つめます。

「ここのんも古いすなあ、いつごろのものやろ。やっぱり平安後期かな...仏さんに年月や名前は彫ってありませんでしたか」

「いやあもう全部溶けてます。...顔ももう...」

お婆さんの誰かが答えました。

「ああそれはそうですわねえ。祠はいつのもの？」

「これは昭和57年と書いてありました。その年に新築しはったみたいです」

修理を引き受けてくれた職人さんが答えます。

...ということはその時もお地蔵さんは動かされたんや。誰が...と、葉子は一瞬思います。

「ずっとこの場所にあったんでしょうか」と和尚。和尚さんは三年前に、古刹の住職に赴任され、この町内のことは詳しくないのです。

「いいえ。あちらにははったんです」

もう一人のお婆さんが答え、マサルがそこを指さしました。同じ町内の人間でもないのに、しかも大学生が何故わかるのか、驚いたのは葉子だけのようで、何故だかみんな肯いています。亨

もマサルなんだから、といたげに葉子を見てにやりとしました。

「あそこはもともと野っばらで、そこにいはったんですねんけど、家が建つことになって、ここに移らはったんです」とお婆さん。

マサルが指さしていた場所は土生さんの家でした。

「ああそうですか。じゃ、始めます」

そうって和尚さんはいくつかの印をきり、般若心経を唱え始めました。皆が神妙に聞いているうちに、葉子のお気に入りかやってきました

「...ぎゃあてえぎゃあてえはらぎゃあてえ...」

やっぱり違う、と葉子は思います。...ほんもの、やわ。...

和尚さんはあと二つの経を唱え、式を終えました。

「さあではお願いできますか」

そう言い残すとお寺へすたすたとまた歩いて寺へ帰って行きます。

亨が路地に車をまわし、マサルが小さく肯いて祠の前に立ちました。マサルの真っ青なシャツが朝の光に輝き、風に揺れていました。葉子と尚美が白い布を二人に渡します。

「ぼくが出します」

そういうとマサルが祠の奥の扉を開き、石のお地蔵さんを一体ずつ取り出しにかかりました。まず白いよだれかけの地蔵さん。白い布を持った亨に渡します。

「おっ、けっこう重いな」

亨はお地蔵さんを白い布でくるむと、車の助手席にそっと置きます。次に赤いよだれかけのお地蔵さん。

祠が空になったところで職人さんが前に出てきました。

「土台以外はまだまだ綺麗やね」

といいながら亨に声をかけ、屋根の下を二人で持ち上げました。すぽんっ、と屋根が外れました。次に正面の扉もすぽん。見事な組み立ての造作です。

道の反対側に止められの車に分解された祠が積み込まみ、この傷みなら二日後にはできてますから、とって職人さんが帰っていきました。

それから亨たちがゆるゆるとお寺に向かったのです。

室町時代にできたという禅寺の正面から、二人はお地蔵さんを抱えて入っていきました。何度か焼失を繰り返した寺の現在の建物は江戸期のものです。達磨大師の大きな画の前に和尚が立っていて、「こちらに」と、先に立っていきます。ついた先はしんとした本堂の大日如来坐像の脇

でした。縁側の扉がすべて開け放たれて風が滑っていきます。

「確かにお預かりしました。祠が治ったら連絡してくださいね。また伺いますので」
和尚がそうやって二人に手をあわせました。

二人が祠のあった石垣の土台の前に戻ると、椅子は撤収されていましたが、床机に座ったお婆さんの何人かと葉子と尚美を含めた女性たちが待っていました。みんながごくろうさん、と声をかけてくれます。例によってマサルは女性たちの関心を一手に集めたようです。まあ何と美しいお方やろ、というお婆さんや、こんな白魚みみたいな手であんな重たいものをよう持たはったねえ、とマサルの手を離さないお婆さんまで。大宅さんも時々、ぼおっとしてマサルに見とれている様子。葉子はそれが面白くてたまりません。

「もうすぐに修理はできるようですから」

亨の一言に、やっと婆さんたちは、いや、女たちは振り返るのでした。

二日後。またしても快晴。ずいぶん秋らしくなった日射しの中、今日お地蔵さんが帰ってきます。祠の前には祭壇が組まれ地蔵盆の時のような供物が並べられています。赤飯も炊かれました。

午前十時、亨とマサルがお地蔵さんを引き取りにいきました。掃除の人が数人いるだけの静かな伽藍を歩き本尊の前へ。それぞれがお地蔵さんを抱えると、二人は顔を見合わせました。持ってきたときよりもあきらかに重くなっているのです。慎重に運びだそうとすると、和尚が声をかけてきました。

「京都の地蔵信仰の源流というかおおもとの仏さんはこの寺にあるんですよ」

「え、そうなんですか」

「観光客の方には教えてませんけどね」

「京都の人知らないんとちゃいます」

「たぶん知らはらへんでしょう」

二人が車で路地に戻ると、すでに職人さんが祠を組み上げていました。そこに慎重にお地蔵さんに戻します。

「くうっ、重いな。あかん」

亨が一度外に戻します。ぼくがやりましょう、と行ってマサルが亨からお地蔵さんを受け取り、そっと中に安置しました。ひとつ、もうひとつ....。

お婆さんたちはその姿にうっとりとしています。

二人の後ろでは和尚さんが待っていて、すぐに魂を戻す式が始まりました。また般若心経からです。そして「...ぎゃあてえぎゃあてえ...」。

マサルが亨にこっそりと囁きます。

「魂が戻ったからきっと軽くなってますよ」

「なんで」

「さっきぼくらが運んだのはただの石ですから」

「あ、そうか！」

式が無事に終了。口々に、お疲れさんとした、といいながら老人たちが引き上げていきます。マサルと亨は尚美と葉子と一緒に花村家へ。大宅さんが走ってきました。

「ほんまに無事終わってよかった。ほんまにおおきに」

大宅さんは何度も頭を下げるのでした。

テーブルに久しぶりに四人が揃いました。尚美とマサルは「茶葉二倍のミルクティー」を飲みながら、葉子からこの間のいきさつを聞いたのでした。

「土生さんみたいな人って町内に必ずいますよね。なんかこう偏屈な人」と尚美。

「この後どうするんやろ」葉子は頬杖をついています。

「知らん顔してまた拝まはりますよ」マサルは断言します。

「協力を拒否していて、また平気な顔して拝むの？どんな神経なんやろ」

「何を願っているのかわからへんけど、あの人にはあのひとりの何かがあるんやろ」と亨。

「そうですね。どこかに外孫がいるのかもしれないし。自分のためにお経あげるのがも知れませんか」とマサル。

「へえ、男の人たちはずいぶん優しいんやね。私はなんか腹立つなあ」

葉子はどうも腑に落ちません。

翌朝、午前五時過ぎ。葉子が起きだしてぼんやりしていると、家の外から般若心経を唱える土生さんの声が聞こえてきました。たぶん大宅さんの家にも聞こえているだろうなあ、怒ってるだろうなあ、と思いながらお湯を沸かし、珈琲を淹れる準備をしていきます。朝起き抜けに、亨がキスをしてくれたので、葉子はなんだかご機嫌です。

ふいに般若心経を唱える土生さんの背中が脳裏に浮かびました。

...丸い背中...

葉子は急に切ない気持ちになりました。

「...ぎゃあてーぎゃあてーはらぎゃあてえ...」

...だけどやっぱり水道の垂れ流しみたい...葉子は首をすくめてくすっと笑うのでした。

(了)



お彼岸の朝、葉子はシャワーを浴びていました。

半分開けた浴室の窓からは紺碧の空が覗けて、雲が速度を上げあげて滑っています。

雲を急かしている風は、どうやら小笠原諸島を通過した台風を中心とした直径千kmの円弧にそって北から流れ落ちて来ているもの。（夜明けの天気予報で聞きました）その俯瞰図を葉子は脳裏に描いてみます。...その風でグライダーしている鳥がいたりして...などと。

くびすじを洗いながら顎をあげた葉子の視界を、紅色した萩の花がよぎっていきました。...そうか植物も飛ぶんだ...。軽い種なら上昇気流に乗って、そこでグライダーしている鳥の羽に乗って...。想像はますます膨らんでいくのでした。

「おはよう」

硝子戸の向こうから亨の声がして、葉子の「想像」は急停止。「おはよう」と声をかえすと、珈琲ミルの音が聞こえてきました。

葉子は、朝、シャワーを浴びていると夜を洗い落としている気分になることがあります。それは亨に抱きしめられた体の記憶だけではなくて、強い夢の記憶だったりもします。自分の抜け殻が足元に流れ落ちていくように感じると、もうどんな夢だったかは忘れてしまっていて、ただ夢の痕跡のようなものが心に残っているのですけれども。

まるで夢の「重さ」の証のように。

葉子は「痕跡」からまた想像を始めます。

ある版画家が、古いイギリスの友人からドーバー海峡の石をもらい、それを何年も紙の上に置いて飾っていました。ある時そっと石を動かすと、紙の上に痕がうっすらとついていました。それをみた版画家が、石と紙のあいだにあるものこそが「二人の存在の証」なのだと直観した、と新聞のコラムで語っていました。もう数年前のこと。（注1）

そのことがずっと残っていたのでしょう。体を洗っていて、ふいに自分の体を、そして亨の体を思います。体だけじゃなくもちろん心も、お互いが「石」になり「紙」になり、お互いに「微かなしるし」を、まるで自分の「存在証明」をつくるようにお互いに置いていく…。そうやってずっと二人で生きていく…。それを日々、繰り返す。

葉子は石鹸を洗い落としていきます。窓の向こうの空を羊の形をした雲が流れていきます。するとこんどは子供の頃の、ある年のお彼岸を思い出しました。

葉子の実家のお墓は東山にあります。ちょうど京都市内が一望にできる広い墓所で、幼い葉子は市内を黒い羊の影が横切っていくのを見つけたのでした。

「ひつじ」と言うと、母が「雲の影なのよ」と笑います。葉子がさらに「ひつじ、ひつじ！！」と言いつのると、父がいいものを見せてあげるといって、太陽の位置を確認しながら掌で「鳩」や「きつね」をコンクリートの壁に映し出してくれました。初めて「影絵」を見た日の思い出。

ふふん、と葉子は鼻歌でも歌い出しそうです。また窓の外を萩の花が飛んでいきました。「想像」はまた、「グライダーの鳥」に戻ります。
...例えば南洋の植物の種が鳥の羽に乗って...

そういえば月下美人とドラゴンフルーツの花がまったく一緒といってもいいぐらい似ていると近所の人からいわれたことを思い出しました。しかも同じ「一夜花」。その方はフロリダで花を見たとか。実も食べて、とにかく甘かった、と言うのです。「月下美人ってドラゴンフルーツでしょ？」と。

（あ、ネットで調べてないや）と葉子は一瞬思うのですが、...フロリダ、いやハワイからならドラゴンフルーツの、あの芥子粒のような黒い種をのせた鳥が...とすぐに思いの翼はそちらへ飛んでいくのでした。

葉子は浴室を出ると、バスローブでキッチンへ。亨が珈琲を淹れていました。

「風が凄いね」と亨。

「お寺の栗や柿が落ちたかも」

「大学のぎんなんもね」

葉子は珈琲を淹れている亨の横にいて、手もとをじっと見つめます。亨はお湯を注いでいるあいだ、ポットを持たない左手を必ず垂直にテーブルに立てる癖があります。ポットの注ぎ口をあげると、その手もテーブルを離れ、また注ぐときに立てる…。

亨の左手がテーブルに立とうとした何度めか、そこに葉子の掌がありました。

「あ、ごめん」

そうやって亨が左手を離そうとすると、葉子の掌がぎゅっと握られました。離しません。

「あれ？」

亨がポットから葉子に視線を移すと、そこには綺麗なおでこが目の前に。

両手のふさがっている亨は、そこにそっと唇をつけます。

くちびるとおでこの間、葉子はちいさな「証明」を感じていました。

「おでこ、ぴかぴかやね」

亨もなんだか嬉しそうです。

(了)

注1 2004年2月・京都新聞「ひと ART TALK」より。

世界的な規模で活動された版画家・造形作家の故・井田照一氏が、友人のジョン・ケージから贈られたドーバー海峡の石を、ある日たまたま動かしてみると、長い年月の間、下に敷いていた紙に石の跡がうっすらとついているのを発見し、感動したという発言をされています。「石と紙の間に生まれていた存在の証」と。



マサルは大学近くの古寺の鐘楼の石垣にもたれて、寺の門前にやってくる人をそれとなく眺めていた。灰色と緑の多い風景の中で赤土色の長袖のTシャツが鮮やかに浮かび上がっている。まるで目印のように。何かのしるしのように訪れる人の一瞥を待っているかのように。

マサルは、自分の住んでいるこの学区に画家に関するさまざまな「跡」が残されていることに気がついていた。（花村亨、花村葉子、波多野勝、鈴木尚美。この物語の主な登場人物は皆同じ学区に住んでいる。）

名前を挙げれば堂本印象、小野竹喬、山口華陽といった大家の旧宅や美術館、記念館があるのだ。美術サークルに入っている同期に訊いてみると現役の画家もたくさん住んでいるという。しかし彼は小野竹喬、山口華陽に関する場所が大学のすぐ近くにあることを知らなかった。

まず絵に興味があること。そして街を歩いて観察する「趣味」のあること。この二つがないと、この学区の土地柄がひょっとしたら画家にとっての磁場のような「気」を出しているかも知れない、という思いを抱くこともないのだろうか、とマサルは思うのだった。

実はその前にこの学区、というよりもこの寺を中心とした半径二百メートルくらいの一帯に文学の才能が「棲んでいた」ということも知っていた。

水上勉、谷崎潤一郎、井上靖、金子光晴である。

水上勉と金子光晴はそもそもこの寺にいた。水上勉は小僧として、金子光晴は執筆に集中するためである。井上靖は毎日新聞の記者でアパートずまい。谷崎潤一郎は関東大震災に被災し関西へ逃れてき、神戸に居を構える前に、この寺近くの借家に住んでいたのだった。

四人ともそれぞれに執筆と生活に取り組んでいたのだけれど、「伏していた」というイメージが強い。それぞれこの地を離れてから文学史上に足跡を残す仕事を果たしていく。実際にこの場所で作品を完成させたのは金子光晴だけであった。作品は「こがね虫」という彼の鮮烈なデビューを飾った詩集である。また水上勉はのちにこの寺での体験をふまえた作品を書いている。

だけど文学部でいったい何人の人間が四人の本を読んだことがあるだろうか、せいぜい谷崎ぐらいじゃないのか...しかしそれも当然といえば当然のことなんだろうな、とマサルは思う。自分だって井上靖のことを訊かれたら、そんなに読んでません、としか言いようがないのだし。

文学に興味があって、本を読んでいること。そして街の中を、本の中を観察する「趣味」のあること...。その時も画家たちの時と同じようなことを思ったものだった。

しかし、知ったからといって何か起きるわけではない。場所に依存するような気分にもならない。ただおもしろがっているだけだ、とマサルは自分自身を見つめていた。

なによりも、どんな辺境にしようとも自分のいる場所こそ、自分の「創作エンジン」が全開になるところこそ「V o l t e x」なのだ。そんな気概をマサルは持っていた。しかしそんな自分の心のありようととも、自分を作り上げる周りの「流れ」や「場所」や「人」もまた大切だという直感もあった。

興味があって、誰も見ようとしないうところであっても自分は見るという「趣味」があって...

マサルは大学から一人でアパートに帰るとき、寺を抜けて両側に聚楽色の壁が続く参道を歩くようにしている。それはゆるい下り坂で電線も、背の高い建物もなく大学裏にある山からの風の通り道になっていたのだった。背中から受ける風がとにかく気持ちがいいのである。

坂はやがて山門に辿り着き、そこで終わる。花村家はその右手にある。山門の外はちいさな広場のようになっていて、大学生が一日中、右へ左へざわざわと歩いている。

昨日のことだった。マサルが山門からその広場へ出ようとする、入れ違いに山門を潜ろうとする学生がいた。するとその背後から

「おーい、そっちは行き止まりやぞ。寺から大学にはいけへんぞ」

と、声がかかったのだ。先輩なのか、少なくとも何年かはこの界隈を歩いたことのありそうな人物だった。

「あ、そうですか。近道かなと思って」

そう言って学生は引き返す。

マサルは思わず苦笑して通り過ぎただけけれど、妙なことを考えついたのだった。この大学には二万人くらいの学生がいて、そのうちこのキャンパスに来るのが三分の二ぐらいとする。さて、その中の何人が寺の境内を経由して大学にいけることを知っているだろう、と。

そこからの帰り道にずっとそんなことを考えていると、そういえばこの道を歩き出してから同じ人間にしか会わないことに気がついたのだった。

...まさか...

マサルは、こんどは自分自身の発想に苦笑いしてしまった。

...あの「長方形の出入り口」が見える人と、見えない人がいるんじゃないか...

そんな発想をしたのには、あまりにも自信たっぷりだった「行き止まりやぞ」という声のせいもある。

そうしてマサルは鐘楼の石垣にもたれて、寺の正面にやってくる人たちをそれとなく観察していたのだった。

寺の正門の真向かいに鐘楼がある。玄関に向かって左手にはコンクリートの壁が道と境内を区切っている。かなり古い道にそった壁なのでくねくねと曲がっている。その寺側に曲がり込んでいるところに長方形にくりぬかれた「出入り口」があるのだ。そこを出て右へ曲がるとすぐに大学に出る。確かに大学側から歩いてきたら死角になって気づかずに通り過ぎてしまうかもしれないけれど、参道を歩いてきて寺の前に立てば目にはいるはずなのだ。

寺には観光客もたくさん来るのだが、誰も「出入り口」を見向きもしないで参道を帰って行く。「次は龍安寺や」とか「次は金閣寺」といった声がかわされるのだけれど、ふたつともその「出入り口」から出た方がはるかに近い。金閣寺などキャンパスを縦断した方が早く着くのだ。

砂利を踏みしめて歩いてくる音がした。マサルは読んでいた白川静の「初期万葉論」からちらっと目線をあげる。女性である。主婦には見えない。よくすれ違う人だ。いつも和装で、まっ白な足袋が印象に残る人。少し俯き加減に正面を横切ってすうっと出入り口から出ていった。つきもよく見る男。この人は大学の関係者か。いつも白いソフト帽を被っていて、ページュのスーツ。鼻の下にはムスタッシュ。茶色の鞆。ちらりとマサルを見遣ると、そのまま出入り口へ。次に来たのはあきらかに学生。正面まで歩いてくると、あたりをきょろきょろと見回す。首をひねり

...もう一度周りを見て...赤土色のTシャツに気がついて...マサルを見て...戻っていく。次も同様。その次も。

今度は道から「出入口」を潜って境内に入ってきた人がいた。この人もよくあう「顔」だ。シルバーのトレーニングウェアの上下に身を固めたおばさん。いつものウォーキングなのだろう。まっ白なシューズ。少し体を左右に揺らせてリズムをとる。

次にまた女性が潜ってきた。尚美だった。

「あ、いたいた。メール読んだらおもしろそうだったし。で、どう？」

「うーん通り抜けるはいつもの顔ばかり。学生は案外抜けていかないね」

「『見えてる、見えてない』ってのは」

「あ、それはどうかなあ。やっぱり考えすぎだよね。どうも『見えてない』というより『熱心じゃないだけ』って気になってきた」

「ふーん、まあそんなところでしょね」

メッセージバックをたすきがけにした眼鏡の男が歩いてきた。いかにも学生である。門前できょろきょろしている。じっくりと周囲を観察している。マサルの赤土色のTシャツにも気がついたようだ。

マサルは声をかけた。

「大学に抜けるんならそこからだよ」

「あ、どうも。やっぱりいけるんですね」

壁にあいた長方形をマサルは指さした。

「は？壁...しかないですが？」

眼鏡の男とマサルの二人とも、困った顔をした。

(了)



秋がゆっくりと深まっていきます。気の早い桜葉には紅葉を前に散り始めるものもあり、街で、たぶんいちばん先に黄葉する桂の葉には、その兆しが浮かび始めていました。

葉子が毎日手入れしをているベランダのキッチンガーデンには、小さな鉢植えのハーブたちが、右からパセリ、セージ、ローズマリー、タイムの順で並んでいます。葉子の母が小さい頃からよくハミングしていた歌の歌詞どおりに並べているのですが、(母は今でもこの歌をよくハミングします) この並びを見てその歌に気をつく人はまだいません。亨にも教えていないことなのでした。

そのハーブたちも最近、朝露に濡れると、いつになく「きゅっ」としまった姿をしているように思えるのでした。そして葉子は月下美人の冬越しの方法を考えたり、ハーブの隙間にサルビアの真っ赤な花を置いてみようかと考えています。目の前ではセージに紫の花が咲いていました。

午前の光は柔らかく、風が少し出てきました。気持ちいいなと感じた途端、葉子は思い出し笑い。昨日、亨が仕事にいった先の老人ホームでの話です。

その日、亨は老人ホームに大型テレビを配送し、アンテナの規格を調べ、地上デジタル対応テレビの設置をしていました。設置場所は1階のみんなが談笑しているオープンスペースの壁際です。UHFでテレビ大阪が映っていましたから、地上デジタル放送のための新たなアンテナを立てる必要はありませんでした。テレビを設置し、配線を済ませていきます。

そんな作業の間中、亨はそのスペースのベンチに座った老人達の視線をずっと感じていました。なにげなく振り返ると確かに老人達は亨のほうを見ているのですが、亨の姿に焦点を合わせている人はまったくいません。なんだかいつもと、そしてどことも違う居心地です。

飛び交う言葉もてんでにばらばら。意味がわかるのは介護士さんの指示する声ぐらいです。中には額をつきあわせて語りあっているようなお婆さんたちもいますが、声は聞こえません。

作業が終了し、事務所に確認してもらおうと広い廊下に出たとき、トイレから白い長靴、白いビニールのエプロンをつけた職員の方が出てきました。広い肩幅と短い髪は、一瞬男性のように見えます。だけど近づくにつれて顔の輪郭や胸の膨らみが若い女性であることを亨に告げました。若い。それもまだ十代を思わせる若さです。

亨が声をかけようとした時、空色のナップザックに何やらものをぎっしりと詰めた老婆が、脇を素速くすり抜けていきました。若い女性職員の前に立つと、やおら大声をあげたのです。

「マグロくださいっ」

「??????」

職員と亨の、老婆の発言の意味をすばやく探ろうとする思惑と視線が火花をあげて廊下を走りました。

と、白いビニールのエプロンと白い長靴。短く刈り込んだ髪…。魚屋さん？亨の直感です。

「なにゆうてんのおばあちゃん」

若い女性職員は笑いながら近寄ってゆきます。

「これで！」

老婆はナップザックを降ろすと、中からベルのついた丸い目覚まし時計を取り出し、ぐっと突き出しました。

「これでマグロください」

職員はまるで我に返ったように、自分の白い長靴とエプロンを見つめ、そしてにっこり笑うと、相手をしっかりと見つめます。どうやら自分が魚屋と間違えられていることに気がついたようです。

「おばあちゃん、あかんねん。今日はマグロないねんか」

二人にゆっくり近づいていった亨の耳に、彼女の声が聞こえてきました。

…そう来たか…と、亨は思います。

亨がナップザックを覗き込むと、中は様々な時計でいっぱいになっています。老婆は亨に気がつくたびに振り返り、困った、という顔をし、また職員に向きあいました。

「マグロくださいーっ！！」

「ごめん。おばあちゃん、今日はイカしかないねん」

…おいおいそんなこと言っているのか…

「マグロやないとあかんですう！！」

「ほんまごめんイカしくないねんー」

老婆は瞬間黙ると、あーそうでっかあ、と大声で言いながら時計をナップザックにしまい込むと、ひょいっと背負いまるで何事もなかったかのように歩いていきました。

「あ、どうも。こんにちわあ。ようあることなんです。あのお婆さん、いつも時計を持って歩いていて…。トイレ掃除した恰好のままやったんで、間違えられたみたいですね。へへ」

「ほんまに魚屋さんやね」

亨が、彼女の盛り上がった肩の筋肉に感心しながらいうと、彼女は照れたように笑いました。ふっくらした白い丸顔の頬が桃色に光っています。

「私、高校まで柔道部やったんです。そのせいか男に間違えられたことも何度かあって…」 「ここでも？」

「はい。ここで介護の仕事させていただいてから何度もです。こないだなんか、おばあちゃんの下着の交換してたら、『あんさん、えらいもん見てくれたなあ。奥さんに言いつけるええ！！』って言われましてん」

「ははは。だけどしっかり女の子やん。はよ彼氏つくってみせたらな」

「ありがとうございますう。そやけど私、彼氏いますねん」

「あ、ごめんごめん」

「わははははは」

その日、亨は手にチェリー・セージの花束を持って帰りきました。介護施設から帰ろうとしたら「マグロのお婆さん」が素速く近寄ってきて手渡していったのです。

亨が慌てて事務所までその花束をもって行くと、あんまり繁りすぎたんで剪定した花とのこと。いややわあ、どこからもってきたんやろ。あのお婆さんいつもと違う人を見ると必ず何かをあげるんですよ。ご迷惑でしょう、処分しますから、というので、いや、もらえるものなら頂いて帰りますと亨。

「ほら、ここまでしてもらってるし」

そうやって亨は花束の切り口を職員に見せました。きちんと揃え、輪ゴムで束ね、湿らしたキッチンペーパーでくるみ、さらにアルミホイルで巻いてあります。

「あ、ほんと」

職員も動きを止めてにっこり。

葉子は鉢植えの紫のセージを三本切ると、テーブルセンターのまん中に硝子瓶に生けたチ

エリー・セージに混ぜてさしました。ひよろひよろの茎の先で小さな紅い花がふわふわと揺れます。

「ねえねえ。その女の子、お婆さんが、イカでもいいです、っていわはったらどうするつもりやったんやろ」

「うん、ぼくも同じこと聞いた」

「なんていうん」

「『ごめんまちごうた蛸やった』て言うんやて」

「ふふふふふ」

(了)

●参考楽曲

Scarborough Fair...Simon and Garfunkel



花村俊之介は目が覚めても夜風の感触を頬に感じていました。

外がほの明るくなったきた午前六時。久しぶりに見た夢の感触です。微かに心地よい疲労感さえ感じていました。

時々あることなのです。以前、仕事場を大掃除する夢を見たときも、目覚めると達成感に包まれた疲労感があったな、と俊之介はその時のことも思いだすのでした。

顔を洗い、歯を磨き、台所にいる妻の幸子の背中におはよう、と声をかけた俊之介は、プレスの効いたまっ白なクルーネックシャツと紺のズボンを身につけ、いつものように台所のテーブルにすわって珈琲豆を挽きはじめます。挽き方も淹れ方もあなたのほうが上手なんやから、と幸子がいうので、朝の珈琲は結婚してからずっと（もう40年になる）俊之介が豆を挽き、ペーパーで淹れていました。

モカが飲みたい気分だったのだけれど幸子の好きなマンダリンを選んで、手動のハンドルを回

していきます。

ごりごりぐりぐり...

するとまるで回転にあわせるように、夢の記憶のかけらが糸で縫い合わせたように思い出されるのでした。

気がつくと俊之介は愛車のホンダを運転していました。走っている風景から24号線だとすぐに判りました。京都と奈良を結ぶ唯一の国道です。ちょうど伏見の御香宮から宇治川を渡り向島へ向かうあたり。文化財の修理で何度も通った道なので、車窓を流れる風景は見慣れたものです。

奈良へ。けどもう昼過ぎです。

(あ、そうか奈良町へ行くんだ。) 俊之介は夢の中で思い出します。

奈良市奈良町。奈良の中でも昔の情緒と風物が残る街。俊之介の好きな街です。奈良町へ... (あ、布巾を買いに行くんや)。家で久しぶりに亨と葉子の二人と一緒に食事をした時、幸子の手伝いをしていた葉子が「この布巾とてもいいです!」といったのがきっかけでした。布巾は幸子もとても気に入っているのですが、もともとは俊之介が奈良町で買った「ならまちふきん」という蚊帳生地仕立ての布巾です。蚊帳の生地が八枚重ねになっていて、しっかりとしたつくりの大判のもの。仕事帰りに偶然見つけて、家でも仕事場でもいいかも、と買ったのでした。

「ガーゼの感触がいいでしょ」

「そうです。そうです」

「水もしっかり吸うしね」

「はい。それに大きいのがいいです」

「そうそう」

幸子と葉子の会話も思い出されます。

(それにしても布巾ために車を走らせるとは。確かネットでも変えたはずなのに) と、俊之介が苦笑いすると「わりと空いてるんですね」と助手席から声がしました。突然声がしたのに俊之介は驚きもしないで「今ぐらいは大丈夫なんや。朝は酷いんだよ。車が動かへんもの」と平然と答えます。夢を思いだしている俊之介はそのことに驚きます。

(あれ? あ、そうだ尚美くんを連れて中宮寺へいく途中なんや。)

助手席には真っ青なシャツに真っ白な短いスカートの鈴木尚美が乗っています。まっすぐな足がきちんと揃えて前に伸びているのですが、裸足です。

「あれ靴はどうしたの。あ、脱いでるんやね」

「ええ、なんだか暑くて、服を全部脱いでしまいました」

「あ...あん！」

俊之介がびっくりして横目で助手席を見ると、誰もいません。

「ああいけないいけない。ふきんやふきんやふきんや」

突然場面が変わり、俊之介は奈良町の石畳を早足で歩いていました。あたりはすっかり暗くなっていて、観光客も帰り始めていました。俊之介は布巾を売っている店へ急ぎました。橙色の灯りがあちこちに浮かび黒い町に滲んでいます。狭い石畳をかつかつかつと歩いていきます。（しまっていないように。）以前にふきんを買った店が見えてきました。俊之介は店に飛び込むように入っていきます。

「いらっしゃい」

「ならまちふきん、二枚ください」

「はいはい」

お金を出そうとして、どこかで聴いたことのある声だなと思って店員を見ると、若い頃の幸子が目の前にいました。

「あ...あ」

「なにか？」

目の前には幸子ではなく、狐のお面を頭に載せた若く美しい男がいました。

「いやいやなんでもないんや、ごめんごめん」

布巾を手を持って店を飛び出ると、どこかで見た街に出ました。あれ、と思ったけれど見あぼえのある街です。近くの標識を見ると「金閣寺前」。（亨のところまで坂を下っていけばいいわけやな。あれ、車は？）

いきなり奈良から京都に飛んでいるのに、おまけに車がないのに何故か俊之介は平気です。風が吹いていました。温かな柔らかい風です。気持ちよくて思わず目をつむってしまいそうです。風に撫でられながら亨と葉子の住む家へ俊之介は歩いていきました。夜はどんどん深くなっていくようです。

もうすぐ家、というところで、行く先に人の姿が街灯の下に浮かんでいました。亨と葉子、それと青いシャツの尚美、狐のお面を頭に載せた美男子。それになんと幸子までいます。

「おおーい」思わず声が出ました。

向こうも手を振ってます。

「おとうさん、どうしはったん」

幸子に言われて俊之介は我に返りました。珈琲豆はとっく挽けていました。

「久しぶりに、見た夢、おぼえてて。それちょっと反芻してたんや」

「へえ。いい夢やったみたいですね」

「けったいな夢やったけど、まあええ夢かな」

「ふふ。よかったやないですか」

珈琲を淹れ、新聞にざっと目を通し、朝食です。

最近健康のためにと発芽玄米。おかずは鮭と納豆、舞茸と若布のみそ汁、ほうれん草の胡麻和え、壬生菜の浅漬け。

「ごちそうさま」

「よろしゅうおあがり」

「ほな行ってくるわ」

「あ、今日、帰りにでも亨のどこ寄ってくれませんか」

「なに」

「これ、葉子ちゃんが『ええわあ』ゆうてたでしょ。うちの余ってるし、一つ持ってっただげてください」

幸子が「ならまちふきん」を俊之介に手渡しました。

「昨日の晩、買うたのに」

「え？」

「いやいやなんにもあれへん。持ってくよ」

「はい。お願いします。ああ、あなた万歩計つけないと」

俊之介は今年に入ってから万歩計をつけるようになりました。幸子の薦めで、夫婦二人ともつけています。目標は一日一万歩。もちろん健康のためです。

万歩計は午前0時で自動的にリセットされるので、ズボンのポケットにクリップを挟んで動き出してからその日の一步目が記録されます。昨夜の夢があったので俊之介は冗談半分にメーターを見ました。最初は汚れかな、とおもいました。画面になにか字が浮かんでいます。

「5198」

(了)



11月。葉子と亨のもとへ福知山の友人からカリンが届きました。友人が移住した土地に以前からあった樹で、毎年、秋に実ができると送ってくれるのです。葉子は早速、玄関の靴箱の上に置きました。これからしばらく、玄関に甘い香りが漂います。

カリンの表面はてらてらと光っていて、玄関の少し昏い光の中だと陶器のように見えるのも葉子は好きでした。

カリンが花田家の玄関でゆっくりと香を滲ませている間にも、季節は晩秋から冬へと駆け足で変わってゆきます。

街に紅い粒子が降ってきたかのように、紅葉する木々は梢から染まっていきます。朝晩は冷え込みだして、とうとう早朝に吐く息が白くなるまでになりました。どの路地でもいくつかの軒先には大輪の菊の鉢が、満を持して並べられます。さながら宙に黄や白や薄紫の泉が湧き出たかのような光景。そして生け垣には山茶花の花が咲き始め、千両や万両が真っ赤な実を垂らしています。

やがて街全体が灰色に覆われる季節の予感にあらがうように、街はまさに錦繡に溢れているのでした。

亨が出勤したあと、お寺の門の前から小学生達が集団登校していきます。当番の親たち三人とお年寄りが二人、集合場所で子供たちを見守っています。親たちは子供たちが出発すると家に帰りますが、お年寄りは学校までついていくのでした。学区には「見守り隊」という老人達のボランティアのチームがあって、子供たちについていく二人もそのメンバーなのですが、今週当番の二人を最初に見たとき、葉子には小学生が二人増えているように感じたのでした。身長が140

センチくらい。高学年にはもっと背の高い子がいくらでもいます。

その背の低いお婆さん二人は双子なのです。「mimamoritai」と背中にプリントされたおそろいの紺のジャンパーは手が隠れるくらい大きくて、それにやはり揃いの緑と白の帽子も大きすぎて顔の半分が隠れています。そして同じジーンズ、白い靴。身長も歩幅も同じ。二人が子供たちを学校まで送り届け、町内に帰ってくる姿を、葉子はいつも「かわいい」と思ってしまいます。

どちらがお姉さんで、どちらが妹なのかは判りませんが、それぞれ三味線と舞のお師匠さんです。

朝日を背に受けておしゃべりしながら歩幅を合わせて帰ってくる二人。葉子はその姿をベランダから眺めているだけで和んでしまい、心が柔らかくなります。

...ふふ、仲いいんやなあ。なにしゃべったはんねやろ...

頭が同じように、くいくいと左右に揺れて、掌をぴっと伸ばして歩いてきます。もうとうに70歳を越しているというのに姿勢がとてもよくて...。姿勢がよいので帽子とジャンパーで体を包んでしまうと小学生に見えてしまうのです。膝や背中が曲がっていたらそうは見えません。

葉子はそんなことを考えてたので、思わず寒さのために無意識に丸めていた背中をしゃきっと伸ばしました。二人が葉子の方を仰ぎ見ました。

「おはようございます」「おはようさん」

子供がそのまま老人になったような顔が二つ、にっこり。

二人の背中を見送ったあと、葉子は台所に戻り、収納からポットを出してぎっと洗いました。明日から亨に渡す飲み物を温かいものにするからです。亨のリクエストは温かいほうじ茶。テーブルの上に置いた買い物メモに「ほうじ茶」を追加します。

そういえば仕事に出かける前に亨がこんこんと軽く咳をしていました。

「ねえ咳してるけど大丈夫？」

「ああ。社長から『お、風邪ひき男に目病み女やな』っていわれてん」

「なにそれ」

「ちょうど奥さんが『めいぼ』（注）ができて眼帯してはったからかなあ」

「は？」

「色っぽってことらしい」

「目はうるうるになるからやろか？風邪ひき男は...」

「へへ。美男子はよう病弱やからなあ」

「あほなこといわんといて。ほんまにだいじょぶなん」

「ごめんごめん大丈夫や。ちょっといがらっぽいだけやし」

「気をつけてね」

葉子は薬箱の中を確かめ、メモに「風邪薬」と加えます。さらに「のど飴」。ちょっと考えて「ヒートテックインナー」と書きました。

「こんちわあ宅急便です」

岐阜の友人から「贈り物」がとどきました。渋柿30個。これも毎年必ず届きます。干し柿にします。買い物メモに「荷造りヒモ」を追加。柿を繋ぐためです。

机に座って一息。紙をもう一枚。

年賀状を考えます。

...やっておかないと...と、葉子は思うのです。冬は駆け足でやってくるから。

「とら トラ 虎 寅さん 」と書いて葉子は時計を見ました。年賀状のことは中断。買い物に出かけます。

さっと化粧をすませ、黒のボックスタイプのコートを着込むと首に真っ赤なマフラーを巻き、大きなキャンバス地のトートバックを肩にかけて外に出ました。

風は冷たいけれどいい天気です。向こうから朝出会った双子の老女が歩いてきました。二人はお揃いのまっ白なウォーキングシューズに明るい黄色のブルゾンを着て、姿勢良く腕をふって歩いています。

「こんにちわ」

「またあいましたね。お買い物」

「はい。ウォーキングですか」

二人はにっこり笑って肯くとリズムよく歩いていきました。葉子は朝よりもさらに可愛らしく感じます。二人は山吹色の長いマフラーで繋がっているのです。

(了)

注・「めいぼ」とは医学用語で「麦粒腫」のこと。瞼の縁にできた小さな痛みを伴う腫れものです。「めぼ」「ものもらい」「めばちこ」ともいわれますよね。筆者の知る範囲の京都では「めいぼ」といいます。

「ああ気持ちいい天気」

幸子のよく通る声に路地の静かな空気が微かに揺れているようです。

「ほんとうに」

玄関の鍵を締めた葉子が幸子の後ろから応えます。二人のすこし前には花田俊之介と亨が並んで歩いていました。

十二月最初の日曜日、今日は花田一家が勢揃いしました。俊之介と幸子が嵐山の紅葉を見た帰りに息子夫婦（亨と葉子）の家に立ち寄り、これから四人全員で俊之介の大好きな京都駅前のアサヒビアホールへでかけるのです。

毎年、紅葉の季節になると同じように家族全員で食事をとります。場所はいつもビヤホール。それも河原町三条から四条あたりの行きやすい繁華街ではなく京都駅前と決まっていました。俊之介の決めたことで、何故そこなのかは誰も聞いたことがありません。料理の質だとかジョッキの大きさじゃないの、と葉子が亨に聞いたことがあります、亨は笑って首をひねるばかり。「駅の近くが好き、っていうのもカワイイと思うけど」などと呟くぐらいで。

亨たちの家の付近から京都駅前へは普通市バスでいくのですが、歩くのが大好きな幸子のリードで西大路を円町まで歩き、そこからJRで京都駅に行くことにしていました。これも毎年同じです。実際のところ、このほうがバスに乗っているより早いことが多いのですけれど。

「ねえねえ葉子さんは今年、紅葉見に行ったの」と幸子。

「行ってないんです」

「ああやっぱりねー。きっと亨も父さんに似て仕事、仕事なんでしょ。あかんなあ」

「でもうちの近所には龍安寺や等持院や妙心寺があるんで、用事で出かけたときに紅葉、見えますから」

「いやいやそういうことやないの。紅葉見物しもってお嫁さんをいたわる、って事やんかいさ」

「いやそれはまあ、へへへ、日々いたわってもうてますから」

「あらま」

どこからか線香の匂いが、葉子たちをすり抜けていきます。さらにしばらくいくと焚き火の匂いに包まれます。冬やなあ、と葉子はあらためて感じるのです。

「常寂光寺も祇王子も綺麗やったよ」

幸子が家で散々しゃべった嵐山の話をもういちどひっぱりだします。

「お義母さんは永観堂や東福寺にはいかはらへんのですか」

「ああそやねえ、東山界限は行ってへんねえ。昔、何遍も行ったからもうええかなとも思うんやけど」

「わたしもそうなんです。ちいさいころに大抵のところ、行ってるでしょう。だから...あ、あそこは行ってないです。岩倉実相院」

「紅葉鏡のとこやね。わたしも行ったことない」

「夏の緑鏡も綺麗だそうですよ」

「こんど一緒にいこか。な、いこいこ」

きらきら光る西大路の緩い下り坂を、冷たい風を頬に受けながら四人は南下していきます。いつのまにか幸子と葉子は俊之介と亨に追いつきました。

「一度死んで四日後に生き返る男がいたんや」

「そうそう。確かそいつは向こうのことをしゃべらへんねんな」

「そしたらもう一人、同じように一度死んで四日後に生き返るのを繰り返しているのがいて」

「で、『しゃべらへん、あいつ』は『あちら』では閻魔大王なんや、と」

「おれはその下で働いているんや、と」

「あんたら何を話してんの」

「は、本の話やけど」

「ほんまに変わった父と子やわ」

「あんたらも楽しそうに なんや話してたな」

「うん。わたしら岩倉実相院に行くねん」

「ああもう散ってるかもしれへんな。早めにいったほうがいいよ。まあそれでもあの板の間は一見の価値ありやけど」

「お義父さんはいったことあるんですか」

「うん、あのぴかぴかに磨き上げられた板の間に感心したなあ。そこに映る紅葉が水に映る紅葉のようで微妙に違うんや」

「わあ見たい」

「静かなときに見たらなおいいと思うよ」

西大路が大きく凹んでその上をJR嵯峨野線（山陰線）の高架がまたいでいます。歩いている人が増え、四人は円町駅に到着。電車に乗ればすぐに京都です。

「おれ70円しかないねん」と、若い男の声。

「えっ、うっそおほんまにそなんしかないのん」若い女の声。

京都に向かう列車の中です。声は座席の葉子と幸子の頭上でかわされているもの。女の子の驚く声に葉子はそれとなく視線をあげながら、どういうことなのかと聞き耳を立てました。ちらりと横を見ると、幸子も興味津々といった目を隠しきれずに葉子をみています。

「ちょっとみせてみ。ほんまなん」

「ほら」

「...ほんまに70円しかあれへん。そやけど財布だけは立派やねんな」

「へへへ」

葉子は上目遣いに財布をちらり...ぶっ。エルメスや...

「そおいえば、あんたは昔からなんでもブランドにこだわってたな」

「うん」

「うんやあれへん。ほんまにないの...いやほんまに70円やわ」

男女とも20代のようです。男はジーンズにまっ白なセーター（ブランドものなのだろうか）女は黒いマイクロミニスカートに黒のレギンス、真っ赤なセーター。葉子は頭の中で声と目に見える範囲内の服装から、二人の関係を想像し始めました。それは幸子も同様かもしれないし、車内で「ほんまに70円」という朗らかな、よく通る声を聴いた乗客たちは皆そうかもしれないでした。

車内の少し離れたところには花田俊之介と亨が並んで座っています。二人を見ていると、以前よりずいぶん似てきたな、と葉子は思います。二人は熱心に何か話し込んでいますが、さっきと同じ中国の昔話なのかもしれません。俊之介の趣味なのですが、なぜか小さい頃から亨はその父親の説話集を読み耽っていたそうなのです。家にもありますが葉子は読んだことがありません。

列車はあっという間に京都に着き、人々がぞろぞろと改札へ吸い込まれるように歩いていきます。コンサートが十分可能な「大階段」を横目に、幸子と葉子は、前方の人の波の中に見え隠れしている白いセーターと赤いセーターを追いながら、その「70円の彼」のことを話していました。

「定期持ってるんでしょ。それとも電車賃払ったら70円しか残らへんかったんかな」

「まさかキセル…」

「ひゃあ」「きゃあ」

「70円をエルメスの財布に入れて、二人はどこに行くんでしょ」

「あれは恋人どうしやね」

「そうですかあ」

「だってあんなことわざわざ言う？」

「『あんた昔から』といていたから幼なじみかも」

「なんか雰囲気的に女の方が年上のような気がしたけど」

「うーん」

「何を話してんの」

亨が二人の背後から声をかけました。葉子が列車の中で前に立っていた「70円の彼」の説明をしながら、四人は改札を抜けて右手へと歩いていきます。

「そやけど、また70円とはな」と俊之介。

「70円しかなくても紅葉は観られるよ」と亨。

「市バスにも乗れへんぞ」

「市立図書館には行けるよ」

「おお」

「『聊齋志異』が読める」父と子が顔を見合わせています。

「そんなことよりさ」と幸子がにこっと笑いました。

「70円しかなくてもピヤホールには行けるみたいやで」

三人が前を見ると赤いセーターと白いセーターの背中がピヤホールに入っていくところでした。

「ははあ」と俊之介。

「なるほどね」と亨。

「と、いうわけや」と幸子。

葉子はくすくす笑うばかり。

四人の想像はもちろん、ばらばらなのですが。なんだかみんな納得したようです。

(了)

11月27日午後五時半過ぎ。

早い夕暮れに空は群青に染まりつつありました。マサルと尚美は北風の冷たい船岡山の山頂で肩を寄せ合い、熱い紅茶を啜りながら上空を見上げています。マサルはポケットからメモを取り出し、パソコンから写しとったデータを確認しています。

「雲が来なきゃいいけど」と尚美。

2009年11月27日

17:49:30 311 (北西) 12

17:52:00 285 (西北西) 79

17:54:30 135 (南東) 14

船岡山は京都市内の北西にある小さな山。この山の頂上に平安京造成時に中心線の始点となった岩が今でも残っています。しかし二人の目的はそこから市内を眺めるのではなく空にありました。天気は良好です。

「そろそろくるよ」

「わあ、どきどきする」

「あ。あれかな？動いてる」

「ん、どれどれ」

方位角311度、仰角12度で京都盆地の北西上空に国際宇宙ステーションが姿を現し、天空にめがけて上っているように見えるはずでした。二人がゆっくりと仰角をあげながら空を探します。

「あ、あれだ！！流れていく」

データどおり北西から南東に向けて小さな赤い輝きがゆっくりと動いていきます。

「あああ高いなあ。それにとっても明るい」

尚美が溜息と一緒に呟きました。

「飛行機どころじゃないんだ。当たり前だけど」

「あの高度だと太陽の光があたっているんだろうね。地上はもうこんなに昏いのに」

球体の天蓋を人に乗せた船が滑っていきます。

「あんなところに人がいるのね。それがテレビじゃなくて肉眼で見えるのが凄い」

「あそこはどうなんだろう、地球の圏外ぎりぎりなのかな。もう宇宙だよね」

「うん。まさに宙船（そらぶね）」

「あんな高みで『船』の中に長時間いるとどんな気持ちになるんだろう。想像を絶する孤独感かな。それとも…」

「それとも？」尚美が空を見上げたまま反芻しました。

「ひょっとしたら地球や宇宙の美しさに陶然となっているのかも」

「無重力というのもあるわよ」

「重しがとれる解放感もあるだろうけれど、どこにも帰属しない感覚はどうなんだろ」

「人間の肉体は重力がある世界で造り上げられ、生きてきたんだもの」

「地上で生きている人類も、このままいったら地上に帰属できなくなりそうだよね」

「…」

見える航跡は長くはなく、僅かな時間で船は姿を消しました。空は冬の暗闇に溶けていきます。

声もなく佇む二人の前から、からからからからと音が駆けてきました。二人が目を凝らして前を向くと、栗の木からいっぺんに落ちた葉が風を受けて走り出したところでした。

☆

12月10日午前五時過ぎ。

葉子は真っ赤なダウンベストを着て弁当と朝食の準備中。亨がテーブルで珈琲を淹れています。テーブルに置いたNHKラジオからは午前五時の放送が始まったところでした。

「あれ、今日は言わないね」

「何？」

「ほら最近、毎朝、見えた！見えた！って盛り上がってたやん」

「ああ国際宇宙ステーションね。きっと航路を変えたんやわ」

「同じところを回ってるんじゃないんだ」

「そう定期的に航路を変えるって昨日説明してたよ」

「ふーん」

「だから今朝は見えないのかも。だいたい日没前か日の出前によく見えるんだって」

「だけど朝から視聴者のメールをオン・タイムで紹介する番組なんてテレビにないよね。早起きしている人たちだけの熱狂みたいでおもしろいなと思ってたんやけど」

「テレビもラジオもそろそろ双子座流星群の話題でしょ。。だけどこの番組だけは宇宙ステーション」

「ふふ、なんだかおもしろいね」

「でもこれからは流星群の話になるんじゃないかな。『昨晚、見ました!』って」

葉子は熱い珈琲をステンレスのボトルに詰めた。ボトルとステンレスのマグカップを小ぶりのナップザックに入れて、テーブルでパソコンを見つめる亨を向いた。

...また宇宙ステーションのメールが届きました。関西の方ですねー。ISSが見えたそうです...

亨と葉子は一瞬ラジオを見つめ、顔を見合わせるとベランダに飛び出しました。ベランダは南西方向が見えます。

「うーん、だめだなあ。方向が違うのかな。雲も多いし。それとももういっちゃったのかな」

「あ。メール、過去形たやったね」

「あ」

二人は寒い寒いといいながら部屋に戻ります。

「全天見えるような場所で待ちかまえないとね」

「航路が変わるということは方角も一定じゃないんだよね」

「うん」

「どこかなあ...」

「船岡山とか」

「どっちにしてもネットで調べてみるよ」

その時から亨は国際宇宙ステーションについてインターネットで検索を始めたのでした。

☆

マサルがISS（国際宇宙ステーション）を自分の部屋から見つけたのは、ほんの偶然からでした。彼が毎日、午前五時に起き、熱いミルクティーを啜りながら南側の窓の外に広がる風景を眺める習慣がなかったら、そのアパート南側で堀河天皇火葬塚の巨大な赤松が枯れ、大きな空が見えるようになっていなかったら、マサルはISSの航跡に気がつくことはなかったでしょう。UFOでも飛行機でも流れ星でもないその正体をマサルもラジオで知ったのでした。

尚美は相変わらず朝のジョギングを欠かしていません。そして走り終わるとマサルの部屋に立ち寄ってシャワーを浴び、いっしょに朝食を摂っていました。マサルがさっき見たという航跡の話聞いたのでした。

尚美の興味はそんなところに人間が「いる」ということ。目をくるくるさせて、おもしろそう、といいます。

「定期的に航路が変わるから。今度は11月の後半に見えるはずなんだ。問題は天気と場所。今度は北西で日没の頃」

「その都度変わるのね。ネットでわかるの？」

「うん」

そうして二人は11月27日、船岡山に立っていたのです。

☆

12月15日午前六時半。マサルの部屋。

マサルと尚美と一緒に朝食を食べています。小さなガラスのテーブルにはベーグルとリンゴとバナナ、簡単なサラダ、そして熱いミルクティー。

二人ともテレビは観ません。マサルの部屋の朝はラジオが流しっぱなしになっているか、バッハのCDが回っているかでした。NHKの午前五時からの番組はもう終わっています。リスナーからのメールは、マサルの予想通り「ふたご座流星群を観た」というものが目立ちました。

「やっぱり流星群のメール、あったね」

「うんあったあった。流星群を見た人たちは徹夜組なのかな？」

「いや寝不足組っていったほうがいいかも」

「全国の『早起きさん』が見ていた宇宙ステーションはどこにいったんだろう」

「北海道の北を飛んでるよ。あ、早朝だけじゃなくて日没も、だろ」

「あ、そうだった。じゃあ私たちは『群青組』。群青色の空ばかり見上げているから」

「ぐんじょうぐみ？幼稚園みたい」

笑顔が二つ向き合います。

f r o m m a s a r u t o n a o m i

今度、衛星が見られそうなのは25日。方角は北北西。時間は六時過ぎ。どうする。

R E :

ベランダからは無理ですね。北の空が開いて見えるのは船岡山？またしても。

R E : R E :

寒いよ。行く？

R E : R E : R E :

「ぐんじょうぐみ」だもん。いきます。イヴからずっとマサルさんのところにいます！！！！

RE : RE : RE : RE :

了解。

☆

12月16日午後八時過ぎ

葉子と亨は夕食を食べ終えて、珈琲を飲んでいるところ。部屋には亨が買ってきたノラ・ジョーンズのアルバムが流れています。亨はジャケットに写っているセントバーナードの頭の大きさに感心していました。

「大きいなあ。かわいいなあ。大型犬好きなねん」

「セントバーナードなら北野の天神さんの近くで散歩してるのよく見かけるわよ」

葉子は夕刊のパズルを解きながら応えます。

「へえ。今度いってみよう」

「あ、今晚、新月」

パズルを解き終えた葉子は柿をむくために立ち上がり、たまたま目をとめたカレンダーを指さしました。

「真っ暗だから、ふたご座流星群、まだ見えるかもよ。見る？」

「いや、いいや。ぼくは寝不足で仕事をしたくないし」

「そうやったよねー。わたしも寝ちゃうかもしれないなあ」

「そうそう例の宇宙ステーション、調べたよ」

「今、どこ飛んでるの」

「北海道の北。で、今度見える『予定』は25日の夕方。六時過ぎ」

「もう真っ暗やね」

「方向は北北西から回ってくる」

「短い時間でしょ」

「ほんの数分。それに天気がどうかな」

「じっと待ってるんじゃないくて、その時間にいけばいいんだから、いこいこ」

「船岡山？」

「そう」

クリスマスまであと9日。晴れますように、と願う四人の「ぐんじょう組」です。

(了)



一月四日、月曜日。

二〇一〇年の正月は三日が日曜日だったので、多くの店や職場と同様に亨の仕事始めも月曜日からとなりました。よく晴れた朝です。

「おめでとうさん」

「おめでとうございます。今年もよろしくお願いします」

と、いっても新年早々の急ぎの仕事はなく、その日は店の奥で社長と奥さん、亨の三人は明日からの段取りを調整したり、商品の点検をしたり。

午前十時過ぎに奥さんが珈琲を淹れて休憩に。電気ストーブを三人が囲みます。

「花村君、初詣はいったん？」

「宗像神社にいきました」

「へえ御所までいくん。遠いのに一」

「なにゆうてんのあんた。うちの伏見稻荷のほうがよっぽど遠いわ」

「はは、そらそうやな」

京都で「お商売」をしてはる人の多くは商売繁盛の願いに伏見稻荷へゆきます。

仕事から帰った亨は、台所に立ってそんな話を葉子にしながら調理中です。

冷蔵庫ではおせちが不揃いに残っていました。、数の子やお煮染めはなくなったのですが、黒豆とか蒲鉾などは残っていて、それを組み合わせつつ、ご飯を炊き、塩鮭を添えた葉子の献立に亨が一品付け加えようとしているのです。亨が帰宅しての第一声は「葱のたくさん入った卵焼き

がなんだか無性に食べたい」でした。

葉子はおかずをずらりと並べたテーブルに肘を載せ、その上で組んだ手に頭を載せて亨の広い背中を見えています。部屋には去年の暮れから部屋によく流れるノラ・ジョーンズの歌がちいさく。

「それでさ、ほら、除夜の鐘のこと聞いてみたんよ」

大晦日に花村家では除夜の鐘が、四方八方で打たれているように聞こえてきたからです。葉子と亨は「北の等持院の鐘なのか、南の妙心寺の鐘なのかわからへんね」と、ベッドの中で半分眠りに落ちながら去年最後の会話を交わしたのです。

「社長は『そら妙心寺やろ』て言わはんねん」

亨の家に限らず、寺の多い京都では除夜の鐘が重なって聞こえてくる場所が結構あるのです。ただし亨と葉子がそんなふうにしたのは初めてのことでした。

「わたしの『説』といっしょやわ」

「いや、そやけどなあ一距離で言ったら等持院やおもうんやけど。それになんとか音が回ってたような気もするし」

「鐘のが大きさとか、鐘楼の高さとか」

「うんまあそんな理由なら納得いくねんけどな」

「花村君、そら妙心寺やで」

社長は自信たっぷりにいうのでした。亨は、等持院のほうが自分の家から近いと主張するのですが、「いやあ妙心寺やろ」とだめ押し。

「なんといってもあそこには狸がおるしな」

「は」

奥さんは、また始まったとばかり、ににやにやしています。

「花村君は狸を知ってるな」

「あの、ぽんぽこぽんですか」

「そう。そのぽんぽこぽん」

そうやって社長は手を組んで前屈みになりました。

「親父が昔、仕事の帰りに毎晩、妙心寺の境内を走り抜けてた時の話や」

妙心寺は京都市右京区にある臨済宗妙心寺派の総本山。多くの塔頭と伽藍を有する境内は広大で、北は一条通り、南は木辻通りに面しています。その門についている木戸は常に開けられていて、昔から南北を貫く長さ五百メートルほどの石畳を市民が自由に通行しています。

「すると必ず同じところで自転車のランプが消える、言うねん」

「は？」

「親父もわしと同じで幽霊やらUFOやらわけのわんらへんものは、まったく存在を認めへんという人間やったんやけどな。あんまりにも毎日同じ所で消えるんで考えた。である日『やっとわかった。超常現象やなかったで』と、わしにゆうたんや」

「どうやったんですか」

「『狸が消すんや』て。あれ？なんで笑うん。まあええわ。わしも最初は気のせいやろ、とゆうてたんや。消すところみたんか、て。ところがある日、わしが太子道のほうで仕事があった帰りの晩に妙心寺を通ると、親父のゆうてたあたりでライトがぼんって消えるねん。で、通り過ぎるとすぐにまた点くんよ。あ、これか思て何度か行ったり来たりしてみたら。やっぱり同じところで消えるんや。石畳の段差のせいではないしなあ。不思議やったでえ。親父に言うたら『ほらみてみい、狸ぢゃ』て。そやからな花村君、そんな狸やから鐘の音ぐらいなんぼでも飛ばせるやろ」

「いやいやいやいや、ちょっと待ってください。だから、わけのわからへんものや超常現象を信じないという社長や社長の親父さんが、なんでそこで『たぬき』なんですか？」

と、亨が言うと

「あれ？狸のこと知らんの？」

と、社長はあきれたように言うのです。そんなことも知らないのか、という表情で。

「はあ」

「あんた一度『妙心寺の狸』って新聞に投稿したらどうなん」

奥さんが笑いながら言います。

「奥さんは社長みたいな事に遭うたことありますのん」

「うん何遍もあるよ」

「で、やっぱり...」

「そなん狸に決まってるやん。ははははは」

「いやだから何故それが...」



「つまり、狸が理由になってんの」と、葉子。

「わけわからへん」

亨は葱たっぷりの卵焼きを皿に盛りつけながら言います。

「そのほうがおもしろいやん」

「まあそらそうやけど」

「ふふ、案外社長夫婦が狸やったりしてね」

「もうええわ」

「そうそう澤田さんがね」葉子が話題を変えた。

葉子は、町内の『鈴木さんの椿』を管理している澤田さんの姿を年末からまったく見ていなかった。十二月三十日、大晦日と遠くに嫁いでいる娘さんが帰ってきていて、何人かの人と一緒に大掃除をしている様子は知っていたのだけれど、澤田さんの姿はなかったのだった。

「入院しはったんやて。今日、大宅さんが『そやから回覧板は一軒飛ばして回して』て、言いに来はったん」

「具合悪いんやな」

「娘さんは検査入院としか言わはらへんそうやけど、背中が痛くて胃腸も調子が悪くて食欲がなくて...」

「インフルエンザかも」

「どうもなかったらええねんけどね」

「なんだか路地がどんどん寂しくなるような」

「そやねえ」

二人は夕食を食べ始めました。

「今ふと思たんやけど」

葉子が亨に言います。

「仮に社長さんたちが当然のように認めてる妙心寺の狸がほんまにいたとして、やっぱりいたずらしかせえへんのかな。例えば人の病気を治すとかできたらええのにね」

「はは。そやなあ、狐はお稲荷さんで商売繁盛の神さまになってるんやし。ちょっとゆうてみょうか」

亨は天井の蛍光灯に向かって、ひやかすように語りかけました。

「妙心寺の狸さん狸さん、聞こえていたらお願いします。澤田さんの病気を治してくださいな」

亨が「なあーんてね」と言おうとした時、蛍光灯がふっと消えました。

翌朝、亨を送り出した葉子は門掃きをしていました。寺の山門から内側へ。静まりかえった澤田さんの家がどうしても気になります。カーテンを閉め忘れた二階の窓は暗い部屋の影を映すばかりです。葉子は溜息をついて、椿と木瓜の前を掃いていきました。寒風の中で枝が揺れています。葉子は立ち止まって思わず見入りました。この寒さの中で二つの木が共に枝いっぱい花蕾を膨らませているのです。木瓜の蕾は桃色に染まっています。葉子は心の中でお願いしま

した。

...花が咲くまでに澤田さんが戻って来れますように...

もちろん「妙心寺の狸さん」にお願いしたのです。

(了)

氷点下の「御札」



「がっしゃーん」

早朝の街の空気を割って自転車がひっくり返る音。つづいて
「誰やこんなところに水撒きやがって」と、怒声。

今年は例年になく寒い冬なのですが、正月を過ぎると冷え込みはさらに強まり、毎朝、気温は氷点下となりました。それなのに、それでなくとも凍結する道路にわざわざ水を撒く人物が花村家の町内にいたのです。

その町内では大宅さんが白地に藍の模様の入った火鉢にプリムラジュリアンをいっぱい植え込んでいて、そこだけが華やかなのでした。赤、黄、青、白の花、そして氷点下の寒さに負けない肉厚の葉の緑も目の覚めるような鮮やかさです。

亨は仕事の帰り道に、星がとてもよく見えることに気がつきました。冷え込みが厳しくなるほど空気が澄み切っていくようです。雪雲は北の山でブロックされ、乾いた氷点下の風がもの凄いスピードで駆け抜けているのだな、と想像します。

葉子は、夕刊を取り込むとき、日没が遅くなったいることに気づきました。午後五時でも明るいのです。また買い物帰りには小さなお寺の門の横で蠟梅（ろうばい）が黄色い花を咲かせているもみつけました。そこだけの甘い香りも。

（朝は氷点下が続くけれど季節は確実に進んでいるんやわ）

葉子はそう思います。

尚美は氷点下の朝でも相変わらずジョギングを続けていました。日の出はまだそれほど早くはなっておらず、東の山際が橙に染まり出す頃です。

今日はマサルも一緒でした。何故ならこんな氷点下の朝に道路に水を撒く男を目撃したからです。

それはどうやら花村家の町内の男で、毎朝、神社の前で水を撒いているのも、路地のお地蔵さんの前でも水を撒いるのも彼の仕業のようなのでした。尚美が目撃したのはお地蔵さんの前で般若心経を唱える姿なのですが、男性が引き上げたあと、その場では水が凍っていて、尚美は仁和寺から引き返して来ては、自転車や歩行者が滑って転んでいる場面に何度も遭遇したのです。そもそも撒いている水は二百メートルほど離れた神社から薬罐に汲んできているようです。日によって、薬罐から水をこぼしながら歩いている男の姿も見たことがあるのです。

彼は毎朝、神社でこうべを垂れ、お地蔵さんの前で般若心経を唱え、我が身の安寧と繁栄を願いながら、多くの人を転倒させているのです。ひとこと言ってやろう、と尚美は思ったのですが、一度ちらりと見た男の眼に不穏なものを感じたのでマサルについてきてもらったのです。

太子道を尚美とゆっくり走りながらマサルは満月の夜に見た椿のことを話します。

「あまりに月が明るいからちょっとだけ散歩したんだ。椿の葉が輝いていてたんだけど、輝く葉も葉の影も青く染まってるようにみえたんだ」

「ああ月の光だとそうかもしれない」

「で、青い影が動いているように見えたんだ。黒だと沈むけど青って流れているようなイメージがあるのかな。なんだか生きものがそこにいそうな感覚」

「なにかいそう、というのなら私は闇夜のほう。新月の杉林とか。路地の入口の門の影とか、闇をさらに墨で塗りつぶしたような、っていうか目が慣れてこない、ただ真っ暗なんだけど、何かそこにうずくまってるような気がしたり」

「へえ闇夜を歩くんだ」

「走るんです」

二人の前方に神社の狛犬が見えてきました。路面がきらきらと輝いています。

「凍結してる」とマサル。

男はもう神社から立ち去ったようです。

「こんなところに水を撒いたらどうなるか想像できないのかしら」

「つまり自分のことだけなんだよ」

「自分？どういうこと」

「夏の打ち水と同じ感覚で水を撒いてるんだよ。たぶん本人はいいことをしていると思ってるよ。塵を流して清めているって」

「えー信じられない」

「葉子さんにも伝えたの？」

「うん、電話で。現場でわたしも言う、って言ってたけれど…。ほら祠の修理の間、お地蔵さんを亨さんとマサルさんで運んだことがあったでしょ。あの時、ただひとり反対して、修理の間、

お地蔵さんも祠もない台座に向かってお経を唱えていた人に違いないって」

「ああ、あの家の人か。うーん、それにしても今朝は一段と水を撒くのが早いんじゃない」

マサルが凍結防止剤を撒いて、二人はお地蔵さんの祠へ向かいました。

「何か悪意があるのかしら」

「そのほうがわかりやすんだけどね」

黒いニット帽を被り、ベージュのジャンパーと紺のオーバーパンツをはいた男が低い声でお経を唱えています。お地蔵さんの祠の横にはアルミのやかんが置かれていて、路面には水が撒かれていて、すでに光り出していました。

「もしもし」

マサルが声をかけると、男の俯いた眼鏡の奥が、ざらりと横に動きました。

「路地のこんなところに水を撒いたら危ないじゃないですか。人や自転車が転ぶでしょう」

返事がありません。男は急に般若心経を途中で打ち切り、立ち去ろうとしました。

「二度とこんなことは止めてくださいよ」

男が振り返りました。

「清めた場所でこけるのはそいつの心がけが悪いからや」

「滅茶苦茶なことを」

「うるさい」

男が立ち去ったあと、マサルは水溜りを靴で掻きだし防止剤を撒きました。

「もうやめてくれるかな」

「うーん、わからない。近所の人たちから一言あれば変わるかも」

午前六時過ぎ、朝食の準備中に尚美から携帯で連絡をもらった葉子と亨は、お地蔵さんの前に様子を見に行きました。どうやら凍結はしていないようです。

「明日もやるかもしれないって尚美さんが言ってたけど」

「どうしても水を撒くんやったら、町内全体で話しせなあかんなあ。また、こける人がでるし」

二人が家に戻ろうとして、その男、土生さんの家の前を通りました。

「あれ。なんやこれ」

亨は土生さんの家の表札に何かが貼りつけられているのを見つけました。

「こんな悪戯するから、あの人も余計に意固地になるんや...」

そうやって表札を覗き込んだ亨が思わず噴き出しそうになりました。

「どうしたん」

亨に変わって覗き込んだ葉子も噴き出しそうに。

二人は笑いをこらえて家に戻りました。

「ああおかしい」

「はは、やるもんやな」

土生さんの表札にはサロンパスが貼られていたのです。それもたぶん使い終えたものでしょう。指紋やら細かな毛がついています。

「たぶんもう水は撒かばらへんよ」

「あのサロンパスにはいろんな意味が込められているんやもんねえ」

「すくなくとも『なんでか』は考えはるやろ」

「最強の『お札（ふだ）』ってことやね」

氷点下の寒さの中、サロンパスはカチカチに固まっていた。

次の日、尚美からもう水が撒かれていないことを二人は知らされます。表札のサロンパスはまだ貼られたままだったそうです。

（了）

節分の次の日。葉子は家の土地を借りているお寺に、毎月の地代の支払いにゆきました。空は晴れ上がり空気は冷え切っていて、道には昨晚、鬼めがけて投げられた豆がいくつも転がっていました。

葉子は一年で一番寒いのはこの頃だと思っています。だけれど、それは春も近いということだ、とも。例えば大宅さんの庭で水仙の花が咲いていたり、天神さんで梅がほころび始めてるように。そうそう澤田さんも退院して家に戻ってきています。

お寺の広い板張りの廊下の端で、葉子は管長さんが支払いの事務手続きを終えるのを待っていました。

古い禅宗のお寺です。お寺の歴史は室町時代から続いているのですが、何度も火災に遭い、現在建物は江戸時代のものです。

玄関は吹き抜けになっていて、葉子の頭上で真っ黒な太い梁ががっしりと組まれているのが剥き出しになっています。玄関から三段上がると広い廊下。その端を区切って、観光客に入場券を販売し、絵はがきや禅宗の高僧たちの筆蹟集などを販売する受付スペースがこしらえてあります。

すべてが木造。葉子から右手へ伸びていく築二百年以上経過した廊下は黒光りしていて、凄みを帯びているように感じます。廊下の突き当たりには達磨和尚の古い襖絵があって、そこから右へ回り込むと、去年の秋、亨とマサルがお地蔵さんを運び込んだ方丈に出るのですが、葉子はそこまで入ったことはありません。

葉子の左手は管長一家の居住する建物につながっていて、廊下から衝立で仕切られた向こうに畳敷きの部屋が続いていました。その部屋に古い台帳やらノートが立てかけられた本棚と、はんこ、ボールペン、鉛筆などが突っ込まれた筒が置いてある文机がありました。衝立の裏にはもう一つ机があるようで、度の強い眼鏡をかけた管長さんが文机と衝立の陰とをいったりきたりしています。台帳と通帳をつきあわせているようです。

毎月のことですが、支払いの手続きはとてもゆっくりとしています。そのことに葉子はすっか

り慣れていて、いつもその間、古いお寺の壁や柱や前庭を眺めているのです。黒光りする廊下も、よく手入れされた前庭にも中年の女性がいて静かに掃除をしています。

「おやおや、どちらへお買い物？」

衝立の向こうから女性の声が聞こえてきました。

畳の部屋の向こうは大きな台所になっていて、そこも衝立一つで区切られています。天井は高く、仕切りが衝立だけなので部屋の風景が一部だけけれども見えます。だけど誰なのかはわかりません。

「ははは。あらあほんまに、どちらへいかれるの」

別の女性の声もします。

「あ」

小さい声が衝立の裏から聞こえました。管長さんが衝立から頭だけを出して葉子を見て苦笑いです。

「ごめんなさい。墓地管理料の台帳とまちごうてしもうて。いますぐしますから」

「はいはいわかりました」

これもいつものこと。危なっかしいようですけれど間違えられたことは一度もありません。ただ、とにかくゆっくりとしているのです。

台所のほうからは、「ふふふ」とか「ははは」と笑い声が聞こえてきます。随分楽しそうやな、と思いながら、葉子はこのお寺が女性ばかりなことに思い当たりました。近所の話では管長さんは前管長さんの娘さんで、いわゆる執事のように寺の宗教行事を仕切っている男性のお坊さまは本山から派遣された方、とのことでした。その男性以外は掃除も案内も接待も、そして墓地の管理から貸している土地の管理まで、すべて女性たちがこなしているのです。

庭に、廊下に、台所に、そして今、帳面とにらめっこをしているであろう衝立の裏に、と女たちが散らばっています。

また笑い声が聞こえてきました。一瞬、葉子には、女ばかりの匂うような空気が、古い建物のなかにひろがった気がしました。しかし黒光りする廊下がすべてを吸い込んでしまったかのよう、すぐに、しんとした空気に戻ります。

「あれあれ、またお買い物？」

と、また台所から。

葉子は不思議に思いました。確かに向こうは台所ですけどその外は、つまり勝手口の外は道路に面していません。長い土壁があるばかりなのです。お手伝いの同僚がちょっとした買い物に出るための会話にしては、少し妙です。

そうしているうちに台帳と通帳への記帳はようやく出来たようです。

「どうもお待たせしました」

そういいながら管長さんが衝立から姿を現したとき、向こうの台所からも何かが動く気配がし、こちらに向かって音もなく子猫が駆けてきました。スーパーのレジ袋を口にくわえていました。水晶のような眼をしています。

「あらあ、かわいい」と、葉子。

...なるほど「お買い物」やね...

「うちにご飯を食べに来る野良の『お母さん』が庫裏の縁の下で生んでねえ、うちで面倒みなあかんようになりましてん」

管長さんは顔をくしゃくしゃにして嬉しそうです。

「あの、襖とか文化財とかひっかきませんか？大丈夫ですか」

「はい、あちらには行きしません」

子猫は葉子の顔をじっと見ると、袋をくわえたまま、台所のほうにたっと引き返していきました。

「あらあ、お帰り。何こうてきたん」

女性の明るい声が聞こえてきます。

葉子は、まるで明日にでも春が来るような気がしたのでした。

(了)



二月の半ばを過ぎた頃、マサルの住んでいるアパートから西へ一筋離れた家の前庭でミモザが咲きました。尚美は早朝のジョギングでミモザに気がついたのですが、その黄色の小さな花がびっしりと枝についた様子を、雪が積もっている、と勘違いしたのです。数メートル手前まで行ってようやくそれが花だと気がついたのです。

「どこにも雪なんて積もっていないのにね。去年だって見てるはずなのに…。ミモザって葉っぱが『お辞儀』してるでしょう。そこにあの房になった花が載ってるから、あ、雪だ。って」

「人間の思いこみっておもしろいよね。あの『かたち』と『氷点下近い気温』。その二つで「雪」と認識するんだもん」

と、マサル。

「あと色。昼間見たらあれだけ鮮やかな黄色は雪だと思わないでしょ。日の出前でモノクロの世界だったから」

「でも真下にいく前にわかったんだね」

マサルは向かい風に眼を細めながら尚美に応えます。

「うん、何か変、という気持ちはずっとあったんだけど、香がしたとたんに。あ、花なんだって」

「そうしてみると香ってすごいね。いろんな思いこみをいっぺんにひっくりがえすんだから」

二人は今出川通りのパン屋さんに向かって歩いていました。明日は月曜日。花村家での朝食会にふたりでおいしいパンを持って行くことにしたのです。

冷たい風がとても強く、尚美はマサルと腕を組んで、ぴたりと体をつけています。

交差点で止まった二人の視線の先には、横に長く伸びる小さな山の斜面があって、雲の影が踊るように流れていました。

「まるで竜が暴れているみたい」と、尚美。

信号が変わり歩き始めると児童公園で太極拳をしている人たちに出会いました。全員がお婆さんです。ラジカセから流れる音楽に合わせて、ゆっくりと手足を伸ばしています。

「ゆったりとしているけれど眼が集中しているよね」

通り過ぎながらマサルが呟きました。

「自分の体の内側を見つめる眼？それに呼吸が大切なんでしょうね」

「お婆さんなのに、とても柔らかいなあ」

思わず背中や腰を伸ばして歩く二人なのです。

*

月曜日の朝です。マサルと尚美のリクエストでミネストローネをつくった葉子は、家の前を掃除していました。

人の気配に顔を上げると澤田さんが茫然とした表情でお寺の山門の前に立っていました。葉子が澤田さんの姿を見るのは、澤田さんが1カ月の入院から帰宅されてから初めての事です。葉子は思わず息を呑みました。澤田さんの染められていた髪はまっ白になり、脚も腕も身体もますます細くなっていたからです。だけどそのことより葉子が驚いたのはその眼でした。

...見ているようで、どこも見っていない...

「あ、おはようございます。澤田さん。どうですか具合は」

なんの答えもありません。そもそも眼の焦点が合っていないのです。

「今日はゴミの日？」

「いいえ明日ですよ、澤田さん」

零度近い気温なのに、薄いパジャマにカーディガンを羽織っただけで、素足にサンダルです。生気が感じられません。

「あ、明日」

そういうと澤田さんはゆっくりと踵を返しました。葉子は言葉を失って立ち尽くしてしまいました。

「花村さん」

振り返ると葉子と同じように箸をもった大宅さんが立っていました。

「どう思う」と、大宅さん。

「どうって」

「澤田さんのこと。娘さんが毎日、介護のために来てはるやんか。その時に聞いたんやけど、家に帰ってきた時『ここは私の家と違う』ていわはって大変やったそうなんよ」

「お腹の具合が悪くて入院したってきいたけど、そのなんていうか...」

「うん。入院した途端、認知症っていうかボケが急に進んだみたいなのよ。娘さんは、あんな母を見た事がない、っていわはんねん。で、お医者さんが『脳のリハビリせな』いうんで退院はったそうなんよ」

「そんなに急に」

「高齢の人には環境の変化は禁物なんやて。よく、よかれと思って田舎の親を都会に呼び寄せたら、急にボケることがけっこうあるらしいの」

「ふーん、そうなんや。だけど病気になったりしたら仕方ないしねえ」

「そう。そこらへんがねえー。難しいのよねえー...。だけど今、澤田さん『ゴミの日?』って聞いてはったでしょ。『自分の家やない』て、ところからは回復してるといえへんやろか」

葉子がついさっき見た澤田さんの眼が忘れられず黙っていました。

「うん。戻ってきてる」

大宅さんは葉子の答えを待たず、自分に言い聞かせていました。

「花村さん」

「はいっ」

「娘さんも、ヘルパーさんもいつもいはるわけやないから、澤田さんの事、私らで気いつけときましょ」

葉子は黙って肯きました。

*

レーズン入りのライ麦パン、カマンベールチーズを焼き込んだパン、玄米パン、クロワッサンと買い込んだ二人は、近くの北野天満宮を覗いてみる事にしました。梅苑でも境内でも梅が咲いているはずです。

大鳥居から石畳をまっすぐにすすみ、石段を上がったところで二人は振り返りました。右手に梅苑を俯瞰できます。

「もうずいぶん咲いてる」

「今月になってから何度も氷点下の朝になったけど、梅はどんどん咲き始めてたんだ」

苑内では紅白の梅花が塊になりつつあります。

「夜になるとこれも『雪』に見えるかも」

「ミモザといっしょね」

「境内もみようか」

二人は前に向き直り、門をくぐっていきました。境内の至る所で紅白の梅花が微かに揺れていました。

*

「おはようございます」

葉子が振り返ると、パンの入った紙袋を抱えた尚美とマサルが並んでにっこり笑っています。マサルの手には紙に包まれた、花のついた枝が数本握られています。

「おはよう。お、それが街で評判のパンやね。楽しみやわ。マサル君の持ってるのは紅梅？」

「桃の花です。白梅町の花屋さんで売ってたんで。どうぞ」

「わあ嬉しい」

「亨さんは？」

「珈琲、淹れてるところ。さあ行きましょ」

三人が家に向かって歩き始めた時、葉子は寺の山門の影に立ち尽くしている澤田さんの姿を見つけました。

「あ、二人で先にいってて」

葉子は澤田さんの後ろに近づいて行きました。澤田さんは、自分の家の横にある椿を見上げています。『鈴木さんの椿』です。葉子は澤田さんの視線の先に見当をつけました。じっと探っていると葉の陰に隠れて紅い花がほころんでいます。

「あ、一番花ですね」

葉子の言葉にゆっくりと、とてもゆっくりと澤田さんが振り返りました。能面のような顔です。

「それは桃？」

「ええ」

「いま香がしました」

葉子は桃の枝を一本、紙包みから抜き出して澤田さんに手渡しました。

「どうぞ」

澤田さんは黙って枝を受け取ると花に顔を近づけます。じっと何かを考えています。葉子は澤田さんが微かに微笑んだように見えました。

ぱたぱたぱたと、つかかけの音がします。大宅さんが向こうから駆けてきました。

(了)



三月が近づくとつれて雨の日が増えてゆきました。そしてその雨はつま先から凍える程に冷たくはなくなり、雨上がりの街の空気が柔らかくなったように葉子には思えるのでした。まだ寒さは残るものの、日に日に暖かくなり、昨日は買い物に行く途中で沈丁花が咲いているのを見つけました。あとは桜の開花を待つばかりの街です。

葉子は尚美と一緒に烏丸一条の「とらや」まで行く途中です。どちらかが疲れたらバスに乗ると決めて、歩いていく事にしました。二人とも雨上がりの澄んだ空気が好きなのです。もちろん散歩も。

「とらや」には雛祭りのお菓子を買に行きます。月曜日の食事会で話題が出たのですが、マサルと尚美は「とらや」は東京のお店だと思っていたのです。それを知った亨と葉子がそうではなくて、もともとは京都の店であることを力説したのでした。

「東京に遷都した時に『ついていった』お店の一つなねん。御所の周りがあった和菓子屋さんの中にもたくさん東京へ移っていったお店がある、て子供の頃聞いたの。『とらや』さんは御所の横の店を残して東京へ出ていったんやけどね」

「『とらやの羊羹』て、有名でしょ。てっきり東京のものだと思ってたな」

「御所の『御用』だったところで天皇さんについていったお店はほかにもあるよ。たとえばお香

の鳩居堂とか」

「あの銀座にある地価日本一でよく紹介されていたところですか」

「そうそう。寺町三条下がったところにあるやろ。まあ『とらや』も鳩居堂も今では東京が本社やとおもうけど、もともとは京都なねん」

「それにしても『東京に遷都』って京都ですねー」

で、ついでに綺麗な庭園も見ようかと、「とらや」へ行くことになったのです。お菓子は安くはないけれど年に一度の雛祭りですから。

家を出ると澤田さんとばったり出会いました。クリーム色のスラックスに柔らかそうな薄い紫のシャツを着て、まっ白なズック靴が道に浮かんでいるようです。

「おはようございます」

葉子がそういうと、澤田さんは声ではなく満面の笑みを返してくれました。

...ずいぶんよくなってきはった...

ふと見ると、中指と人差し指で真新しいセブンスターを挟んでいます。澤田さんは愛煙家でした。葉子にはその挟み方がなんとも優美に見えます。細い沁みだらけの指だけれど、とても美しい、と。

それからお寺の森の横の道を歩いていると、ウグイスの声が聞こえてきました。

...ほーほけきよけ...

...きよけーきよけきよけ...

「春告げ鳥も本調子やないわね」

葉子はそういうと声の聞こえた梢に向かって

「ほーほけきよ」

と、声をかけました。

「ウグイスはね、鳴き真似で声を覚えるって聞いたことがあるの」

「え、ほんとですか」

...ほーほけきかきよか...

「ほーほけきよ」

...きよっ きよっ...

「ほーほけきよっ」

...ほーほけきよきよ...

「あっ惜しい」

「ほーほけきょ」

...ほーほけきょ...

「ふふふ」

二人は森の横を過ぎ、街の細かな通りを選んで歩いていきました。

「葉子さん、瀬戸内には春告げ鳥と同じように『春告げ魚』がいるんですよ」

「へえ愛媛の方で？」

「知られてるのは神戸のものなんですけど」

「あ、それなら知ってる。『いかなご』でしょ」

「そうなんです。私『くぎに』が大好きなんです」

「あ、私も好き。今年はもう水揚げあったんかしら」

「大漁やったみたいですよ」

「ほなら『とらや』によったら錦市場までいってみよか。今年の初物があるかもしれへんやん。

バスですぐやし」

「はいっ」

二人の足は西陣を抜け、どんどん南東へ向かいます。尚美は毎朝、走っているのが平気なのですが、しっかり歩く葉子に尚美は感心していました。しかも時々鼻歌を歌いながら歩いています。さっきは「ひなまつり」も続いて「ロビンソン」。葉子が黙っているときは次の歌を探しているような気になります。

「うったうたうー」

「え、なんですかそれ」

「大好きな小説に出てくるの。小説読む？」

「はい。こんど読ませてください」

「うん」

二人は御所横の烏丸通りにでました。まっすぐ南に向かって歩いていると、前から小学生の女の子が歩いてきます。もう下校する時間になっていました。

女の子はピンクのパーカーを腰に巻き付けて歩いています。濃紺の半袖Tシャツとジーンズの短いスカート。（寒くないかしら）背中までの髪が後ろに流れています。近づくにつれて少し怒っているような表情がわかりました。伏し目がちに口をきっと結んで早足で歩いてきます。家の隙間や細い路地から西陽が女の子に当たります。そのたびに顔が、、脚が、腕が輝きます。

すれ違うときに、葉子はその金色に光るうぶ毛の腕を見ました。その瞬間、それがまるで初めて世界へでてきた「もの」のように感じたのです。体に電流が走ったようでした。

「その腕」はまるでこの日を待っていたかのように思えました。北風に寒さを感じなくなるの

を待っていたかのような。まるで無防備なまま世界に現れた、はかなさすら感じさせるほどの肌理の細かな白い肌。

葉子は目を奪われました。

「もう春なんですね」

思わず立ち止まり振り返った葉子の背中を追い越してゆく尚美の声と視線も、去っていく少女の方に向けられていました。

(了)

●東京赤坂・京都烏丸一条にある「とらや」は「虎屋本舗」ではありません。

<http://www.toraya-group.co.jp/main.html>

●鳩居堂はこちら。

<http://www.kyukyodo.co.jp/>

●「うったうたうー」については江國香織・「左岸」（新潮社）を参照されたし。

●「ロビンソン」はスピッツの曲です。

卵白のように白い布に塗りたくられた緑色の砒素
押し潰されたイチゴ！ さあ眼を楽しませよう

「美術 一九一〇」・エズラ・パウンド

毎朝のシャワーの最後にマサルは軽石で両踵をこすります。踵がすぐに白く角質化するマサルの、欠かせない日課です。出しっぱなしの41℃のシャワーが背中一面にあたってひろがっていきます。その感触も、毎日、踵を更新しているような気分もマサルは好きでした。

左足、そして右足…。

チノパンと桃色のセーターに着替えたマサルは散歩に出かけました。外はよく晴れていて時々冷たい風が吹いています。風は、時々耳元で「ぐわん」という音を残したり、音もなく頬を撫でていたりします。どちらもシャワーを浴びたばかりの顔には心地よいものでした。

南に向かって歩き、突き当たりを曲がり西へ歩いていくと私立中学校の正門前を通過します。卒業式の立て看板が出ていました。中はしん、としています。

マサルは唐突に木島先生の事を思い出しました。あまりに突然だったので思い出す「理由」を探しました。

例えば、あの日もこんな天気でこんな風が吹いていて、こんな気温だったのだろうか、とか。あるいはあの日と光量がぴたりと同じなのだろうか、とか。それともただ「中学校」「卒業式」という言葉が記憶の鍵穴にぴたりと符合したのだろうか、とか。だけどマサルはそんな詮索をすぐに止めました。その日の思い出が次々と頭の中で展開していくからです。思い出しながら散歩道に選んだ禅寺の広い境内にひろがる石畳を歩いていきました。

いくつもの塔頭の白い土壁がいつもと違う存在感で目に入ってきます。

「白い土壁」はマサルの、中学の美術の先生だった木島先生と関係があったのです。

「濁」

木島先生は黒板にその字を大きく書くと、美術教室の生徒たち一人一人の顔をのぞき込むようにして全体を見渡しました。

「これ、なんて読む？」

誰も答えません。

「一年生だと無理かな」

「にごり、です」

教室にマサルの声が響きました。

「そう。いま言ったのは誰？」

マサルは立ち上がりました。

「波多野です」

「君か。これが読めるのはエラいぞ。うん。」

マサルは何がそんなに偉いのかわかりません。「だく」と読まずに「にごり」と読んだからなのか。それともなにか違う意味でもあるのか、マサルはとまどいながら着席しました。

「みんな、濁りのない色を考えてごらん」

その問いは簡単なようで難しい問題でした。「単に絵の具のチューブから出てきた色が濁りのない色ではないぞ」と、言われます。さらに「色を混ぜたことが濁るということでもない」と。

「さあどうだ」

先生はまたみんなを見回しました。先生は長めの真っ黒な髪をオールバックにして、とても大きな眼をしています。背が高く、肩幅がとても広くて焦げ茶色のセーターが似合ってるなあ、とマサルは感じていました。

「そのことを考えながら風景画を画くこと」

それが課題として出されたのですが、木島先生の授業はそれが最後になりました。

木島先生は翌週から心臓の持病が悪化したために学校を休まれ、一ヶ月後には退職されたのです。マサルたちにはたった一度の授業でした。

新しい先生は穴吹一郎という名前の、眼鏡をかけたとても痩せた男性で、目の覚めるような真っ赤なセーターを着て最初の授業に現れました。そして自分が木島先生の大学の後輩であること、木島先生はいろんな展覧会に入賞されたすばらしい「画家」であることを、まず生徒たちに説明しました。そして白い布のかかった大きな絵を生徒たちの前に置いたのです。

「この絵を見てください」

それは全体に真っ白な印象の絵でした。

「これは木島先生がある公募展で入選された作品です。病気で学校を退職されるということで、学校に寄贈されたんです。これは日本画の技法で画かれた土壁です。君たちには濁りのない色を考えて、という課題が出ているらしいけれど、この絵が参考になればということでした」

マサルは絵をじっと見つめました。画面のほとんどが白。上の方に銀鼠の瓦、画面のところどころに小さな「破れ」があって、そこから藁がのぞいています。絵全体が光っているようでした。

次の瞬間、マサルはその白壁が前に膨らんでくるように感じました。...動いてる!...
思わず前のめりになって絵に見入るマサルの耳に穴吹先生の声が聞こえてきました。
「ね、じゃあめいめいで画いてみよう」

その時のこと、(画の壁が膨らんでくるように見えた事)をマサルはすっかり思いだしていました。

その時は「濁りのない色」の正解がわからないまま水彩で風景画を提出したのですが、穴吹先生は「うんうん」といって作品を受け取ってくれるだけで「答え」は言ってくれませんでした。正解はない、というのが答えなのかと思ったものです。

木島先生が亡くなったと聞いたのは二年生の二学期で、膨大な数の土壁を描いた作品が残されたということでした。

禅寺の塔頭はほとんどが白壁です。その一つ一つを視界に入れながらマサルは木島先生の作品を思い出しながら歩いていきました。すると同じ白壁でもずいぶん違って見えるのです。

土塁の上に立つ白い壁は雨に撥ねた土の色が裾にしみこんでいます。あるいは所々破れた白壁。また下が石垣の壁は透き通るような白。日陰のところは弱い白。

やがてマサルは輝く白い壁に行き当たりました。思わず立ち止まって見入っていると、壁が膨らんでくるように見えます。

...これだ!あの画を見たときの感じ...

石畳から砂利へ踏み出し、壁に手のひらを押しあててみました。ひんやりとした感触が伝わってきます。

...光の角度か...

そう思って空を見上げると、それを待っていたかのように雲が日差しを遮りました。すると壁はこんどは小さな波を打つように動いて見えます。

マサルは立ちつくしました。

雲が流れて日が差し始めると、また白い壁がゆっくりと膨らむように感じます。

マサルは黙って散歩を再開しました。壁が生きものであるはずはなく、自分の眼にそう見えてしまう何か...。(そう考えるしかありません。)なんだろう...

境内の順路を何度も曲がりながら歩いていく先々で白い壁に出会いました。そして最後の塔頭の壁は陰気な影に沈んだ白でした。位置から考えると一日中、陽光の当たらない壁です。藪椿のまっ赤な花が完全な形で壁の下に落ちていました。立ち止まったマサルは（自分の行動の馬鹿さ加減にあきれながら）その花を拾うと、壁にぎゅっと押し当てました。

まるで「そうしなければならない」かのように。

手を離すと花が落ち、白壁にかすかな赤い跡が残ります。すると一瞬、その周りの白が明るくなり、さらに白くなったように見えたのでした。

...濁りのない白？...

後方の角から視線を感じました。振り返ると誰もいません。だけれどどこからか自分を見つめている視線を感じます。マサルはゆっくりと壁から離れ、門に向かって歩いていきました。山門を出ると早足になり、街路に出るととうとう走り出しました。視線がようやく遠くなった感覚がします。

...あれなのか...

足を止めたマサルの額に汗が吹き出しました。

(了)



一月初めの小寒から四月末の穀雨までを八つの節気に分かち、その中を五日ごとに一つの「花信」を告げる風が吹く。合わせて「二十四番花信風」という。

...「漢語歳時記」興善宏...

大宅さんが「綺麗な花が咲いてんねんけど。一緒に見に行かへん。すぐ近くやし」と葉子を誘いに来たのは、掃除も終わった午前十時過ぎ。花、と聞くと葉子はじっとしてられません。昨晚、湿った雪が降りしきっていたこともあって、二人は咲き出した春の花を点検しながら歩いていきました。

まず木瓜（ぼけ）の花。葉子には白地の縁を桃色を染めた丸い花びらが小さな陶器のように思えます。

「昨日は雪やったけど、一昨日は霰（あられ）が降ったでしょう」と、葉子。

「そうそう、びっくりしたわよお。なんか冬の終わりって毎年荒れるわよね。鉢植えの葉っぱに穴が開くんやないかとはらはらしたわ」

「だいじょうぶやったん？」

「うん。なんとかね。あれぐらいただたらなんとか保つのね」

「木瓜の花なんて叩き落とされそうなら可憐やのに傷ひとつないね」

葉子は木瓜の花を覗き込みながらそういいました。

「強いわよね」

「だけど触ると...」

そう言いながら葉子は花びらに触れてみます。

「とても柔らかいのよね。たしかに弾力はあるけど」

「あれも綺麗に咲いてる」

大宅さんが指さす先にはレンギョウが鮮やかな黄色い花をいっぱいにつけていました。

木瓜、レンギョウ、そしてその向こうで咲き始めた桜も雪や霰には負けていません。

空は昨日とは一転、よく晴れて空気が澄み切っています。ウグイスやツグミの鳴き声が時々響いていました。

お目当ての花をつけた木は、いや木というよりも「それ」は井形に組まれた木枠に絡みつき、玄関前の空間を埋めつくした蔓の塊でした。塊の表面を房になった満開の白い花が覆い尽くしています。

「いやあ綺麗やわあ」

「ね、綺麗でしょ。何かに似てると思わない」

「うーん、藤に似てるけど...でもほんとにまっ白な花やね」

「ほらこれ見て」

ツルの塊をかき分けるようにしてスペースが空けられ、蔓に長方形の紙片が金色の針金で結わえてありました。

ハーデンベルギア 小町藤

葉子は小さく声に出して読みました。

「こちらの村上さんがね、いつも名前を尋ねられるんで札をつけはったん」

「え、これ藤なの？」

「こういう花はなかなかないでしょ」

「初めて見た...だけど葉っぱは藤とは違うわよね」

葉子は藤というと、まるでセットのように藤棚を想像するので、こんなふうにつるが無造作に重なっている姿が藤だとは思いつきませんでした。それにまだ三月です。だけれど確かにこぶりな花の姿は藤です。

がらりと玄関が開いて、とても背の高い女性が表に出てきました。

「あら、おはよう」

「あはようさん。小町藤を見てもらおうおもて、ね」

「おはようございます。綺麗な花ですねえ」

「おはようございます。これも藤と同じでマメ科の植物なんですよ。オーストラリア・タスマニアの原産なの。だから小町藤というのは日本でついた名前。確かに似てるし、それに紫のものもあるの。だけど日本でいう白藤ではないのよね」

「葉っぱが違うとおもいました」

「まあよくご存じ」

「だけどこの小ぶりなのがいいわよ。藤は垂れ下がるとなんだかおどろおどろしくて。私はこっちのほうが好き」と、大宅さん。

「あれはあれで豪華やけど」と、葉子。

よく見ると根元の方は藤と同じゴツゴツと太くなっています。

「毎年、冬を越せるかなあって思うんやけど、今年も咲いてくれました」

三人でしばらく花の前で佇み、あれやこれやと花談義をしたあと、と二人は町内に戻ってきました。今度は五月。大宅さんが初めて植えたシャクヤクがいっせいに新芽を噴き出しているのを楽しみにしててね、の事。

「あーそうそう薔薇も咲くしねー」

振り返りながら大宅さんはそう言い残して帰っていきました。

さて、家に帰ってから葉子は「白い藤」という言葉が記憶のぼんやりとした霞の中に引っかかっている、それが何なのか思い出そうとしていました。思いだしたのはPCを開いてメールをチェックしている最中。それは確かにネットの掲示板で見た言葉だったのです。葉子の好きな歌手のサイトでのこと。

...白い藤をご存じの方、教えてください...

という書き込みがあり、すぐさまいくつものレスポンスがついたのでした。すると

...ちょうど今頃咲く、もう少し小ぶりな花なんですが...

との書き込み。どうやら歌手には思い出の花であつたらしく、名前が知りたいとのこと。だけれどそこで応答は止まりました。なにせその書き込みがあつたのが三月。藤が咲くのは普通、五月頃だったからです。三月に咲く藤のことは誰も知らなかったのでしょうか。

...あれはこの花の事やったんやわ...

書き込みがあつたのが藤の花の咲く季節よりずっと早かったので、ずいぶん唐突だな、と思っ

たのを覚えていました。だけど小町藤ならちょうど季節もあります。だけどそのサイトはすでに閉鎖されています。メールアドレスすら残っていません。

...今なら書き込めたのにな...

夜、帰宅した亨にその話をしてみました。

「あの人、なんでサイト閉じたん？」

「なんだかいろいろあったみたいなん。活動はずっと続けてるけど」

「ふーん。まあネットの検索は凄いらもう知ってるんちゃうかな。『白い藤』で検索したらひっかかるとおもうけど」

「そう思ってやってみたら『白い藤』だとハーデンベルキアはでてきいひんかったねん」

「ふーん、そうなん...。そうか、葉子は伝えたいわけなんやね」

「ていうか自分の気持ちだけのことなんやけど」

「そんなら画像付きでネットに置いておけば。ひょっとしたらその人が検索してみつけるかもしれないし」

次の朝、葉子はもう一度村上家を訪ね、ハーデンベルキア（小町藤）をデジカメで撮影。家に戻ってから画像付きでT w i t t e rにアップ。亨のアドバイスどおりにキーワードをつけておきました。

...ご近所で咲いた、ハーデンベルキア、京町藤です。三月に咲く白い藤。普通の藤より小ぶりです。雪や霰をものともせずには咲きました。いい天気で、〇〇さんの歌を口ずさみながら散歩してました...

葉子は歌手が見てくれるということはまったく期待していません。ましてやメッセージが届くとは思ってもいませんでした。

三日後の夜。夕食のあとにP Cを開いた葉子はメッセージを見つけました。

...三月に咲く白い藤、きれいですね。どこかにあるはず、と探していたんです。花信ありがとうございます。...

ハンドルネームは「嵐が丘」の作者名になっていました。

「亨さーん、花信てなにー」

「わからへーん」

亨の声がお風呂から響いてきました。

(了)

- 「漢語歳時記」は興善宏さんによって京都新聞一面に2009年四月一日から2010年三月三十一日まで毎日連載されていたコラムです。
- 画像はハーデンベルキア。



乾いた真っ青な空が数日続いた。昨日も一昨日もジェット機は雲を曳かず、まるで空に浮かんでいるように見えた。風は強く、桜の花吹雪が舗道のうえで旋回していた。夕方に西から飛んできた定期便のジェットが久しぶりに飛行機雲を見せてくれたのだけれど、まるでそれが合図だったかのように、天気は一気に急降下。その日は朝から雨になった。最近、世界に噴き出してきた若葉たちは、この雨を待っていたかのように輝いて見える。

精気に満ちた美しい黄緑だ。桂の葉などはまだ小さいけれどハート型の輪郭がくっきりと示していた。

澤田さんが亡くなった。

再び体調を崩されて入院したのだけれど、路地の家に帰ってくる事はできなかった。

娘さんが、一軒一軒訪ねて知らせてくれたのだ。家はまだそのままにしておくとの事。ただ「鈴木さんの椿」も木瓜の木もどうなるかわからない。世話をする人がいなくなってしまったのだから。

そんな日の午後三時。葉子は首を廻しながらそれまで読んでいた文庫本をしおりを挟んで閉じると、立ち上がってポットにお湯を沸かし始めた。ソーサーとカップとセイロンティーをテーブルの上に置くと、両手を上にあげて、「のびー」と声に出しながら背中を伸ばす。読んでいたのはIRAのテロリストが登場する高村薫のミステリ。少し肩が凝った。

人殺しの小説は余り好きではないのだけれど、この作家の描写力に強くひかれて何冊か読んで

いる。

しゅんしゅんしゅん。

紅茶をいれ、砂糖も檸檬もミルクもなしでそれを啜りながら、ふと亨と自分のCDコレクションを確かめたくなった。

小説にはいくつかのクラシックの楽曲が登場する。特にブラームスについて熱く語られていて、それは家にあった。確かめたいのはモーツァルトだ。ピアノ協奏曲第25番。小説の重要な登場人物にピアニストがいて、この曲を弾いていたのだった。だけれど例えば小説家が「哀しみ」と表現していても、その内実や深さを感じたい。実際にその音楽を聴いた自分がどんな反応をするのか知りたくなったのだ。

花村家にあったピアノ協奏曲は、アシュケナージで23, 27。クララ・ハスキルで20, 24。内田光子で26, 27。

25番はなかった。

葉子はますます気になり出した。仮にCDを買うとしても、今月は火災保険の更新があるので家計にそんなに余裕はない。ネットでは様々なプレイヤーの盤が紹介されているけれど、試聴してみないとわからない。結局近くのレンタルショップで借りることにした。

気候が温かになったせいか、葉子たちの住む京都市北西部の有名寺院を巡る人たちが増えている。目立つのはお年寄りのカップル。トレッキングシューズにバックパック。穏やかな色のハットにパンツといったいでたちで、皆とてもおしゃれだ。葉子が路地へ出ると、まったくそのスタイルの大宅さんとばったりであった。レインハットに桜の花びらが数枚載っている。

「今からお出かけ？」

「ううん、帰ってきたところ。草津まで行ってきたねん」

「草津？滋賀県の」

「うん。サラノキを見にね。草津市立水生植物公園の温室。もう花が終わりかけで無理かな、とおもったんやけどなんとか見る事が出来たわ」

「サラノキって沙羅双樹のことでしょ」

「そうそう。ほんもののね。お釈迦さんが亡くなった時、四方に咲いていたのがこの木」「そやけど妙心寺にもあるし真如堂にもあるし、いろんなお寺の庭園にあるし...。だいたい天神さんの縁日で苗木売ってますやん」

「それなんよお。それぞれ。みんなそう思いこまされてるだけなんよ。それは全部、夏椿。インド、ヒマラヤ原産の木とは全然違うねん」

「まあお寺は『そういうものとみなして』ってのが多いから」

「それでも今日見てね、ちょっとこれは違いすぎやわ、と思ったよ」

「なんで」

「だってその花は星のかたちしてるんやもん」

「あ、それは夏椿とは全然違う...」

「そうでしょお。この木は日本ではここにしかないらしいよ」

「わあ見たかったな」

「来年いっしょに行こう」

デジカメに写った「サラノキ」の花を見せてもらい、大宅さんと別れると、葉子はレンタルショップに向かって歩き出した。路面は桜の花びらがびっしりと雨に貼りつけられている。それを踏まないように避けて歩いた。

...来年一緒に、か...

葉子は、その来年がなくなってしまった澤田さんの事をふっと思いだした。澤田さんならなんて言うだろう。

元々教師だったから『そうです。あれは椿です。平家物語に出てくる沙羅双樹ではありません』ときっぱり言い切るだろうな。

眼鏡をかけたきりっとした表情が思い出される。

...さみしい...

レンタルショップには内田光子の25番があった。それを借りると家に帰り、音を流しっぱなしにして夕食の段取りをすすめていく。

そうしながら葉子は亨が今日の妙心寺の南側に配達に行くといって事を思い出した。四月は大学の新生が大勢、京都の街での暮らしを始める。大学近くに店舗を構える亨の店ではこの時期は繁忙期なのだ。テレビと電子レンジとスタンドと小型冷蔵庫、といったセット販売がそここの数がでるのだ。

...たしか妙心寺にも「沙羅双樹」があった。サラノキのこと教えてやらなきゃ...

ピアノ協奏曲25番はアンダンテになっていた。

...静かで、深くて、哀しくて、優しくて...

葉子は手を止め、じっと耳を傾けた。

(了)

●滋賀県草津市立水生植物園公園みずの森 はこちら

<http://www.mizunomori.jp/>

「サラノキ」も紹介されています。

●ちなみに釈迦が生まれたときに咲いていたというムユウジュは京都府立植物園の温室でも見る事ができます。

●参考CD

モーツァルトピアノ協奏曲第24番、第25番

内田光子、イギリス室内管弦楽団、ジェフリー・テイト指揮

●画像は「鈴木さんの椿」の根元に咲いていた花です。

よく晴れた4月25日に



4月25日、日曜日午前10時過ぎ。快晴です。

もうすぐ五月だというのに昨日まで何日も冷たい雨が降りました。今朝も霜が降りるほど冷え込んだのですが、雨と寒気団はどうやら去ったようです。

烏丸通りの北の突き当たり、烏丸通り北大路の交差点からから少し西へいったところにあるスターバックスで尚美は本を読んでいた。

この店には窓際に長いカウンターがあって、そのいちばん奥が尚美のお気に入りの席です。本を読むしレポートも書きます。

街の光とざわめきを感じているのが好きで、ファミレスやミスドや大通り沿いの喫茶店を何軒も試して、結局ここのスタバに落ち着いたのです。

アパートからも大学からも自転車でいける距離であることと、大型書店とCDのチェーン店と、とびきりおいしいチーズケーキの店とがスタバからすぐのところにあっただけでも決め手になりました。地下鉄の駅もバスのターミナルもあります。ここは京都市北部の交通機関の基点となっているのです。

テーブルにバックを置き、その上にさっき買ってきた新刊が袋に入ったまま置かれています。尚美が手にしているのは古ぼけた緑の本。古書店で100円で買ったものです。それは元々あったであろう函もカバーもとれてしまった昭和38年発行の世界現代文学全集の一冊。読んでいるのはヘッセの「シッダールタ」でした。

そもそもその古書店にはマサルについていったのです。マサルは卒論のために正岡子規を読み込んでいるのですが、図書館の本だと書き込めないしコピーも面倒なので、ずっと正岡子規全集を全巻揃いで探していたのです。それが見つかり、とりあえず手付けを払いに行くところでした。マサルが奥で支払いを済ませている間、尚美は店内を探索。なにげなく見た100円均一と書かれた段ボールの箱の中に「シッダールタ」はあったのです。

...高橋健二・訳...

尚美には閃くものがありました。尚美も葉子も好きな某歌手が自分のブログで好きな本としてあげていたのです。「確か新潮文庫であるはずなんやけど」と葉子が言っていたのと同じ本では？ニューヨーク出身のその女性歌手は「高橋健二訳がおすすめ」と書いていたのです。

呼びかけるような訳文の独特のリズムにはまった尚美はどんどん先へ進んでいきます。

例えば

...おお、ゴーヴィンダよ、それをぼくは知っている...

の、ような。

肩をぽんっと叩かれて顔を上げるとマサルが立っていました。

「お待たせー。ずいぶん長くいるの？なんだか夢中になって読んでるから」

尚美は黒い長袖のTシャツにメッセンジャーバッグをたすきがけにしたマサルを見上げました。最近、痩せたような気がします。それでもよい姿勢と吸い込まれそうな黒い瞳は健在です。思わず触れたいような磁器のような白い肌も。

「こないだ古本屋さんで買ったやつ。まるで歌ってるような台詞回しなの。なんだか癖になりそう」

「ああ『シッダールタ』だよね。確かH i k k i eのお気に入りとかいってなかった？」

「そう」

「ふーん、あ新刊も買ったんだ。見せてくれる」

尚美が答える前にマサルは紺色の袋から本を取り出して表紙を眺めていました。

「なるほどB o o k 3、ね」

「へへ、これはどうしても、ね。さっきそこの本屋さんに行ったら平積みにあと二冊しかなかった」

マサルはフレイバー珈琲を注文し、尚美は「シッダールタ」を閉じて、二人で窓の外を眺めていました。行き交う人の影が二人の上を通過していきます。尚美は光と音の波がガラスのフィルターをくぐって二人を包んでくるような感覚になりました。

...いいな、こんなふう...

「正岡子規のほうは、どう」

「ああ」

珈琲を一口飲んで、少し考えをまとめるような沈黙のあとマサルが話し始めました。

「今は中江兆民とのいきさつについて考えてるんだ。同時代の文学と哲学のそれぞれ牽引者で、ふたりとも不治の病、結核に冒されていて、二人ともそれで死んでいくんだけども。

...中江兆民に『一年有半』というエッセイがあってね。つまり余命一年半と宣告された兆民が病んだ自分を見つめる文章を書いているんだよ。つらつらと書きながら『いつ死んでも自分は平気だ』という境地に達するわけ。

そのことについて子規は『仰臥漫録』で触れていて、結構きつい事を書いているんだよね。病気を売り物にするな、みたいな、ね。

ぼくなり『読み』だと『いつ死んでも平気だ、といえることが凄いいんじゃないって、どんなふうになっても生きていけることが凄いいんだ』って子規がいつてるように思えるんだけど。

実際、兆民は肺に穴一つだけ子規は体が穴だらけになってしまったものね」

「正しいとか間違ってるとかの話じゃないわけね」

「うん。解釈はいろいろだし。子規は兆民の態度に羨望しているんだという人もいるし、いや子規は兆民を激しく否定しているんだという人もいる。

業績は別にして、死と病に対する態度としてなんだけど」

「マサルさんはどう思うの？」

「余命宣告された人間が人生に対してどういう態度をとるかだよ。...それぞれじゃないかな。それぞれが自分自身とどう折り合いをつけるかだと思う。兆民も子規もとても説得力があるよ。宣告されていない人間の方が人生に対して無自覚じゃないかと感じたし」

「中江兆民って...ルソーの『契約論』を訳した人、ぐらいしか知らない...」

「うん。で、明治の日本に向かって『日本にはいまだかつて哲学はない』と云った人だよ。『無仏』『無神』『無精魂』という主張。最近の政治状況見てたら日本に哲学はないままなのかという思いもするけど」

「うーん」

「そういう人に向かって子規は『理は分かるが、美は分からない』人だといったんだ」

尚美は明治期の哲学、文学にどんどん分け入っていきこうとしているマサルの、少し早口になる話し方が嫌いではありません。

「そっちはどうだった。シッタールタは？」

「まだ読み始めたところ。訳文のリズムがおもしろくて」

珈琲を飲み終えたところで二人は立ち上がりました。ふたりは葉子と亨と待ち合わせをしているのです。場所は北野天満宮。毎月25日は定例の縁日で、境内と周囲の道路に露店が並び大勢

の人で賑わうのです。今月は珍しく25日と日曜日が重なりました。

普段は仕事でこれない亨も今日はゆっくりできるから、「いっしょにぶらっとしない」という葉子からの提案だったのです。

北大路バスターミナルからバスに乗り、混雑する北野天満宮前を避け、二つ手前のバス停で降りると二人は北側から歩いて境内に向かいました。碁盤の目の街だからこそでできるやり方です。

空は相変わらず抜けるような青。風は乾いていて少しひんやりしています。北から東側に回るとの道路は閉鎖され、両側にびっしりと露店が並んで道は人出あふれかえっていました。今日は外国人が多いようです。

「どれが京都在住の外国人かあててやろうか」

と、マサルが尚美の顔を覗き込みなが悪戯小僧のような眼をしています。

「わたしだってわかるとおもう。例えば...ほらあの人」

尚美が視線でさした外国人が草木染めの布の店の前に佇んでいました。

金髪、青い眼、黒のパンツに紺のセーター、素足にサンダル、あごひげ。

「ぴんぼん」

「あの人も」

炭のような皮膚の色、黒縁の眼鏡、ジーンズに白いズック。

「あ、手ぶらの人間を選んでもらう」

「ううん、京都にいる外国の人は痩せてる人が多いから、それが基準...って、あてずっぽうだけど」

葉子と亨と落ち合う場所は園芸の出店が多い東側のエリアです。尚美とマサルが人の海をゆらゆらと歩いていくと、その手前、本殿の門の近くで帽子を売っている露店に二人がいました。

「へへ。見つけた」

「こんちわ」

「あ、お二人さん相変わらず仲がいいわねえ」

尚美はバス停からずっとマサルの腕に自分の腕を回し、ぴたりと身体をつけていました。

「どう、似合う？」

そういいながら亨が帽子を被って振り向きしました。ここはボルサリーノとダックスのカジュアルなハットばかり売っている露店です。

「いけてますよ」と、マサル。

「なんかハットをあみだにしてぶらぶらしたい気分なんや」

「ふふふ」

葉子は黙って笑っています。

亨はお金を支払い、その場で頭に載せました。

「さあぶらっといこか」

「わたしはね、トマトの苗を買おうと思ってるの」と、葉子。

「私も何か欲しいなあ」

と、尚美。その時マサルの目は古本の露店に向かっていました。

「マサル、そっちやないやろ」

亨にそういわれてマサルは苦笑い。

「あら、あの指輪、綺麗ね」

「ほんとに」

アクセサリーの露店に向かう葉子と尚美。

マサルの背中を亨が黙ってぽんっと叩きました。四人は人の海に融けこんでいきます。

(了)

- 「シッダールタ」 ヘルマン・ヘッセ／高橋健二訳（新潮文庫）
- 「世界文学全集 Ⅱ－１６ ヘッセ」（河出書房）昭和３８年発行



灰色の天蓋から細い雨が点線のように降りてくる朝でした。ベランダに出て空を見上げる葉子の顔に、滴がぴっぴっと弾けます。

「今日どうやろう。行けるかなあ」

葉子はダイニングに戻り、珈琲をいれている亨に声をかけます。

「うん、ええよ」

膨らんでくる珈琲の泡から目を離さずに亨が答えました。ラジオからは終日の雨を予報する声が部屋に流れています。

葉子がこのほか天気を気にしだしたのは上賀茂の大田神社で杜若（カキツバタ）が見ごろになったというニュースを聞いてからです。太古からその地に群生しているという青紫の杜若は結婚する前から二人で毎年見に行っていたのです。ただし条件つき。必ず雨の日に見ること。それは亨がいだしたことでした。

結婚してからは亨の仕事が休みの日であることも条件に加わりましたが、今年も雨の日を待っていたのです。

バスで賀茂川を渡り、終点の上賀茂神社から歩いてゆきます。傍らを水路が流れる古い道を東へ歩き、郵便局の前で北へ。静かな住宅街を歩いていきます。点線だった雨は絹糸のようになり少し強くなってきました。

「亨さん、いつだったかここに来た雨の日に画家の名前をゆうてたでしょう。誰だっけ」「ターナー。晩年やけど。ほら混然一体となる感覚」

「あ、そうやったそうやった。さっきからなかなか名前が出てきいひんかって…。あの時の雨は激しかったね」

「うん、覚えてる。あの日は水煙がたってた。一面の濃い緑に青紫の花がいくつも浮かんで、しかも全体がぼやけて」

「うん、そうそう。なんだかすごかった。全部溶け出したような感じ。綺麗やった。亨さんが『雨の日はええんや』てゆうてたん、なるほどとおもたもん」

「…綺麗やったな」

亨が「雨の日の杜若」を最初に経験したのは小学四年生の時でした。自転車で市内のあちこちに「遠征」する楽しさを覚えた頃で、その日も友達と上賀茂神社を目指して走ってきて、大田神社をたまたま見つけたのです。

その時は夕立に遭いました。あわてて友だちと境内に駆け込み雨宿りをしながらみるみる表情を変えていく杜若の群落を見たのです。晴れている間はきらきら輝いていた緑の葉は影を帯びて深い色に沈み、鮮やかに眼に飛び込んできていた青紫の花はその緑の海を漂うように揺れだしたのです。じっと見入っていると、その緑の下にまるで何か生き物が潜んでいるような感覚に襲われました。雨で生き物が覚醒し動き出したような感覚です。そうしているうちにこんどは群落全体が生き物のような感覚に襲われました。色は水煙の中で溶けあって一塊になったようです。雨が激しくなればなるほどその感覚が強くなりました。

…眼や…

亨は直感しました。

杜若の群落全体の中に眼がある。眼だけがある、と感じたのです。そしてその眼に射すくめられているのを感じました。だけれど心には怖さと同時に、とてつもなく美しいものを見ているような感情がわき起こっていることも感じていたのです。

二人の行く左手に大田神社が見えてきました。鳥居の手前に群落があります。今では開発が進み、それほど広くはありませんが、かつてはこの一帯にもっと広く群落していたといいます。

「あ、綺麗に咲いてる」

柔らかな雨に濡れて杜若のたくさんの青紫が今にも空中に流れ出ていきそうにみえます。

「優しい雨やな」

「亨さん気いつかへん？」

「え」

「私たちが結婚してからずっと優しい雨なん。出かけるときに激しくても私たちがこの場所にくると優しいの。つきおうてるころは激しかった」

「そういえばそうかもしれへん。昔は激しい雨で風景が渾然一体となって、なんだか凄みがあったよね。そやけど...うん。確かに今日も優しい雨やね」

亨は一面の緑を見渡しました。青紫の花が浮かんで微かに揺れています。そういえば以前のよう「眼」を感じることはなくなりました。沼は静かに眠っているようです。

ツバメが雨を切って低空を鋭く滑っていきます。その時何かが一瞬光り、消えました。緑のうねりは黒い影を孕んで雨の中に沈み込んでいきます。亨はじっと杜若の群生を眺めていました。「眼」の事はまだ葉子に話していません。

(了)



五月だというのに真夏のような暑さが一週間続きました。おかげで花村家のベランダではミニトマトが早くも実をつけはじめ、大宅さんの庭ではゴーヤがどんどんと蔓を伸ばし始めていました。

たしかに日中には真っ青な空から強い光が街を灼くように降り注ぐのだけれど、毎日午後四時頃になると、きまって空にシェードがかかったように灰色が流れだすのでした。

空の南の際、大阪の方向には青空が微かに残り、西の愛宕山の方向からは光が差しさえするのですが、京都市街の上空の灰色はどんどん濃度を増してゆき、やがて夕立となるのです。

だいたいその時刻は葉子が買い物から帰る時間帯でした。空が暗くなるに従って、葉子の視界の中には小走りで帰りを急ぐ人や洗濯物を取り込む人が頻繁に登場するようになります。そんな街を歩いていると、葉子は少し気忙しくなりながらも、妙にわくわくしてくるのでした。地面を叩きつける雨の強さも好きですし、何かものがすっきり洗われるようなのもよいし、それが短時間に終わるといのもいい。おまけに止んだあとのすっきり澄んだ空気も素晴らしいし。

(ほら稲びかり。)

今日も葉子は家に向かって歩いていました。

少し遅れて地響き。

そしてからからに乾いた舗道に黒い染みが、びしっびしと打たれていきます。

今日も夕立が始まりました。

雨はあっというまに激しくなり、路面はまるでドラム・ロールのような音を立てています。あたりは真っ暗になっていきます。

葉子の行く手に両手で白い植木鉢を持った女の子が一人立ち尽くしていました。少し困った表情の顔が雨に洗われて、白いシャツと赤い地に青と緑のチェックのスカートが雨に浸食されています。葉子は思わず傘を差し出しました。

「はい。もう大丈夫」

「あ...」

女の子はまるで言葉を忘れてしまったような声を出しました。

白い植木鉢には斑入りの大きな緑の葉に囲まれて鮮やかなレモンイエローの花が咲いています。

「濡れちゃったわねえ。ん、カラーの花？」 「...はい」

「きれいな花やねえ。でもこれ持ってたら傘、させへんね。ちょっとうちに雨宿りしていき。すぐそこやから」

「...あの」

「ええのええの。この雨、じきに止むやろし。それまでね。こんな雨の中歩いてたら風邪ひいてまうよ。お家はどこ」

「西町です」

「うん、まだ距離あるやん。このあたりは隠れるところがあればへんし。さ、行こ」

「ありがとうございます」

女の子の声がやっと言葉を結びました。

※

マサルは珈琲を啜りながら思いを巡らしていました。見つめる窓の外では晴天が一気に崩れ、雨が降り出したところです。机の上には読んでいた文庫本。そしてぶ厚い辞書。数枚のメモと万年筆が置かれています。

...「町」と書くべきか「街」と書くべきか、いつもそこで迷ってしまう。...

(「78」吉田篤弘)

大好きな作家の、文庫本に書かれたその一文が「思い」の始まりでした。それはちょうどマサル

が京都の事を書くときに迷う事と似ていたからです。

「78」という作品のなかでは、「港町」というように海に近づくほど「町」と表記したくなる、と書かれていました。海から離れ、海を望むように地点に立つと「街」だ、と。

京都の場合は海はありませんが、「町家」という言葉があるし、「町」と書く方がふさわしいとマサルは思うのです。だけど京都の中心を思うと「街」と書きたくなるのです。その違いには何か生理的なものさえ感じます。

それでマサルは白川静先生の「字訓」を引っ張り出しました。漢字にどれほど豊かな感情と意味が込められているか、鮮やかに説いてくれる白川先生の著作は高価ではあったけれど一冊は手もとに置かねば、と手に入れていたのです。

それによると「町」は古代の区画整理における田畑の「あぜ」が由来でした。「町」の大きな括りが「坊」であり、現在でもその名残の地名が残っています。

一方「街」は道路を主とする意味でした。

しかし、成り立ちはそうだとしても、マサルにはその使い分けに何か皮膚感覚に近い感覚があるように思えるのです。多くの作家たちはそれぞれこだわって使う漢字があります。そのこだわりに似たものがあるように思えるのです。マサルが好きな吉行淳之介であれば「影」ではなく「翳」であるとか、「体」ではなく「軀」を使うように。

マサルはメモ用紙に「町」と「街」と書いてみました。

なるほど「町」には「田」という字が隠れているし、「街」には「行」という字が隠れています。

...うーん。「行」か。「街」という字には流れるイメージが貼り付いているのかな...

マサルは外を見ました。雨は上がっています。

マサルは珈琲を飲み干すと、立ち上がりマグカップを洗い、水切りに入れると、チェックのシャツを羽織り、紺のキャップを被って出かける事にしました。

ピーナツバターを買いに行くのです。朝食のトーストにピーナツバターを使うのですが、マサルはクランチタイプが好きで、尚美はクリームタイプが好きなのでした。ちょうどクランチが空になったところで、これからは尚美の好みに合わせる事になっていたのです。

雨上がりの「街」をゆっくりと歩いていきます。今歩いている道は、昔からあったといわれている道。ゆったりと曲がっています。このあたりは碁盤の目の市街地からほんの少しはみ出たところです。至る所に古道の名残が残っているのです。寺へ通じる道、神社へ通じる道、あぜ道...

。 栗の花の匂いが強く薫ってきました。小川が流れている谷に向かって歩いていきます。両側
はびっしりと家が続きます。また別の栗の花の匂いがたちこめてきました。谷底に向かうにつれ
て強い香水の匂いがたちこめてきました。ここから向こうへ、坂を上ったところに一条通があり
ます。坂に行く黒いピンヒールと黒いストッキング黒革のミニスカートが見えます。

「うーん、ここは『町』かな」

※

「はい。ちょっとじっとして」

葉子は女の子の髪をキッチンの椅子に座らせて、ごしごしとタオルで拭きました。女の子は葉
子のトレーナーを着ています。シャツとスカートは急速乾燥中。

「大丈夫？」

「はい」

「間一髪やったね」

「すみません」

「五年生？六年生？」

「五年生です」

「雨、もうすぐ止むから、ね。ほらあったかいミルクでも飲んで」

葉子は自分の買い物をテーブルに置き、自分もホットミルクを啜ります。

玄関には大切に持っていたカラーの植えられている白い鉢が置いてありました。

「大切な花なん？」

「はい」

「へえ。よかったらわけ聞かせてよ」

「え...。えーと。あの一同級生の友達が転校するんです。その子に去年この鉢を渡してたんです。
うちではどうしても花が咲かなくて...。その子は枯れそうになった花や捨てられた苗とかを育
てるのがバツグンやって、学校の花壇とかの手入れもいつもしてて。うちのんもでけへんかなあ
、てきいたら、ええよ咲かしたるよ、てゆうてくれて」

「へえ、バツグンなんや」

女の子はこっくりと肯きました。

「咲きそうになってたんやけど、私をびっくりさせようとおもて、綺麗に咲いてから渡したか
っんや、て今日学校まで持ってきてくれたんです」

「でもそんなに急な転校なん？」

女の子はまたこっくりと肯きました。

「もう授業の途中で帰えらなあかんぐらい急やって...大阪のほうとしか聞いてへんし...」

「ふーんそうなんや」

「なんや嬉しいけど、悲しいような気持ちになって、ぼおとしてて…」

顔に照れたようなさみしいような笑いが浮かんでいます。

「そうかあ。大事な花やね」

女の子はまたこっくりと肯きました。

「あ、そうそう家の人？電話しとかな心配しはるよね」

女の子は机に置いた携帯で時間を見ると「まだ仕事やし」と呟きました。

※

「あ、葉子さん」

「あらマサル君」

二人は谷底の小さな橋の上であいました。葉子は白い植木鉢を持った女の子と小川を見ているようです。

「なにしてるんです？」

「へへ、薄暗くなってきたからね。ここ蛍が飛ぶよねえ、て話してたん」

隣で水色のランドセルを背負った女の子がにっこり笑っています。

「蛍？こんな川で、ですか」

「そうよお。毎年飛ぶんよ。ねえ」

女の子が肯きました。

「まだ時間は早いけど、今度一緒に見ようてゆうてたん」

坂の上でバスが止まる音がしました。

「あ、お母さん帰ってきはったよ」

女の子が白い植木鉢を抱えて坂を走っていきました。坂の上には市バスの「お尻」が見えています。

葉子とマサルがゆっくりと坂を上っていくと、坂の上に女の子とお母さんらしい女性の姿が現れました。お母さんが小さく会釈しました。葉子たちを待っているようです。

「雨上がりは空気が綺麗やね」

「でもこの匂い、なんとかなりませんかね」

二人は小さく苦笑いしながら坂を上っていきました。

(了)



六月も終わり近く、桂の若葉が肉厚になり輪郭がくっきりとしてきました。葉脈もふかくなり、その心臓に似ているという形（葉子は丸いハートマークだと思っていますが）が充実の季節を迎えていました。

桂の木はお寺の西側にある漆器工房の玄関先にある若木で、四年前に家を建て替えたときに植えられたものです。高さはまだ3メートルほど。

樹の緑の中でも葉子はことさら桂の葉が好きです。楠や椿のような艶はないのですが、風景の中に沈み込むような緑なのです。一枚一枚が水彩で描かれたように葉子は感じていました。それよりももっと好きなのが陽に透かしたときの緑。この若木でもそろそろ味わうことができます。

梅雨の晴れ間だった今朝も見ることができたのですが、葉子は見ませんでした。少し亨のことが心配だったのです。それは二十六日から続いていました。

「『みな月』食べてね」

夕食の後、葉子は小皿に和菓子をのせて自分と亨の前に置きました。

「麦茶でいい？」

「うん」

亨はテレビの阪神対中日戦をぼんやり見ながら、まるで気のない返事です。

と、ふいに我に返ったように

「あ、今日は三十日やねんな」

葉子に顔だけを向けて確かめます。

「そう」

氷に見立てた白い生地の上に小豆ののった「みな月」という和菓子を、夏越しのお祓いとして六月三十日に食べる習わしが京都にはあるのです。

「気分はどう。少しは楽になってきた」

そう言いながら葉子は、椅子に座り亨の顔をじっと見つめました。

この日は気温が三十度を超える蒸し暑い日でした。前日、夜遅くまでサッカーワールドカップの日本対パラグアイ戦を見ていたための寝不足とも相まって、亨の顔には疲れた表情が浮かんでいました。しかし理由はそれだけではありません。

六月二十六日、配達のために智恵光院通りを今出川から丸太町に向かって軽四トラックで南下しているときに突然、胸がつかえるような気分の悪さをおぼえ、それがなかなか治らなかったからです。

通りの名前にもなっている智恵光院というお寺は青空駐車場が境内をいびつな形に浸食していて、通りから見るとどこからどこまでが寺の境内なのか一瞬わからなくなります。ビルの狭間に雑然とした継ぎ接ぎの土地が放置されているような印象を亨はいつも感じていました。

そのとりとめのなさは南北に西陣を突っ切って走るこの通りの、どこか底が抜けたような茫漠とした雰囲気にも通じているようにも感じていたのです。しかしその日の亨はそれが無性に気に障ったのです。もちろんそんな風を感じる自分にも不審な眼を向けていたのですが。

軽四は下立売（しもだちうり）通りとの交差点で止まりました。道なりに南下すればすぐに丸太町です。右に曲がれば江戸時代から続く山中油店があります。その店には…。

と、そこまで何となく思いが回った時、もしやそれが原因では、と気分の悪さの原因に当たった気がしました。車を駐めて山中油店に確かめに行ってもよいのですが、下立売り通りは一方通行なうえにとっても狭い通りです。亨は信号を越え軽四を止めると、携帯からインターネットにアクセスしました。キーワード「西陣空襲」を打ち込みます。

亨の「予感」は的中しました。しかしネットで確かめた情報を前にして、亨は、じゃあその「何を」今、感じているんだろう。そもそも本当に空襲がいいようなない気分の悪さの原因なのかどうか、考えてみました。だけど「やっぱりそうか」と感じる自分がある…。

昭和二十年六月二十六日、正午頃。京都市内は米軍による空襲を受け、智恵光院通りに沿うように七発の爆弾の直撃を受けました。

京都では爆撃による火災の延焼を防ぐために市内のいくつかの箇所道路を強制的に拡張す

る「建物疎開」が行われていました。智恵光院通りもその一つだったのですが、まるでそれをあざ笑うかのように智恵光院通り付近、つまり西陣の真ん中が爆撃されたのです。 即死四十三名、重軽傷者六十六名。

「みなさん京都でも空襲があったんですよ」

小学校の授業で先生がそう語りかけてきたことを亨は思い出しました。そして山中油店にはその時の爆弾の破片が展示されていることも。爆撃された地点の中にはいまだに「街の隙間」のままのところもあることも。それこそ現在、駐車場として使われていたり。

中学生の時に自転車に乗って見に行ったその「現場」はどことなく寒々しい気が漂っているようだったことも。

...なんだこの気分...

自分はいったい何に感応したのだろう。車の中で亨は、自分の体と心を覗き込んでいました。

「西陣の空襲のこと、まだ気にしてるん」

みな月を食べながら葉子が亨の顔を見つめています。

「うん、まだちょっとな。たしかに学校で教えてもろてたけど、普段意識せえへんやん。覚えてへんやん。それがあの日はどうしたんやろ。何か穴が開いたままになっていて、そこにはまり込んだような気分ていうか...なんていうんかな...気分が悪いというか、ちょっと治しようがない哀しい気分になって...」

亨が何に感応したのか、葉子にも亨にも何となく分かる気がするのです。なにせ爆撃された同じ日の同じ場所なのですから。

だけど簡単にそれを言ってしまってもいいのか躊躇するのです。

葉子は言うてしまうことが簡単に片づけてしまう事になりそうで、引っかかりを感じ、亨は「この日」に限らず、智恵光院通りの今出川から丸太町の間を通るときは「感じなければならぬもの」のように思うのです。

「うちのお父さんがようゆうてた。よその人から『よろしいなあ京都は空襲がなくて』なんて言われるけど、そのたびに、そうやないんですって説明するんやて。西陣だけやないし」

「そう馬町（東山五条を下がって東側の付近）でもあったしな」

「なにより京都は貴重な文化財があるから米軍が爆撃を控えたという説にがまんならん、て。そんなこと絶対にありえへんて言うてはった」

「『説』ていうなら原爆の投下候補地やったというほうが当たってるかもしれへんよな。でも葉子、京都の空襲を『癒されない傷』というんやったら世界は傷だらけだよな。それこそもっともって治しようのない傷に溢れている...」

「うーん。...そうやねえ」

会話は途切れ、二人は「みな月」を食べ、麦茶を啜ります。

「爆撃のあった日の前日は北野の天神さんの縁日やし、四日後は『みな月』をたべる日やったんやね」

「そう。今と変わらへん」

「そんな日々も壊れたんやね」

静かな夜です。葉子は明日の朝、晴れたのなら、亨といっしょに桂の若葉を見ようと思ったのでした。

(了)



雨上がりの御池通を亨と風呂敷包みを抱えた葉子が並んで歩いて行きます。

まだ少し濡れているアスファルトの上で何かが輝いていました。

「亨さん、あれなんやろ」

二人はそっと近づいて行きました。

「黄金虫」と、亨。

二人の視線が鈍く光を反射している背中で結ばれた瞬間、黄金虫が飛び立ちました。

風が一陣、後を追っていきます。

「気持ちのいい風やね。町もとても静か」

「平日の昼間は会社やお店があるからまあまあ賑やかやけど夜はもっと静かや思うよ。この辺も人口が減ってるから町も静かなんや」

「そうなん」

「親父なんてもう小学校も中学校も『出身校』があれへんねやで。竹間小学校、初音中学、両方ともあれへん」

その日、亨と葉子は実家によばれて出かけてきたのでした。建具、指物職人の父と母、二人が待っています。

お祭りの日には家族のみなでご馳走を囲んで「お祝い」をすること。

子供たちが独り立ちしても、その日だけは実家に集まって「お祝い」をすること。

その「お祭り」というのが地蔵盆であれ、秋祭りであれ、祇園祭であれ、そうするのが花村家のずっと昔からの習わしであり、この町のほとんどの家でもそうでした。

花村家は堺町押小路にあります。祇園祭の鉾町ではないし、山鉾巡行の通りからもずれているけれど、毎年、七月二十四日には祇園祭の「後の祭り」にあわせて「お祝い」をするのでした。

祇園祭と言えば七月十六日の山鉾巡行とその前夜の宵山がクライマックスです。だけどその日以外がただ巡行を目指す準備のためだけに費やされているわけではなく、祇園祭は七月の一月間を費やしてさまざまな行事や祭りが続いていくのです。通称「後の祭り」とは正式には還幸祭といいます。

小さな門を潜り玄関に向かうまでの小さな庭に檜の木がありました。亭が小さい頃よく登ったという樹。葉子には少し繁りすぎているように思えます。おかげで庭全体がうすい陰に包まれているようです。その陰の中に木槿（ムクゲ）があって目が覚めるような白い花を咲かせていました。足下には飛び石。その周りでは苔がしっとりと濡れています。

「ただいま」と、亭。少し遅れて「こんにちわ」と、葉子。
「はいはいはいはい」と奥の方から声がして、お母さんが出てきました。
「葉子さん元気にしてたん？」
「はい」
「母さん、檜の木、剪定せなあかんね」と、亭。
「そやねえぼちぼちせなあかんねえ」
「おかえり」父も出てきました。
「まあゆっくりしていき」
「ありがとうございます」

葉子と亭は居間にすすみました。磨き込まれた四角い座敷机の上に、二段弁当が並べられ、コップとお猪口がそれぞれにつけてあります。箸の色は黒、朱、紺、赤。

「義母さん、これを」
葉子がぺたんとして膝をそろえて正座し、風呂敷から包みをだしました。
「いやあそんな気いつかわんでええのにい」
そういいながら包みを受け取ると「あ、おとうさん喜ばはる」。
義父は酒を必ず熱燗で飲みます。燗にあう伏見のお酒を葉子は持ってきたのでした。

さて四人勢揃い。
「さ、ただこか」
「おめでとうさん」
みんなで声をかけて食べ始めました。この季節の京料理には欠かせない鱧ももちろんついています。そしてこの部屋には木槿の白い花が一輪挿しに生けてありました。
「木槿の白が涼しげでいいですねえ」と葉子。

「木槿はちょうど祇園祭の時分に咲き出すよね」

「すずやかやろ」

お燗を持ってきた母は父にお酒をつぎ、その浮いた腰のまますっと立ち上がり居間の隅にゆくと、立てかけてあった紙袋を葉子に渡しました。

「これ、葉子ちゃんに。ちょっとつかけるのにええかなとおもて」

「わあなんでしょ」

葉子が紙袋から取り出した箱には赤い鼻緒の下駄がはいていました。

「底が加工してあってちょっとサンダルっぽいでしょ」

「わあうれしいです。ありがとうございます」

袋から出したもう一つの包みからは長刀鉾の「ちまき」が入っていました。祇園祭の時にそれぞれの鉾や山が用意する「ちまき」は一年間の災難を除けるために玄関の上に貼り付けるものです。「蘇民将来乃孫也」という小さな紙札が結わえ付けてあります。

「それを最近では玄関の内側につける人が多いんや」と父。

「これは外やよね」

「そおや。そやないと悪鬼が外から入ろうとしたとき『あ、この家は蘇民の子孫の家やからやめとこ』てわからへんやろ」

「なんで内側に張るんかな」

「最近ではええ加減なことというんがおるんや。せっかくの災厄除けやのに」

「後の祭り」では鉾ではなく御神輿が四条寺町から八坂神社へ還っていきます。葉子は義母から二人で見に行こ、と誘われました。

「あの下駄で行こうかなあ」

「あ、葉子ちゃんそれええわ。あとでちょっと支度するね」

「どおなん仕事は」亨が父に酒をつぎながら話を振ります。

「ま、なんとか、な。文化財の修復が続くけど。おまえはどうなんや」

「ぼちぼち」

亨は建具・指物職人の跡を継ぎませんでした。建具といっても文化財の修復がほとんどなのですが、父は本当に好きな人間でないとこの仕事はできない、という考えを持っていましたから、ゆくゆくは今、働いてもらっている若い子に継いでもらおうと考えています。そもそも京都のあらゆる「職人仕事」は分業が徹底していて、細かな作業の一つ一つがそれを担う職人の自宅や工房で行われることが多く、父はそれをまとめ、調整し、指示を出す「仕事」が主になっていました。もちろん現場で直接作業することも時々はありましたが、現場では若い職人に任せること

がほとんどなのです。

もちろん亨に継ぐ気があるか尋ねたことはあります。しかし、何かを逡巡し言葉が出なかった亨に対して「うん、ええねやそれで」という一言で父は話を打ち切ったのでした。

それっきり父は跡を継ぐ話を一切しなくなったのです。

亨にしてみれば、父に対して言葉を切り出そうとしたときに、様々な思いが絡み合っついに口を開くことができなかつたのでした。

帳面とそろばんを前にしている時の母の厳しい顔。いつでも高齢の職人たちの生活を常におもんぱかり思案していた父と母。そんな姿を子供の頃からずっと見てきました。さらに先細りしていく仕事の受注。伝統工芸の仕事の大切さはわかるけれど自分自身を持ちこたえることができるかどうか。

そんなふうに揺れていること自体で「あかん」と父に判断されたのだ、と亨は思っていました。また「この仕事で飯を食う」と考えたとき、前のめりで仕事にくらいついているような若い子に俺は負けている、とも。

「ふうんそおか」

父はお猪口を口に運び、亨はビールをくびっ。

「祇園祭はどおなんやろ。運営やら維持とか大変やろね」

「ああ町によって大変らしい。解体した鉾を格納する場所とか、な。そやけど大船鉾が復活するかもしれへんて聞いたな」

「船鉾ってもうあるやん」

「昔もう一つ大船鉾ゆうのがあったらしい。その復活に取り組む人がでてきたわけや」

「ふーん...おもしろいね」

それから話題はサッカーワールドカップのことに。ちょっと酔ってきた父は、今回、韓国代表のキャプテンだった朴智星と日本代表の松井大輔が二人そろって所属していた頃の京都パープルサンガの事を語り出しました。父がそこまでサッカーが好きだとは亨は知りませんでした。

「あの二人がいた時の超攻撃型サッカーはもうサンガでは無理やろな。いっぺん天皇杯とったやろ。あの頃が最高やったなあ」

「Jリーグはもっと強くなるよ」

「強くならなあかんよな」

父は亨の眼を見ています。

「わたしら御神輿見に行ってくるし」

母が二人に声をかけました。

「いっといで。わしと亨は呑んでるから」

葉子と義母は新京極から寺町へ回ることになりました。三条から見ると修学旅行生の黒い頭で一年中埋め尽くされている通りです。

「もうそろそろ御旅所どころや思うけど。ちょっとぶらぶらしよ」

「はい」

二人の下駄の音が玄関から通りへと流れていきました。

「亨、爛してくれるか」

「うん」

「おまえもどうや」

「うん呑む」

(了)



「こんにちわあ」

大宅家の庭で葉子はその男と初めて会いました。大宅さんも初めてのようでしたが、男はまるで何年も前から大宅さんを知っているかのように垣根の隙間から屈託のない声をかけてきたのです。

「どうですか、今年のゴーヤ、うまくいったはりますか？」

「いやあ、今ちょうどその話してたところなねん。なかなか実がつかへんなあいうて...って、えーっと？お宅は？」

やっぱり初対面でした。

「いやいやこれは申し遅れました」

そう言いながら男は垣根からのぞかせた顔をひっこめると、門から庭へ入ってきました。この暑いのに、白いボタンダウンにチャコールグレーのスーツ、銀と紺のレジメンタルタイ、そして何故か黒い長靴という出で立ちです。頭は短く刈り込まれていて、彫りの深い顔は褐色に日焼けしていました。大きな眼をきらきらさせながら名刺を大宅さんと葉子に差し出します。

「ん？夕立兄弟会社？」

「はい」

「なにしてはりますのん？保険？新聞？そんなんやったらまにおうてんねんけど」

「いやいやいやいや違うんです。『夕立』で書いてますやんか」

「なにこれ『ゆうだち』で読むの。おもしろい会社の名前やねえ。そやから何の用ですのん」

「いやですから夕立のセールスにうかがっているわけです。ほら、そのゴーヤも、あちらのトマトも全部萎れてしまって。日が傾きだしたら水やりせなあきませんやんか。ね。それがですね、契約して頂きましたら週に三日は夕方に必ず雨を降らせて差し上げる、ということになっております」

「いやあ暑い暑いゆうてたら、えらいこといわはるお方が現れました」

大宅さんは白地に紺の大きな朝顔がプリントされたサンドレスを着ていたのですけれど、いつのまにか右手が裾の「朝顔」をひとつ握りつぶしています。そして葉子を見て何ともいえない顔をしました。

...どないするこの人...と、いう眼です。

...おもしろそうやん、もうちょっと聞いてみよ...

葉子はいたずらっぽいや目を返しました。

「ははあ、夕立をねえ...。降らさはる。ほほお、おもしろいこといわはるねえ」

「はいー。特に家庭菜園をなさっておられる奥様方には是非に、とおすすめて回っているんです」

「はあ、そらけっこうなことやけれど、ねえねえ、どないして降らさはりますのん」

男は心外だ、と言う顔を一瞬しましたが、また熱のこもった眼を大宅さんにむけて、「当社の実績は100パーセントです」と、言い切りました。

「そこは信じていただくしか...はい」

「じゃあちょいちょい降る夕立は...」

「あれはこの地区の別のお客様のリクエストでしてですね。残念ながら個別のお宅だけ、というわけにはできないのです」

これはおもしろいことになってきた、と葉子は思いました。

「ほら最近、ゲリラ豪雨とかあるやんか。あんなどないすんの、ものすごく迷惑やんか」

男の眉間に皺が寄り、険しい目つきになりました。

「最近ですね、無法業者がおりましてですね、契約を守らんと、一月の分をいっぺんに降らしたりしおるんですわ。僕らも困ってるんです。そんなこともありましてこうやって回らせてもらってるんです」

「ええ??雨の会社て他にもあるん？」

「はいございます。冬だけ営業している北山時雨興業とか。うちは9月の末までですなんけど」

このあたりから大宅さんの口が開いたままになりました。

「『きたやましぐれこうぎょう！！！！』ははっ。たまげた」

「ねえねえ、わかったから、その契約って教えてよ」と、葉子。完全に面白がっています。

「ありがとうございますっ」

男はアタッシュケースからA4の紙を取り出しました。水に濡れたフタバアオイの画像の上に白いインクで商品名が印刷されています。

「えっとですね、強さのランクが三段階あります。マイルド、ミディアム、ストロング。ま、言いかけてもタ立ちですからそこそこ強いんですが。それと長さが15分、30分、45分とあります」

「一時間はないのん」

「はあもうそうなりますと『本降り』にちかいもので...はい」

「ほなミディアムで30分！！」

大宅さんがやけくそのように言いました。

「おおきに、ありがとうございます。ほな早速、今夕5時から始めさせて頂きますんで。おおきに。お手間とらせましたあ。失礼しまあす」

「あれあれ料金とか契約書とか...」

そう言う葉子の腕を大宅さんがぐいと押しとどめました。

「は？何か？」と、男が振り返ります。

「いやなにも」

「ほなお楽しみにい」

「頼んだでえ」

男はあっという間に立ち去りました。大宅さんは名刺をじっと見つめています。

「はははは。どこぞのあほさんかいなおもたけど、あんな眼で見つめられると説得力あったね。まじめやし、真剣やし。きらきらしてたね。つついひきこまれてしもた」

「わたし、ほんまに降る気がしてきました」

「ふふ、そやったらおもしろいけど」

大宅さんが携帯で時間を見ました。

「一時間後やね」

「あれ山科方面担当てなってる」

葉子が名刺を見ながらそう言いました。

「ほんまや。山科方面担当 桃山四郎やて」

「あ、おもしろい。大宅さん、裏見て」

「どれどれ。北山方面担当 丹波太郎、左京区方面担当 比叡三郎、伏見方面担当 山城次郎。兄弟みんな名字が違うんやね」

「長男が太郎でしょ。あとは分家とちがいます？」

「そうかあ。ということは桃山四郎は末っ子で範囲も狭いから今日はお兄さんの手伝いにきたん

やね」

「たぶん。ゲリラ豪雨も多いことやし」

「なーんちゃってね。私らなにを話してんねやろ。ま、楽しませてもらたけど」

二人は笑いながら、それぞれの家に戻りました。

午後五時過ぎ、葉子がベランダから路地を見つめていると夕立が降りました。植物たちが息を吹き返すように緑をてらてらと輝かせています。葉子は今日見た男の眼の輝きに似ている気がしたのでした。はす向かいから大宅さんが傘を差して出てきました。首をすくめて手を振っています。

「きちんとした夕立やねえ」

「ほんまにねえ」

(了)

●京都では昔から夏の夕立を降らせる入道雲（積乱雲）に名前が付いています。

北西方向が丹波太郎、東南方面が山城次郎、北東方面が比叡三郎。

最近、京都府立桃山高校地学部のみなさんが山科盆地に夕立を降らせる入道雲を研究し、その存在をつきとめ桃山四郎と命名しました。

この研究は日本学生科学賞で最優秀読売賞を受賞しています。



とても幸いな事に京都には恵の雨だけをもたらして台風が去った後、季節が急に動き出したように葉子は感じていました。

それでも濃い影が風景を深く彫刻しないうちに用事を済ませてしまいたいとは思っていましたが。

ベランダのハーブたちもなんとか猛暑を乗り越えたようです。

パセリ、セージ、ローズマリー、タイム。タイムが少し弱っているくらいです。

今年はその鉢たちに並んで、バジルとニガヨモギの鉢が置かれています。バジルは料理のために、ニガヨモギは「自家製殺虫剤」をつくるために植えたものです。

葉子も近所の大宅さんも、また路地で植物を栽培している主婦の誰もが市販の園芸用殺虫剤（化学薬品）の使用に敏感になっていました。葉子は口に入れるものは無農薬、と考えていたのですが、バジルがいつも虫にぼろぼろにされてずっと失敗が続き、何とかしたいとずっと考えていたのです。

いつかバジルのペーストを自家製で作れたら、とは思っていたのですが、虫の事を考えるとつい苗を買いそびれ続けていたのです。

今、鉢に収まっている苗はスーパーマーケット横に車を駐めて移動販売している花屋さんの処分品。それをたまたま見つけた葉子は、不格好だけれど格安だし、これなら失敗しても落ち込まないし、と思って買ったのでした。

だけど弱っているものは回復させましょう、立ち上がったら成長させましょうと思ってしまうのが葉子。そしててらてらと光る充実した葉が増え出すと、かつて虫にやられた記憶がぶり返ってきて、ずいぶん神経質になっていたのです。

ある日、薬を使うしかないのかしら、と葉子が溜息まじりに大宅さんに話してみると、（例

によって門掃きの時に) 大宅さんのように薔薇を栽培している人にとっては化学薬剤は不可欠なのだそうで、マスクをして噴霧するのだけれども、それでもなんだか気持ちが悪くなる事もあり、逆に何かいいアイデアはないかしらねえ、と訊ねられてしまいました。

そんな折、葉子は京都在住の園芸家の庭を紹介する番組をたまたまテレビで観たのです。(大宅さんも観ていたそうです。) 同じ気候条件ですから栽培のヒントがあるかも、と思わず前のめりになっていました。

そしてふと、よく手入れされた植物たちにまったく虫の害がない事に気づいたのでした。

葉子にスイッチが入りました。その園芸家の方は一切、薬を一切使わない事で有名な方だったので。

...どうすればきれいに育てられるんだろう...

園芸家について調べ、その人に著作のある事を知ってすぐに手に入れました。

やはりありました。農薬ではない天然由来の材料でつくられる「自家製殺虫剤」。

早速、またしても朝の門掃き中に報告です。

「大宅さん、私、つくってみる」

「頑張って！！できたら分けてね」

「うんっ！！！！でも二ヶ月かかるわよ」

「春に間におうたらええのん」

「あらま」

材料は以下のとおり。

ホワイトリカー、赤唐辛子、にんにく、ワームウッドまたはヨモギ(乾燥または生の葉)、除虫菊(乾燥させた花)。

そしてホワイトリカーに他の材料を二ヶ月間漬けておきます。

材料のほとんどはすぐに手に入るものです。見慣れないのはワームウッドと除虫菊。

除虫菊は近くの自然食品や天然由来の石鹸などを扱っている店に置いてある事がわかりました。問題はヨモギです。

「ヨモギ」といえば道端にいくらかでも生えている雑草のような感覚が葉子にはあったのですが、いざそういう「眼」で探してみると見つからないのです。見つからないままさらに調べてみるとワームウッドのほうが殺虫効果が高そうなことがわかりました。ワームウッドは日本名でニガヨモギといいます。

「それってアブサンに入ってる草だよ」

夕食の時に亨が言いました。

「あの、飲んだ事ないけれど、きつーいお酒？」

「うん、たしかヨーロッパのどこかでは生産や販売が中止になってるはずだよ」

「きつすぎて」

「たぶん。だけど『殺虫成分配合の酒』って言葉を並べたらなんか凄いよね。なんだかほんま廃人になるイメージやなあ。そうかあ葉子がつくろうとしている天然殺虫剤はアブサンにニンニクやら唐辛子やらをつけ込んだようなものなんや」

「う、うん」

それから何日か葉子はホームセンターに行ってみたのですが、ヨモギを売っているところはありませんでした。もちろんニガヨモギも。そこでネット検索。すぐに販売店がみつきり、注文。翌日には代金と送料を振り込み、（振込手数料のほうが高いくらい安価です）三日後には鹿児島から種の入ったちいさな袋が届きました。

「Warmwood」と大きく書かれた袋はすべて英語で表記されています。「made in ~」という表記はありませんが、あきらかに外国の種のように。二センチ四方の小さい紙がホチキスで留めてあり、そこに「ニガヨモギ」と書かれていました。

早速、葉子は種まきの準備を始めました。直径も高さも5センチほどの黒いビニールポッド鉢に種まき用の土を満たし、水をたっぷり入れた受け皿に置きます。土はあっという間に水を吸い上げしっとりとした表面になりました。

葉子は種の入っている紙袋を開封しました。すると中からさらに小さい透明なビニール袋がでてきて、そこに種が入っていました。

葉子は一瞬、息を飲みました。

種は...そんな事は予想もしていなかったのですが...何とも小さくか細いものだったのです。長さ2、3ミリの、黒く細い糸の切れ端のようなものなのです。

「なんて小さいの」

葉子は思わず声に出して言いました。

するとその声に動かされたように指が種をひとつつまみつかむと、ポッド鉢に一行にざっと並べてしまったのです。

重なり合っている種もあって、それを指で静かに均し、土を薄く被せました。丁寧にやるつもりだったのですが、もう後戻りはできません。

しん、とした土の表面を見ていると

「結構、おごそかなものなのね」

と、また言葉が口をついて出てきます。すると「おごそか」という言葉がアタマいっぱいひろがっていきます。

...眠っていた命を指でつまんで土へ戻し、そのスイッチを押したんだもの...

葉子はどきどきしてきました。

種まき用の土は鉢下の小さな穴から水を吸い込んで、さらにしっとりとしてきました。咳一つで飛んでしまいそうな種も濡れた土に貼り付いたようです。

葉子は人差し指のお腹で土の上をそおっと撫でるのでした。

種を蒔いてから三日経ちました。

黒いポット鉢の表面にはなんの変化もありません。

亨は葉子の神経が「立って」きている、と感じていました。ひっきりなしにベランダの明るい日陰に置かれた鉢に視線が行くのです。よく管理されていた種だから心配ないよねというのですが、帰ってくるのは生返事ばかり。心の中は発芽の事でいっぱいようです。

翌日も変化なし。

その日の夕方に亨が帰宅すると、隣家のクーラーの室外機からこぼれる水滴の音が耳に障るの、といます。

思わず亨は葉子を座らせ、だいじょうぶ、だいじょうぶと言いながら肩を揉みます。

葉子は亨の手のひらの感触に自分の事を思ってくれる亨の気持ちを感じるのです。亨は亨で、落ち着こうとする葉子の気持ちが、それこそ前に倒れたうなじを見ただけでわかります。

「大丈夫、大丈夫」

種は翌日、発芽。

葉子が並べたとおり、緑の一文字になって世界に現れました。葉子は大喜び。途端に表情が明るくなった事が亨にはわかります。だけど亨にはまだ心配事がありました。

葉子が「間引き」ができるかどうか、です。

(了)



葉子の住む路地から三世帯が去りました。

一つは大宅さんの二軒隣のお家。お祖母さんとともに暮らすための引っ越しです。もう一家族は腰にタトゥーをいれていた村井さんの家庭。この路地に住み始めてそれほど日が経っていないのですが奥さんの病気のために実家に戻る事に。さらにもう一軒は独り住まいのお婆さんの家。お婆さんが転倒し、大腿骨を骨折したために入院。そのまま老人ホームに移る事になったのです。

路地は一段と静かになりました。

今朝も葉子は門掃きをしています。朝日の中にいると温かさを感じました。

そんな季節になったんだ、と思っていると、金木犀の香りが流れてきました。

葉子は掃く手を止めて思わず顔を上げました。お寺の山門の向こうに金木犀を垣根にした家が何軒もあるのです。香はそちらからきているようです。

山門をくぐり、様子を見に行ってみました。花は一度に咲き出したようで、黄金の小さな花が緑の葉の中にたくさん浮かんでいます。葉子は香の洗礼を浴びながら、自分が最近、顔を上げていなかった事に気づきました。何度も金木犀の下や横を歩いているのに、徐々に膨らんでいったはずの黄金の花の蕾に全然気がついていなかったからです。

...いつのまにか、そんなにうつむいて暮らしていたんや...

葉子は腰を前に出し、胸を意識して前にそらして空を見上げました。体の芯で「ぼきん」と音がしたようです。

...あかんあかん猫背になってたんとちゃうやろか...

胸を張ったまま掃除に戻ります。

「妻が適応障害なんです」

引越しの挨拶に来られた村井さんの旦那さんが俯きながらそうっていた姿を思い出しました。「我が道を行く」という雰囲気のおさんだっただけに意外でした。それにタトゥーのことをうるさく言っていた人たちはもう町内にはいないのに、何故引越しを、と思ったら子供さんも転校先でうまくいってなくて、と言うのです。

「病気がなんとかなら、また戻ってきますから。ちょっと時間がかかりそうですけれど」
とも。

...俯きだしたのは、あの日以来かも知れない...

買い物に出ると街中に金木犀の香りが流れていました。意識して視線をあげると柿の実が色づいていました。さらに肩甲骨に力を入れて胸をぐっと反らせてみます。芙蓉の花が咲いていました。また体の芯で音がした気がします。

亨と暮らす日々。ただぼんやり時間を削ぐように生きているつもりはないのだけれど、この数週間、まるで世界を見ていなかった。葉子は一週間の自分の姿を反芻してみました。

俯いていた原因としては、路地からどんどん人が減っていくことぐらいしか思い浮かびません。そんなこと意識した事もないのに、と葉子は思います。

...さみしくなったから？...まさか...

秋の光はたっぷりと街に降り注ぎ、大通りが近づくにつれて空が大きくひろがって見えてきました。真っ青な空に輝く白雲が浮かび、乾いた風が吹き渡っています。

こんないい天気はずっと続いていたのかしら、と葉子はすっかり昨日までの自分を疑ってかかります。やっぱり顔を上げていなきゃ、と。今更ながら。

大通りに出る角はコンビニの駐車場になっていて、そこを誰かが走っていきました。その後ろを小学生が走っていきます。さらに子を追い抜いて真っ赤な顔の女の人がいきます。...大宅さん!!!...

次の瞬間、葉子は走り出していました。すぐに小学生に追いつきました。

「どうしたの」

「ひったくりです。ぼくの財布とられました」

葉子は前方を見ます。

「あの、おじさん？」

「黒い服のおじさん」

「ぼく、ケータイ持ってる？今すぐ110番しなさい。お婆さん『たち』が追っかけるから」

「はい」

大宅さんがもの凄いスピードで男を追っていきます。

「こらあ、待ちなさい！！誰かそいつを止めてえ！！どろぼーどろぼー」

その声が葉子のところまで聞こえてきました。しかし街ゆく人は振り返りもしません。ケータイで誰かと話しながら黒い服の男とすれ違ったりしています。

...ええ何？みんな聞こえないの？...

葉子もスピードを上げました。

「待てえドロボー！！」

大宅さんの声が大通りから細い路地の中へ何度も響いています。ようやく数人の男の人たちが反応し始めました。と、あっというまに男は取り押さえられ、大宅さん、葉子、男の子の順で追いつきました。やがて警察官が到着。短く事情聴取をされて一件落着。大宅さんと葉子は帰路に、いや途中だった買い物に向かいました。

「大宅さん、脚早いのねえ」

「いやあそんなでもないけど、絶対逃がさへん、ておもたんよ。あの男の子と眼がおうたん。それがなんともいえん悲しい眼えやってね。あかん。これはあかんぞって。子供にあんな眼させたらあかんって、ええかっこゆうたらそうなんやけど。もう絶対いややから。それは」

「なるほどね。だけど怖くなかった？私ねちょっとぞっとした。相手がナイフ持ってるとかそんなんよりも、大宅さんが叫んでるのに誰も反応しなかったでしょ。なんだか冷やあっとした」

「そうやねえ」

大宅さんは地面を見つめながら歩いています。

「叫んでる私一人が世界から浮いてしまっているような、別の世界にいるような変な感じはしたね」

「最後にいろんな人の怒声が混じって、ようやく現実に戻った気がした」

二人はゆっくりとスーパーに近づいてきます。

「ああ、それにしても今日はいろいろと目が醒めるような事ばかり」

と、葉子が言うと

「強烈すぎるわ」と、大宅さんは苦笑いです。

「あれ？花村さん」

「ん、なに」

「金木犀の香りがする。花が咲いたんやね。今、気がついたわ」

「ふふふ」

二人は香を運んでくる風の方角をじっと見つめるのでした。

(了)



日曜日はとびきり美しい朝焼けから始まりました。陽が昇るにつれて抜けるような青空がひろがり、空気は澄み切っています。

天候も気温も風も快適で、体の細胞すべてが「はしゃいでいる」ように葉子は感じていました。

こんな日に遭遇するたびに葉子は「今日は今年のビューティフルデイ・ベスト10に入る日やわ」と昔から亨に呟いていました。それはたいてい夕食の時に「発表」されるのですが、今日はもうこの時点で葉子の中では「ベスト10入り」が確定したようなものでした。

結婚当初の頃、亨はその数が妙に多いような気がして手帳に「B10」と小さく書き込んでみる事にしたのでした。

それを合計すると、年間27日のときもあれば50日の時もありました。そもそも大晦日に「葉子さん、あなた今年も『ビューティフルデイのベスト10に入る日』で何度もゆうてたけど全部で35回もあったで」というふうに言ってやろうと思って集計を取り始めたのですが、結局、一度もそう言う事もなく、手帳にしるしをつける事も止めてしまいました。

それはつまり葉子の「口ぐせ」なのであって、理由がなんであれ葉子が心地よければ自分は幸せなんだから、なにも混ぜ返す事もないか、という気分になったのです。できることなら毎日「ベスト10に入る日」であってほしいとさえ。

一方、葉子は気候条件だけが「ベスト10」に入るための必要な条件でない事をわかっていました。どんなに優しい風が吹いていても、苦しみを感じていればその優しさに気づかないだろうし、どんなに美しい空が頭上にひろがっていても精神的にめげていればアスファルトか家の壁を舐めるように見つめているだけなのだから、と。

葉子自身に世界を眺める心と体が持てる事が前提条件なのです。例えば今は亨との暮らしが平穏である事が何よりなのです。

けれど、時として風と陽と風景と人に助けられる日もありました。体や心の不調を確かに癒さ

れる日もあったのです。ふっと周りを見回した瞬間にすっ、と。

だから、めげていても顔を上げていなくちゃ。ていねいに人としゃべらなきゃ、と葉子は思うのです。

葉子は「今日はベスト10に入る日やったの」と亨に言うとき、
...おかげさまで...という気持ちを込めます。

それは亨に対してというよりも、こういう日を過ごさせてくれた「世界」に対しての「お礼」として。

さて、葉子は秋の花を見えています。

松の木の下に植えられた紫のセージはベルベットのような花を咲かせています。そしてこの季節まで室内で大切に管理されてきた各家の大輪の菊の花たちが、満を持して玄関先や軒下に並びだしています。菊は最初、うどんかパスタの「玉」のように固まっているのですが、やがて花弁が一枚ずつゆっくりとひろがり、花の形が現れだすのです。

「どうや、だいぶ取れたかな」

葉子の頭上から亨の声が降ってきました。亨は梯子の一番上に立ち、棕櫚の木に大蛇のように巻き付いたノウゼンカヅラの剪定をしていました。

ここは澤村さんの家の前庭。澤村さんが亡くなってから、横庭の木瓜も芙蓉も、そして「鈴木さんの椿」も手入れされないままになっていました。で、大宅さんが遠くに住んでいるご家族の了解を得て剪定する事にしたのです。だけれど高さ5メートルはある棕櫚の木とノウゼンカヅラは葉子と大宅さんでは手に負えなくて、亨に白羽の矢が立ったのです。

「うん、そんなかんじでええんちゃうかな」と、葉子。

考えてみれば別の町内の石榴の木を剪定したのも亨でした。あの町内同様、この路地も老人ばかりになってしまいました。貴重なもう一人の男手である大宅さんの旦那さんは夜勤あけでおやすみ中。これから亨が「町内の営繕係」になるのは間違いないな、と葉子は梯子の上で大活躍の我が夫を見上げながら思うのでした。

「あらあ綺麗になったわあ」

そういいながら大宅さんがお盆にミントティーとバウムクーヘンを載せてやって来ました。

「一服してくださいな」

「亨さん、大宅さんがお茶いれてくれはったよ」

「あ、おおきに」

地蔵盆の時に使う床机をだし、三人でそこに座ってお茶を啜りました。風はさわやかな西風。日射しは柔らかく、棕櫚の葉が擦れて乾いた音を出しています。

「そやけど澤村さん、亡くならはった時いくつやったっけ」

「えっと80歳はとっくに越えてはったとおもうけど」

「そうかあ。その年齢で去年まで自分で剪定してはったんやね。凄いなあ。上の方は細かな新芽がたくさん吹いていて結構大変やで。それにこの高さやんか」

「そういえば、私、澤田さんが剪定してるところ見た事無いわ」と、大宅さん。

「あ、そういえば私も。気がついたらさっぱりと綺麗になって...」

「植木屋さんに頼んでたんやろか」

「いや、それやったら車が止まってるし、後始末の大きな音でわかるもん」

「ということは...あのお婆さんがこれを昇って...」

三人は思わず棕櫚の樹の上を見上げました。

葉子は、澤田さんが剪定鋏を手に梯子の上から振り返り、にっと笑っているような気がしました。

「人間、最後までできるんやね。やる人はやるんやね」と、大宅さん。

「ほんまにねえ」と、葉子。

棕櫚の樹の遙か上空は青く輝いています。

...今日はベスト10入りやな...

亨はお茶を啜りながら目を細めるのでした。

もちろん葉子もそう思っています。

(了)

亨は屋根の上にはいました。地デジアンテナの、多分今年最後となる設置作業中です。空は蒼く、強い北風が吹き渡っていました。時々、冷たい雨粒が針のように頬を刺します。

午前十時。仕事は手慣れたものですから、ほとんど流れ作業のようにスムーズに進んでいきます。だから、というわけでもないのですが、亨の意識の半分はカーゴパンツのサイドポケットに入っている携帯電話に向けられていました。葉子の声を待っているのです。

アンテナの向きを比叡山方向にあわせようと北東方向に顔をあげると、ちょうど日本海から山を越えてやって来た灰色のちぎれ雲にすっぽりと隠れたところ。亨は腰を下ろし雲が吹き飛んでいくのを待ちました。すると視線が自然と（どうしても）堀川通りのほうへと動いていきます。

...今頃、葉子は...

亨の携帯からスピッツのスカレットが流れ出しました。亨は飛びつくように携帯を取り出します。

「もしもしっ」

「あー花村君、アンテナどうや。固定できた？ぼくも上にあがるか」

部屋でテレビを設定している社長からです。

「すぐにできますから」

亨は顔を上げました、比叡山がくっきりとその姿を見せていました。



尚美はスーパーにいました。昨夜決めた今日のディナーのための食材を次から次と籠に入れていきます。メニューは鯛のカルパッチョ、クリームシチュー、チーズ各種、シーザーズサラダ...。バケットは帰りにベーカリーによって買います。

...私一人でできるかしら...

レジで会計を済ませ、食材でいっぱいになったトートバックをスーパーのテーブルの上に置くと、不安の雲が心にひろがり始めました。

尚美は携帯を取り出しました。

「もしもし……うん、今買ったところ。とにかく多くて……うんそう…早めに来て欲しいの…本は…わかった…あ、ケーキはどうするの…わかった。じゃ」



マサルは地下街の巨大書店のなかを歩いていました。

今年何度も来た店です。今年一年を振り返るように棚を見ながら歩いていきました。文庫本の棚のところで足が止まります。

今年一年、マサルが読んだ本の中でいちばんのめり込んだ本を自然に探してしまいます。

それはレイモンド・チャンドラーの「ロンググッドバイ」。村上春樹の訳です。本編も好きなのですが、村上春樹によって書かれた、異例と言っていいほど長い解説は何度も読みました。

「ああそうなのか」と声のでてしまうほど。

マサルは本を閉じると右手で青い背表紙を元に戻し、新刊書の棚へお目当ての本を探しに行きました。尚美へのクリスマスプレゼントにするつもりです。

すぐにその本が見つかり左手を伸ばしたとき、携帯からオルゴール音が流れ出しました。

「もしもし。……どう買い物終わった。…そうか手伝おうか…うん…わかった。…うん。これから買うところ。ラッピングは部屋でするから…うん、うん。……ケーニヒス・クローネだよ。…うん、じゃあ」



午後六時。

空はすっかり暗く、輝く半月が空に浮かんでいます。風は相変わらず強く、亨は背中を少し丸めて家に帰り着いたところです。

「ただいま」

「あ、お帰りなさい」

答えたのは尚美とマサルです。二人は調理のほぼ出来上がっていました。

「お、マサルも一緒にやってくれたん」

「へへ下働きですが」

「ありがとうありがとう」

「亨さん、どうでした」

尚美がエプロンを掴んで亨の前まで歩み寄りました。

亨の寒さで強張った顔がいつべんに崩れました。

「三ヶ月だって」

「おお！！」

尚美とマサルは思わず声を上げました。

「葉子さんは？」

「病院から実家に回ってから帰るって」

「ただいまあ」

葉子が帰ってきました。腕に大きな紙袋を三つ通し、黒い鞆を肩から斜めにかけています。

「尚美さんとマサル君ごめんね。全部用意してもらっちゃって」

「そんなあ。いつも月曜日にご馳走になりっぱなしなんだから、せめてクリスマスぐらいやらせてくださいよ。それよりそんな重いものもったらだめですよ」

「そうやそうや」

そう言って亨が葉子から荷物を取り上げました。

「なんやこれ結構重いやん」

「へへへみんなにプレゼント。あとでね」

「ありがとうございます」

と、いいながらマサルと尚美が並んで「気をつけ」の姿勢を取りました。

「葉子さん、亨さん、おめでとうございます」二人揃って礼！

「葉子さん、ママになるんですね」と、尚美。

「ありがとう」

葉子の顔いっぱい笑顔がひろがりました。

(終)

この作品は文芸サイト「おとなのコラム」に2007年9月から2010年12月まで連載したものです。本にする過程で三編減らしています。

●冒頭の「届けを出す日」「自転車」はさらにその以前に文芸サイト「ゴザンス」に掲載されたものでした。

かつて「おとなのコラム」というヴァーチャルスペースがありました。

その以前には「ゴザンス」というスペースが。いまでは共にありません。

二つとも「文芸投稿サイト」といわれるものですが、日々ノートや原稿用紙やPCに向かってこつこつと書き続けていた者たちにとってのまさにサイト=s i t e =現場であったと思います。それは自らのウェブサイトで作品を発表することとは別の緊張感と刺激をもたらしてくれました。

また同じ志を持つ他者の作品を読むことができ、また文芸を愛好するより多くの人に自作を読んでもらえる場は、書き続けるものにとって、かけがえのない場であったと思います。

今でも書き続けている「基礎」はここにあります。

当時のスタッフであった皆様、そして投稿仲間の皆様にはあらためて深く感謝します。

ありがとうございました。

今回の作品は「おとなのコラム」にほぼ一年間連載したものをまとめ、少しだけ編集したものと、それ以前に「ゴザンス」に載せたごく短い「お題」を「序」として冒頭につけました。

ですから「葉子」のモデルはゴザンスに投稿していたときからすでにあり、そのまま「おとなのコラム」で物語を結び続けたこととなります。

「ゴザンス」や「おとなのコラム」に書いた短い作品の中にテーマも物語もいまだに潜んでいます。投稿サイトから独りの表現を立ち上げはじめた「仲間たち」を見ながら、ぼくの書く作業もまた独りで続いていきます。

今回P a b o oでこのようにまとめることで「句読点」をつけることができました。次作もまたインターネット空間に書いていこうと思います。

この作品を読んでくださり、ありがとうございました。

最後に、「光函」の時と同様、表紙絵の使用を快諾してくださった竹林柚宇子さんに感謝します。この画が最後まで導いてくれました。ありがとうございました。

葉子、と。

<http://p.booklog.jp/book/48080>

著者：西原 正

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/pipilulu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/48080>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/48080>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ